

# 鳴 抜

第 1 次 調 査

1 9 9 8 年 9 月

三重県埋蔵文化財センター

# 序

三重県の中央部を流れる雲出川の流域は、現在では津市・久居市・一志郡および松阪市の一帯を含みますが、かつては大きく一志郡とされていた地域であります。この一志郡は、三重県下の歴史上でも特徴的な文化を担った地域で、重要な遺跡が数多く所在するところです。弥生時代の稻作文化がまず受け入れられたのがこの地域と考えられますし、古墳時代前期において前方後方墳が集中する地域であります。また、古代律令期における中央的な文化が伊勢に受け入れられる状況を考えるうえでも、この地域の動向は非常に重要です。

今回発掘調査を行いました雲出島貫遺跡は、雲出川河口近くの左岸部で、現在は津市雲出島貫町にあたりますが、旧の一志郡内に相当します。今回の発掘調査では、縄文時代晚期から近世までの、非常に密度の濃い遺跡を調査することができました。とくに古墳時代前期では、竪穴住居跡や墳墓など良好な資料が数多く確認されました。

一志郡内の遺跡のうち、この遺跡のような低地部に所在する遺跡は、近年の当埋蔵文化財センターの調査によっても次第に明らかになりつつあります。これまで低地部の遺跡は、その存在があまり知られていなかったこともあって、どちらかといえば丘陵部の遺跡を中心に考古学的な説明がなされる場合が多かったと思われますが、雲出島貫遺跡のような低地部の充実した内容の遺跡をより積極的に評価することによって、新たな歴史像を形作る必要があります。低地部の遺跡の持つ資料的重要性は、今後も益々高まるでしょう。

今回の発掘調査は、道路改良工事に伴う第1次調査で、今年度にも第2次調査を行います。2カ年にわたる調査を踏まえて、今後、当遺跡に対する評価を行おうと考えています。

発掘調査にあたっては、地元津市および近隣在住の方々、雲出島貫地区自治会をはじめ、津市教育委員会、県土木部道路建設課・津土木事務所から多大な御協力とともに暖かい御配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、各位の誠意ある御対応に、心からの御礼を申し上げます。

1998年9月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井與生

# 例　　言

- 1 本書は、三重県津市雲出島貫町字藤本・町中ほかに所在する雲出島貫遺跡の第1次発掘調査にかかる報告書である。
- 2 調査は、平成9年度一般地方道嬉野津線国補橋梁整備工事に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。
- 3 発掘調査は平成9年度に、報告書作成業務は平成9・10年度に行った。発掘調査は三重県埋蔵文化財センター調査第一課が行い、主査兼調査第二係長前川嘉宏の調整のもと、技師伊藤裕偉、技術補助員川崎志乃が担当した。
- 4 調査にかかる費用は、執行委任を受けて三重県土木部が全額負担している。
- 5 当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行った。遺構・遺物の写真は、伊藤が撮影した。執筆は伊藤・川崎が分担し、その個所は目次・文末等に示した。全体の編集は伊藤が行った。
- 6 調査にあたっては、津市・久居市・嬉野町在住の各位、雲出島貫地区、津市教育委員会、および県土木部道路建設課・津土木事務所から多大な協力を受けたことを明記する。
- 7 報告書作成にあたっては、奥 義次（県立度会高等学校）、萱室康光（津市教育委員会）、田村陽一（県立相可高等学校）、原田 幹（愛知県教育委員会）、林部 均（奈良県立橿原考古学研究所）の各氏から有益な御教示を得た。
- 8 当地は国土座標第VI系に属する。挿図の方位は、全て座標北で示している。なお、磁針方位は西偏 $6^{\circ} 20'$ （昭和62年）、真北方位は西偏 $0^{\circ} 18'$ である。
- 9 挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。
- 10 当報告書での用語は、以下の通り統一した。
- つき……………「坏」があるが、「杯」を用いた。  
わん……………「椀」「碗」「塊」があるが、「椀」を用いた。
- 11 当報告書での遺構は、通番となっている。また、番号の頭には、見た目の性格によって、以下の略記号を付けた。
- S B…………掘立柱建物 S D…………溝（古墳周溝を含む） S E…………井戸  
S F…………焼土坑 S H…………竪穴住居 S K…………土坑 S R…………流路  
S X…………墓・土器棺 S Z…………流路・落ち込みなど pit…………ピット、柱穴
- 12 出土土器実測図のうち、赤彩のあるものは、その範囲を赤系色で表現した。
- 13 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 14 表題の「嶋抜」は、中世以前の当地域の呼称である。
- 15 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。  
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 本文目次

I 前 言	伊藤 ( 1 )
1 調査の契機	( 1 )
2 調査の経過	( 1 )
3 調査の方法	( 2 )
II 島貫をとりまく諸環境	伊藤・川崎 ( 5 )
1 地形的環境	( 5 )
2 雲出島貫遺跡周辺の歴史的環境	( 5 )
a 縄文時代以前の状況	( 5 )
b 弥生時代の集落	( 5 )
c 古墳と集落	( 5 )
d 古代「嶋抜郷」とその周辺	( 7 )
e 海運と陸路～中世の状況～	( 7 )
3 雲出島貫遺跡の先行研究	( 8 )
III 調査の成果～層位と遺構～	伊藤 ( 10 )
1 調査区の地形と基本層位	( 10 )
2 A 1 区の層位と遺構	( 12 )
a 第 5 遺構面	( 12 )
b 第 4 遺構面	( 12 )
c 第 3 遺構面	( 13 )
d 第 2 遺構面	( 13 )
e 第 1 遺構面	( 15 )
3 A 2 区の状況	( 15 )
4 A 3 区の層位と遺構	( 17 )
a 第 4 遺構面	( 17 )
b 第 3 遺構面	( 18 )
c 第 2 遺構面	( 19 )
d 第 1 遺構面	( 21 )
5 A 4 区の層位と遺構	( 25 )
a 第 3 遺構面	( 25 )
b 第 2 遺構面	( 28 )
c 第 1 遺構面	( 31 )
6 A 5 区の層位と遺構	( 32 )
a 第 3 遺構面	( 34 )
b 第 2 遺構面	( 35 )
c 第 1 遺構面	( 35 )
7 B 区の層位と遺構	( 35 )
a 縄文時代晚期の遺構	( 35 )
b 古墳時代前期の遺構	( 35 )

c	古墳時代後期の遺構	( 43 )
d	中世～近世の遺構	( 45 )
e	時期不明の遺構	( 45 )
IV	調査の成果～出土遺物～	伊藤・川崎 ( 49 )
1	A 1 区出土の遺物	( 49 )
a	縄文時代晚期の遺物	伊藤 ( 49 )
b	古墳時代前期の遺物	川崎 ( 49 )
c	古墳時代後期～奈良時代の遺物	伊藤 ( 51 )
d	中世の遺物	伊藤 ( 51 )
2	A 2 区出土の遺物	伊藤 ( 52 )
3	A 3 区出土の遺物	( 52 )
a	縄文時代晚期の遺物	伊藤 ( 52 )
b	古墳時代前期の遺物	川崎 ( 52 )
c	古墳時代後期の遺物	伊藤 ( 54 )
d	飛鳥～奈良・平安時代の遺物	伊藤 ( 54 )
e	中世の遺物	伊藤 ( 55 )
4	A 4 区出土の遺物	( 55 )
a	縄文時代晚期の遺物	伊藤 ( 55 )
b	古墳時代前期の遺物	川崎 ( 55 )
c	奈良時代の遺物	伊藤 ( 58 )
d	中世の遺物	伊藤 ( 59 )
5	A 5 区出土の遺物	( 59 )
a	古墳時代前期の遺物	川崎 ( 59 )
b	奈良時代の遺物	伊藤 ( 60 )
c	中世の遺物	伊藤 ( 60 )
6	B 地区出土の遺物	( 60 )
a	縄文時代晚期の遺物	伊藤 ( 60 )
b	古墳時代前期の遺物	川崎 ( 60 )
c	古墳時代後期の遺物	伊藤 ( 62 )
d	平安時代以降の遺物	伊藤 ( 63 )
7	試掘調査ほか出土遺物	伊藤 ( 63 )
V	調査のまとめと展望	伊藤・川崎 ( 114 )
1	縄文時代の遺跡動向	伊藤 ( 114 )
a	晚期集落の状況	( 114 )
b	晚期の土器	( 114 )
c	土器棺墓	( 114 )
2	弥生時代の空白	伊藤 ( 115 )
3	古墳時代前期の遺跡動向	伊藤 ( 115 )
a	島貫集落の状況	( 115 )
b	島貫の墳墓群	( 115 )
4	雲出島貫遺跡の古式土師器	伊藤・川崎 ( 116 )

a	形式分類について	川崎 (116)
b	変遷	伊藤・川崎 (122)
c	外来系土器	伊藤 (123)
d	赤彩土器	伊藤・川崎 (124)
e	細工された土器	伊藤 (124)
f	底部に充填のある土器	川崎 (125)
g	雲出島貫遺跡の古式土師器の傾向と展望	川崎 (125)
5	古墳時代中後期の遺跡動向	伊藤 (125)
6	一志郡と嶋抜郷～古代前半期の状況～	伊藤 (126)
7	中世の動向	伊藤 (126)
a	中世後期集落の区画	(126)
b	中世後期の土師器類	(127)
8	小結	伊藤 (127)

## 図 版 目 次

P L A T E 表紙 遺跡を北方上空から望む	P L. 37 A 5 区第3 遺構面 全景
P L. 1 調査前風景	P L. 38 A 5 区第3 遺構面 周溝 S D54(1)
P L. 2 調査の状況	P L. 39 A 5 区第3 遺構面 周溝 S D54(2)
P L. 3 A 1 区第5 遺構面 土器群 S Z 103	P L. 40 A 5 区第3 遺構面 溝 S D67
P L. 4 A 1 区第3 遺構面 土器群 S Z 40	P L. 41 A 5 区第2 遺構面 遺構
P L. 5 A 1 区第3・2 遺構面 遺構	P L. 42 B 2 区 全景
P L. 6 A 1 区第2 遺構面 掘立柱建物 S B 105(1)	P L. 43 B 2 区 竪穴住居 S H73(1)
P L. 7 A 1 区第2 遺構面 掘立柱建物 S B 105(2)	P L. 44 B 2 区 竪穴住居 S H73(2)
P L. 8 A 1 区第1 遺構面 遺構	P L. 45 B 2 区 竪穴住居 S H73(3)
P L. 9 A 2 区の状況	P L. 46 B 2 区 竪穴住居 S H73(4)
P L. 10 A 3 区第4 遺構面 全景	P L. 47 B 2 区 竪穴住居 S H83(1)
P L. 11 A 3 区第4 遺構面 土器棺墓 S X88・89	P L. 48 B 2 区 竪穴住居 S H83(2)
P L. 12 A 3 区第4 遺構面 土器棺墓 S X88	P L. 49 B 2 区 竪穴住居 S H69・70
P L. 13 A 3 区第3 遺構面 遺構	P L. 50 B 2 区 井戸 S E71
P L. 14 A 3 区第3 遺構面 遺構	P L. 51 B 3 区 全景ほか
P L. 15 A 3 区第2 遺構面 遺構	P L. 52 B 3 区 竪穴住居 S H96
P L. 16 A 3 区第2 遺構面 竪穴住居 S H58	P L. 53 出土遺物(1) A 1 区
P L. 17 A 3 区第2 遺構面 掘立柱建物 S B 106(1)	P L. 54 出土遺物(2) A 1 区
P L. 18 A 3 区第2 遺構面 掘立柱建物 S B 106(2)	P L. 55 出土遺物(3) A 1 区
P L. 19 A 3 区第1 遺構面 全景	P L. 56 出土遺物(4) A 1 区
P L. 20 A 3 区第1 遺構面 遺構	P L. 57 出土遺物(5) A 1 区
P L. 21 A 4 区第3 遺構面 周溝 S D55(1)	P L. 58 出土遺物(6) A 1 区
P L. 22 A 4 区第3 遺構面 周溝 S D55(2)	P L. 59 出土遺物(7) A 1 区
P L. 23 A 4 区第3 遺構面 周溝 S D55(3)	P L. 60 出土遺物(8) A 1 区
P L. 24 A 4 区第3 遺構面 周溝 S D55(4)	P L. 61 出土遺物(9) A 3 区
P L. 25 A 4 区第3 遺構面 周溝 S D55(5)	P L. 62 出土遺物(10) A 3 区
P L. 26 A 4 区第3 遺構面 竪穴住居 S H63(1)	P L. 63 出土遺物(11) A 3 区
P L. 27 A 4 区第3 遺構面 竪穴住居 S H63(2)	P L. 64 出土遺物(12) A 3 区
P L. 28 A 4 区第3 遺構面 竪穴住居 S H63(3)	P L. 65 出土遺物(13) A 3 区
P L. 29 A 4 区第3 遺構面 竪穴住居 S H63(4)	P L. 66 出土遺物(14) A 3 区
P L. 30 A 4 区第3 遺構面 遺構	P L. 67 出土遺物(15) A 3 区
P L. 31 A 4 区第3 遺構面 土器群 S Z 48	P L. 68 出土遺物(16) A 3 区
P L. 32 A 4 区第3 遺構面 井戸 S E79・土坑 S K80	P L. 69 出土遺物(17) A 3 区
P L. 33 A 4 区第2 遺構面 竪穴住居 S H49	P L. 70 出土遺物(18) A 3 区
P L. 34 A 4 区第2・3 遺構面 遺構	P L. 71 出土遺物(19) A 4 区
P L. 35 A 4 区第1 遺構面 全景	P L. 72 出土遺物(20) A 4 区
P L. 36 A 4 区第1 遺構面 遺構	P L. 73 出土遺物(21) A 4 区

P L. 74 出土遺物22 A 4 区  
P L. 75 出土遺物23 A 4 区  
P L. 76 出土遺物24 A 4 区  
P L. 77 出土遺物25 A 4 区  
P L. 78 出土遺物26 A 5 区

P L. 79 出土遺物27 B 区  
P L. 80 出土遺物28 B 区  
P L. 81 出土遺物29 B 区  
P L. 82 出土遺物30 B 区  
P L. 83 出土遺物31 B 区

## 挿 図 目 次

- fig. 1 事業地内調査区位置図  
fig. 2 遺跡位置図  
fig. 3 調査区周辺地形図  
fig. 4 A 1 区平面図  
fig. 5 A 1 区北壁土層  
fig. 6 A 1 区第5面土器群 S Z 103遺物出土状況  
fig. 7 A 1 区第3面土器群 S Z 40土器出土状況  
fig. 8 A 1 区第2面掘立柱建物 S B 105平面・断面図  
fig. 9 A 1 区第1面溝 S D 1 土器出土状況  
fig. 10 A 3 区北壁・東壁土層  
fig. 11 A 3 区平面図  
fig. 12 A 3 区第4面土器棺墓 S X 88・89平面・断面図  
fig. 13 A 3 区第3面落ち込み S Z 57他土器出土状況  
fig. 14 A 3 区第2面豎穴住居 S H 58平面・断面図  
fig. 15 A 3 区第2面焼土坑 S F 93平面・断面図  
fig. 16 A 3 区第2面掘立柱建物 S B 106平面・断面図  
fig. 17 A 3 区第1面土坑 S K 17土器出土状況および土層断面図  
fig. 18 A 3 区第1面溝 S D 9・20遺物出土状況  
fig. 19 A 4 区平面図  
fig. 20 A 4 区北壁土層  
fig. 21 A 4 区第3面井戸 S E 79土器出土状況  
fig. 22 A 4 区第3面豎穴住居 S H 63平面・断面図  
fig. 23 A 4 区第3面上 土坑 S K 60・土器群 S Z 48土器出土状況  
fig. 24 A 4 区第3面周溝 S D 55関連図  
fig. 25 A 4 区第3面上 土器群 S Z 56土器出土状況  
fig. 26 A 4 区第2面豎穴住居 S H 49土器出土状況  
fig. 27 A 5 区北壁土層  
fig. 28 A 5 区平面図  
fig. 29 A 5 区第3面周溝 S D 54土器出土状況および土層断面図  
fig. 30 B 2 区北壁土層  
fig. 31 B 地区平面図  
fig. 32 B 2 区豎穴住居 S H 73遺物出土状況  
fig. 33 B 3 区豎穴住居 S H 76・78平面・断面図  
fig. 34 B 2 区豎穴住居 S H 83炭化材・土器等出土状況  
fig. 35 B 3 区豎穴住居 S H 96平面・断面図  
fig. 36 B 2 区豎穴住居 S H 70平面・断面図  
fig. 37 B 3 豊穴住居 S H 98平面・断面図  
fig. 38 B 2 区掘立柱建物 S B 108平面・断面図  
fig. 39 出土遺物実測図(1)A 1 区第4・5面  
fig. 40 出土遺物実測図(2)A 1 区第3面  
fig. 41 出土遺物実測図(3)A 1 区第3面  
fig. 42 出土遺物実測図(4)A 1 区第3面  
fig. 43 出土遺物実測図(5)A 1 区第3面  
fig. 44 出土遺物実測図(6)A 1 区第2面  
fig. 45 出土遺物実測図(7)A 1 区第1面  
fig. 46 出土遺物実測図(8)A 1 区第1面・A 3 区第4面  
fig. 47 出土遺物実測図(9)A 3 区第4面  
fig. 48 出土遺物実測図(10)A 3 区第3面  
fig. 49 出土遺物実測図(11)A 3 区第3面  
fig. 50 出土遺物実測図(12)A 3 区第2面  
fig. 51 出土遺物実測図(13)A 3 区第2面  
fig. 52 出土遺物実測図(14)A 3 区第2面  
fig. 53 出土遺物実測図(15)A 3 区第1面  
fig. 54 出土遺物実測図(16)A 3 区第1面  
fig. 55 出土遺物実測図(17)A 3 区第1面  
fig. 56 出土遺物実測図(18)A 4 区 繩文  
fig. 57 出土遺物実測図(19)A 4 区第3面  
fig. 58 出土遺物実測図(20)A 4 区第3面  
fig. 59 出土遺物実測図(21)A 4 区第3面  
fig. 60 出土遺物実測図(22)A 4 区第3面  
fig. 61 出土遺物実測図(23)A 4 区第3面

fig.62 出土遺物実測図24A 4区第2面  
fig.63 出土遺物実測図25A 4区第1面  
fig.64 出土遺物実測図26A 5区第1～3面  
fig.65 出土遺物実測図27B区縄文・古墳前期

fig.66 出土遺物実測図28B区古墳前期  
fig.67 出土遺物実測図29B区古墳前期  
fig.68 出土遺物実測図30B区古墳後期ほか、試掘調査  
など

## 表 目 次

tab. 1 遺構一覧表(1)	tab.15 出土遺物観察表(12)
tab. 2 遺構一覧表(2)	tab.16 出土遺物観察表(13)
tab. 3 遺構一覧表(3)	tab.17 出土遺物観察表(14)
tab. 4 出土遺物観察表(1)	tab.18 出土遺物観察表(15)
tab. 5 出土遺物観察表(2)	tab.19 出土遺物観察表(16)
tab. 6 出土遺物観察表(3)	tab.20 出土遺物観察表(17)
tab. 7 出土遺物観察表(4)	tab.21 出土遺物観察表(18)
tab. 8 出土遺物観察表(5)	tab.22 出土遺物観察表(19)
tab. 9 出土遺物観察表(6)	tab.23 古式土師器分類(1)
tab.10 出土遺物観察表(7)	tab.24 古式土師器分類(2)
tab.11 出土遺物観察表(8)	tab.25 古式土師器分類(3)
tab.12 出土遺物観察表(9)	tab.26 古式土師器分類(4)
tab.13 出土遺物観察表(10)	tab.27 古式土師器分類(5)
tab.14 出土遺物観察表(11)	tab.28 A 3区第1面土坑 S K17土器組成

# I 前 言

## 1 調査の契機

三重県下の道路網は、幹線となっている国道23号線以外は、概して極めて劣悪な状況にある。県道嬉野津線は、雲出川を渡る雲出橋が脆弱で、軽自動車がようやく通行できる程度のものである。この雲出橋を新たに造成するために設定されたのが今回調査対象になった路線である。

津市雲出島貫町地内の対象路線内については、雲出島貫遺跡が存在した。この遺跡は、津市雲出島貫町の旧参宮街道以西から久居市木造町にかけて広がる周知の埋蔵文化財包蔵地（津市遺跡番号484）としてすでに認識されているものである。

三重県埋蔵文化財センターでは、事業地内の埋蔵文化財の実態を確認するため、平成8年12月から平成9年1月にかけて、当センター係長杉谷政樹を担当者として試掘調査を実施した。その結果、旧参宮街道以東にも遺跡の広がることが判明し、事業地内の約8,500m<sup>2</sup>に遺跡が存在することが確認された。各試掘坑からは、古墳時代から室町時代にかけての多くの出土遺物が認められ、良好な遺跡が埋蔵されているものと考えられた。

この結果を基に当センターおよび文化芸術課では、県土木部と埋蔵文化財保護協議を重ね、事業地内の発掘調査を行うことで合意した。調査は、平成9年度から2ヶ年行うこととした。平成9年度は、そのうちの単純平面で約2,000m<sup>2</sup>が対象となり、遺構面の累計面積では3,650m<sup>2</sup>を結果として調査することとなった。

## 2 調査の経過

### a 調査経過概要

発掘調査は、平成9年9月10日から重機による掘削を開始し、同年12月19日に現地作業を全て完了した。

調査区は、標高約2m前後という条件下であった

ため、水との闘いといえる調査となった。降水時には、周囲の雨水が全て調査区内に流れ込むため、翌日はポンプをフル稼動しての排水から作業がはじまった。遺構面の最深部は標高1mほどで、現地盤高からは1.5m以上下であったため、大雨の後は調査区壁が崩壊するなど、一気に疲労がたまるこもあった。それでも、調査は大きな問題もなく終了することができたのは、作業員各位の御努力の賜である。ここに御芳名を記し、心からの御礼を申し上げたい。

飯田悦子、飯田信代、伊藤八重子、梅本慶一、尾市利一、尾市しづ、国枝シズ、倉田きよ子、倉田よしこ、河野まき子、郡山節男、後久 治、小寺キヨ子、後藤幸子、斎藤勝予、佐藤峯子、杉山 奏、林 定、原田 隆、松原 要、松原しづ子、松原忠秋、八幡貞子、山口貞子、山下若子、吉田寿夫、

### b 調査日誌（抄）

1997年

9月8日 道具搬入。

9月10日 重機による表土掘削開始。

9月12日 重機による表土掘削続行。排水溝を掘削するうち、遺構面が3～4面存在することを確認。

9月16日 掘削作業開始。

9月19日 A1区第1面で16世紀頃の溝を確認。

9月22日 A1区2面で大型掘立柱建物を確認。

9月24日 A1区1・2面写真。A3区第1面検出開始。

9月29日 A1区3面の検出。古式土師器良好。A3区第1面SK17に中世土器多量。

9月30日 A3区第1面実測。

10月2日 A4区第1面検出。中世後期を中心。

10月3日 A1区第3面実測。A3区SK17遺物採り上げ。A4区第1面掘削。

10月6日 A3区第2・3面検出。飛鳥～奈良時代の土器良好。

- 10月7日 A1区第4面検出。浅い溝のみ。A3区から金環出土。A4区第1面実測。
- 10月8日 A3区第2・3面から、大型の掘立柱建物らしきもの検出。
- 10月9日 A5区第1面検出開始。
- 10月15日 A1区第5面開始。縄文晩期あり。A2区重機掘削。A3区第2面実測。A4区第2面下に古式土師器良好。A5区第2面で、奈良時代の井戸S E50を検出。
- 10月16日 A1区第5面縄文土器の採り上げ。その後、引き渡し。
- 10月17日 A4区第3面でSD55を検出。土器良好。A5区第2面で竪穴住居群？検出。
- 10月21日 A3区第2面の大型掘立柱建物が明確になる。
- 10月27日 A3区第2・3面で、竪穴住居SH58を検出。A5区第1・2面実測。
- 10月29日 A4区第3面で、大型の竪穴住居SH63を検出。A5区第3面溝SD54から、焼成後底部穿孔壺が出土。
- 10月30日 A3区第2・3面、再実測。A4区第3面SD55の出土状況図終了。SD55を切る竪穴住居SH65を検出。
- 10月31日 A5区第3面SD68がV字形の溝になる。B2区検出開始。
- 11月6日 A4区第3面竪穴住居SH63の実測完了。B2区で須恵器の時期の竪穴住居2棟確認。
- 11月7日 A4区第3面SH63の下、奇妙な溝状になる。
- 11月11日 B3区検出開始。竪穴住居の残骸あり。
- 11月14日 A3区第4面の検出。溝・土坑などあり。B2区第1面SH73に完形の土器群を確認。
- 11月18日 B2区SH73に炭化材を確認。
- 11月28日 A3区第4面にて縄文晩期の土器棺検出。B2区SH73遺物採り上げ。小形器台上に小形壺を確認。
- 12月2日 前日までの降雨で調査区水没。
- 12月3日 調査区に初氷。A3区縄文晩期土器棺(SX88・89)の実測。B2区第1面SH83の掘削。焼失家屋。
- 12月9日 A4区・B2区清掃。B3区竪穴住居SH96を検出。
- 12月11～15日 実測。
- 12月16日 津土木事務所との現地協議。A4区SD55とA5区全体の盛土保存を確認。
- 12月18日 前日までの降雨により、調査区の壁がまたも崩壊！A4区・B2区の写真・実測。現地作業が終了。青木哲也氏（立命館大学）による調査区土壤の調査（～19日）
- 12月19日 調査区土層図の作成。
- 12月22～25日 道具・プレハブの撤収。
- 1998年
- 1月31日 三雲町主催「三雲町と低地の遺跡たち」展でのスライド上映と遺物展示

### c 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行っている。

- ・法第57条の3第1項（文化庁長官あて）  
平成9年6月6日付け道建第765号（県知事通知）
- ・法第98条の2第1項（文化庁長官あて）  
平成10年1月13日付け教文第1870号（県教育長報告）
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長あて）  
平成10年3月20日付け教文第6-104号（県教育長通知）

## 3 調査の方法

### a 掘削について

当遺跡は、最も多い部分では合計5面の遺構面が存在していた。最初に検出できる第1面と最終の第5面の間には、厚い部分で1.5mほどの堆積が認められた。

埋土については、遺構検出面の直上まで存在していた耕作土・旧耕作土の類については大部分をバックフォーで除去した。包含層については、工事との関係で時間的な制約のあったA1地区については、バックフォーによる掘削を行わざるを得なかった。その他の地区では、包含層中に出土土器が数多く認められることが予想されたA3区については人力掘削を中心とした。その他の調査区で遺物包含量の少

ない部分については重機による掘削を適度に行うこととした。

#### b 排水について

低地であるため、調査には常に水に悩まされることが予想された。そのため、調査区の付近に予め電源を設定しておき、それによって終日排水ポンプを稼動させた。矢板の設置はできなかったが、それでもいくらかはましな状態で調査ができた。

#### c 地区設定について

今回の調査では、旧参宮街道より東をA地区、西をB地区とした。そして、水路・農道などによって分断される単位でA地区を1～6、B地区は1～8に分けた。このうち、A 6区、B 1・B 4～8区は1998年度における調査区に相当する。

調査区内は、4 m四方の升目で切ることによって小地区を設定している。西から数字、北からアルファベットを付け、升目の北西隅の交点をその小地区的符号とした。

A 1区はそれ単独での方眼である。A 3～5区、B 2・3区は、それぞれ同じ基準での方眼となっている。今回の調査区では、この3者の方眼が存在しており、それぞれの関係はない。また、この3地区的小地区方眼は、国土座標軸とは無関係である。

#### d 遺構図面について

調査区の平面図は、遺構密度により1/20手書き、1/50手書き、1/100平板のそれぞれのものがある。竪穴住居・土坑などの出土遺物を伴うような遺構は、原則的には個別に1/10の実測図を作成している。

これらの実測には、(株)かんこうと委託契約を締結して作成した基準点を用い、国土座標中に表現している。

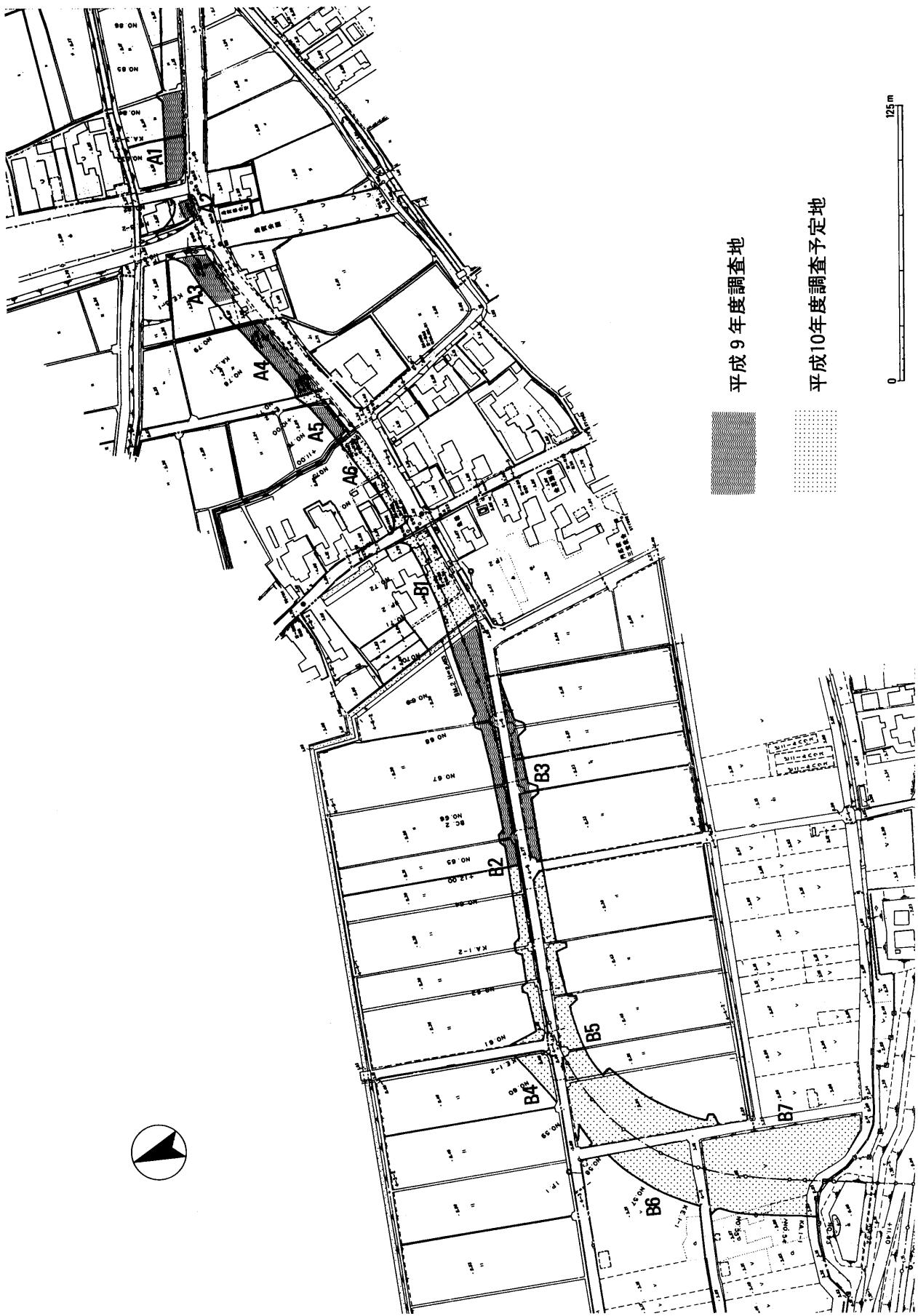


fig. 1 事業地内調査区位置図 (1 : 2,500)

## II 島貫をとりまく諸環境

### 1 地形的環境

雲出島貫遺跡は、現在の行政上では津市雲出島貫町字藤本・町中を中心として広がる遺跡である。西は久居市木造町に接し、南は雲出川を挟んで一志郡三雲町である。遺跡の南は三重・奈良県境の高見山系を水源地とする雲出川が流れ、遺跡の約3km下流で伊勢湾へと注いでいる。つまり、当遺跡周辺部は雲出川下流域に相当する地域なのである。

この雲出川が左岸に形成した土壤により、当遺跡周辺の基盤は形成されている。ただし、その土壤は一様ではなく、様々な状況を見せている。

とくに重要なものとして、砂堆がある。雲出川が運んできた土砂が伊勢湾を北上する沿岸流によって形成されたものである。雲出島貫遺跡では、字町中が所在する場所がそれにあたる。これは雲出川が形成した最初の砂堆にあたり、その後、現在の海岸線までの間に4・5条の砂堆を形成している。このことにより、雲出島貫遺跡では砂堆の東西によって土壤的な差異が生じることとなっている。

雲出島貫遺跡は砂堆の形成がなされる先端部分に相当するため、全体的には微高地としてあるが、遺跡北方には潟湖が形成されていたと考えられる。現在の津市藤方付近は、かつての潟湖“藤潟”であり、この潟湖を大いに利用した港町が安濃津である<sup>(1)</sup>。安濃津についてはここで詳述するまでもないが、潟湖“藤潟”が近世になって新田開発により消滅することを考慮すれば、中世以前の雲出島貫遺跡が、南に雲出川、北に藤潟といういずれも水域に挟まれた環境下にあったことが理解されよう。

### 2 雲出島貫遺跡周辺の歴史的環境

#### a 縄文時代以前の状況

雲出川下流域における遺跡は、地形的に大きく分ければ雲出島貫遺跡のような低湿地部と、遺跡北方に所在する「高茶屋台地」と呼ばれる台地部とに分

かれる。遺跡として足跡の残る最も古いものは、台地部の四ツ野B遺跡（津市高茶屋小森町）における旧石器時代後期の石器がある<sup>(2)</sup>。台地部には、おそらくその後も断続的に遺跡が形成されていたものと考えられるが、今のところ明確ではない。

次に確認されるのは縄文時代晚期最終末で、時期的には弥生時代前期に相当する。台地部では先述の四ツ野B遺跡で突帯文土器を用いた土器棺墓が確認されており、高茶屋大垣内遺跡（津市高茶屋小森町）と四ツ野B遺跡では弥生前期の土器片が確認されている<sup>(3)</sup>。低地部では前田町屋遺跡（三雲町星合）で突帯文土器や大洞式の土器が出土している<sup>(4)</sup>。前田町屋遺跡の大洞式は非常に精練されたもので、搬入品ではないかと考えられるものである。今回の雲出島貫遺跡の調査では、縄文時代晚期における土器棺墓やまとまった土器が確認されたことから、低地部におけるこれらの遺跡群との絡みで新たな縄文時代像を考察することができよう。

#### b 弥生時代の集落

弥生時代に至ると、やや上流の木造赤坂遺跡（久居市木造町）で前期～後期にかけての集落跡が展開している。雲出川下流域における拠点的な弥生集落であると考えられる。木造赤坂遺跡の形成は縄文時代にまで遡るようである<sup>(5)</sup>。かなり古くに発掘調査もなされており、雲出川下流域の状況を知るために重要な遺跡であるにもかかわらず実態はよく判らないままであるのが惜しい。

雲出川下流域における弥生時代を特徴付ける大きな要素に、四ツ野B遺跡から出土した銅鐸がある。工事中に発見されたこの銅鐸は近畿突線紐式のもので、四ツ野B遺跡の時期が弥生後期から古墳前期であることから、四ツ野B遺跡を含めた周辺の複数集落にかかるものであると推測される。

#### c 古墳と集落

古墳時代に入る頃は、今回の雲出島貫遺跡の調査

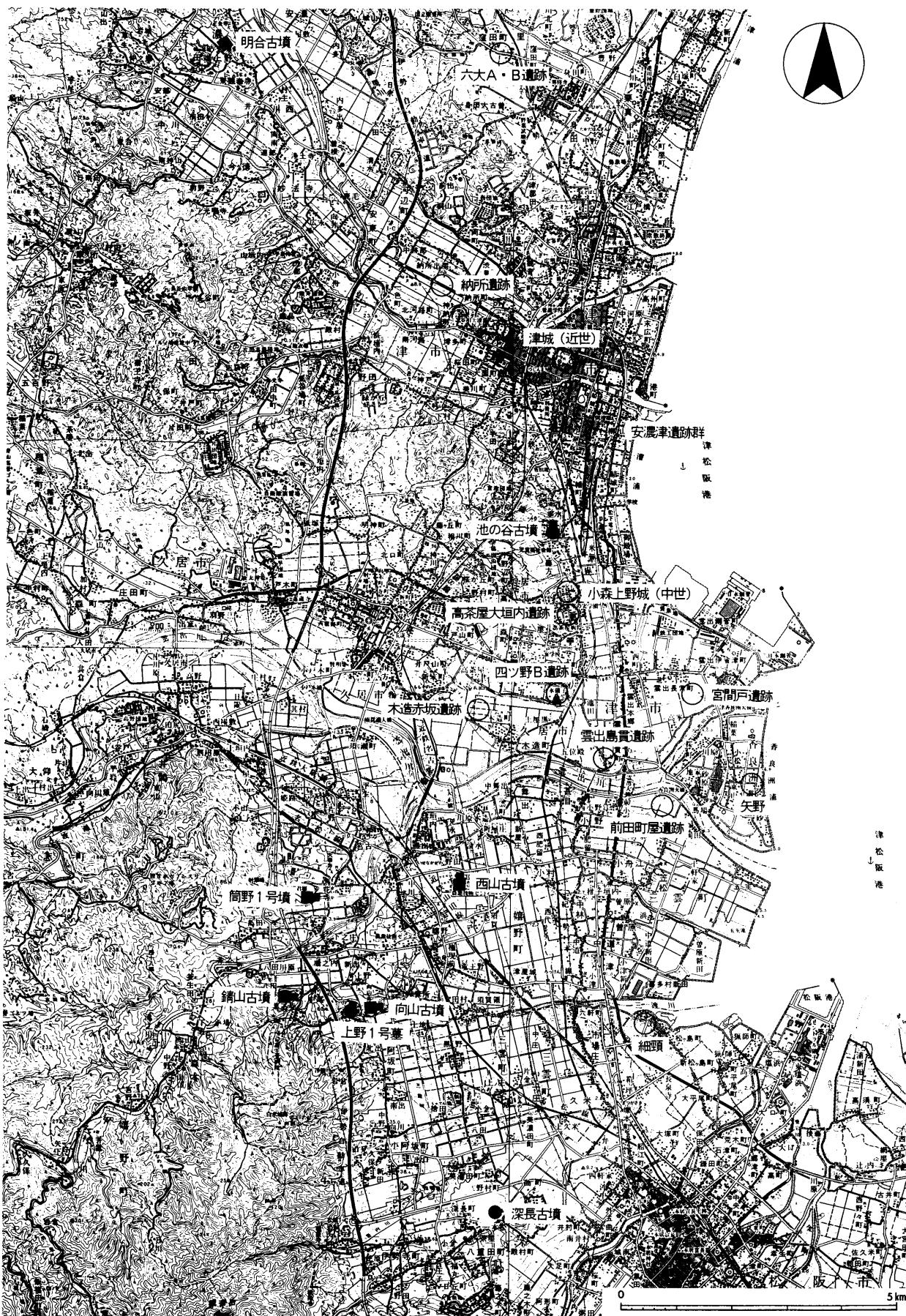


fig. 2 遺跡位置図 (1 : 100,000) (国土地理院 1/500,000 「津西部」「津東部」「二本木」「松阪」より)

で最も濃密に確認された時期に相当する。前期初頭には前田町屋遺跡で古墳と考えられる方形墳墓が確認される。時期的にはやや下るが、当遺跡やや上流の久居市木造町には木造大塚古墳とされている前期古墳があり、そこから出土した石製合子が引接寺（木造町）に所蔵されている<sup>(6)</sup>。また、“藤瀬”北東部に位置する、全長約90mの前方後円墳である池の谷古墳も、前期後半ないしは中期初頭のものと考えられる<sup>(7)</sup>。当地の首長墓に相当するのがこの2者であろう。

古墳時代中後期には、高茶屋大垣内遺跡に大規模な集落が展開している。同時期の集落が今回の調査によって当遺跡でも確認された。高茶屋大垣内遺跡からは6世紀前半頃の土師器焼成遺構も10基程度確認されている。『日本書紀』雄略天皇17年3月条にある「藤形の村」から送られた土師器工人の記述との関連が非常に興味深い。高茶屋大垣内遺跡では、焼け歪みの見られる須恵器類もあり、土師器のみならず須恵器も含めた生産遺跡を内包した大規模集落と考えられる。

古墳は、台地上では四ツ野古墳があり、低地部では雲出川を挟んで当遺跡の対岸にあたる小野江甚目遺跡から2基の円墳が確認されている<sup>(8)</sup>。当遺跡のすぐ西にあたる久居市木造町の五位殿地区においても円筒埴輪の出土が知られている<sup>(9)</sup>。おそらく、5世紀後葉から6世紀前葉にかけての時期に形成された古墳群が、この近辺の微高地上に点在しているものと考えられる。

#### d 古代「嶋抜郷」とその周辺

古代における雲出川流域は、伊勢においてもかなり精緻な土器が数多く確認される遺跡の多いことで知られている。そのなかでも、雲出川下流域の状況には数々の興味深いものがある。

古代律令制において、当地は一志郡の嶋抜郷として把握されていたことが『倭名類聚抄』<sup>(10)</sup>からうかがい知れる。そして『正倉院文書』中には、次のような史料がある。

穗積臣淨麻呂  
年卅八  
伊勢国壹志郡嶋抜郷戸主壹志君挨祖父戸口

「壹志君挨祖父」の表現から、直接の血縁関係を言うことこそできないものの、嶋抜郷が当地における有力豪族であった一志君と何らかの関係を有する人物を戸主としていたことから、当遺跡周辺が一志郡内における重要な場として存在していたことが窺われる。また、当史料が同文書中に見られる「西南角領解」との類似性からその一部と考えるならば、「穂積臣淨麻呂」という絵師が嶋抜郷出身ということになり、当地の深い文化的背景を見出すことも可能である。

高茶屋大垣内遺跡では、全国的に類例の少ない「美濃國」印のある須恵器杯が出土している。平安時代初期に記された『皇太神宮儀式帳』<sup>(12)</sup>では、伊勢神宮へと向かう倭姫が「藤方片樋宮」に滞在したとする。直接的な史料とは言えないまでも、当地周辺の重要性を物語る一情報である。

また、雲出川右岸では前田町屋遺跡で奈良時代の墨書き土器が確認されており、隣接する星合大明神遺跡（三雲町星合）<sup>(13)</sup>でも当該時期の掘立柱建物が確認されている。雲出川右岸部は律令期における「一志駅」との関係でも注目されている場であり、後の参宮街道へとつながる主要街道が当地周辺を通っていたものと考えられる。

#### e 海運と陸路～中世の状況～

当地には、神宮領嶋抜御厨があり、かなり早い時期から神宮領として存在していたことが知れる<sup>(14)</sup>。『神鳳鈔』<sup>(15)</sup>では内宮領として塩を納める御厨として把握されている。列島規模の港町である安濃津は、雲出島貫遺跡の北方約4kmに所在する。低地部における諸遺跡は、この安濃津との関連が極めて大きいであろうことは容易に推察できる。

建久2(1191)年には、嶋抜御厨に貢御人（供御人）がいたことが知れる<sup>(16)</sup>。供御人が、関所の自由通行権や営業独占権などを獲得していく存在であること<sup>(17)</sup>を考えれば、嶋抜を根拠とする商人的な人物の存在も考えることができる。雲出島貫の地理的な状況を考慮すれば、陸上のみならず河川あるいは海上を用いた活動を考えるのが妥当である。

この一方で、雲出島貫の地勢は陸上交通路の要地としての機能もある。安濃津から嶋抜を通り、現在

の三雲町へと至る街道も中世後期までには成立していた。弘治3(1557)年、山科言継は安濃津を経て「雲津」に至り、細結（細頸、今の松阪市松ヶ島町付近）・ひらう（平尾、今の松阪市大平尾町付近）・魚見（松阪市魚見町）などを経て田丸（度会郡玉城町）で北畠氏の饗応を得ている<sup>(18)</sup>。「雲津」では「蓮光坊」でもてなしを受けている。蓮光坊については残念ながらどこに所在していたのかは今のところ不明であるが、道程から見て今の雲出島貫町付近と考えてよいと思われる。いずれにしてもこの近辺には、京都の公家を饗応できる程度の施設が備わっていたことがわかり、街道沿いの宿場町としての機能を想定することができる。

安濃津の終焉と相まった津城下町の成立によって、島貫における水上交通も停滞が想定される。その一方、参宮街道の宿場町としての機能が相対的に高くなっているようである。

以上、雲出島貫遺跡周辺の歴史的環境について見てきた。三重県下全域で言えることであるが、今後はとくに低地部の遺跡をどのように解明していくのかが一層の課題となる。そのなかで、当地は陸と海の2方面からの検討を要する地域としてとくに注目されるのである。

### 3 雲出島貫遺跡の先行研究

雲出島貫遺跡については、比較的古くから認識されている。野田精一は「島貫貝塚址」として、雲出島貫遺跡の東部にあたる字山鶴地内の遺物を紹介している<sup>(19)</sup>。鈴木敏雄氏は野田氏の紹介した遺跡を「字山鶴遺跡」として土師器・須恵器などの出土を紹介する。また、字藤本地内を「藤本遺跡」として紹介する。字藤本は、今回の発掘調査によるB地区に相当する場所である。『一志郡史』には、ここから出土した土師器棒状浮文を持つ壺と二重口縁壺の実測図が掲載されている<sup>(20)</sup>。

三雲町立鶴小学校（三雲町笠松）には、故野田精一氏が収集された土器類が保管されている。この中には、雲出島貫遺跡内の字藤本・山鶴などから出土した古墳時代前期の土師器類、鎌倉時代の陶器類、

および大形土錐などがある。時期的には今回の発掘調査によって確認された遺物とほぼ一致する。完形に近いものも多数収蔵されている。

#### 註

- (1) “藤湯”および安濃津については、伊藤裕偉「安濃津に関する基礎検討」（『安濃津』三重県埋蔵文化財センター 1997）を参照されたい。
- (2)以下、四ツ野B遺跡については、村木一弥「津市四ツ野B遺跡の発掘調査」（『三重の古文化』74 1995）を参照。
- (3)高茶屋大垣内遺跡は、高茶屋病院改修工事に伴う発掘調査が1996年度以降継続している。その概略が『高茶屋大垣内遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1998) で示されている。以下、当遺跡については、この調査成果による。
- (4)道路改良工事に伴う発掘調査が1996・97年度に行われた。新名強『前田町屋（第2次）・星合大明神』（三重県埋蔵文化財センター 1998）
- (5)鈴木敏雄「考古学からみた一志郡」（『一志郡史』下巻 1955）
- (6)伊勢野久好「一志郡の首長墓たち」（『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会 1991）
- (7)浅生悦生「池の谷古墳」（『津市の文化財』津市教育委員会 1989）
- (8)1997年度三重県埋蔵文化財センター調査。
- (9)註(5)文献
- (10)『倭名類聚抄』（『諸本集成倭名類聚抄』外編 臨川書店 1966）
- (11)『正倉院文書』所収「西南角領解」？（『大日本古文書』編年之13）この史料は、天平勝宝9(757)年と考えられている。
- (12)『皇太神宮儀式帳』（『群書類從』第1輯）
- (13)註(4)文献
- (14)『太神宮諸雜事記』延長6(928)年4月13日条（『群書類從』第1輯）には、「一志神戸嶋祓御厨預」の存在と、「當神戸」が「二宮御鹽調備供進之所」であることを伝えている。「嶋祓」はいまでもなく「嶋抜」のことである。また、「當神戸」が調備供進する塩は、嶋抜で調達したものと考えて間違いないだろう。
- (15)『神鳳鈔』（『群書類從』第1輯）
- (16)建久2年閏12月27日付、二所大神宮神主解（『鎌倉遺文』574）
- (17)脇田晴子「供御人」（『国史大辞典』第4巻 吉川弘文館 1984）
- (18)『言継卿記』弘治3年3月22~25日の条（国書刊行会）
- (19)野田精一『三重県郷土誌考』（三重県郷土資料刊行会 1989）
- (20)註(5)文献



fig. 3 調査区周辺地形図（圃場整備前）(1:10,000) 津都市計画区域図№55・56・60・61 (1975年撮影) より

### III 調査の成果～層位と遺構～

#### 1 調査区の地形と基本層位

調査区は、雲出川が左岸部に形成した沖積地に相当する。雲出川が排出した土砂が伊勢湾西岸部を北流する沿岸流によって形成された1条目の砂堆が現在の雲出島貫集落の中心部にあたり、近世の参宮街道がその上を走る。

この砂堆上（次年度調査予定のA 6区・B 1区に相当する）は現在の標高で約3.5mで、周辺部で最も高く安定した場となっている。その両側は現在の標高で約2.3m程度となっており、現況が水田であることもある“低湿地”と呼ぶにふさわしいものである。平成9年度の発掘調査は、この砂堆を挟んだ東西両側に相当する。

砂堆を横断する土層図は、平成10年度の発掘調査後に改めて検討することとし、ここでは今回の調査区に見られた層位的特徴を見てみる。

調査区の層位は、砂堆の東西、すなわちA地区とB地区で若干の相違がある。

##### A地区

A地区では、標高約1.0mで砂層が確認される。この砂層は、土壤的には雲出川の土砂が伊勢湾西岸部を北流する沿岸流によって形成されたもので、原則的には海性砂に相当する。この砂層上面が縄文時代晚期の遺構基盤面となり、調査区によって異なるが、第4ないしは第5遺構面となる。

この砂層上に堆積するのが黄灰色系砂質土である。A地区西端に相当するA 5区では標高約1.6m、A 4区の東部からA 3区にかけては消滅し、A 1区では同約1.2mで確認できる。縄文時代晚期の土器棺墓が確認されたA 3区付近を微高地とし、その東西両側に堆積した土層と見られる。砂堆に近づくほど高い位置で確認される層とも言える。この層上面は、A 5区では古墳時代前期の遺構面の基盤となり、A 1区では古墳時代以前縄文時代晚期以降の遺構面となる。A 1・A 3区の状況から推察して、縄文時代

晩期以降に形成された土層であると考えられる。

黄灰色系砂質土上には、暗褐色系粘質土が確認できる。これは、A 5区には見られず、A 4区～A 1区にかけて見られるものである。A 4区では古墳時代前期の遺構がこの層を基盤として存在するが、この面では明確に確認できなかった遺構が多い。A 1区では古墳時代後期～飛鳥時代の遺構面がこの層上で確認できる。A 3区の古墳時代後期の遺構面も、原則的にはこの層上で確認されるべきものであるが、遺構の重複が激しかったため、かなり削り込んでの検出となった。

暗褐色系粘質土上には、淡褐色系砂質シルトが堆積する。原則的には現耕作土直下で確認できるものであり、一応A 5～A 1区にかけて見られたものである。この層上面では室町時代を中心とした遺構があり、少し削り込んだ段階で飛鳥～奈良時代の遺構が確認できる状況である。この2時期の遺構面は、厳密に層位的に確認できるのかどうかは調査の段階では明らかにできなかったが、今回の報文中では一応別個の遺構面として記述している。

##### B地区

B地区では、標高約1.3mで砂層が確認できる。この地区の砂層も原則的には海性砂と考えられる。この砂層を基盤とした遺構は確認できなかった。

砂層の上には、部分的に淡灰色系砂質シルトを間層として含むが、大勢としては黄褐色系粘質土が堆積する。現耕作土直下がこの層に相当し、標高約2.0m程度で検出できる層である。古墳時代前期～中後期、および中世前後の遺構の基盤がこの層となり、A地区で見られた黄褐色系砂質土と原則的に対応するものと考えられる。この層中には縄文時代晚期の遺物が若干包含されている。

調査区の層位的状況は、おおよそ以上のとおりである。厳密な問題については、全調査区の層位的確認が終了する平成10年度に再度検討したい。

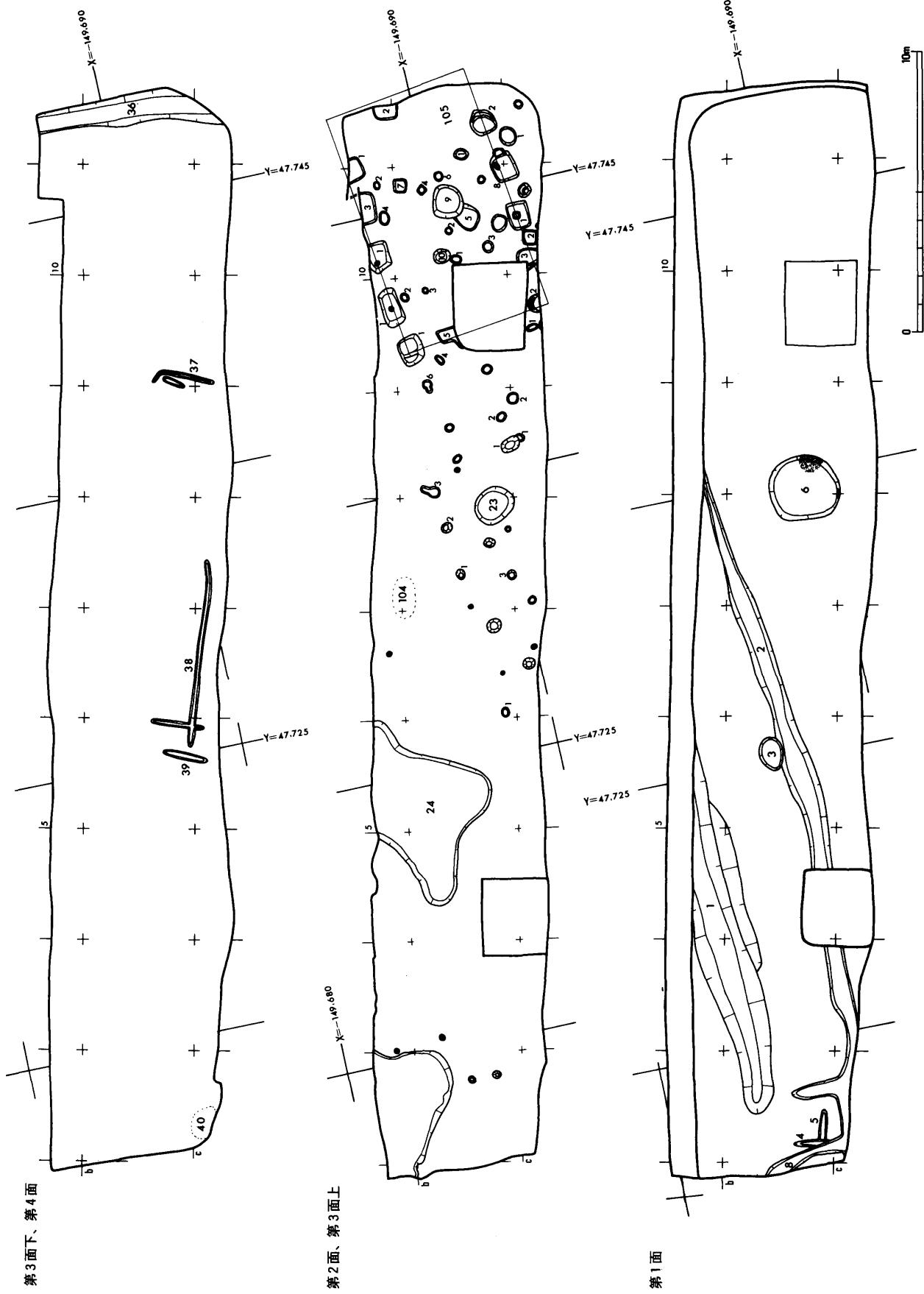


fig. 4 A 1 区平面図 (1 : 200)

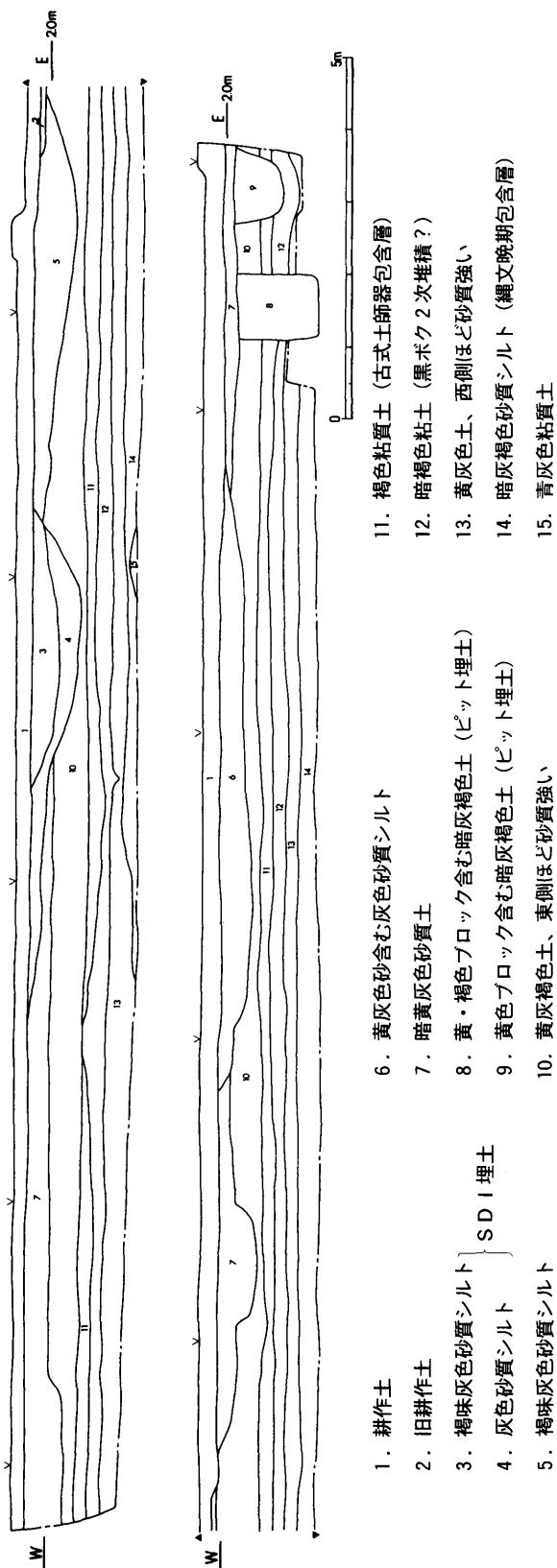


fig. 5 A 1 区北壁土層 (1 : 100)

では、以下において各調査区単位での検出遺構と層位的状況を見していく。

## 2 A 1 区の層位と遺構

A 1 区は、今回の調査区中で最も東に位置する調査区である。第 1 ~ 第 5 遺構面を確認している。ただし、第 1 面と 2 面、第 3 面と 4 面は、一部同一面で確認している。これは、本来検出面としなければならない面での遺構確認ができなかったことに起因している。

### a 第 5 遺構面

第 5 遺構面は、淡黄灰色砂質シルト面に存在する遺構面である。標高は約 0.9m である。縄文時代晚期の土器群がこの層中に見られた。

**土器群 S Z 103 (fig. 6)** 遺構面上に縄文時代晚期の土器の散乱が認められたため、これを S Z 103 とする。調査時点では明確な遺構としては認められず、土器群としてのみ見られたもので、当初は自然流路の一部かと考えた。しかし、周囲に木炭片や焼土粒もわずかながら見られたので、竪穴住居跡もしくは何らかの居住空間が存在した可能性を考える方が妥当かと今は考えている。

土器は、同一個体が散乱した状況も見出せ、土器群としての同時代性は高いものと考えられる。

### b 第 4 遺構面

第 4 遺構面は、明黄灰色粘質土を基盤とする。標高は約 1.2m である。出土遺物が少なく、遺構面の時期特定は困難であるが、縄文時代晚期以降、古墳時代前期以前で考えられるものである。

遺構としては、溝 S D37・38・39 がこれに該当する。いずれも幅約 0.2m、深さ約 0.1m の小規模なものである。状況としては、A 3 区第 4 遺構面における小溝群と類似している。

遺物は極めて少量で、時期の特定はできない。なお、両端を整形した棒状石製品 (fig. 39-2) が、この遺構面検出中に出土している。

### c 第 3 遺構面

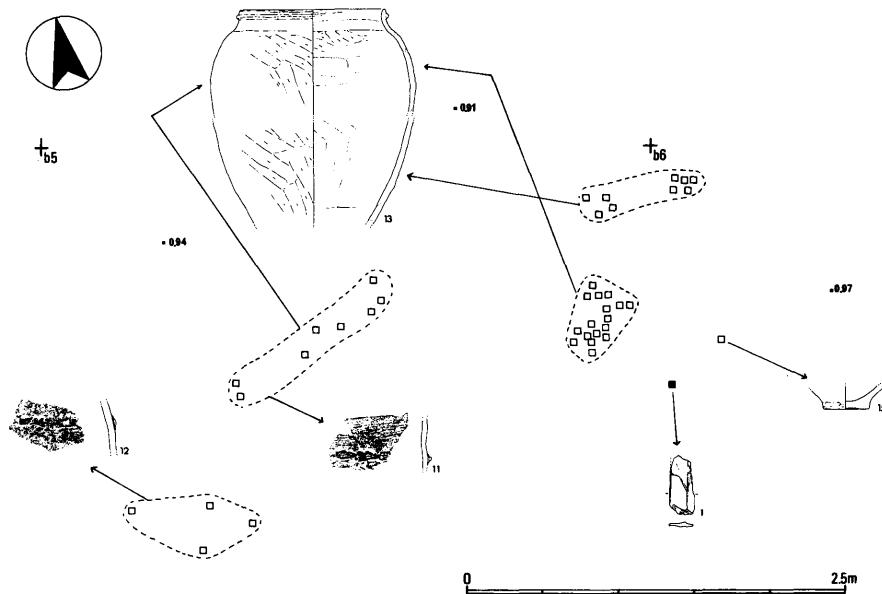


fig. 6 A 1 区第 5 面土器群 S Z 103 遺物出土状況 (1 : 50) ※・0.94などは検出面レベル

第3遺構面は、黒褐色系粘質土を基盤とする遺構面である。標高は1.4m前後である。遺構としては、2ヶ所の土器群と溝を1条、落ち込みを2ヶ所検出したに止まる。しかし、土器群としてしか検出できなかったことが示すように、本来は多くの遺構が存在していたと考えられ、調査担当者が確認できなかつたに過ぎないと考える。古墳時代前期の遺構面である。

**溝 S D 36** 調査区東端で検出した遺構である。東片の大部分が調査区外であるため明確ではないが、幅約1.0m、深さ約0.2mほどの、断面U字形を呈したものと考えられる。埋土上層から完形の土師器壺 (fig. 40-26) やS字状口縁台付甕片が出土した。

**土器群 S Z 40 (fig. 7)** 調査区西端で検出した遺構である。古墳時代前期の土器群がまとまって出土している。遺構の形状は分からなかったが、土器類の同時代性は高いと考えられる。

**土器群 S Z 104** 調査区中央部で検出した。壺と台付甕 (fig. 40-27~29) がまとまっていた場所で、遺構の形状は分からなかった。

#### d 第2遺構面

第2遺構面は淡褐色系砂質土層上面で検出した。標高は約1.6mである。遺構は、掘立柱建物2棟、土坑・ピットなどがある。古墳時代後期から飛鳥・

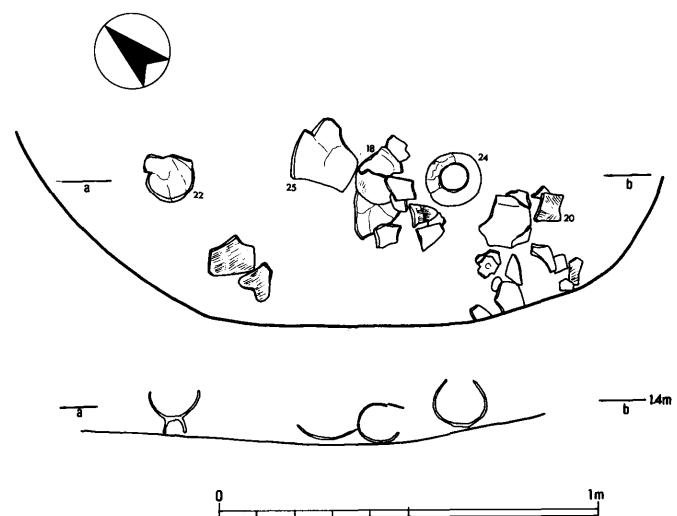


fig. 7 A 1 区第 3 面土器群 S Z 40 土器出土状況 (1 : 20)

奈良時代にかけての遺構面と考えられる。

**掘立柱建物 S B 105 (fig. 8)** 調査区東端で確認した遺構である。柱列が2列あり、2棟分の掘立柱建物である可能性も捨てきれないが、西端の棟持柱が試掘坑によって破壊されているものと考え、1棟の掘立柱建物として報告する。

柱間は、桁行は柱芯々で約1.8mで5間分あり、全体で約9mと復元する。梁間は約5.4mとなる。建物主軸は、北を中心見てN 7° Wである。柱掘形は大きいもので短辺約0.9m、長辺約1.4m、深さ約0.4mの、かなり規模の大きいものである。

柱痕跡内から土師器甕 (fig. 44-124) が、柱掘

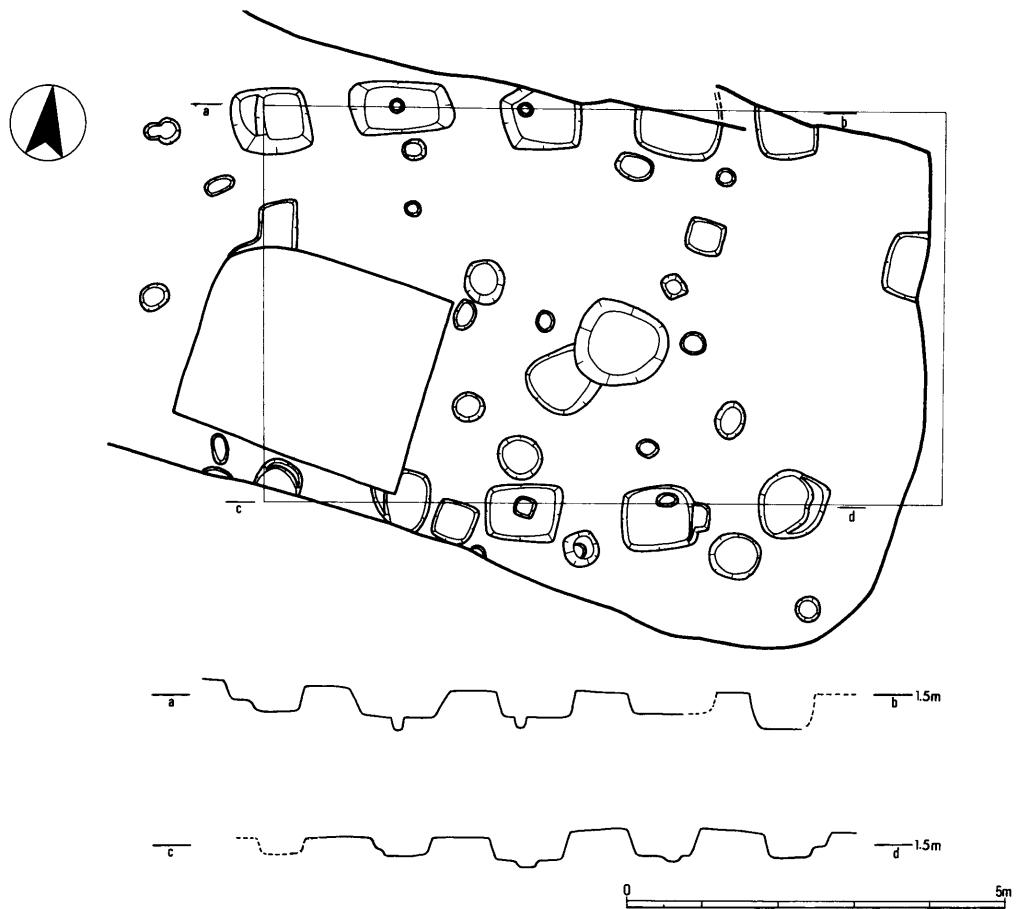


fig. 8 A 1 区第2面掘立柱建物 S-B 105平面・断面図 (1 : 100)

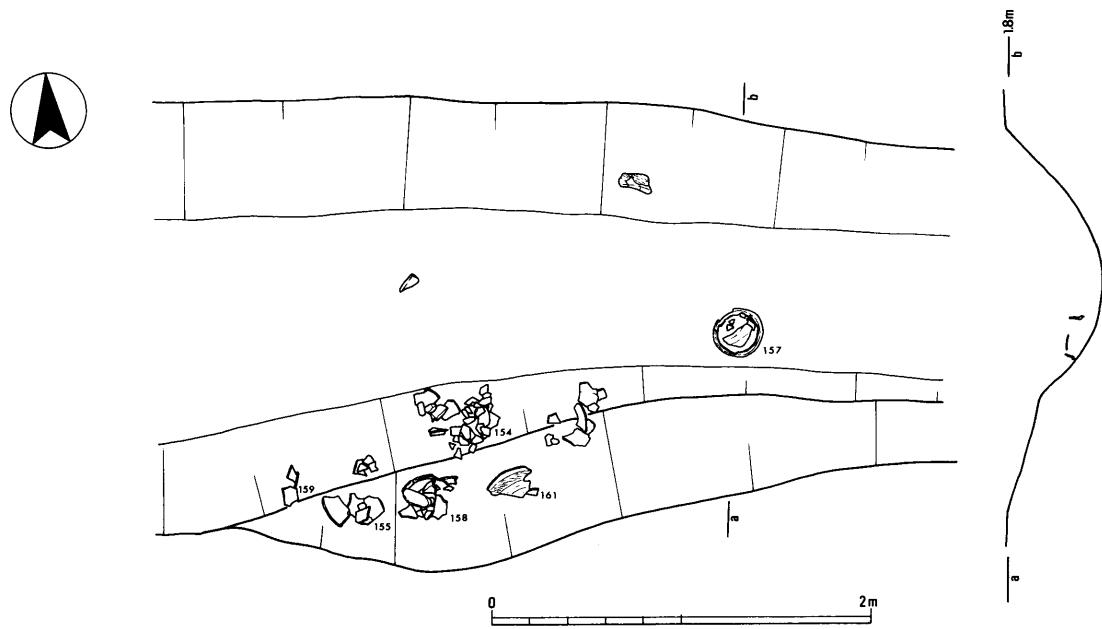


fig. 9 A 1 区第1面溝 S-D 1 土器出土状況 (1 : 40)

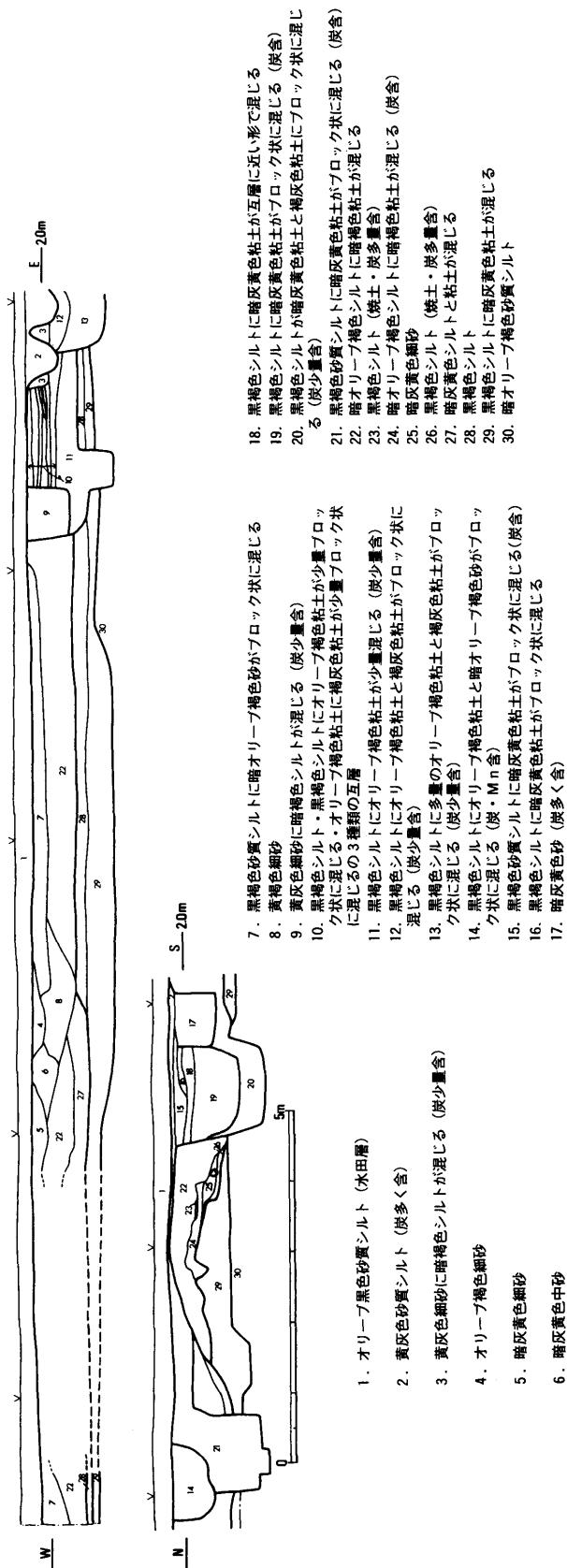


fig. 10 A 3 区北壁・東壁土層 (1:100)

形から須恵器杯類 (fig. 44-120~123) が出土している。興味深いのは、b 9-pit 1 や c 10-pit 1 の柱掘形内から鉄鏃が出土していることである。状況から見て、混入ではなく、意図的に埋納されたものと考えられる。

これらの遺物から、7世紀前半頃の遺構と考えてよからう。

**土坑 SK 6・23** 土坑 SK 6 は第1遺構面を削り込んで検出したものであるが、その下部に相当する SK 23 と一連の同一遺構と考えておく。SK 6 の埋土中には木炭の小片があり、南東部には焼土が見られた。このことから、遺構の形状こそ明確ではないが、竪穴居である可能性が高い。土師器杯類ら長胴甕・甌などが出土しており、飛鳥～奈良時代頃の遺構と考えられる。

#### e 第1遺構面

第1遺構面は、耕作土直下の淡褐色系砂質土上で検出した。標高約2.0mである。溝が6条と土坑が1基ある。いずれも中世後期の遺構である。

**溝 SD 1・2 (fig. 9)** 調査区の西半部で検出した遺構である。東西方向に、ほぼ並行して走る溝で、SD 2 は両端が調査区外に及ぶが、SD 1 の西端は調査区内で完結する。遺構面からの深さは、SD 1 が約0.7m、SD 2 が約0.5mである。SD 1 からは土師器鍋類を中心とした多くの土器類が出土している。この2条の溝間が道路状遺構になる可能性もある。

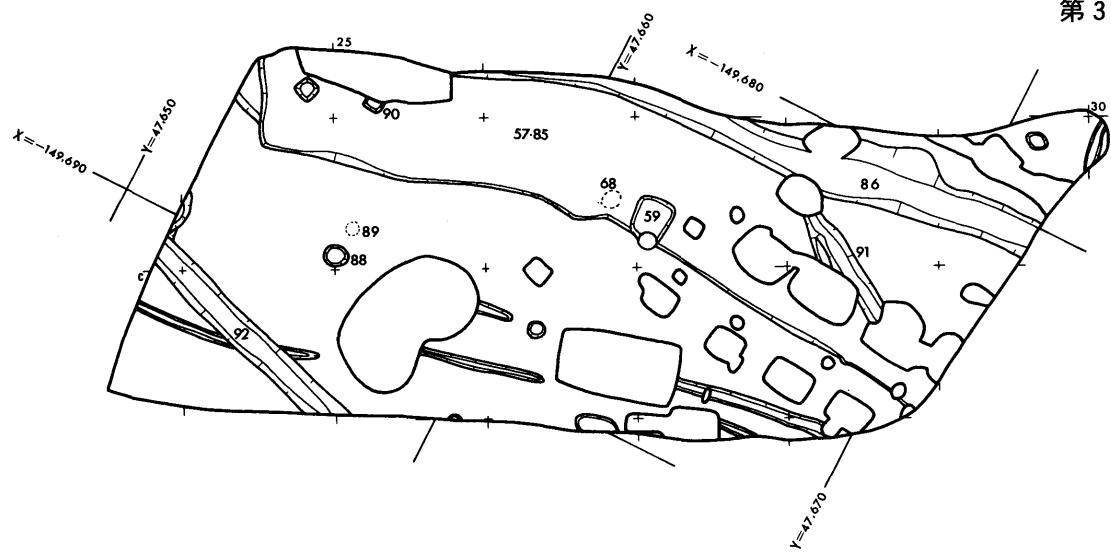
SD 2 の西端部では、若干突出するような状況で小溝がある。この上層部からは土師器鍋類を中心とした土器類が細片で多量に出土している。

遺構の時期としては、SD 1・2ともに中世後期、16世紀前半を中心とした時期と考えられる。

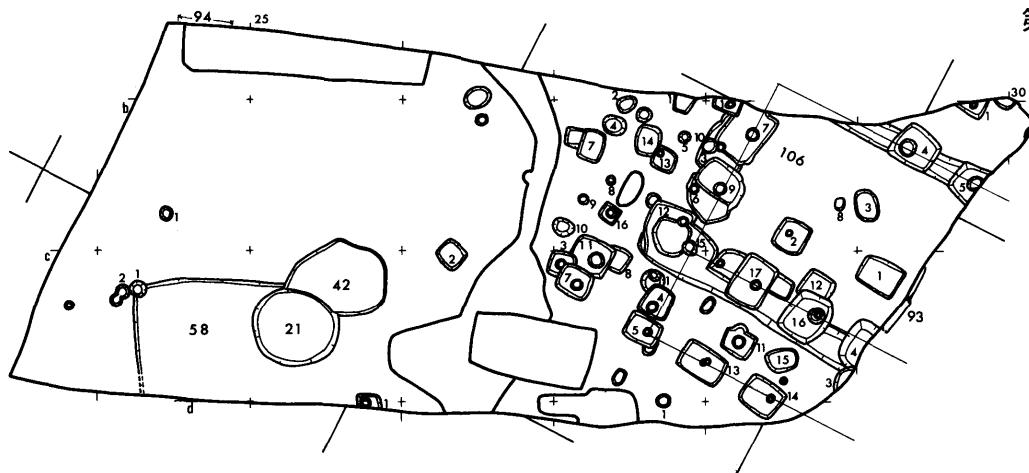
**溝 SD 4・5・8** いずれも、SD 2 の西端で検出した小規模な溝状遺構である。SD 8 は、SD 2 に取り付くような状態である。SD 4 もそのようなものであるが、検出時の切り合い関係からは SD 8 よりは古いものである。

### 3 A 2区の状況

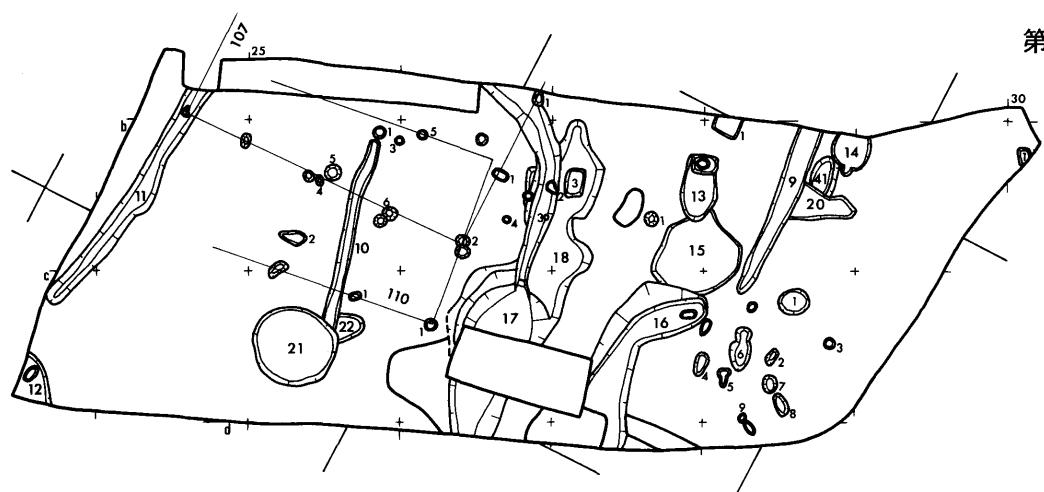
第3・4面



第2面



第1面



0 10m

fig.11 A 3 区平面図 (1 : 200)

A 2 区は A 1 地区の道路を挟んで西側にあたる調査区である。この調査区は、人家と隣接し、調査以前にも家屋が存在していた場所である。そのため、盛土も1.5m近くあった。3 方が道路、1 方が人家といった狭隘な調査区で、A 1 区の第 1 遺構面に達するためにも 2 m近くの掘削が伴うこととなった。そのために危険が伴い、隣接する人家にも影響が出ることを考え、今回は調査を控えた。

#### 4 A 3 区の層位と遺構

A 3 区は、俗称「近鉄道路」の西に隣接する調査区である。第 1 ~ 第 4 遺構面を確認している。第 1 ~ 第 3 遺構面までは A 1 区と同じ時期の遺構面である。第 4 遺構面は、A 1 区の第 4 ・ 5 遺構面が同一層面において確認されたものと考えられる。

##### a 第 4 遺構面

調査区西部ではやや黄灰色系砂質土、東部では淡緑灰色系砂である。つまり、A 1 区の第 4 遺構面と第 5 遺構面の層が、この地区では明確に分離していないことになる。遺構面は標高約 1.4m で A 1 区第 5 遺構面よりも 0.5m ほど高い。したがって、当該時期において、A 3 区は微高地状になっていたもの

と考えられるのである。

縄文時代晚期の遺構と、時期不明の溝状遺構を確認している。

**土器棺墓 S X88 (fig.12)** 調査区西部で検出した遺構である。長軸約 0.7m、短軸約 0.5m の橢円形の掘形内に、壺形の土器棺を西に口縁部を向けて設置している。口縁部側には、別個体のやはり壺形の土器の体部片を用いて蓋としている。棺身は、底部側がやや下がる状態で斜めに安置されている。

棺身に使用された土器は、体部に補修孔を数ヶ所持つもので、口縁部が意図的に打ち欠かれているものである。蓋に使用された土器も口縁端部が全く欠損したものを使用している。使用された土器の形態を知るうえではまったく残念至極であるが、何らかの意志が作用していることも考えられようか。

土器の形態から、縄文時代晚期でも、最終末に近い時期のものと考えられる。

**土器棺墓 S X89 (fig.12)** S X88 の北側で検出した遺構である。口縁部径約 21cm の小形の鉢を用いたもので、口縁部を東に向け、遺構面上から検出されている。このことから、この遺構は土器棺ではない可能性もある。

土器の形態から、縄文時代晚期でも、最終末に近い時期のものと考えられる。

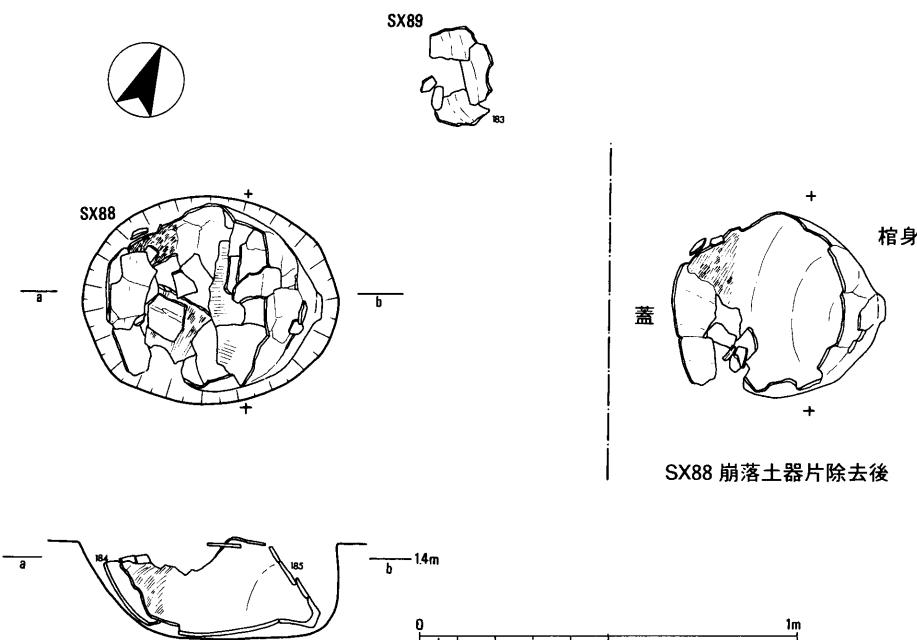


fig. 12 A 3 区第 4 面土器棺墓 S X88・89平面・断面図 (1 : 20)

**小溝群** A 1 区第 4 遺構面で検出したものと同様な小規模な溝が調査区内で 3 条ほど確認されている。出土遺物がなく、時期は不明であるが、A 1 区第 4 遺構面のものと同じ時期の遺構と考えてよいかと思われる。

### b 第 3 遺構面

第 3 遺構面は、原則的には古墳時代前期を中心とした遺構面である。遺構は、原則的には黒灰色系砂質土面上で確認されるものであるが、明確にその面上で確認したものは少ない。

なお、古墳時代後期を中心とした時期についても、竪穴住居などの遺構を第 2 遺構面から第 3 遺構面の検出時に確認している。この時期の遺構は第 2 遺構面として取り扱うこととする。

**溝 S D86** 調査区の北部で検出した遺構である。幅約 0.6m、深さ約 0.3m の溝で、東西端ともに調査区外へ延びる。埋土上層から S 字甕や壺などが出土している。古墳時代前期に相当する。

**落ち込み S Z61** 調査区の北東部で検出した遺構である。遺構下部は前述の S D86 が見られるので、その上層部あるいは S D86 がほぼ埋没した段階に見られた落ち込みかと考えられる。埋土中には赤彩土器や焼成後底部穿孔壺などを含む。時期的には S D86 よりも少し新しいと考えられる。

**落ち込み S Z57・85 (fig.13)** 溝 S D86 の南側に認められた落ち込み状の遺構である。S Z57 が上層部、S Z85 が下層部に相当する。埋土中からは、器台・高坏・二重口縁壺・S 字甕などの多くの遺物が含まれているが、時期的には幅がある。



fig.13 A 3 区第 3 面落ち込み S Z57 他土器出土状況 (1 : 40)

なお、S Z 68としたものは、S Z 57の南側に見られた土器群であり、S Z 57の一連と考えられるものである。

**溝 S D87** S Z 85の東部に取り付くような状況で確認された溝である。幅約0.8m、深さ約0.2mで、浅い落ち込み状を呈するものである。

**溝 S D91** S D86から枝別れして南東方向へと延びる溝である。幅約0.8m、深さ約0.3mで、比較的明確な掘形を有するものである。埋土中にはS字甕・壺のほか、北関東地方かと思われる外来系土器を含む。時期的にはS D86よりも少し古いかと思われる。

**溝 S D92** 調査区南西部で検出した溝である。幅約0.8m、深さ約0.2mで、断面U字形をしている。出土遺物がなく、明確な時期は決しがたいが、溝S D91とほぼ同方向であることから、この時期のものとして取り扱った。

**土坑 S K90** 調査区北西部で検出した遺構である。任意に設置した排水溝に接したため、遺構の北側は破壊されている。直径約0.3m、深さ約0.2mのピット状の土坑である。埋土中から、2個体分のS字甕がまとまって出土した。西に隣接するピットとともに、堅穴住居の主柱穴か、あるいは掘立柱建物となる可能性もあろうか。

**土坑 S K59 (fig.13)** 調査区中央部で検出し

た遺構である。一辺約1.0mの方形を呈している。内部には炭を多量に含んでいた。

### c 第2遺構面

第2遺構面は、淡褐色系砂質土上をベースとする遺構面である。遺構面の標高は約2.0mである。

第2遺構面検出中には、b 25・26グリットを中心とし、7世紀を中心とした良好な遺物が数多く出土した。これらは明確な遺構に伴うものではないが、東に隣接する掘立柱建物S B 106などの時期に伴うものと考えられる。

**堅穴住居 S H58 (fig.14)** 調査区南西部で検出した遺構で、方形の堅穴住居である。遺構の東部は土坑S K21・42によって切られる。北辺と西辺の一部は明確に検出できたが、東辺は確認することができなかった。そのため、方形とまではいえるが、規模は不明と言わざるを得ない。カマドが北辺中央にあたると想定すれば、東西辺は約4.4mとなる。貼床は、明確には確認できなかった。

北辺にはカマドが見られる。カマドは、黄色系粘質土で造られている。煙道に相当する部分には土師器甕が口縁部を建物内に向ける状況で置かれていたため、土師器甕を用いて煙道を形成していたのであろう。カマドの中央には花崗岩の棒状礫が置かれており、支柱石と考えられる。

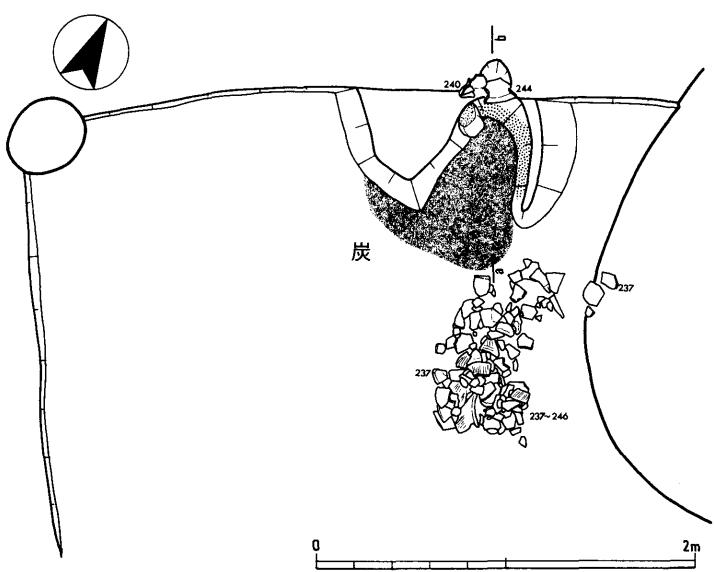


fig.14 A 3 区第2面堅穴住居 S H58平面・断面図 (1:40)

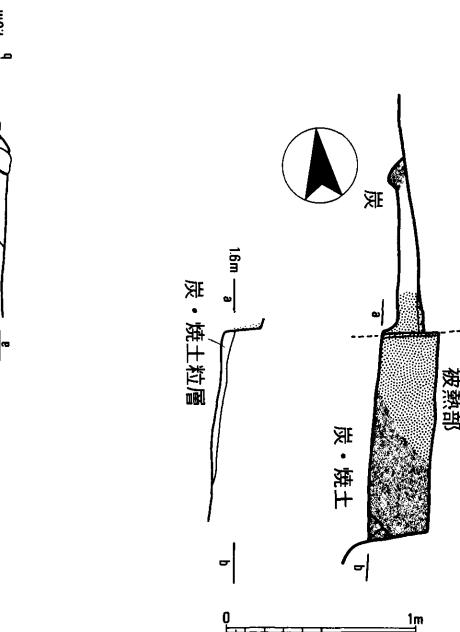


fig.15 A 3 区第2面焼土坑 S F93平面・断面図 (1:40)

主柱穴は確認できなかった。また、貯蔵穴があるとすれば北辺東寄りであるが、SK21・42による破壊のため、確認されなかった。

カマドの南側には、土師器甕・長胴甕・甌・高杯や須恵器蓋杯などがまとまっており、一括性の高い良好な資料である。これらの土器から、6世紀後半頃の遺構であると考えられる。

**焼土坑 S F93 (fig. 15)** 調査区東部壁面において確認した遺構である。本来、調査区側に広がっていたものと考えられるが、調査担当者の不注意により確認できなかったものである。

北側の壁面がほぼ垂直に立ち上がるものでそこか

ら北に向かって何らかの関連施設と考えられる焼土・炭が延びる。北壁の内側最下層には焼土・炭混じり土が充満しており、確認範囲内の中央に土師器甕が伏せた状態で出土した。甕内部にも焼土・炭混じりの土が充満していた。

これらのことから、この遺構については堅穴住居のカマドである可能性も考えられるが、決定的な要素がないため、焼土坑としておく。

出土土器は土師器のみである。形態的にはSH58の遺物よりも後出的であり、7世紀代の遺構と考えておく。

**炭層 S Z94** 調査区北西隅の壁面にて、焼土・

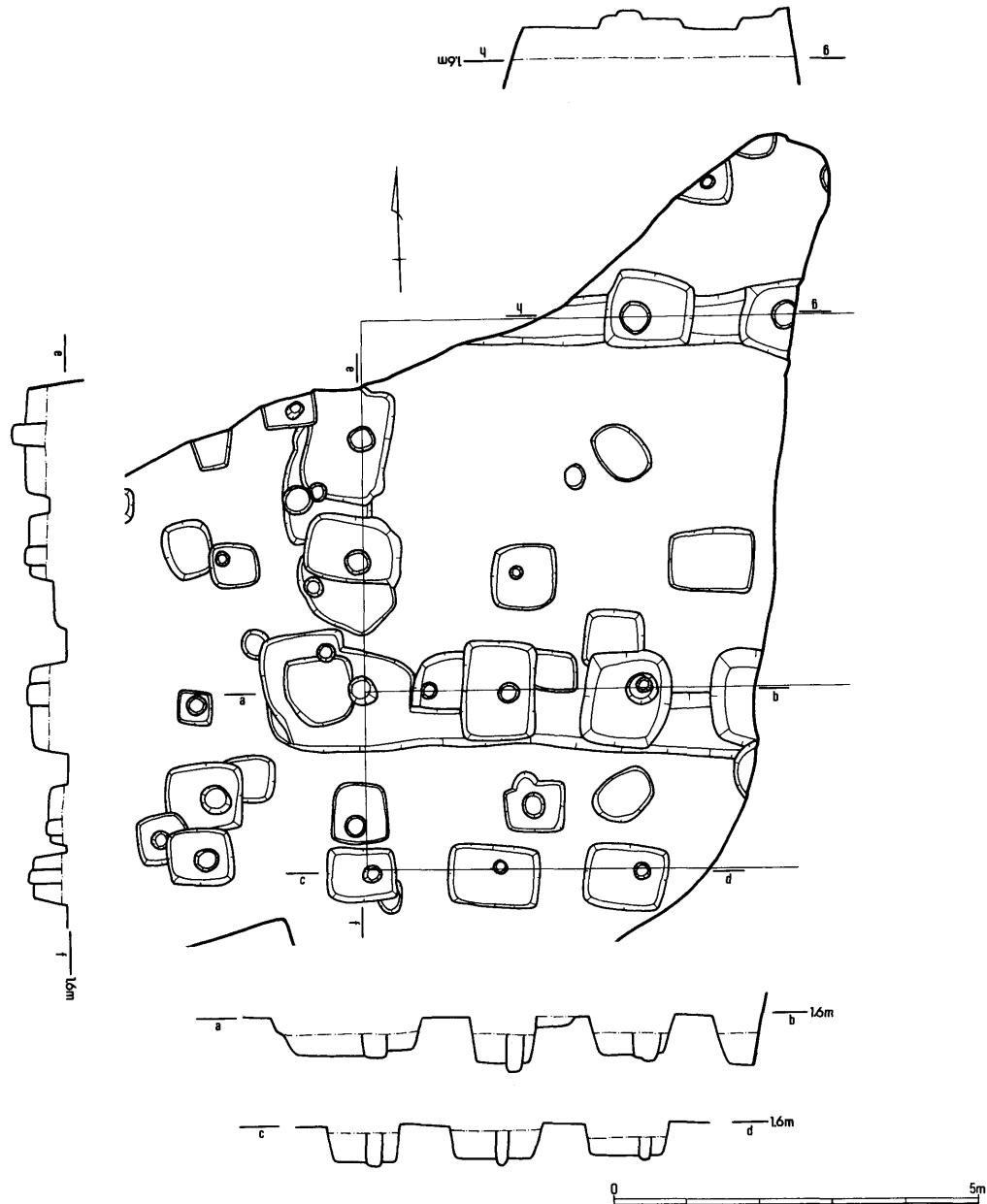


fig. 16 A 3 区第2面掘立柱建物 S B 106平面・断面図 (1 : 100)

炭層を確認した。調査の最終段階でこの壁面中より土師器甕を1個体確認した。明確にはし難いが、やはり堅穴住居ではないかと考えられる。時期的にはS H58よりもやや後出的かと考えられる。

掘立柱建物 S B106 (fig.16) 調査区東半部  
で検出した遺構である。南北4間、東西3間以上の  
掘立柱建物である。南側に庇と考えられる柱列のあ  
ることから、東西棟であると考えられる。南北方向  
の主軸は、真北を基準にN 0°で、ほぼ真北を向い  
ている。

柱間は、東西が約1.8m、南北が約1.8mで、身舎と南庇間は2.4mとなる。身舎部分の桁行方向は布掘り状に接続される。ピット内は、fig.10の土層図に見られるように、上層部に黄色系土と暗褐色系土の互層が見られ、版築状に固められていると考えられる。ピットの大きさは、身舎部分では長辺1.4～1.3m、短辺1.2～1.0m、南側の庇部分では長辺1.3～1.0m、短辺約0.8mで、全体に大型である。深いピットは、検出面から約0.7mほどある。このように、かなり大型の掘立柱建物であるといえる。

ピット内からの出土遺物は、第3遺構面からの紛れ込みが多いが、僅かな出土遺物から判断すると、7世紀後半頃の遺構かと考えられる。

## 土坑SK21・42 調査区西部で検出した遺構で

ある。SK21は直径約2.3m、SK42は直径約2.4mで、切り合い関係からはSK21の方が新しい。検出面からの深さは約0.5mである。SK42出土の須恵器から、7世紀中葉頃の遺構であると考えられる。

d 第1遺構面

第1遺構面は、耕作土直下の淡褐色系砂質土層上で確認した遺構面である。検出面で、標高約2.2mである。平安時代後半から中世後期にかけての遺構が見られる。

土坑S K13 調査区中央東部で検出した遺構である。長軸約1.8m、短軸約1.0mの不整橢円形を呈する落ち込み状の土坑で、検出面からの深さも約0.1mと浅い。土坑内からは灰釉陶器段皿や黒色土器が出土している。平安時代後期頃の遺構と考えられる。

土坑 S K 17 (fig.17) 調査区中央南部で検出  
した遺構である。中央を試掘坑で破壊されているが、  
南部にも延長部分が確認される。東西約3.0m、南北4.5m以上の不整橢円形を呈する土坑である。淡  
灰褐色系砂質土を埋土とする。

溝S D18が北に取り付くように認められるので、それと一連の遺構である可能性もあるが、S K17 자체が明確な掘形を有するものであるため、遺構としての完結性は高いものである。

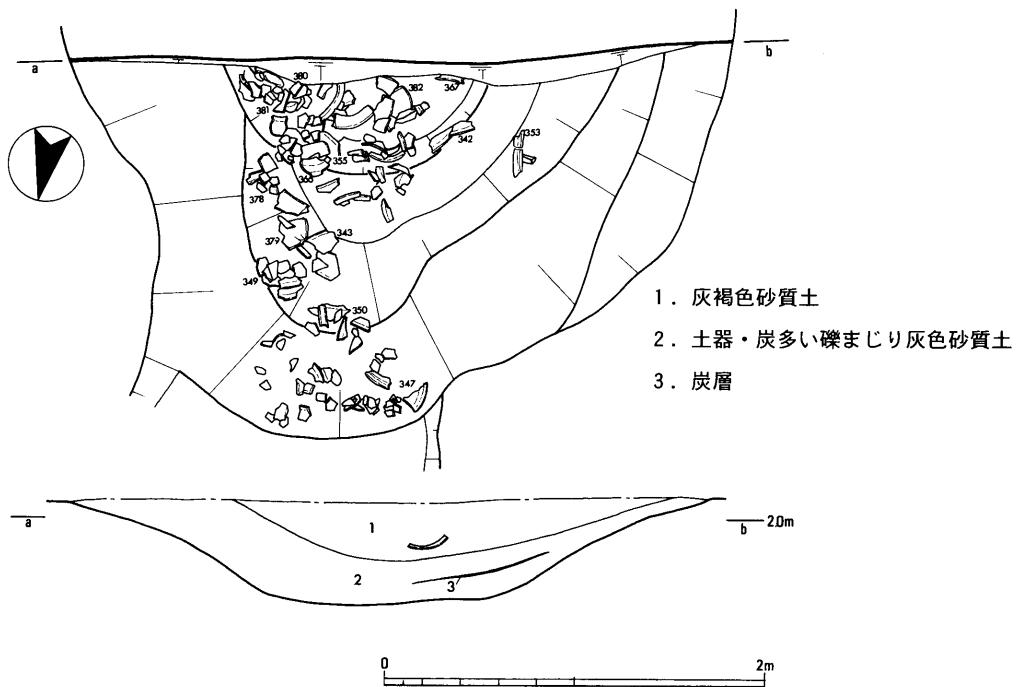


fig. 17 A 3 区第 1 面土坑 S K17 土器出土状況および土層断面図 (1 : 40)

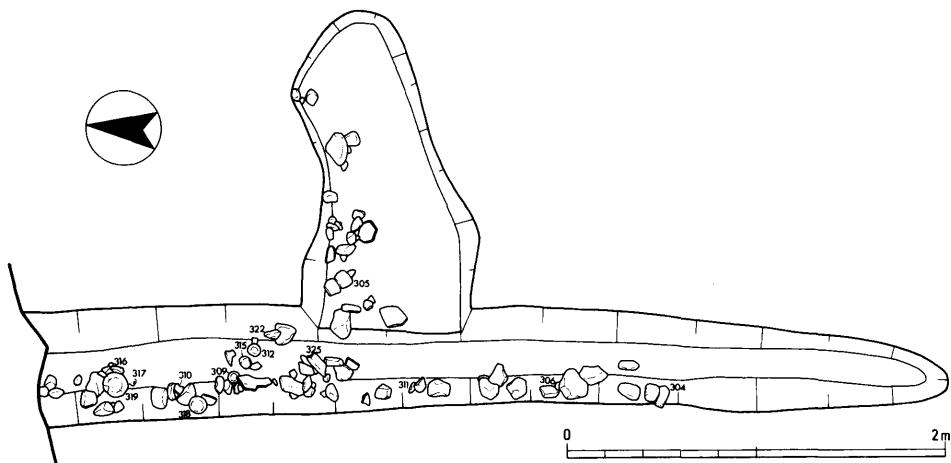


fig.18 A 3 区第1面溝 S D 9・20遺物出土状況 (1:40)

土坑埋土内からは、下層部分を中心に、煮沸用土器類を中心とした多量の遺物が出土した。土師器では南伊勢系および中北勢系のものが混在している。供膳形態土器類が少量であることも特筆される傾向といえる。遺物の一括性は極めて高いものと考えられる。

出土遺物は、16世紀前半頃を中心としているものと考えられる。

**溝 S D 9・20 (fig.18)** 調査区東部で検出した遺構である。南北に延びる S D 9 に対し、S D 20 はそれに直交するかたちで東側に認められる。S D 9 の南端は調査区内で収まり、北部は調査区外へと至る。溝の方向は N 3° W で、A 1 区 S D 1・2 とほぼ直交関係にあるのも興味深い。S D 20 も調査区内で収まるものである。ともに暗褐色系土を埋土とする。

S D 9・20とともに、土師器皿類を中心とした遺物が比較的まとまって出土しており、先述の S K17 の出土遺物とは対照的である。S D 9 埋土内からは少量の礫とともに五輪塔も出土している。これらに意図的な配列は見られず、無造作に投棄されたものと考えた。

出土遺物の示す時期は、S K17 と同様、16世紀前半を中心とした時期と考えられる。

**溝 S D 10** 調査区中央西部で確認した遺構である。幅約0.3m、検出面からの深さ約0.1mの小規模なもので、南北に走っている。延長約5mを確認した。

淡灰色系砂質土を埋土としており、S K17やS D 9・20よりも時期的に先行するものと考えられる。しかし、出土遺物が微細なため、明確な時期は分からぬ。

**溝 S D 11** 調査区西部で確認した遺構である。黄灰色系土を埋土とするもので、この埋土は他の遺構には見られないものである。幅約0.3m、検出面からの深さ約0.1mの小規模なものである。

出土遺物は微細なものばかりで、時期を示すようなものは見られなかった。

**溝 S D 16** 調査区中央南部で確認した遺構である。検出時には幅約1.0mを呈していたが、0.1mほど下げた段階で幅約0.6m、深さ約0.4mとなり、法面が垂直に近い状態で落ちる溝となった。南端は調査区外へと続くが、北部は東に折れている。

埋土内からは鎌倉時代前半を中心とする遺物が出土しており、この時期の遺構と考えられる。

**溝 S D 18** 調査区中央北部で検出した遺構である。南端は S K17 に取り付くような状態となる。北端は調査区外へと続く。

遺構を掘りきってしまうと、北東部に弧を描くように屈曲する溝で、幅約0.6m、検出面からの深さは約0.4mとなる。しかし、上層部分は調査区内で南北方向の直線的な落ち込みとして確認できるため、下層部分の埋没後、上層部分が掘削されたものと考えられる。したがって、厳密には上層部分が S K17 に取り付くものなのである。埋土は、下層部が淡灰色系粘質土で、上層部分が淡灰褐色系砂質土とい

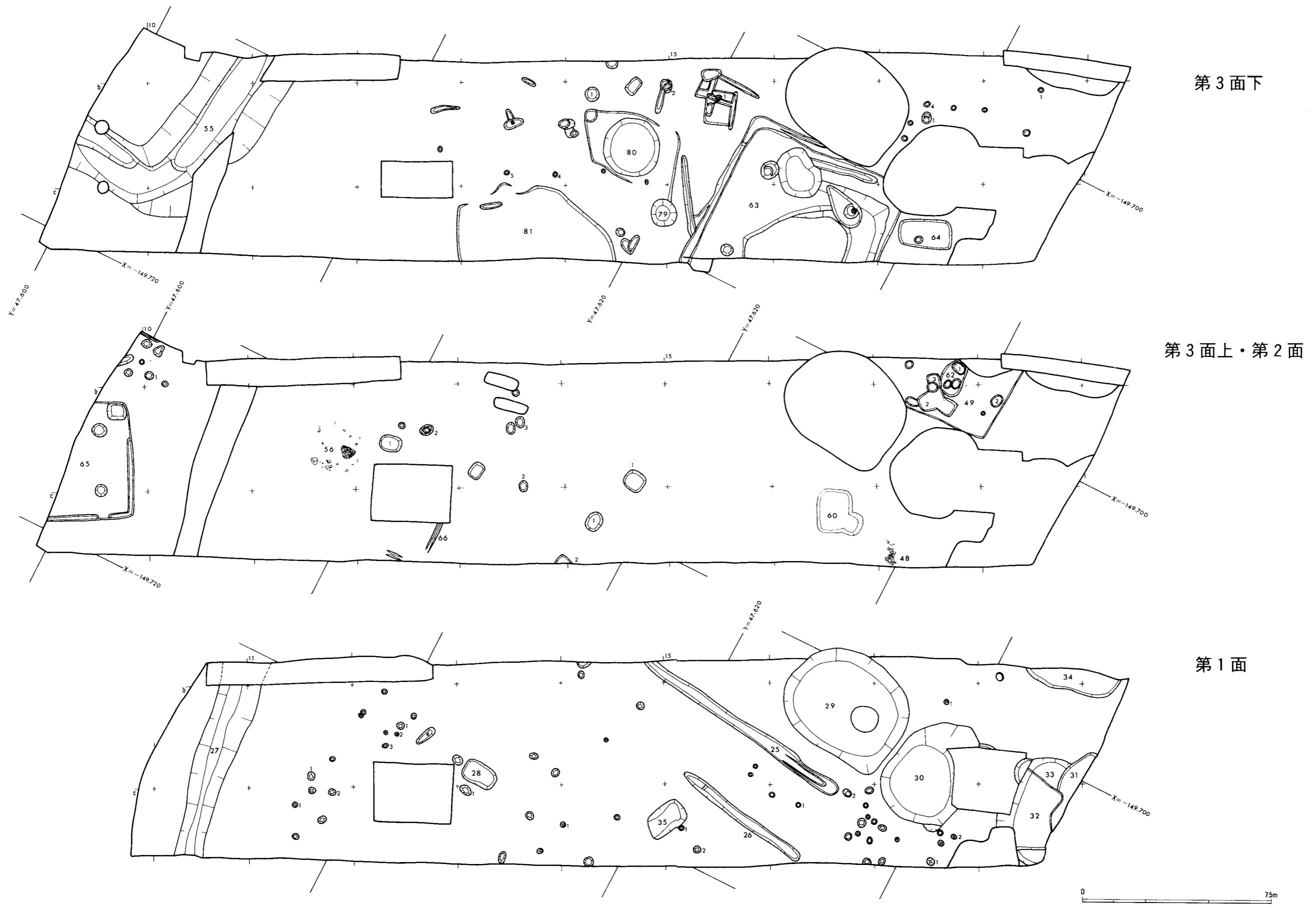


fig.19 A4区平面図(1:150) ※遺構は略号を省略 小数字はピット番号(グリット毎)

う差がある。

出土遺物からは、上層部分がS K17とほぼ同じ16世紀前半頃、下層部分は遺物が少量のため、それ以前としか言えない。

**掘立柱建物 S B 107** 調査区西部で確認した遺構である。南北2間(4.5m)以上、東西4間(8.1m)以上の掘立柱建物である。東西棟と考えられ、建物主軸はN 1° Eで、ほぼ真北を向く。

出土遺物が少量のため時期は明確でない。

**掘立柱建物 S B 110** 調査区西部で確認した遺構である。南北2間(4.5m)以上、東西2間(4.5m)以上の掘立柱建物である。東西棟と考えられ、建物主軸はN 4° Eである。

出土遺物が少量のため時期は明確ではないが、S D 9 の方向ともほぼ揃っているため、同じ時期のものと考えてよからう。したがって、S D18上層やS K17とも一連の遺構であると考えられる。

## 5 A 4 区の層位と遺構

A 4 区は、A 3 区の西に相当する調査区である。A 3 区とA 4 区間には、雲出神社跡地があり、今でも頻繁にお参りがされている。範囲内にはその参道があったため、発掘調査は行わなかった。

3面の遺構面として調査を行った。ただし、それは層位的には明確に区分できず、2・3面目はほぼ同じ面で検出される筈のものであったが、遺構の見難さから順次検出面を下げたに過ぎないものである。一応、第1～第3 遺構面をA 1・A 3 区の第1～第3 面に対応させて記述する。

### a 第3 遺構面

第3 遺構面は、本来は第2 遺構面と同様、暗褐色系粘質土層上面で検出できるものである。事実、S D55はこの層上で検出している。しかし、明確に遺構を識別することができなかつたので、この遺構面に相当する遺構の大部分は、A 1・3 区の第4 遺構面に相当する黄褐色系粘質土および淡緑灰色系砂質土層面で確認したものである。

**落ち込み S Z81** 調査区中央南部で確認した遺構である。遺構南部は調査区外へ続く。幅7 m程度

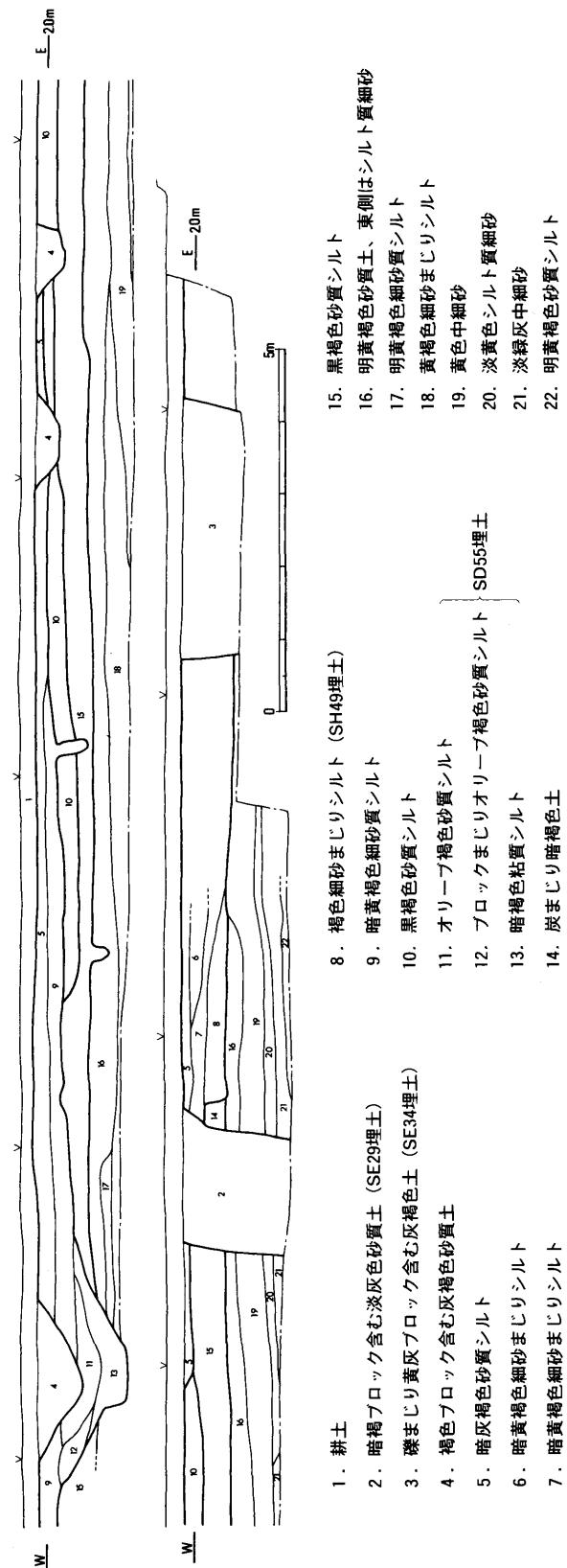


fig.20 A 4区北壁土層 (1:100)

の浅い落ち込みと数条の小溝などを確認したが、形状は不整である。ただ、北部の一角で若干の焼土・炭を確認したので、明確なプランこそ把握できなかつたものの、竪穴住居であった可能性もある。

埋土上部からは、高杯・壺などの比較的まとまった土器が出土している。

**井戸 S E 79 (fig. 21)** 調査区中央部で確認した遺構である。S Z81とS H63との間にあたる。直径約1.0mの整った円形で、検出面からの深さは約0.8mである。断面形は整った逆台形を呈している。井戸と考えられる遺構である。

遺構の底に接する状態で壺が1個体出土している。この壺は体部下半を欠くものの、上半部はほぼ完存した状態で割れていた。のことから、意識的に体部下半を欠いた土器を何らかの目的のために井戸内に入れたものと考えられる。

出土した土器の形態は、S Z81出土の壺類と形態・手法ともに共通するものである。

**土坑 S K 80** 調査区中央部で確認した遺構である。東西約3.5m、南北約1.8mのやや不整な長方形の落ち込み内に直径約1.8mの整った円形の土坑が掘り込まれている。円形土坑は深さ約0.5mであるが、底面は均一ではない。S E 79と同様、井戸の可能性があるが、凹凸の激しい底面の状況から、一応井戸には含めないでおく。

出土遺物は、円形土坑内からはほとんど見られず、長方形落ち込み内からの土器がある程度である。

**竪穴住居 S H 63 (fig. 22)** 調査区東側南部で確認した遺構である。東西約7.0m、南北6.5m以上の竪穴住居である。遺構南部は調査区外である。また、遺構の北東隅は中世の井戸 S E 30によって破壊されている。検出面からの深さは約0.2m程度と浅いが、これはこの上部での遺構ラインの確認ができなかったためである。

壁沿いには壁周溝が見られる。北壁部では二重になっている部分もあることから、建て替えが想定される。壁周溝の深さは約0.1mと浅い。

主柱穴は3ヶ所確認できた。位置的に見て、もう1ヶ所が調査区外に存在し、4本柱によって支えられた建物と考えられる。柱掘形は約0.5mと大きく、深さも床面から約0.4mほどある。

北側2本の主柱穴の間には、土坑が見られる。性格的には貯蔵穴であろうか。直径約1.8m、深さ約0.3mで、不整円形を呈するものである。

遺構中央には、若干の被熱した土と炭が見られた。炉と考えてよからうが、同じ場所で継続的に火が燃やされたという状況ではない。

床面からは、とくに壁寄りを中心として良好な土器が数多く出土している。床面上のものがほとんどであることから、一括性も高い資料といえる。

なお、床面については、中央部が高く、周囲は若干下がるような状態で、決して平坦ではない。この壁寄りの少し低い床面下は溝状になっている。調査の最終段階に竪穴住居内部の人為的に埋められた部分を取り除いていくと、床面中央部分を島状に残し、その周囲を壁面に沿って深く掘り下げられた状態となつた。この深さは、中央の島状の残った床面からは約0.7mほど下がっている。壁面に沿って掘られているため、この竪穴住居に伴うもので、しかも構築段階に行われたものであることは確実であろう。ただ、このような掘り込みを住居構築時に行うとい

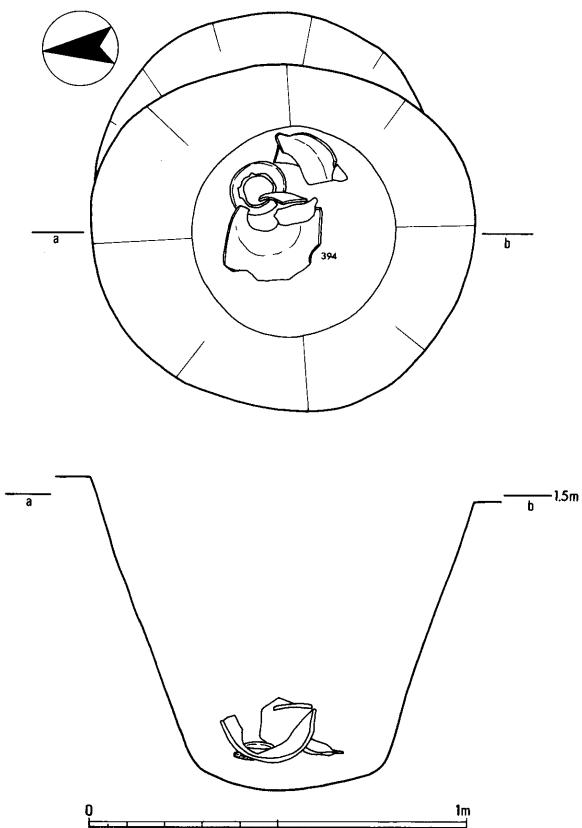


fig.21 A 4 区第3面井戸 S E 79 土器出土状況 (1:20)

う事例は他には管見に及ばず、機能的な位置付けができない。

出土土器は、前述のように極めて良好なもので一括性も高い。布留甕の破片も含む。なかには、fig. 60-477・478のように、口縁部を意図的に打ち欠くようなものも含んでいる。

**土坑 S K 60 (fig. 23)** 調査区東部で検出した以降である。炭混じりの落ち込み状遺構として認識したものである。位置的に見て、S H63の上部に相当するため、S H63の上層埋土という認識の方が妥当かも知れない。

出土土器は、台付甕を中心としたもので、若干散在しながらもよくまとまっている。

**土器群 S Z 48 (fig. 23)** 調査区東側南部で確認したものである。土器群として見られたもので、遺構の形態は確認できなかった。

土器は台付甕・高杯・小形丸底鉢・壺などがある。非常によくまとまつたもので、一括性の高いものである。

**周溝 S D 55 (島貫 1 号墓) (fig. 24)** 調査区西端で確認した遺構である。「第3遺構面」とした遺構群のうちで、明確に第2遺構面検出段階で確認

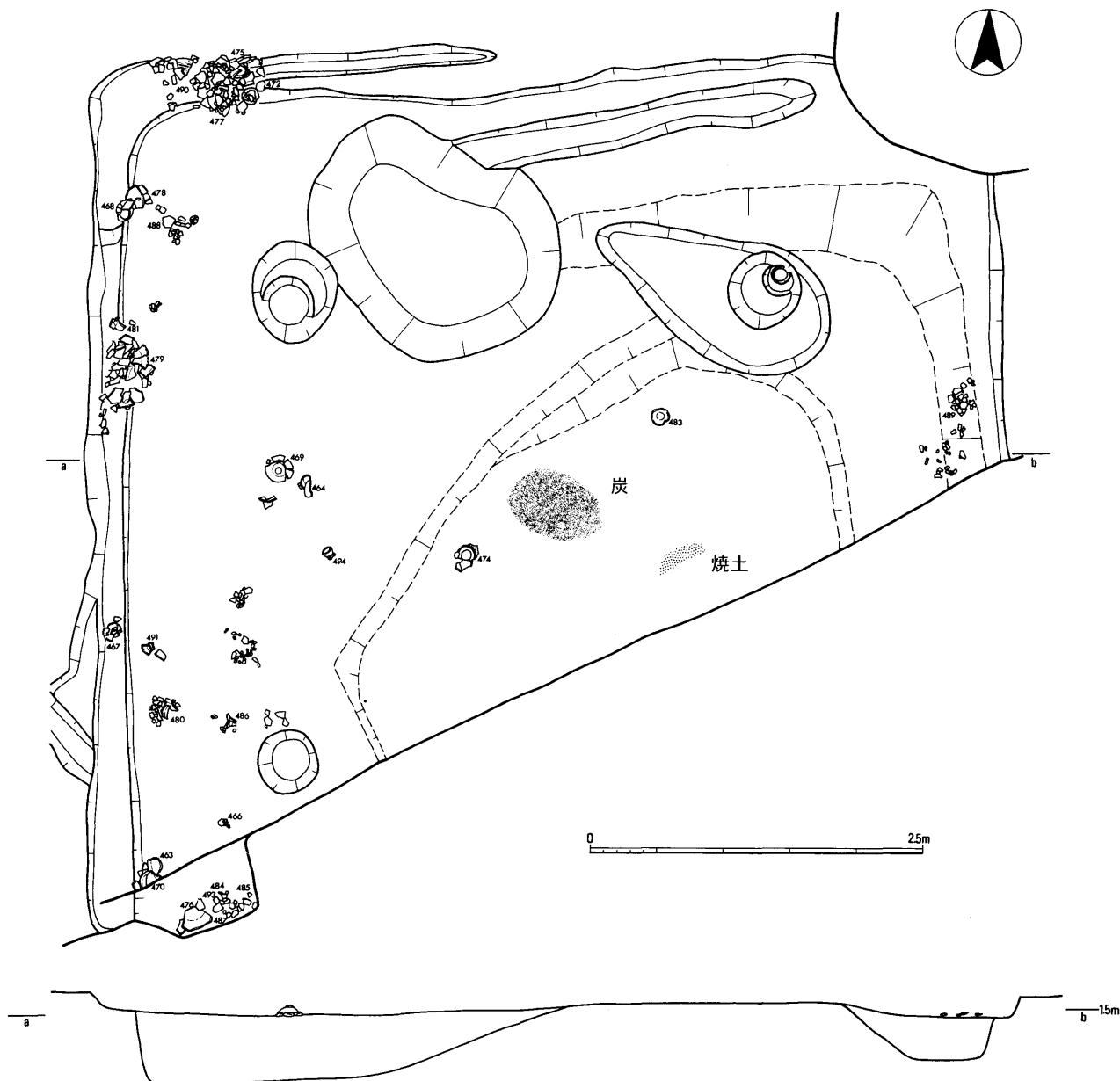


fig. 22 A 4 区第3面堅穴住居 S H63平面・断面図 (1 : 50)

した唯一の遺構である。

調査区内においてL字形に屈曲する溝である。形態から見て、墳墓あるいは古墳にと考えて間違いないだろう。方形の墳墓で、東西3.5m以上、南北5.5m以上の規模である。

周溝は、逆台形状に明確な掘形を呈する。とくに墳丘側では、底面から垂直に近い立ち上がりを示し、20cmほどのところから緩やかに立ち上がっていく状況が観察できる。墳丘側を明確に区画しようとする意識があるものと考えられる。

周溝底は、コーナー部分における掘り込みが若干浅くなっている。とくに東側周溝でそれが明瞭に確認できる。南側周溝では、調査区外側の西側ほど周溝底が微妙に浅くなっている状況も確認できる。これは、あるいは南側に前方部状の突出部を有する墳墓である可能性もある。調査区西側は平成10年度に調査を行うことになっているので、この点を注意して調査を行いたいと思う。

土器は、周溝埋土中から多量に出土している。赤彩土器や、口縁部を意図的に欠いた壺、体部下半に穿孔のあるもの、脚台部が意図的に欠かれた台付甕、

布留甕などがある。ただし、その大部分は周溝がほぼ埋没した段階で置かれたものであり、内弯する口縁部を持つ壺 (fig. 58-423) のみが周溝埋土下層からの出土である。したがって、この墳墓の時期は、423の壺が最も近いもので、それ以外は墳墓の時期よりは新しいものということになる。

上層土器群は、これ自体は非常に一括性の高い土器群であるといえる。

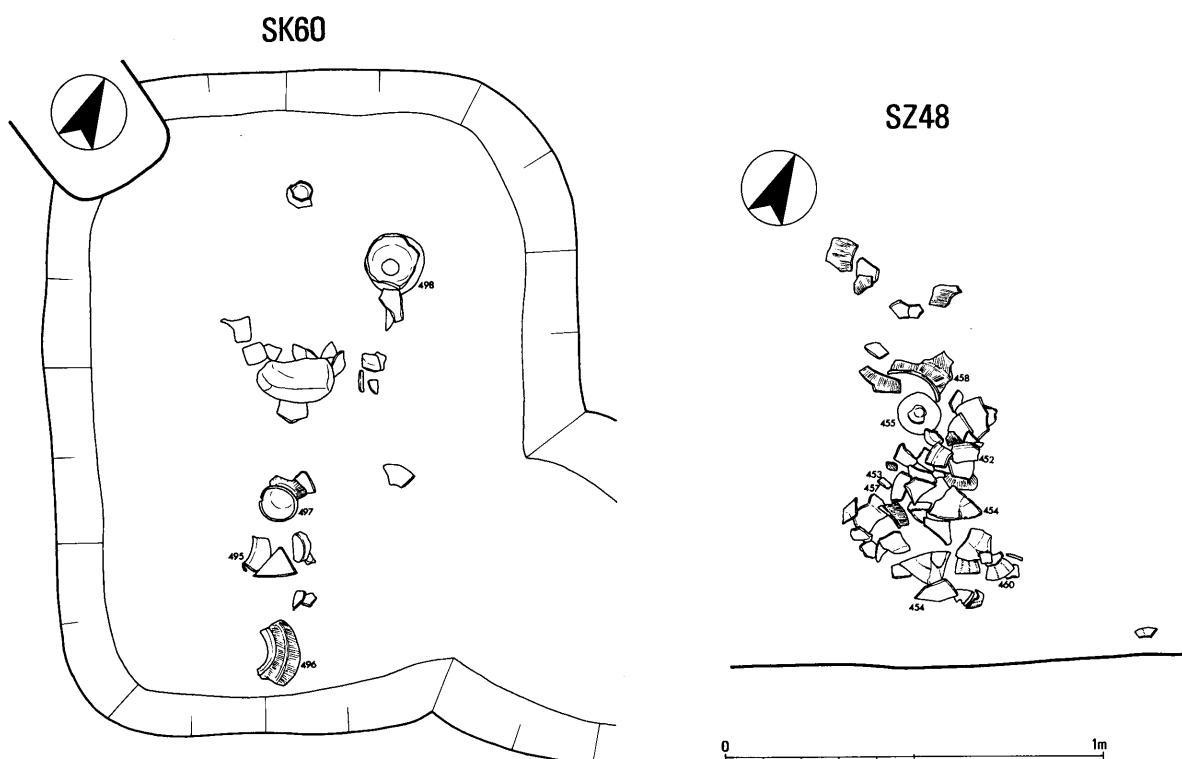
**土器群 S Z 56 (fig. 25)** 調査区西部、周溝 S D55の東で検出したものである。土器群としてしか認識できなかったが、円形にめぐる土器群の中央付近には焼土が見られたことから、竪穴住居ではなかつたかと思われる。

土器群には、三重の屈曲を持つ壺などがあり、まとまりは比較的良い。

### b 第2遺構面

第2遺構面は、第3遺構面と同様、黒褐色系粘質土を基盤とする遺構面であるが、先述のように便宜上、第3遺構面とは別に記述する。

この面からは、奈良時代を中心とした遺構が確認



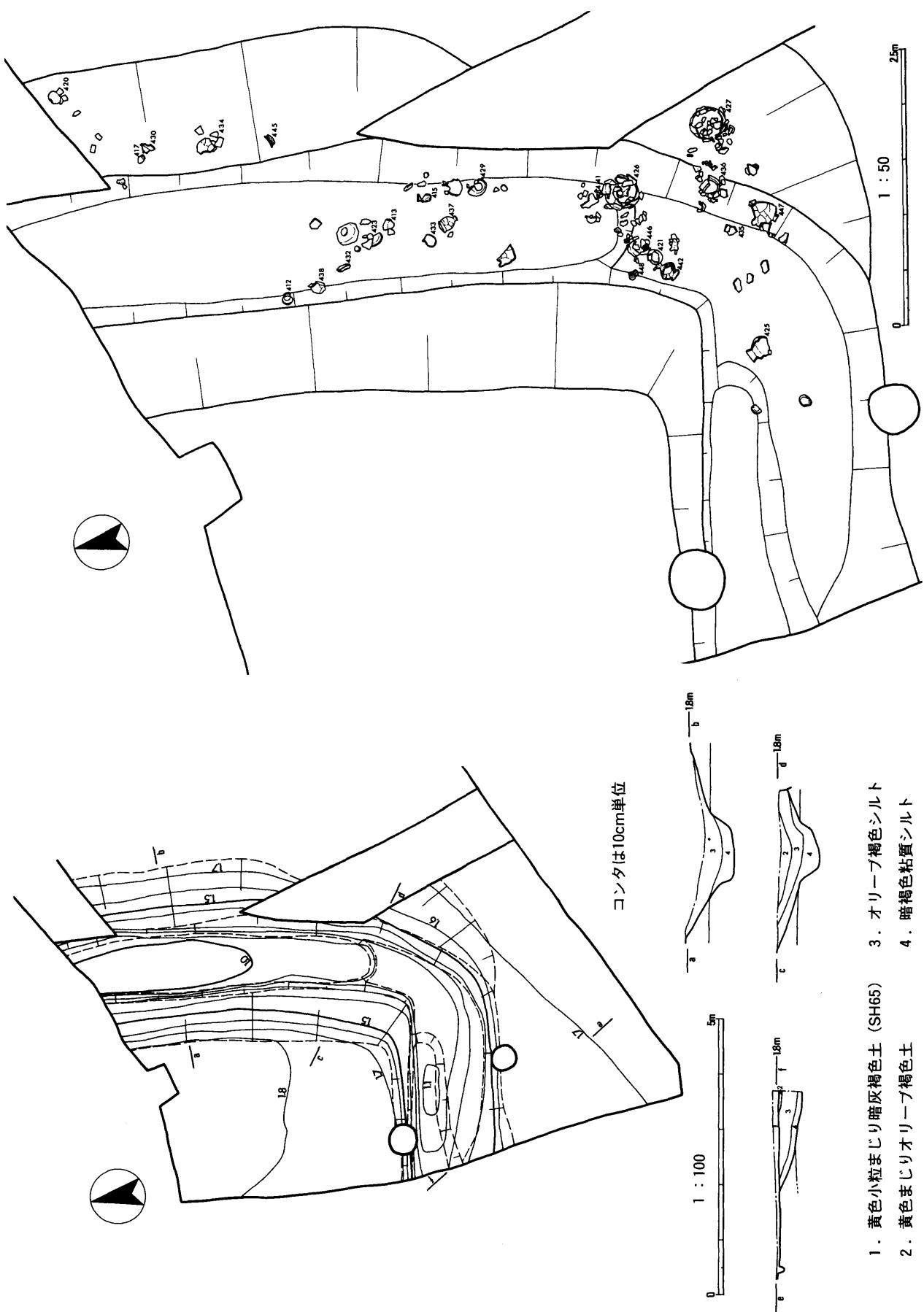


fig. 24 A 4 区第3面周溝 S D 55関連図

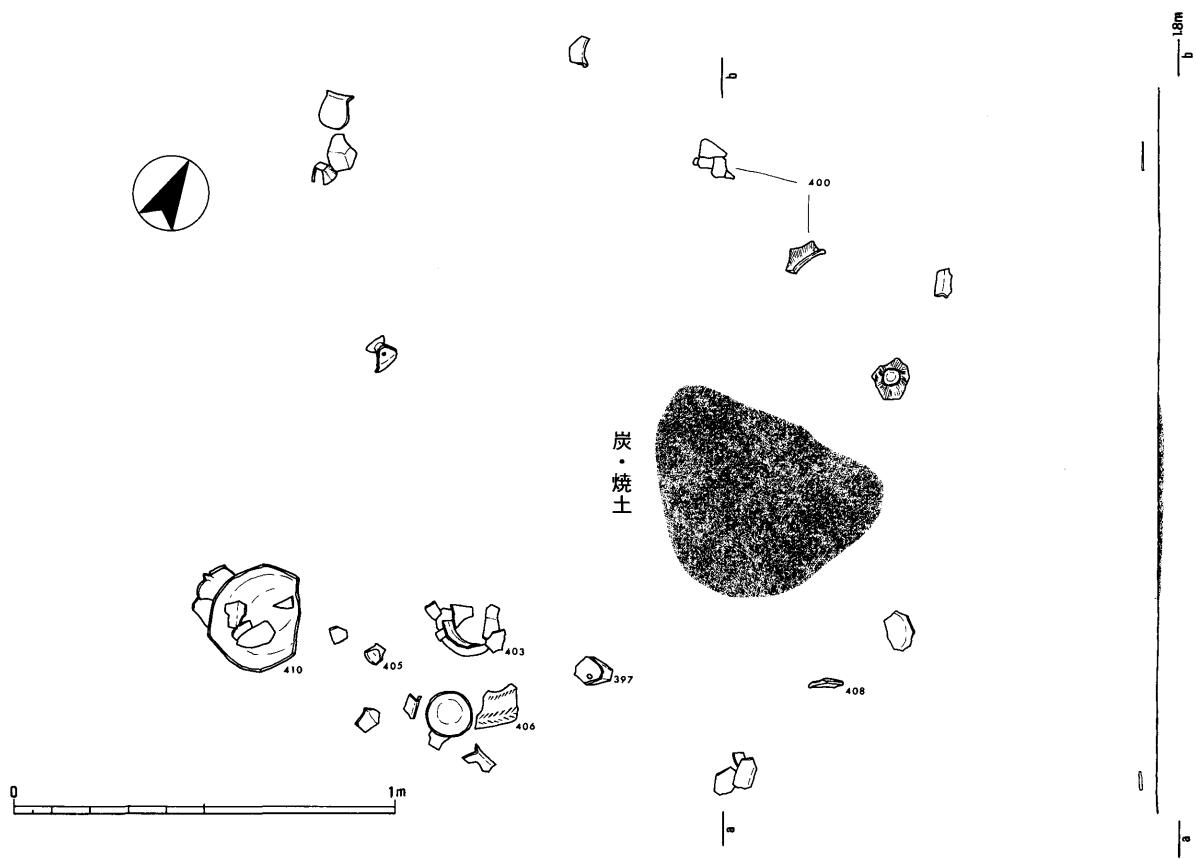


fig. 25 A 4 区第 3 面上 土器群 S Z56 土器出土状況 (1 : 20)

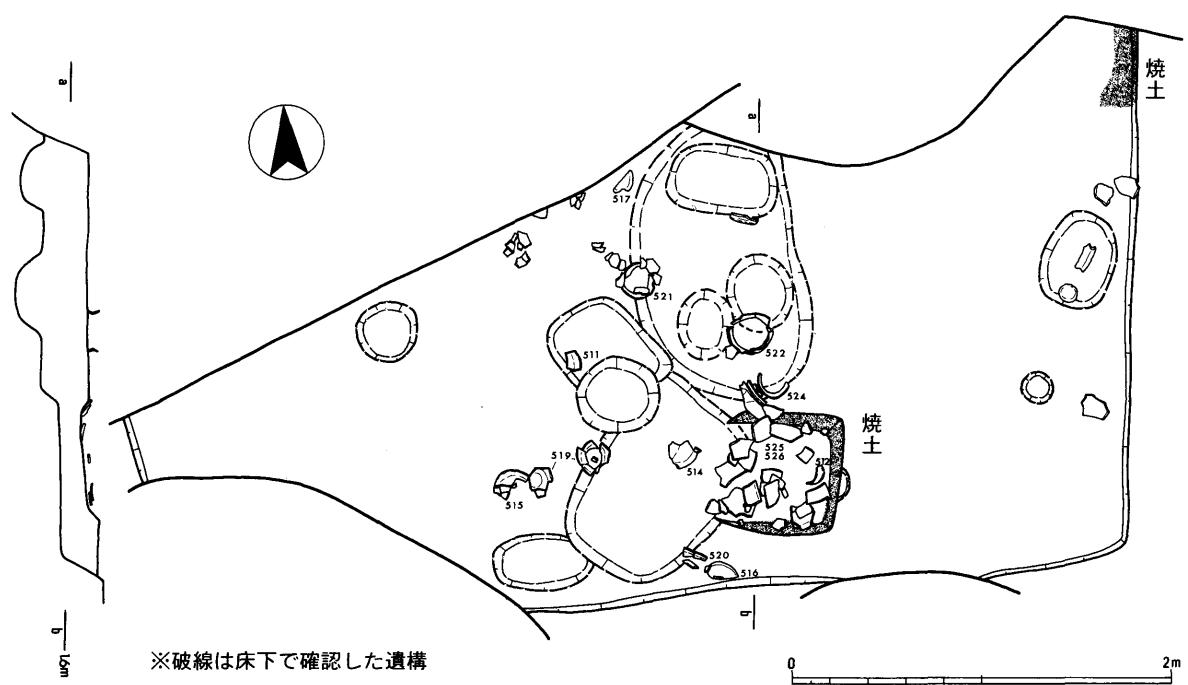


fig. 26 A 4 区第 2 面竪穴住居 SH49 土器出土状況 (1 : 40)

できた。

**竪穴住居 S H49 (fig. 26)** 調査区東部で検出した遺構である。北側は調査区外、南側の一部は中世の井戸 S E29・30によって破壊されているため今一つ明確ではないが、方形の竪穴住居と考えられる。東西約5.2m、床面の検出面からの深さは約0.1mである。

南壁寄り中央やや東に、焼土がコの字形に巡る部分がある。この部分からは移動式カマドの破片が一部倒立した状態で出土している。この他に東壁中央付近にも焼土が認められ、この部分については造り付けのカマドと想定される。つまり平面形では、竪穴住居内部に2ヶ所のカマドを有している状況となる。ただし、東壁寄りのカマドについては、明確な形状が検出されなかったことから、南壁寄りの移動式カマドを用いる部分が設定された段階で削除された可能性が高いものと考えられる。

床面上には土師器類を中心に多くの遺物が見られた。とくに甕類は口縁部を下にして、移動式カマドの付近に置かれていた状態で検出している。

床面を取り払うと、下部からは多くのピットが確認できた。しかし、建物主柱穴に相当するものがどれにあたるのかはよく判らない。ピットのうち、b 17グリットpit 3からは、古い段階の志摩式製塩土器が出土している。時期的に、竪穴住居に伴うものと考えてよいと思われる。

遺構の時期は、出土した土器類から見ると、奈良時代前半後頃かと考えられる。

**竪穴住居 S H65** 調査区西端で確認した遺構である。南北約4.3mの方形の竪穴住居である。周溝 S D55の埋没後に構築されている遺構である。検出面からの深さは、約0.1mである。

南壁および東壁沿いには壁周溝が見られる。壁周溝は、北東隅の貯蔵穴と考えられる土坑の手前で終息している。主柱穴に相当するピットは2ヶ所確認できた。

出土遺物は少量で土師器長胴甕・甌の破片がある。明確な時期は判らないが、隣接するA 5区の状況を考慮すれば、奈良時代前後のものである可能性が最も高いであろう。

なお、西半部については次年度において調査がな

される予定である。

**ピット群** 調査区中央部に、長辺約1m、短辺約0.6mほどの隅丸長方形を呈したピットが数基検出されている。これらは建物としてまとめることはできなかったが、掘立柱建物の柱掘形に相当するものと考えられる。

### c 第1遺構面

第1遺構面は、耕作土直下の淡褐色系砂質土を基盤とする遺構面である。

この面からは、中世後期を中心とした遺構が確認できた。

**溝 S D25・26** 調査区中央東部で検出した遺構である。S D25と26はN85°Wの方向、すなわちその直交がN5°Eの状態で並行して並ぶ。東端は同じ位置で終息することから、関連のある溝であることは明白である。それぞれ上部幅約0.4m、下部幅約0.2m、深さ約0.4mで、下部法面はほぼ垂直に近く掘削されている。

埋土内から出土した土器は中世後期のもので、15世紀末から16世紀初頭頃の埋没と考えられる。なかには青磁香炉 (fig. 63-538) のようなものも含んでいる。

**溝 S D27** 調査区西部で検出した遺構である。周溝 S D55を切る。南北方向に走る溝で、南北端は調査区外へと至る。方向はおよそN9°Wである。幅約0.6m、深さ約0.3mで、断面は緩やかなV字形をなす。

埋土上層部を中心に、中世後期に相当する遺物が出土している。遺物の中心が16世紀前半代であり、この時期に埋没したものと考えられる。遺物中には平瓦を含んでいる。

**井戸 S E29** 調査区東部で検出した遺構である。掘形は長軸約5.0m、短軸約4.0mの不整橢円形である。掘形内中央やや東寄りに直径約1.0mの枠痕跡が確認できる。枠は結桶を用いたものと考えられ、下部から崩壊した桶部材が出土した。井戸の底は湧水が激しく確認できなかったが、標高約0.6mまでは確認した。

掘形内からは瀬戸大窯期の陶器が出土しているため、中世後期、16世紀前半頃に機能していたものと

考えられる。

**井戸 S E 30** 調査区東部で検出した遺構である。北西には井戸 S E 29が存在するが、掘形同士は切り合わない。中央から東部にかけては試掘坑によって破壊されている。

井戸枠は明確には確認できなかったが、中央部を中心に結桶部材と考えられる板材があり、結桶による枠が存在したものと考えられる。

掘形内からは中世後期、16世紀前半を中心とした土器類が出土している。

**井戸 S E 31** 調査区東端で検出した遺構である。ごく一部を確認したのみで、大部分は東方調査区外である。形状から井戸と判断した。後述する井戸 S E 33よりも新しいものである。

出土土器は、掘形内から中世後期、15世紀後半頃を中心とした時期のものが確認されている。

**井戸 S E 33** 調査区東部で検出した遺構である。東部および南部が調査区外である。形状から井戸と判断した。直径約5.0m程度の掘形を有するものと考えられる。井戸枠は確認できなかった。

出土遺物は、中世全般に及ぶが、中世後期、16世紀前半頃を中心とした時期の構築かと思われる。

**井戸 S E 34** 調査区東部で検出した遺構である。一部が確認できたのみで、大部分は北方調査区外に至る。形状から井戸と判断した。

井戸枠も確認できなかったが、排水用の溝を掘削した際に人頭大以下の円礫が出土していたため、石組の井戸である可能性がある。

出土遺物は、中世後期、15世紀前半のものが数点確認できる。

**ピット群** 溝 S D 25・26の東部に一群、溝 S D 27の東部に一群のピット群が見られる。前者については全くまとまりを見せない一群であり、掘立柱建物に伴うものと考えるのは少々難しい。後者は、列をなしそうなものも見られることから、掘立柱建物の一部である可能性があるかも知れない。

## 6 A 5 区の層位と遺構

A 5 区は、A 4 区の西に相当する調査区である。

A 4 区と A 5 区間には農道があり、ここは平成10年

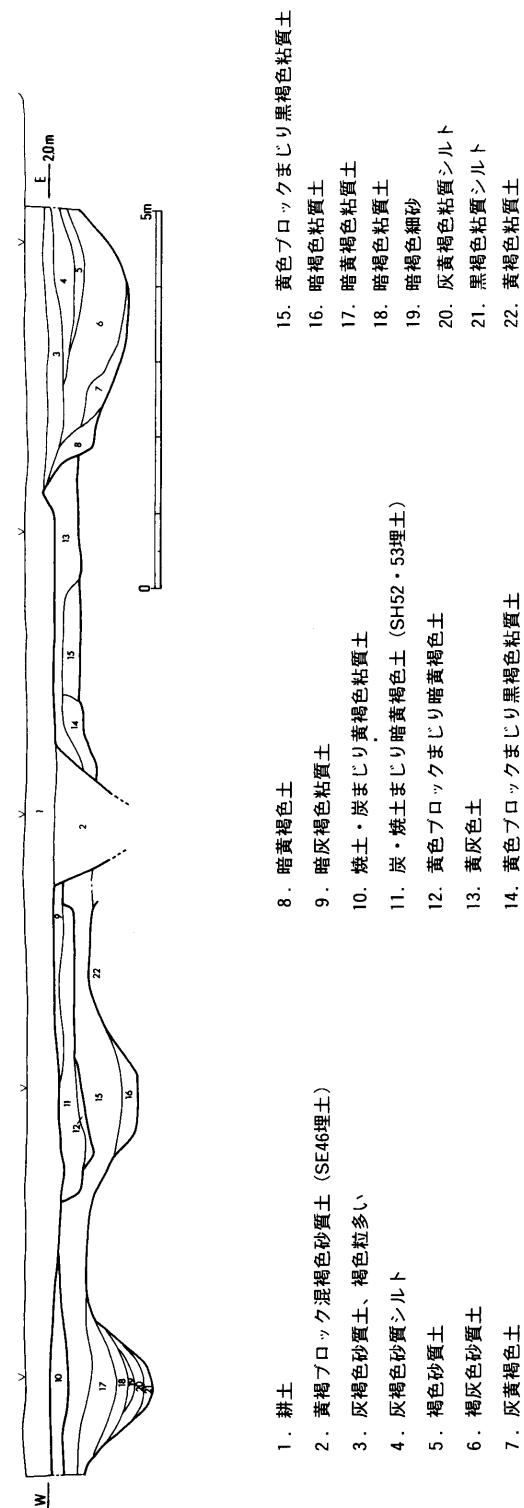


fig. 27 A 5 区北壁土層 (1 : 100)

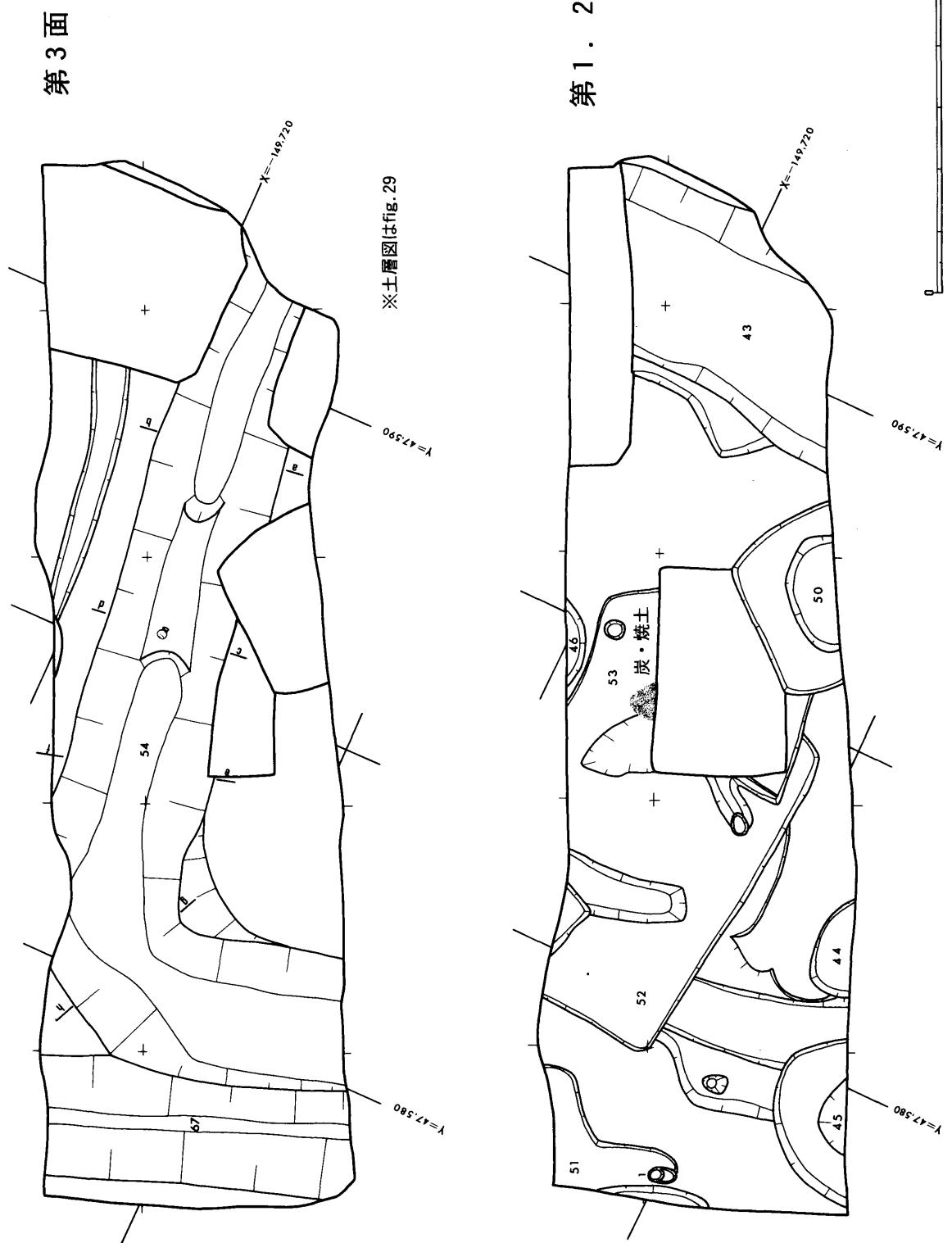


fig. 28 A 5区平面図 (1 : 100)

度に調査予定である。

3面の遺構面として調査を行った。第3遺構面は淡黄色系土を基盤とするもので、古墳時代前期の面に相当する。この層は、A4区以東では第4遺構面に相当する面であったものである。第2遺構面は淡褐色系粘質土を基盤とし、奈良時代を中心とした遺構面である。第1遺構面は淡褐色系砂質土を基盤とし、室町時代以降の遺構面となる。

第3遺構面以下からも縄文土器が認められることから、第4遺構面に相当するものの存在が想定できるが、溝S D54・67を保護する目的から、これ以上の掘削は避けた。

#### a 第3遺構面

第3遺構面は、淡黄色系砂質～粘質土を基盤とするもので、基盤の標高は約1.6mである。

**周溝S D54（島貫2号墓）(fig.28・29)** 調査区内で、北西側に屈曲部を持ち、L字形をなしている溝である。東側は中世の溝S D43で切られるが、その底にはS D54の延長が確認でき、調査区外へと続いている。西側は溝S D67と交差するが、後述のS D67でも述べるとおり前後関係は不明である。この溝の内側にあたる南側を墳丘部と考え、方形を呈する周溝墓の一角を検出したものと考えた。

溝幅は約2.1m、検出面からの深さは約0.7mである。溝の断面形は、墳丘側が若干緩やかになる形状をなす。埋土は2～3層に区分できる。上層に相当する部分から、口縁部の一部を欠損するのみのほぼ完形の底部穿孔壺が出土した。

S D54の北側には、北辺に並行する小溝がある。この溝からの出土遺物はないが、何らかの関係を有するものであろう。

出土遺物には前述の壺のほか、台付甕の破片が数点出土している。

**溝S D67** 調査区東部で検出した溝である。南北方向に走るもので、両端が調査区外へと続いている。

幅約1.9m、深さ約0.9mで、断面は整ったV字形を呈する。遺構底面は、北側の方がやや下がり気味である。

南部では周溝S D54と交差する。ここで両者の前後関係を確認したかったのであるが、後述する井戸S E45の影響により、埋土・基盤土を含め、全体が青灰色に変色していたため、残念ながら確認できなかった。

埋土内からの出土遺物が全くなく、遺構の時期も決め難い。古墳時代初頭を前後する時期のものという限定ができるに過ぎない。

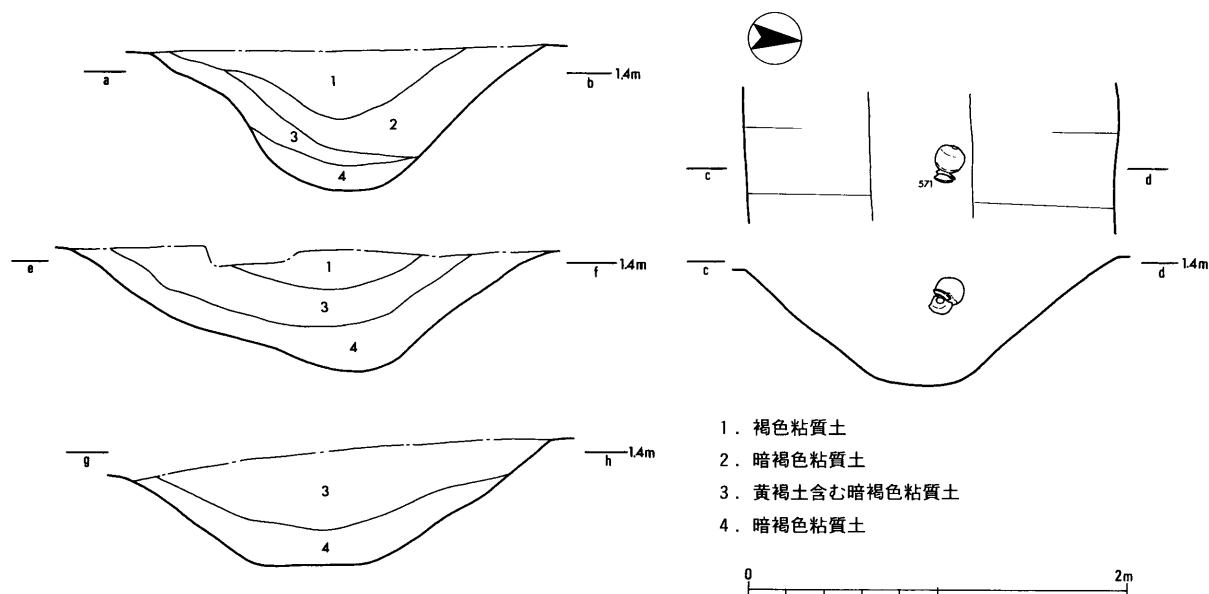


fig.29 A 5 区第3面周溝 S D54土器出土状況および土層断面図 (1:40)

### b 第2遺構面

第2遺構面は、第3遺構面を埋没させた暗褐色系土を基盤とする遺構面である。第1遺構面ともほぼ共通するが、第1遺構面よりも0.1mほど下げた段階で検出した遺構である。奈良時代を前後する時期の遺構が確認されている。

**豊穴住居S H52・53** 調査区中央部で確認した遺構である。2棟以上の豊穴住居が重複したしたものである。東側で、北東部に角を持つ部分をS H53、西側で、南西部に角を持つ部分がS H52とした。いずれも方形を呈する豊穴住居であると考えられる。

S H53は試掘坑によって破壊されているものの、試掘坑の北側に焼土を確認しており、カマドではなく炉であったものと考えられる。貼床に相当するものも確認できた。ただし、主柱穴に相当するものは見られなかった。

S H53の炉付近から出土した土器は飛鳥時代に相当するものである。S H52からの明確な出土遺物はなかったが、S H53にやや後出するものかと考えられる。

**井戸S E50** 調査区中央南部で確認した遺構である。南部は調査区外に及ぶ。掘形は東西約2.7mの方形を呈する井戸で、最深で標高約0.5mまで確認したが、それ以上は危険を伴うと判断したため、掘っていない。

掘形の埋土が粘質土系であるのに対し、枠内埋土と考えられるものは砂質であるため、比較的明確に区分できる。井戸枠と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、井戸枠内を中心とする部分から比較的まとまって出土している。奈良時代前期を中心とする時期かと考えられる。

### c 第1遺構面

第1遺構面は、第2遺構面とほぼ共通するが、表土直下において検出できる遺構群である。中世後期から近世にかけての遺構が確認できた。

**溝S D43** 調査区東部で確認した遺構である。幅4.0mほど、深さ約1.0mの大規模な溝である。東側法面は、北側で一部が確認できたに過ぎない。

出土遺物は、埋土最上層部から瀬戸美濃産陶器の

志野焼が出土しているため、完全に埋没したのは16世紀でも後葉かと考えられる。

**井戸S E45** 調査区東部南端で確認した遺構である。大部分が調査区外に及ぶ。形状から井戸と判断した。

明確な出土遺物は少ないが、近世以降のものと考えられる。

**井戸S E46** 調査区中央北部で確認した遺構である。わずかに一部が確認されたのみである。形状から井戸と判断した。

埋土内からは常滑産の陶器井戸枠が出土している。時期的には近世、18世紀以降のものかと考えられる。

## 7 B区の層位と遺構

旧参宮街道が乗る砂堆の西部にあたるB2・B3区は、前述のようにA区とは層位的な環境が大きく異なる。この調査区では、遺構面の検出は耕作土直下の淡黄色系粘質土層上で確認されたもののみであった。

B地区は、昭和50年代の圃場整備事業による搅乱が激しく、多くの遺構がこの段階に失われているものと考えられる。

B2・B3区ともに状況としては同一であるため、ここでは両地区をまとめて時期別に記述することとする。

### a 繩文時代晩期の遺構

**落ち込みS Z77** B3区西端部付近で確認した遺構である。検出当初は、西に隣接する古墳時代前期の豊穴住居S H76と切り合う少し古い時期の豊穴住居かと考えたが、貼床に相当するものや、焼土などが全く検出されず、豊穴住居の可能性は低いものと考えた。

埋土内から出土する遺物はその大部分が縄文時代晩期に相当するものである。そのため、縄文時代晩期頃の豊穴住居である可能性も考慮する必要がある。

### b 古墳時代前期の遺構

**豊穴住居S H72と周辺の落ち込み** B2区の豊穴住居S H73付近で検出した遺構である。

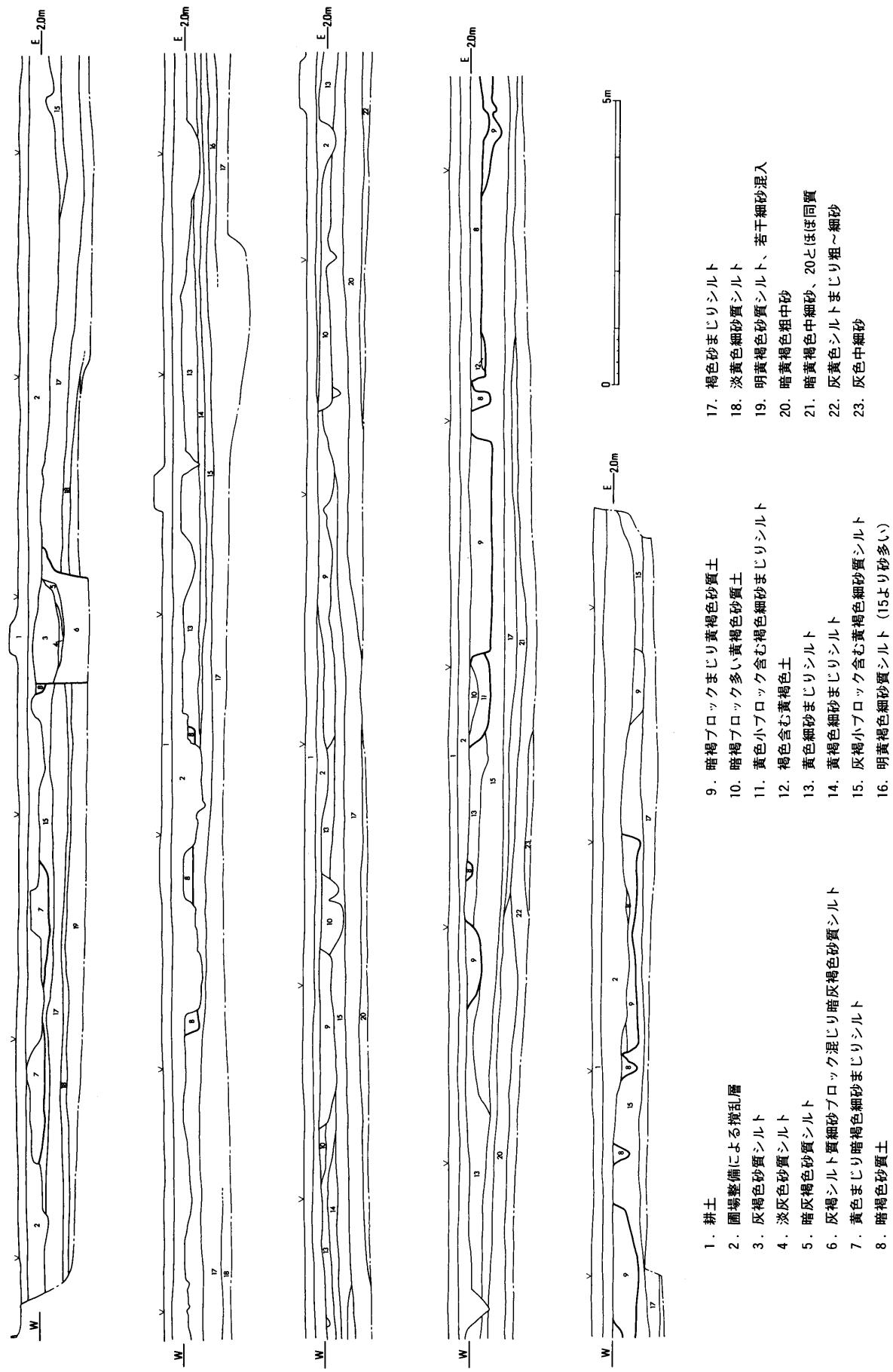


fig. 30 B 2 区北壁土層 (1 : 100)



S H72は、東部はS H73と重複する。南部は明確な検出ができず、途切れたような形状となるが、南北約4.2m、東西約5.0mの方形の堅穴住居と考えた。炉などの施設は確認できず、また、主柱穴に相当するようなものも判然としなかった。

S H72の東側、S H73の周辺には、同様の落ち込み状の遺構がいくつか存在している。これらはそれぞれが堅穴住居である可能性もあるが、明確な遺構ラインが判らなかったものである。

**堅穴住居 S H73 (fig.32)** B 2 区で検出した遺構である。東西約5.8m、南北約5.7mの正方形に近い方形を呈する堅穴住居である。遺構検出面から床面までは約0.2mであった。遺構の中央には焼土が見られる部分があり、ここが炉に相当すると考えられる。主柱穴や貯蔵穴などは確認できなかった。

**炭化材** 堅穴住居内には炭化材が多数あり、焼失家屋であることは明白である。炭化材は建物内西寄りに多く、東側には少量の炭が確認できたに過ぎない。



fig.32 B 2 区堅穴住居 S H73 遺物出土状況 (1 : 40) ▲は、床面より上で出土した遺物

い。

炭化材は、南西隅から建物中心に向かって延びているもの（材a）や、壁面に垂直に近い状態に見られるもの（材b）などがあり、四隅から中央に向かって設置されていた基本材とそこに壁面側から立て掛けられていた部材とがあったことを物語る。

また、東壁寄りの上層では拳大程度の粘土塊が確認された。

**土器群** 建物内には、焼失時に伴うと考えられる土器群が明瞭に残っており、一括性の高い土器群として把握できる。

建物内北西隅では、小形器台の上に置かれた小形壺がその状態で倒れ、横に置かれていた高杯がそれに覆い被さるようになって出土している。そのやや南側では、小形丸底壺と半球状杯部を持つ高杯がまとまって出土している。

建物中央南寄りでは、口縁部を欠損した体部完形の壺や台付甕が数個体まとまっていた。

この他に、埋土上層からは破片となった土器とともに、ミニチュア土器も出土している。これらは床面付近の一群よりも新しいものと考えられる。

**堅穴住居 S H76 (fig.33)** B 3 区の西端で検出した遺構である。方形を呈する堅穴住居と考えられるが、調査区内からは建物南東隅が検出されているのみである。正確な規模は判らないが、東壁と炉の位置関係から東西 5 m 程度のものと考えられる。

東壁沿いにはわずかな落ち込みが確認でき、壁周溝に相当すると考えられる。中央北部には焼土が確認でき、炉に相当しよう。床面には 2 ヶ所のピットがあるが、この堅穴住居の主柱穴に相当するものではない。

埋土内からは少量の遺物しか出土しておらず、明確な時期は判らないが、古墳時代前期前後であることは間違いない。なお、埋土内からは、砥石として用いた軽石も出土している。

**堅穴住居 S H78 (fig.33)** B 地区西端寄りで検出した遺構である。方形を呈する堅穴住居で、北壁は調査区外である。東西辺は約4.0mである。

検出面から約0.1mで炭層面が検出できた。炭層は、建物中央付近を中心とし、周囲には少ない。この炭中には S H73 で確認できたような建築部材と

考えられるようなものはなかったが、編目状に観察される部分もあり、やはり焼失家屋の可能性がある。大型の炭化材が確認できないのは、ほとんど焼け落ちたためであろうか。

炭層面の下は人為的と考えられる埋め土で、貼床に相当するものと考えられる。貼床を除去した段階で、検出面からの深さは約0.2mとなる。

建物内からは、主柱穴に相当するものは明確に確認できなかった。

**堅穴住居 S H83 (fig.34)** B 2 区の東部、S H73 の東で検出した遺構である。西部は後述の堅穴住居 S H70 によって破壊される。建物の方向は S H73 とよく揃っている。建物北部は排水溝で破壊してしまっており、調査区外へも若干続くものと考えられる。東壁のみ調査区内にあり、南北約4.8mである。

この堅穴住居も焼失家屋と考えられ、埋土上層部に炭層面が検出された。炭層は建物内一面に広がっている。中には、編み目を残したような部分も認められている。ただ、S H73 で確認したような、大型の建築部材は見られなかった。

炭層面を除去すると、建物中央北寄りにおいて非常によく被熱を受けた部分が確認された。炉に相当すると考えられる。東壁寄りではピット状に落ち込んだ部分が見られたが、主柱穴に相当するものを検出することはできなかった。

炭層面付近から、比較的まとまって土器が出土している。なかには、北陸系と考えられる土器も含んでいる。

**堅穴住居 S H84** B 2 区東部の、S H73 から 7 m ほど離れた西側で検出した遺構である。この部分における圃場整備段階の変化は顕著で、北側の辺を確認したに過ぎないが、形状から見て堅穴住居と考えられる。

試掘坑が建物にかかっており、この時にピット状の遺構が検出されている。明確な出土遺物はこのピットからの出土土器のみである。

**堅穴住居 S H95** B 3 区西部で検出した遺構である。形状から考えて堅穴住居とした。北側には、後出する堅穴住居 S H78 が重なる。大部分が調査区外南へと続く。規模は、検出した範囲から推察すると、6 ~ 7 m ほどの方形の堅穴住居であると考えら

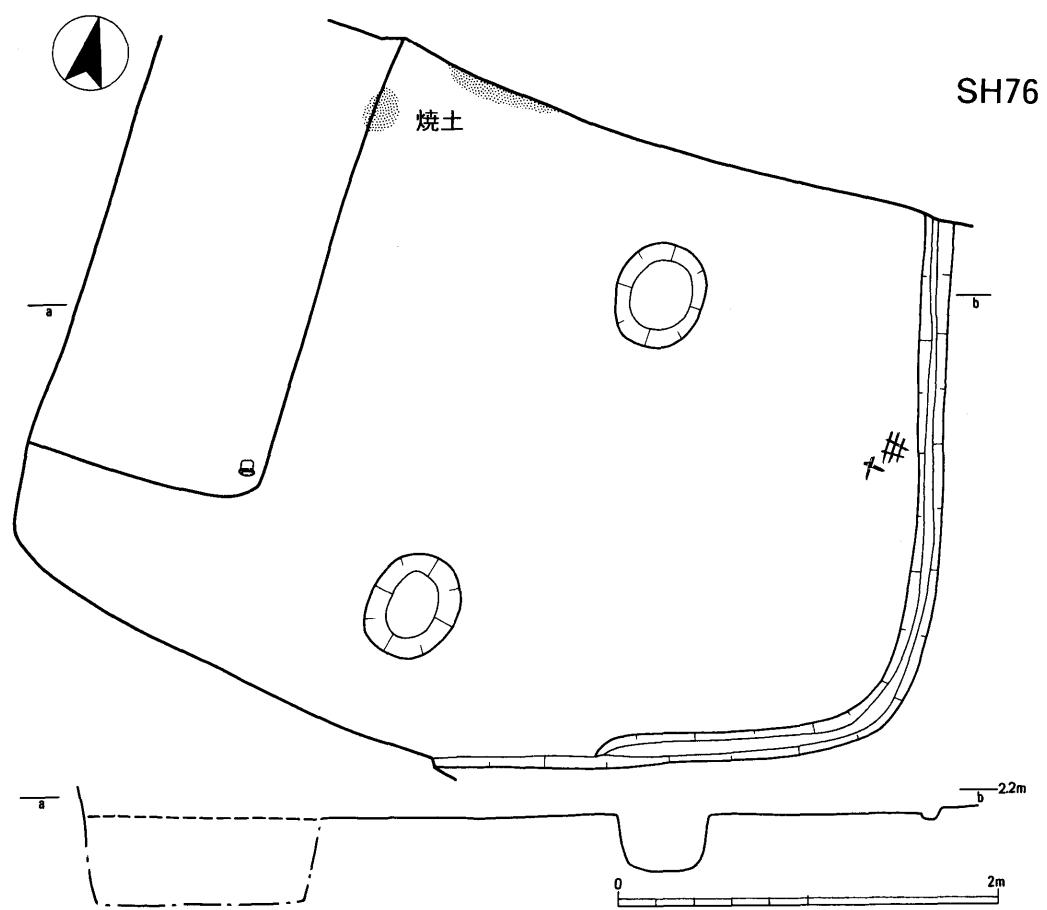
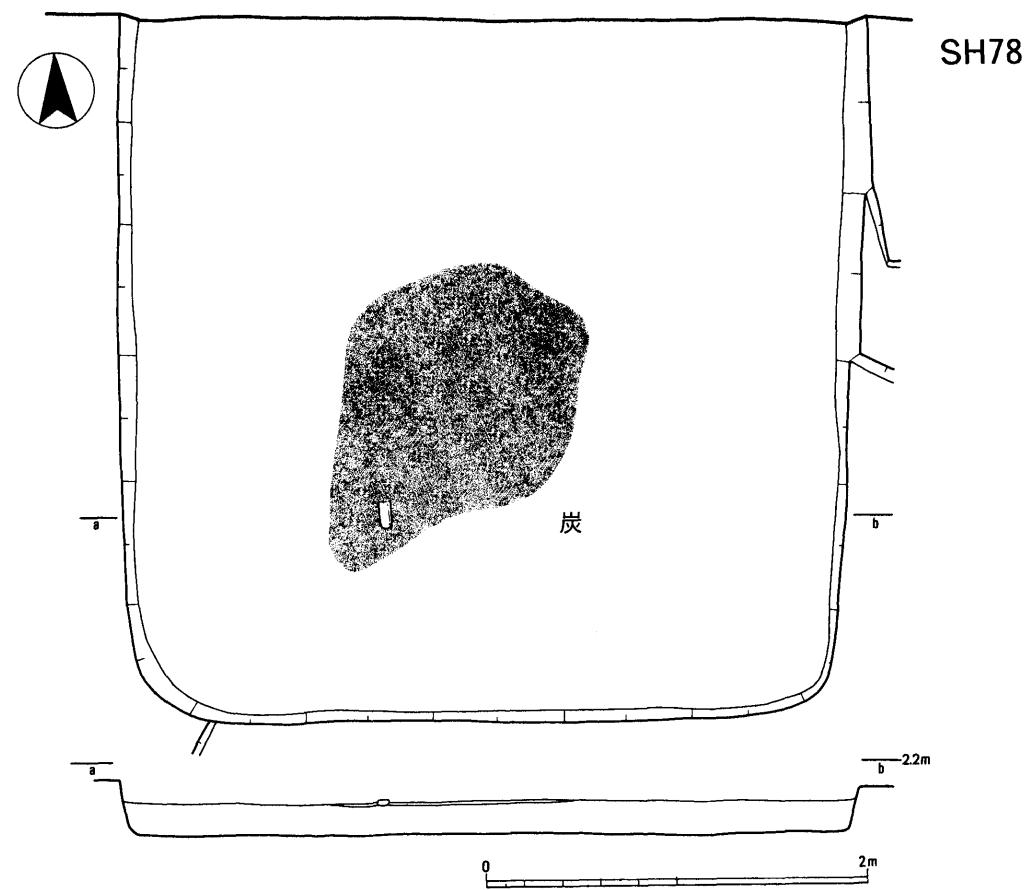


fig. 33 B 3 区堅穴住居 S H76・78平面・断面図 (1 : 40)

れる。

出土遺物は少量であるが、S H78よりはやや古い時期に相当するものであろう。

堅穴住居 S H96 (fig.35) B 3 区の中央やや西寄りで検出した遺構である。南壁を中心に一部を確認したのみで、大部分は北側調査区外に続く。南壁で約4.8mの方形の堅穴住居と考えられる。

検出範囲の中央を中心に炭層が見られた。この炭

層は S H73・83のような明瞭なものではなく、薄いものである。検出部の東寄りでは主柱穴に相当すると考えられるピットを確認したが、それと対応するピットを検出部西側では確認することができなかつた。

床面上には片口付小形鉢と広口壺がそれぞれ完形で出土している。壺は体部上半と下半に 1ヶ所づつ焼成後に穿孔をするものである。



fig.34 B 2 区堅穴住居 S H83炭化材・土器等出土状況 (1:40)

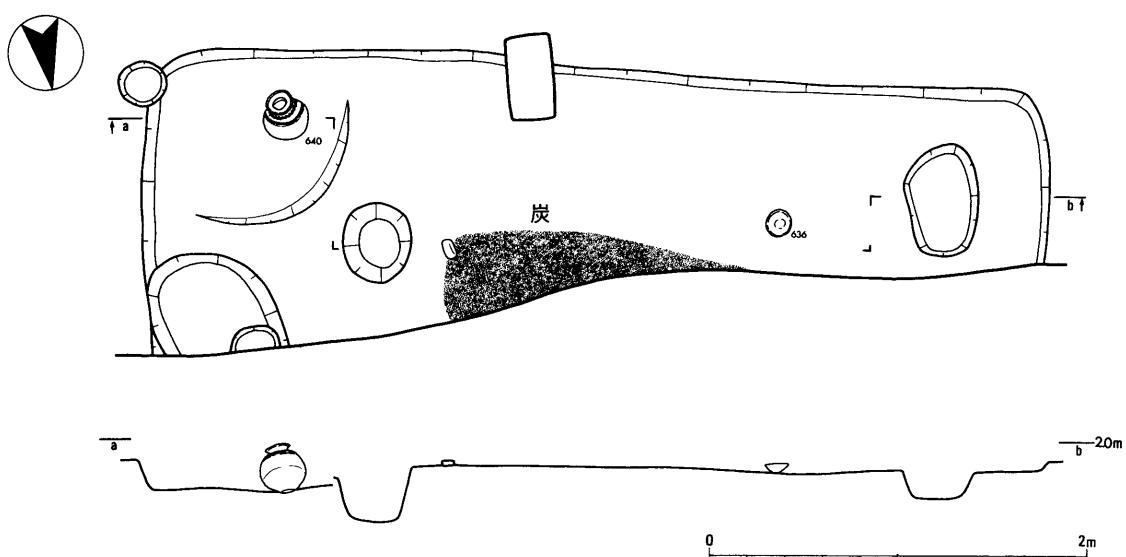


fig.35 B 3 区堅穴住居 S H96平面・断面図 (1:40)

**堅穴住居 S H109** B 2 区西部の北壁面において、焼土および堅穴状の落ち込みを確認している。調査区側は圃場整備時の削平が著しく、平面では確認していない。形状から見て堅穴住居と判断した。壁面中から、古墳時代前期に相当する土師器高杯が出土している。

**土坑 S K82** B 3 区の西側で確認した遺構である。直径約1.0m、検出面からの深さ約0.4mの円形の土坑である。埋土内からは古墳時代前期初頭に相当する少量の遺物が見られた。

### c 古墳時代後期の遺構

**堅穴住居 S H69** B 2 区東部で確認した遺構である。圃場整備の改変が激しい部分で明確な範囲が判りにくいが、東西約5.0mの堅穴住居と考えられる。北側は排水溝を設置しており、それを越えて北側へとさらに続いているものと考えられる。検出面がほぼ床面に相当するものである。

南側には壁周溝状の落ち込みが見られ、西壁にも

その延長がある。外枠と一致していないため、2時期の建て替えを伴った住居と考えられる。

出土遺物は微細で判断が難しいが、床面上から田辺昭三氏による陶邑編年の T K23型式に並行する須恵器片がある。

**堅穴住居 S H70 (fig.36)** B 2 区東部で確認した遺構である。北部は調査区外へと続くが、東西約5.0mの方形の堅穴住居である。

南壁西部から西壁にかけて壁周溝が見られる。壁周溝は床面から約0.1mほど下がっている。壁周溝は、建物南東隅にある貯蔵穴と考えられる遺構の手前で収束する。

建物南東隅には貯蔵穴と考えられる土坑がある。この土坑は、検出段階では幅約1.0mほどの土坑として検出できたが、その外周部分はテラス状となり、深く掘り込められているのは直径約0.7mほどの不整円形部分で、床面からの深さは約0.4mとなる。埋土は堅く締まっており、人為的に埋められたものと考えられる。

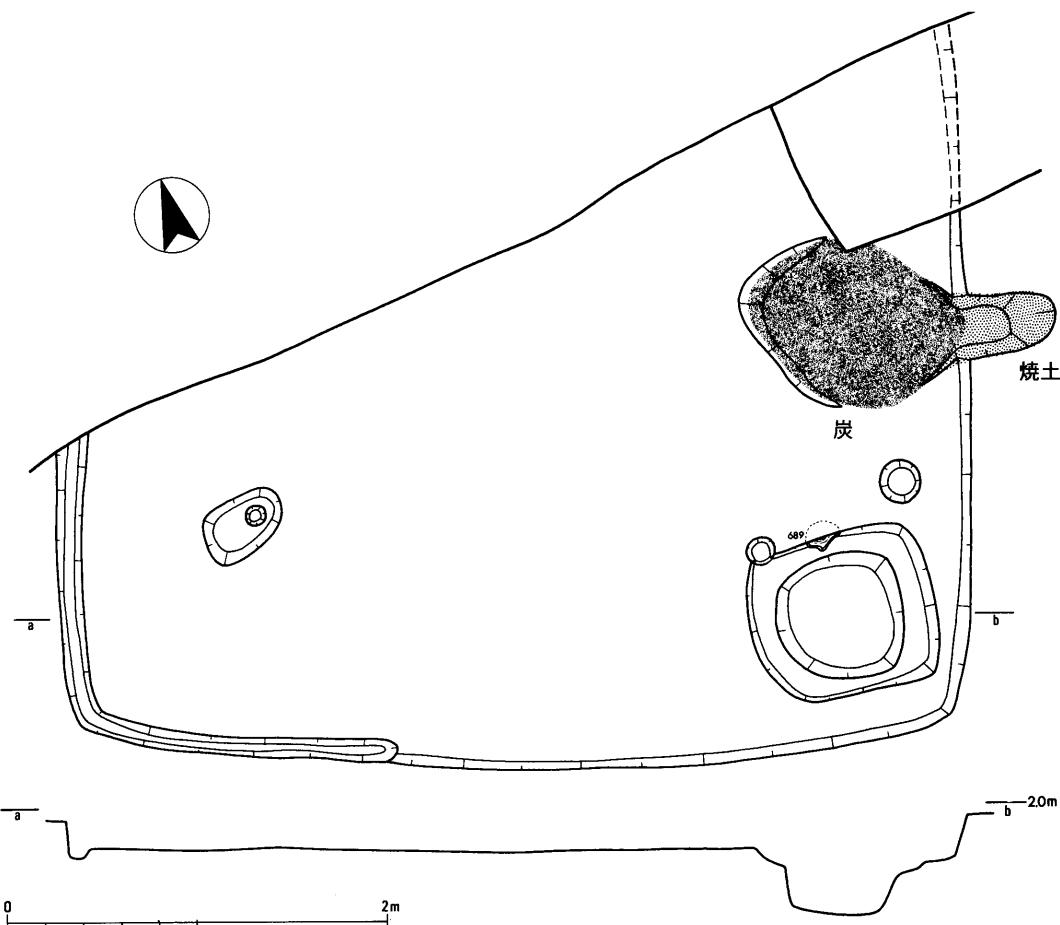


fig. 36 B 2 区堅穴住居 S H70平面・断面図 (1 : 40)

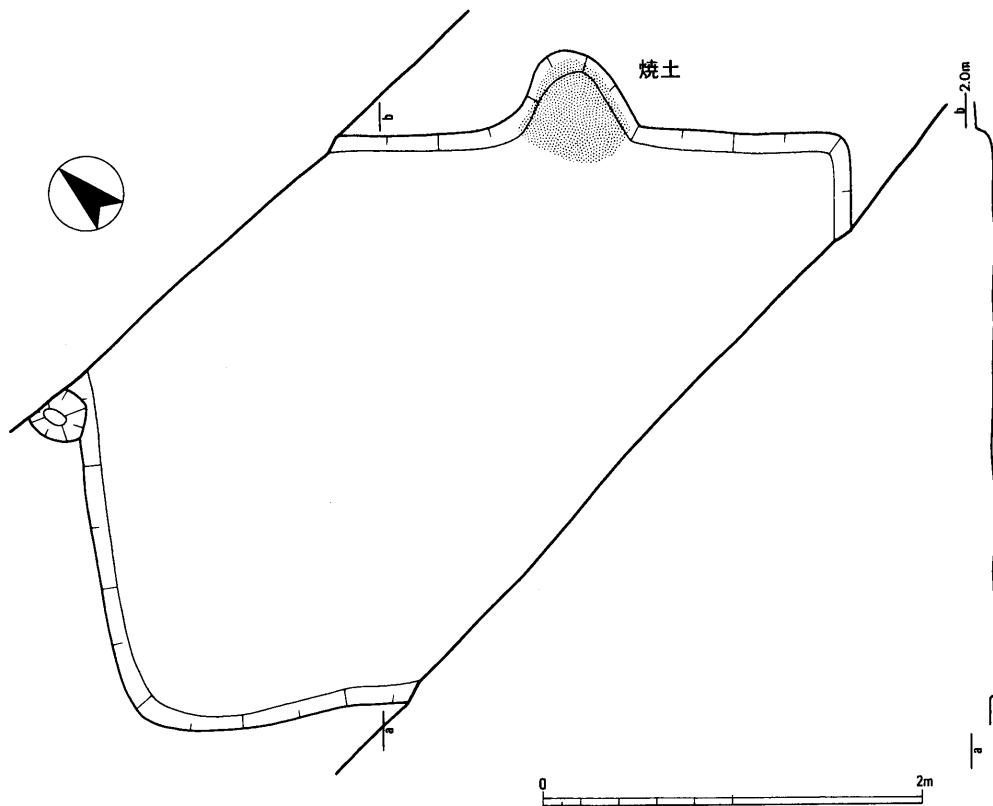


fig. 37 B 3 壁穴住居 S H98平面・断面図 (1 : 40)

貯蔵穴のある東壁には、カマドが確認できる。煙道も一部残存する。このカマドは遺構掘削時において、袖部が全く確認できなかった。袖部が認識できずに掘り飛ばしてしまったものではなく、おそらく調査区外に相当する北壁部分に新たなカマドを設置した結果、廃棄されたカマドと考えられる。カマドに向かって右手に貯蔵穴があるという通常のスタイルを考慮すれば、今回検出した貯蔵穴はこのカマドとセットになるものと考えられる。

遺構埋土内からの出土遺物は少ない。貯蔵穴埋土内から田辺編年のTK23型式に並行する杯蓋が出土していることから、これを前後する時期の遺構と考えられる。

**壁穴住居 S H98 (fig. 37)** B 3 区東部で検出した遺構である。やや不整形な部分が北部にあるが、東西約4.2m、南北約3.0mの長方形の壁穴住居と考えられる。圍場整備段階の削平が顕著で、検出面が床面付近となっている。

北部中央に焼土が見られ、削平が著しいものの、カマドの痕跡と判断する。建物内からは、カマド以外の施設は検出できなかった。

検出中（すなわち床面上ぐらい）および埋土内からは田辺編年のTK23型式に並行する頃の須恵器や土師器台付甕が見られる。

**小土坑 S K102** B 2 区東部で確認した遺構である。直径約0.7mのピット状の土坑である。埋土内からは田辺編年のTK43～209型式頃かと思われる須恵器杯身や須恵器俵瓶、土師器甕などが出土している。

**溝 S D99・100** B 3 区西部で確認した遺構である。SD99は落ち込み状、SD100は南端が途切れる溝である。SD100は幅約1.2m、検出面からの深さ約0.2mである。

埋土中には縄文時代晩期の深鉢片のほか、土師器鉢や高杯・台付甕などが出土地している。時期的には、古墳時代前期にまで遡る可能性もある。

**ピット** 古墳時代中後期に相当するピットは、B 2 区のd 52グリットやb 75グリット付近に見られる。建物としてまとめることはできないが、この付近に当該時期の掘立柱建物のある可能性もある。

#### d 中世～近世の遺構

**井戸 S E75** B 2 区西部で検出した遺構である。

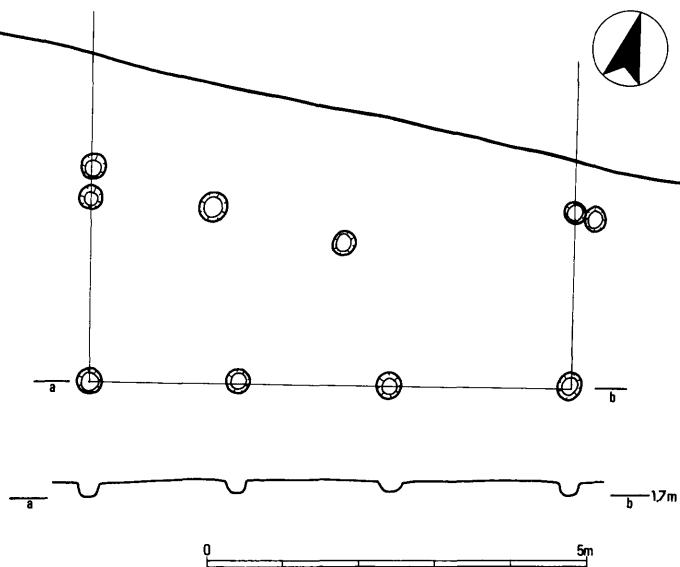


fig.38 B 2 区掘立柱建物 S B 108平面・断面図 (1:100)

幅約2.0mで平面形はよくわからない。というのも、平面で確認した段階では井戸という認識がなく、調査区の断ち割りを行った際に井戸であることを認識したためである。埋土は、標高約1.2mまで確認したが、底には至っていない。埋土中には石・木材などは確認できなかった。

埋土中からは灰釉陶器片・瓦器片・陶器椀（山茶椀）片が出土している。鎌倉時代前期には埋没していたものと思われる。

**井戸 S E 71** B 2 区東端部で確認した遺構である。直径約3.0mの円形の掘形を持つ。中央には、直径約0.6m、残存高約1.26mの結桶を用いた枠が見られたが、どういうわけか残っていたのは約半分であった。井戸の底は、結桶の状況から推測すると、検出面から約1.9m下（標高約0 m）である。

井戸枠内からは近世以降の陶磁器片が出土している。

**掘立柱建物 S B 108 (fig.38)** B 2 区東部で確認した遺構である。古墳時代の竪穴住居 S H72・73を切り込む。東西3間（約6.3m）、南北2間以上の側柱建物と考えられる。ピット内からの出土遺物は少ないが、一応中世頃のものと考えておく。

#### e 時期不明の遺構

**竪穴住居 S H97** B 3 区の東部で確認した遺構である。西壁と主柱穴のみを確認したもので、東壁

は確認できなかった。4ヶ所の主柱穴の配置と西側の壁によって、竪穴住居であると判断した。

出土遺物が全く無く、時期の特定はできないが、調査区内の状況からみて、古墳時代前期～後期の間のいずれかであろう。

遺構略号	性 格	地 区	遺構面	グ リ ッ ト	時 期	特 徴 ・ 形 状 ・ 計 測 数 値 な ど
S D 1	溝	A 1	1	b 2 ~ a 5	中世後期	方向はN87° E S D 2と並行 土器多い 鍋4 c ~
S D 2	溝	A 1	1	c 2 ~ c 7	中世後期	鍋4 c ~
S K 3	土坑	A 1	1	b 5	中世後期	鍋4 c ~
S D 4	溝	A 1	1	b 2	中世後期?	遺物少量
S D 5	溝	A 1	1	b 2	中世後期?	遺物少量
S K 6	土坑?	A 1	2	b 7 ~ 8	奈良	焼土有 穫穴住居か?
S Z 7	落ち込み	A 1	3	a 10 ~ b 11	古墳前期	
S D 8	溝	A 1	1	b 1 ~ 2	中世後期	鍋4 c ~
S D 9	溝	A 3	1	b ~ c 28	中世後期	方向はN 3° W 五輪塔含む
S D 10	溝	A 3	1	b ~ c 25	中世前期	山茶椀片
S D 11	溝	A 3	1	a 24 ~ c 23	中世後期?	奈良墳の可能性あり
S K 12	土坑	A 3	1	c 23	不明	
S K 13	土坑	A 3	1	b 27 ~ 28	平安後期	灰釉陶器、黒色土器A類
S K 14	土坑	A 3	1	b 28 ~ 29	中世後期	鍋4 d ~
S K 15	土坑	A 3	1	b ~ c 27 ~ 28	不明	
S D 16	溝	A 3	1	c 27	中世前期	鍋1 b ~
S K 17	土坑	A 3	1	c 26 ~ 27	中世後期	土器多量
S Z 18	溝	A 3	1	b 26 ~ 27	中世後期	鍋4 d ~
S D 19	溝	A 3	1	d 27	近代	攪乱溝
S D 20	溝	A 3	1	b 28	中世後期	鍋4 c ~ 輸の羽口有り
S K 21	土坑	A 3	1	c 25	奈良	円形土坑
S Z 22	落ち込み	A 3	1	c 25	奈良?	S K 42の上、奈良墳の可能性大
S K 23	土坑	A 1	2	b 7 ~ 8	飛鳥~奈良	S K 6直下
S Z 24	落ち込み	A 1	3	~ b 5 ~	古墳前・中期	S字甕b類含む
S D 25	溝	A 4	1	a 14 ~ c 16	中世後期	方向はN85° W S D 26と並行
S D 26	溝	A 4	1	b 15 ~ c 16	中世後期	S D 25と並行
S D 27	溝	A 4	1	b 11 ~ c 10	中世後期	方向はN 9° W 平瓦あり
S K 28	土坑	A 4	1	b 13	中世	
S E 29	井戸	A 4	1	b 16 ~ c 17	中世後期	石臼(茶臼)片、鍋3 b ~
S E 30	井戸	A 4	1	b 18 ~ c 17	中世後期	鍋3 b ~
S E 31	井戸	A 4	1	b 19 ~ c 18	近世?	S K 32より古
S K 32	落ち込み	A 4	1	c 18	近世?	
S E 33	井戸	A 4	1	b 18	近世	S E 31・S K 32より古
S E 34	井戸	A 4	1	a 18 ~ 19	中世後期~	鍋4 c ~
S K 35	土坑	A 4	1	c 14 ~ 15	中世	
S D 36	溝	A 1	3	a ~ c 10	古墳前期	上層に完形壺あり
S D 37	溝	A 1	4	b ~ c 9	古墳以前	
S D 38	溝	A 1	4	b ~ c 5	古墳以前	土器片あり、時期不明
S D 39	溝	A 1	4	b ~ c 5	古墳前期	
S Z 40	土器群	A 1	3	c 2	古墳前期	土器一括、布留甕あり

tab. 1 遺構一覧表(1)

遺構略号	性 格	地 区	遺構面	グ リ ッ ト	時 期	特 徴 ・ 形 状 ・ 計 測 数 値 な ど
S K41	土坑	A 3	1	b 28	中世後期	
S K42	土坑	A 3	2	c 25	奈良	埋土は灰褐色粘土で硬質
S D43	大溝	A 5	1	a 7 ~ b 6	中世後期~	埋土上層は近世初頭
S K44	土坑	A 5	1	b 4	不明	土器少量
S E45	井戸	A 5	1	b 3	近世	
S E46	井戸	A 5	1	a 5	近世	常滑産陶器井戸枠片あり、18世紀以降
S E47						S E50と同じにつき、抹消
S Z48	土器群	A 4	3	c 17	古墳前期	
S H49	豎穴住居	A 4	2	b 17・18	奈良	移動式カマド、床面上土器良好
S E50	井戸	A 5	1・2	b 5・6	奈良	方形堀形、枠不明、土器良好
S Z51	落ち込み	A 5	2	a 4	奈良	
S H52	豎穴住居	A 5	2	a・b 4	奈良	須恵器片
S H53	豎穴住居	A 5	2	a・b 5	飛鳥~奈良	焼土あり
S D54	周溝	A 5	3	~b 5~	古墳前期初頭	墳墓 L字に屈曲、焼成後底部穿孔壺
S D55	周溝	A 4	3	b・c 9~11	古墳前期	墳墓 埋土上層は布留甕を含む土器良好
S Z56	土器群	A 4	3	b 11	古墳前期	焼土有、豎穴住居?
S Z57	落ち込み	A 3	3	a 24~b 26	古墳前期	S Z86の上部、S字甕c類
S H58	豎穴住居	A 3	2・3	c 24・25	古墳後期	北壁にカマド、良好な土器一括
S K59	土坑	A 3	2・3	b 27	古墳前期	S字甕c類
S K60	土坑	A 4	3	c 16	古墳前期	炭混じり土坑、S H63上層に相当?
S Z61	落ち込み	A 3	3	b 28・29	古墳前期	赤彩土器、S D86上層に相当
S K62	土坑	A 4	3	a 17	奈良	S H49下土坑
S H63	豎穴住居	A 4	3	b・c 15~17	古墳前期	大形住居、良好な一括土器、布留甕
S K64	土坑	A 4	3	c 17	古墳前期	
S H65	豎穴住居	A 4	2	b・c 9	古墳後期~奈良	古式or長胴甕あり
S D66	溝	A 4	2・3	c 12	古墳前期	S字甕片、豎穴住居周溝?
S D67	溝	A 5	3	a・b 4	古墳前期初?	断面V字形、遺物なし
S Z68						S Z57と同じにつき、抹消
S H69	豎穴住居	B 2	1	b 72~74	古墳後期	須恵器 T K23~
S H70	豎穴住居	B 2	1	b 70・71	古墳後期	貯蔵穴・カマドあり
S E71	井戸	B 2	1	c・d 74・75	近世	結桶、石組なし
S H72	豎穴住居	B 2	1	c 67~68	古墳前期	不明瞭
S H73	豎穴住居	B 2	1	c・d 69	古墳前期	焼失家屋、良好な一括土器
S K74	土坑	B 2	1	d 56・57	古墳前期	S字甕c類
S E75	井戸	B 2	1	c・d 52	中世前期	ロクロ土師器、土錘、鍋1a
S H76	豎穴土坑	B 3	1	f・g 50	古墳前期	焼失家屋? 軽石の砥石
S Z77	落ち込み	B 3	1	f・g 51	縄文晚期	土器片多い
S H78	豎穴住居	B 3	1	f・g 52・53	古墳前期	S字甕b類
S E79	井戸	A 4	3	c 14・15	古墳前期初	体部下半を欠いた土器
S K80	土坑	A 4	3	b 14	古墳前期初	土器少量、井戸?

tab. 2 遺構一覧表(2)

遺構略号	性 格	地 区	遺構面	グ リ ッ ト	時 期	特 微 ・ 形 状 ・ 計 測 数 値 な ど
S Z 81	落ち込み	A 4	3	c 12~14	古墳前期初	土器群 壓穴住居?
S K 82	土坑	B 3	1	f 53	古墳前期	S字甕 b類
S H 83	壓穴住居	B 2	1	b・c 71・72	古墳前期	焼失家屋 北陸系高坏
S H 84	壓穴住居	B 2	1	d 66・67	古墳前期	
S Z 85	落ち込み	A 3	3	b 24~26	古墳前期	S字甕 b類
S D 86	溝	A 3	3	b 26~30	古墳前期	S字甕 c類
S Z 87	溝?	A 3	3	b 27~c 29	古墳前期	落ち込み状 S字甕 c類
S X 88	土器棺墓	A 3	4	b 24・25	縄文晚期	棺身の口縁部は意図的に欠く。別個体体部片で蓋
S X 89	土器棺墓	A 3	4	b 25	縄文晚期	掘形不明
S K 90	土坑	A 3	3	a 25	古墳前期	S字甕 2個体分
S D 91	溝	A 3	3	b・c 28	古墳前期初	
S D 92	溝	A 3	3・4	b・c 23・24	不明	遺物なし
S F 93	焼土坑	A 3	3	c 29	飛鳥	壁面は垂直に立つ。強い被熱
S Z 94	炭層	A 3	3	a 24	奈良?	壁面で確認。焼土・炭層あり。壓穴住居か?
S H 95	壓穴住居	B 3	1	g 52・53	古墳前期	S H 78より古 S字甕 b類 軽石あり
S H 96	壓穴住居	B 3	1	f 57	古墳前期	完形の2カ所穿孔壺
S H 97	壓穴住居	B 3	1	f・g 61・62	不明	主柱穴4ヶ所、遺物なし
S H 98	壓穴住居	B 3	1	f・g 63・64	古墳後期	カマドあり 須恵器・台付甕
S D 99	溝	B 3	1	f・g 55・56	古墳後期	須恵器片
S D 100	溝	B 3	1	f・g 55・56	古墳後期	
S K 101	土坑	B 3	1	g 54	古墳前期	
S K 102	土坑	B 2	1	c 69	古墳後期	須恵器俵瓶あり
S Z 103	土器群	A 1	5	b 5・6	縄文晚期	取り上げ時は「N R」と仮称。周囲に炭片あり
S Z 104	土器群	A 1	3	b 7	古墳前期	S字甕・壺が集中
S B 105	掘立柱建物	A 1	2	a 9~c 10	飛鳥前半	東西棟 5間×2間 主軸N 7° W ピット掘形内に鉄鎌埋納
S B 106	掘立柱建物	A 3	2	a 28~c 28	飛鳥後半?	東西棟 大形掘立柱建物 南面庇、主軸N O°
S B 107	掘立柱建物	A 3	1	a 24~b 26	中世	東西棟 主軸N 1° E 中世後期か?
S B 108	掘立柱建物	B 2	1	c 68~69	中世	東西棟 主軸N 15° W
S H 109	壓穴住居?	B 2	1	c 50・51	古墳前期	壁面でのみ確認
S B 110	掘立柱建物	A 3	1	b・c 25・26	中世	東西棟 主軸N 4° W 中世後期か?

tab. 3 遺構一覧表(3)

## IV 調査の成果～出土遺物～

今回の調査によって出土した遺物は、整理箱にして約113箱である。時期的には縄文時代晚期から近世にまで及び、古墳時代前期の土器が最も多い。土器が大部分で、若干の石製品などを含む。

以下、各調査区ごとの出土遺物を、遺構単位となるものを中心に記述する。個々の土器の詳細については、遺物観察表（tab. 4～22）を参照されたい。

### 1 A 1 区出土の遺物

#### a 縄文時代晚期の遺物

土器群 S Z 103およびその周辺出土のものとして、石器（1）および土器（4～15）がある。1は磨製石斧で、頁岩系の素材を用いている。刃部に研磨痕が残るが、素材の影響により全体的に使用時の剥離が著しい。

土器では、口縁部付近に突帯を持たないもの（4～7）、突帯を有するもの（8～13）がある。6は、口縁端部に段差を持たせることによって突帯風になっているが、原則的には段と見るべきものである。突帯を持つ一群は、二枚貝による押し引き施文のあるもの（10・11）と、指その他による刻み目のあるもの（8・9・12）、刻み目のないもの（13）がある。全形が知れるものがなく、11・12は明らかに体部片であり、2条突帯になるものと考えられる。二枚貝による押し引き施文のものは、外面調整にも条痕文を見る能够である。突帯が素文の13は、壺形を呈し、外面はケズリによる調整が見られる。14・15の底部は、別個体ではあるが13のような器形のものである。14は底面にもケズリ調整がある。

S Z 103の一群は、概ね東海地方の土器編年でいう五貫森式に相当すると考えられる。

2は結晶片岩製の石製品で、両端を加工した棒状のものである。石錘の一種か？第4遺構面検出中に出土ものであり、古墳時代前期以前とは言えるが、縄文時代であるという確証はない。3は砂岩製の砥石と考えられるもので、同じく第4遺構面検出中に

出土したものである。

16は第4遺構面の溝S D37から出土した土器である。口縁端部が外側に肥厚し、その直下にかなり低い突帯があり、二枚貝による押し引き施文が見られる。時期的には馬見塚式に相当するものである。

（伊藤）

#### b 古墳時代前期の遺物

土器群 S Z 40出土土器（17～25）　土師器（以下省略）の小形鉢・台付甕・平底甕・壺などがまとまって出土した。

17は小形鉢で、体部外面にはハケメが見られる。甕は布留形甕（19）・く字状口縁甕（20・21）・S字状口縁台付甕（22）などがある。18は平底となっているが、内外面のハケ原体はS字状口縁台付甕のものと類似する。19は口縁端部が肥厚するものである。20・21は口縁部内面と外面に細かいハケメが施されるもので、21は頸部外面に素地が付加されている。23はS字状口縁台付甕の口縁部に粘土を付加することによって成形されている。

24・25は壺である。24は外面に赤彩が施され、体部下半に焼成後穿孔されている。25の体部外面は、全体をハケメ調整した後、下半にはランダムなヘラミガキが、上半には板ナデが見られる。内面の下半にはハケメが、上半には板ナデが見られる。底部には焼成前に付着した何らかの圧痕がある。

この土器群は、全体として元屋敷式<sup>(1)</sup>に並行すると考えられる。

溝S D36出土土器（26）　26は直口壺で丸底を呈する。体部は横方向を基調とするランダムなヘラミガキで仕上げられている。

土器群 S Z 104出土土器（27～29）　台付甕（27・29）・直口壺（28）がまとまって出土している。

27はS字状口縁台付甕であり、外面のヨコハケが施されていない。赤塚次郎氏による分類<sup>(2)</sup>（以下省略）のC類後半に相当する。29は長い口縁部を持

つもので、前述の23と同様の成形である。28は口縁端部上端に面をなす。外面の磨滅は著しいが、口縁部にはタテハケ後ヨコナデが認められ、体部内面はハケメ調整されている。全体に器壁が厚めになっている。

**土器群 S Z 24出土土器 (30~37)** 散在して小形器台・台付甕・壺が出土した。

小形器台 (30) は受部内面の器壁に凹凸の使用痕が見られる。

甕はS字状口縁台付甕の口縁部 (31・32) と台付甕の脚台部 (33~36) がある。31・32はC類に相当する。脚台部にはいくつかの形態がある。このうち33はS字状口縁台付甕の脚台部であり、脚裾が折り返されている。35の外面には、整形時に付着したと考えられる素地粘土が縦方向に付着している。

壺 (37) は平底を呈し、器壁が厚い。

**包含層出土土器 (38~116)** 欠山式並行期から古墳時代後期に至る時期のものがあるが、量的には元屋敷式並行のものが大半である。器種は小形鉢・小形壺・小形器台・高杯・器台・壺・甕がある。

小形精製土器類は赤彩されているものが目立つ。器種は小形鉢 (38~41・51~54・56~59) ・小形壺 (43~45) ・小形器台 (50) がある。38は内外面に赤彩されている。39・40は、口縁部内外面と体部外面のみ赤彩し、体部内面は意識的に赤彩されていない。41は内外面に赤彩されている。

51・52は口縁部が短く、53は頸部から口縁部が立ち上がり、段をなしている。口縁部内面にはヨコハケが見られる。54は口縁部が短く外反する。56~59は口縁部に段を持ち、端部はヨコナデにより外反する。56・57は横方向のヘラミガキが見られる。内面には横方向のヘラミガキに縦方向のヘラミガキが暗文風に入る。58・59は内面に縦方向のヘラミガキが見られる。

小形壺 (44) は割れ口から径が広がるようであり、壺の口縁部と考えられる。43・45も同様のものであろう。

小形器台 (50) の受部内面の器壁には凹凸の使用痕が見られる。49は外面がヘラミガキされており、赤彩が施されている。内面はハケメが残る。器壁が厚く、小形高杯の可能性もある。

器台 (63) は受部に焼成前穿孔の透かしがあり、受部中央の器壁が脚部に向かってのびている。

高杯は、杯部が椀形を呈するもの (65) ・杯部は屈曲し、脚部がゆるやかに広がるもの (67・68・69) ・脚部の屈曲するもの (70~72) がある。65は脚部が外反しながら広がる。66は口縁部が内弯し、端部は肥厚する。67は杯部内面の器壁に凹凸の使用痕が見られる。69の脚裾は立ち上がる。70は口縁端部に面を持ち、脚裾は強い横ナデによって立ち上げられている。全体に、丁寧なナデで仕上げられている。71は脚部内面にヘラケズリが見られる。72はハケメが残っており、器壁が厚くなっている。

壺は中形壺 (55・60・61) ・大形壺 (73~88) がある。55は口縁部が短く、平底を呈する。60は直線状の口縁部に、球体状の体部を呈する。底部は丸底である。体部外面下半はヘラケズリが、体部内面には弱いヘラケズリ後ナデが見られる。61は胎土が緻密で、器壁が薄い。体部外面には、縦方向のヘラミガキが見られる。42・62は長頸壺の口縁部、46~48は底部である。42・62はいずれも内弯し、縦方向のヘラミガキが見られる。42は内外面に赤彩が施されている。46~48は平底を呈し、外面にはヘラミガキが見られる。46・48は赤彩が外面に、47は内面に施されている。外面には黒斑があり、赤彩が施されていたか不明である。48は底部を焼成後穿孔・研磨している。

二重口縁壺は頸部から一次口縁が直立するもの (73・82) と頸部から広がるもの (75~81) がある。73には横方向のヘラミガキが見られる。75はいわゆる柳ヶ坪形壺である。76~80は擬口縁の上に粘土を追加して、二次口縁を作り出している。二次口縁が欠損している80以外は口縁端部に面を持つ。79は口縁端部に刺突が施されている。80の一次口縁には焼成前かと思われる穿孔が2ヶ所残存しており、その位置から6方向に開けられていると考えられる。81は口縁部外面に素地を付加することによって二重口縁状としている。ハケメの後、粗いミガキが施される。82は一次口縁外面と二次口縁内面にハケメ後ヘラミガキが、二次口縁外面にはハケメが見られる。

74は破片のため径は不明であるが、器壁が厚く、相当大きな壺であろう。83は頸部から口縁部が立ち上がる。84は口縁部が外反し、外面にはハケメが、内面にはヘラミガキが見られる。口縁端部は面を持

ち、綾杉文が施されている。頸部には突帯が巡る。85は口縁端部が外反する。口縁部内外面ともにタテ方向のヘラミガキが見られるが、口縁端部内面には横方向のヘラミガキが見られる。86は口縁端部が肥厚し、体部内面にはヘラケズリが見られる。87は体部外面がハケ後ナデられている。体部内面は強いヨコナデが見られる。上げ底部分は丁寧になでられている。一見異質ではあるが、成形は他のものと変わらない。

甕は、大半を占めるS字状口縁台付甕（92～116）の他に、広義の布留形甕（90・91）や、細かなハケメ調整をするやや異質なもの（89）などがある。

89は口縁部が「く」の字状に開く。口縁部内面と体部外面にはハケメが、内面には板ナデ状のケズリが見られる。90・91は布留形甕である。91は調整が粗雑で、口縁部内面のハケメがそのままの状態である。

S字状口縁台付甕では、92～94のようにやや小振りのものもある。94は口縁部がやや崩れているが、基本的には細部まで大形甕同様につくられている。97～100は口縁端部に面を持ち、外面には押し引き刺突文が施されている。体部外面と頸部内面は荒いハケメで調整されている。A類に相当する。101は口縁端部に面を持ち、体部外面は細かいハケメで調整されており、B類に相当する。102～110は口縁端部が外面に張り出す。95・96は口縁部の立ち上がりが深い。C類に相当する。111は口縁部が丸くなり、ヨコハケが消失する。C類後半からD類に相当する。112は器壁が厚く、ハケメも荒いが、口縁部には2単位のヨコナデが未だ残る。D類後半からE類<sup>(3)</sup>に相当する。

113～116は甕の脚台部である。脚裾は折り返して、なでられている。113～115は器壁が薄くハケメが及んでいるが、116は器壁が厚くなり、なでられているだけである。  
(川崎)

### c 古墳時代後期～奈良時代の遺物

掘立柱建物S B 105出土遺物（117～124） 須恵器・土師器のほか、鉄鎌・土錐がある。須恵器は、123は田辺昭三氏による陶邑編年<sup>(4)</sup>（以下、田辺編年）のTK47型式に並行するもので他のものよりも古く、混入であろう。120～122は田辺編年のTK217型式に並行するものであり、これが掘立柱建物

の時期を示す遺物と考えられる。

鉄鎌は2本ある。別のピットではあるがいずれもピット掘形の壁際から出土したもので、意図的に入れられたものと考えられる。いずれも長頸鎌で、118は柳葉形、119は片刃形をなす。

土坑SK6出土土器（129～132） 須恵器杯身、土師器杯・甕・甕がある。130の杯は外面にランダムなミガキを施す。飛鳥。藤原京および平城京における編年（以下、「都城編年」）<sup>(5)</sup>の平城I頃に並行するものであろう。

包含層出土の土器（133～146） 包含層からは、古墳時代後期から奈良時代頃までのものがある。須恵器では、壺・深碗・杯身・鉢が、土師器では杯蓋・杯身・皿・高杯・甕・移動式カマドがある。133の壺は田辺編年のTK209型式頃に並行しよう。142の移動式カマドは右袖部分の破片で、袖の前に付加する突出部の貼付痕が明瞭に観察できる。

(伊藤)

### d 中世の遺物

溝SD1出土土器（147～161） 比較的まとまって出土している。出土位置から見ると、157のみが遺構底面に貼り付く状況で、その他は埋土上層部からの出土である。

147は加工円盤で、常滑産甕の体部片を敲打によって整形する。148は青磁碗で、内面に凸を中央に持つ蓮弁の押印文が見られる。149はロクロ土師器皿で、混入である。150は瀬戸大窯期<sup>(6)</sup>の縁釉小皿である。151はC系統、152はD系統の南伊勢系の土師器皿<sup>(7)</sup>である。153は南伊勢系で茶釜の蓋である。154～156は中北勢系の羽釜<sup>(8)</sup>で、口縁部に円孔を持たないものである。157～161は南伊勢系の鍋に相当する。第4段階d・e<sup>(9)</sup>に相当する。159は丸みを持つ体部で、これまでにあまり類例のないものである。

溝SD2出土土器（162～169） 162・163は加工円盤。164は中北勢系の土師器皿である。165は茶釜形、166は鍋とともに南伊勢系である。167は瀬戸大窯期相当する釜形壺である。168・169は常滑産の甕である。

包含層出土土器（170～178） 中世に相当する包含層出土土器には、中世前期から後期にかけての

ものが見られる。170は輪花を持つ陶器小碗である。171は陶器碗（山茶碗）で、藤澤良祐氏による編年（以下「藤澤編年」）<sup>(10)</sup>の第6型式に相当する。175は南伊勢系第3段階の鍋、176・177も南伊勢系の羽釜である。  
(伊藤)

## 2 A 2 区出土の遺物

調査した範囲が盛土部分であったため、出土遺物は少ない。図示していないが、奈良時代頃の土師器がごく少量ある程度である。  
(伊藤)

## 3 A 3 区出土の遺物

### a 縄文時代晩期の遺物

土器棺墓 S X 88使用の土器 (184・185) 184  
が蓋、185が棺身として使用されていた。

**棺蓋の土器** 184は体部中央部の縦方向の破片である。外面には煤が付着し、実用土器の転用と考えられる。口縁部付近で急速にすぼまり、深鉢というよりは壺である。外面体部最大径部分の直上に突帯を有し、そこを境に下方は縦方向のケズリ、上方は二枚貝を用いた条痕文が見られる。突帯上には外面体部上半に行われた条痕と同じ原体による押し引き刻目が行われる。内面はナデで、突帯部分にはその貼付に伴う指頭圧痕が明瞭に残る。口縁端部は残念ながら残っていなかったが、おそらく端部直下ないしはやや下方にもう1条突帯があり、全体としては2条突帯となる土器であろう。

**棺身の土器** 185は口縁部が意図的に欠かれたものを棺身として用いたと考えられるもので、周辺からもこの口縁部片は一切認められなかった。器壁が脆く、残りが悪い。突出する底部を持つ。口縁部付近で急速にすぼまり、やはり深鉢というよりは壺である。全体を斜めに貫く状態で補修孔が3ヶ所以上認められる。外面体部最大径部やや上を境に、下方はケズリ、上方は二枚貝条痕が見られる点は184と同様である。しかし、突帯の位置は体部最大径部よりもかなり上に位置している点が184と大きく異なる点である。突帯の位置が条痕の境になるのではなく、突帯の貼付が条痕の施文後であることを示し

ている。内面は、外面突帯位置のやや下方から上に外面と同様に条痕が施されている。口縁端部は前述のように当初より欠損しているが、184と同様、口縁端部直下ないしはやや下方にも突帯のある、全体として2条突帯となる土器であろう。

これら2点の土器は、突帯の形態とそこへの施文方法、および全体の形状から、馬見塚式に相当するものと考えられる。

**土器棺墓 S X 89出土の遺物 (182・183) 183**  
が棺身、182はS X 89付近から出土したものである。183は体部が砲弾形をなす深鉢で、外面は二枚貝条痕とケズリが錯綜する。182はサヌカイト製の小形石斧と考えたものであるが、単なる剝片かも知れない。

**包含層出土土器 (179~181) 縄文時代晩期に相当する包含層出土土器としては、深鉢の破片がある。179・181は外面に条痕が見られる。**  
(伊藤)

### b 古墳時代前期の遺物

**溝 S D 91出土土器 (186~188) 壺・甕が出土**  
している。壺(186)は口縁端部外面に面を持つ。甕は受口状口縁をもつもの(187)と「く」の字状口縁をもつもの(188)がある。187は口縁端部に面を持ち、体部外面はハケメで調整されている。188は外面と口縁部内面を細かいハケメで調整されている。

**土器群 S Z 87出土土器 (189) S字状口縁台付甕 (189) が出土している。口縁端部上面が窪み、口縁部全体が外へ張り出すもので、C類に相当する。**

**土坑 S K 59出土土器 (190~192) 小形器台・壺が出土**  
している。小形器台(190)は受部が椀状を呈し、受部と脚部が貫通しないものである。30同様の凹凸が見られる。壺は、口縁部が外反し端部に若干の面を持つもの(191)と二重口縁になるもの(192)がある。

**溝 S D 86出土土器 (193~195) 壺・甕が出土**  
している。壺(193)は二重口縁壺である。口縁端部に面を持ち、等間隔に棒状浮文を3単位施した上から、3単位まとめて一回で横方向の刺突がなされている。甕はS字状口縁台付甕(195)とミニチュアのS字状口縁台付甕(194)がある。194は成形・器壁調整とともに通常のものと変わらない。195はB類に相当する。

**土器群 S Z 61出土土器 (196~201) 小形鉢・**

壺・高杯・甕が底付近から出土している。

小形鉢（196）は口縁部が短く外反する。胎土は緻密で、体部外面以外が横方向のヘラミガキで調整されている精製品である。体部外面には赤彩が施されているようだが、確実ではない。

壺には、「く」の字状口縁を呈するもの（197）、口縁部が短く直立する（201）がある。197の口縁部内外面と体部外面には赤彩が施されている。198は、外面にランダムなヘラミガキの上に赤彩されている。201は外面全体・口縁部内面・体部内面の擬口縁以下がハケメで調整されている。底部が焼成後穿孔されており、更に穿孔部分に研磨が行われている。また、穿孔断面に接合痕が現れており、接合痕以下では研磨の及んでいない部分があることから、粘土紐の中央に別の粘土を内面から充填して成形していると考えられる。

高杯（199）は杯部と脚部外面が縦方向のヘラミガキで調整されている。脚部内面はなでられている。

甕（200）はS字状口縁台付甕で、口縁端部が短い。外面のヨコハケが無く、C類後半に相当する。

落ち込みS Z 57出土土器（202～211） 小形器台・高杯・壺・甕が出土している。211のみが遺構底面に張り付くような状態で、その他は浮いた状態で出土した。一括性は極めて低い。

小形器台（202）は受部と脚部が貫通するものである。脚部は内弯ぎみに広がる。外面は縦方向にヘラミガキ調整されており、内面はなでられている。

高杯は脚部がそのまま広がるもの（203）と屈曲するもの（204）がある。203は脚部内面がヘラケズリされている。204はナデで成形されている。

壺は口縁部が短く直線状のもの（206）と二重口縁を呈するもの（209～211）などがある。207は平底を呈する壺であり、内面の擬口縁より上部がハケメで調整されている。外面は磨滅が著しいが、ハケメが残り赤彩されている。208は擬口縁より下部の外面と上部の内面がハケメ調整されている。底部外面には砂粒が付着している。二重口縁壺（209～211）はいずれも突出する擬口縁をなすものである。一次口縁端部に面を持ち、その上に二次口縁を作り出している。209・211は口縁端部に面を持ち、210の口縁端部は凹線状に窪む。211の二重口縁壺はやや上げ底気味

の平底で、中形の直口壺の底部と同様のものである。また、底部内面に胎土の荒い粘土が貼付されている。

甕はS字状口縁台付甕（205）がある。D類に相当する。

落ち込みS Z 85出土土器（212） 二重口縁壺が出土している（212）。口縁端部に面を持ち、口縁端部と屈曲部外面に刻目文が施されている。

土器群S Z 68出土土器（213） 台付甕が出土している（213）。大きく開く口縁部を持つもので、先述の23・29同様の成形である。

土坑S K 90出土土器（214） S字状口縁台付甕（214）が出土している。外面にヨコハケが消失しているもので、C類新に相当する。

包含層出土遺物（215～235） 小形鉢・小形壺・壺・高杯・甕のほか土玉が出土している。

土玉（215）は手捏ねで、117の土錘とは孔が開けられているか否かという点が異なるだけである。

小形鉢には、口縁端部がヨコナデにより外反するもの（219・223・224）、口縁部が内弯するもの（220・225）がある。216は小形壺で、外面を縦方向のヘラミガキで調整し、外面と口縁部内面が赤彩されている。217・218は内外面に赤彩が施されている。218は小形壺かも知れない。217は外面を横方向のヘラミガキで調整されている。219・220は内外面に赤彩が施されている。223・224は口縁部に段を持つ。ヘラミガキの方向は横方向である。225は強い指ナデによって口縁部と体部の境目が作り出されている。226は小形壺で、横方向のヘラミガキが見られる。口縁部内面には赤彩が施されている。

長頸壺（221）は口縁部が内弯し、端部が外反する。内外面共に赤彩が施されている。

高杯（227）は脚部が屈曲するものである。外面はハケメ調整され、内面はなでられている。

甕には、跳ね上げ口縁を呈するもの（228）、布留形甕（229・230）、「く」の字状口縁を呈するもの（222・231～233）、S字状口縁台付甕（234・235）がある。222は口縁部外面に赤彩が施されており、甕として機能していない可能性もある。228は口縁部外面に面を持ち、そこに擬凹線状の施文が見られる。体部内面はヘラケズリしている。229は口縁端部が摘み上げられ、それが内傾した結果、口縁端部上面が

面をなすこととなる。体部内面は、頸部間近までヘラケズリが及んでいる。230は口縁端部がやや肥厚しており、内面のヘラケズリは頸部まで及ばない。231・233は口縁端部に面を持つ。231は細かいハケメで、233はやや粗めのハケメで調整される。232は細かいハケメ調整後、体部外面にはヘラミガキされている。234は口縁端部が外面に張り出す。235は口縁部が退化し、器壁が厚くなっている。  
(川崎)

#### c 古墳時代後期の遺物

**堅穴住居S H58出土の遺物 (236～246)** 堅穴住居S H58からはまとまった資料が出土している。244はカマド煙道で、240の脚部はカマド煙道付近で出土したが、240の杯部およびそれ以外のものは堅穴住居中央からまとまって出土したものである。したがって、244以外の一括性は極めて高いものと考えられる。

236～238は須恵器蓋杯である。237の内面には同心円叩き具痕が残る。238の底部外面の回転ケズリは断続状になっている。大枠で田辺編年のTK43～MT85型式に並行するものである。

239～246は土師器である。239は台付椀、240は高杯、241は甕、242～245は長胴甕、246は甌である。239の口縁部外面には素地付加による瘤状の突出が見られるが、整形最終段階で偶然付着したものである可能性もある。243は把手付の鉢ないしは鍋の可能性がある。246は底部を一文字状に削り残すもので、把手は挿入付加による。底部付近外面は内外面ともにケズリを施す。把手付近の外面には横方向のハケメが見られる。

**包含層出土古墳時代遺物 (247・248)** 247は金環である。銅芯の地金に金メッキないしは金箔が施されている。248は須恵器で試掘坑から出土している。  
(伊藤)

#### d 飛鳥～奈良・平安時代の遺物

**焼土坑S F93出土の土器 (249～251)** 焼土遺構内からの出土である。土師器類で、台付椀・甕がある。飛鳥前半のものであろう。

**炭層S Z94出土の土器 (252)** 平底風の土師器甕がある。飛鳥時代前後のものであろう。

**土坑S K21・42出土の土器 (253～255)** 須恵

器蓋杯・土師器甕がある。須恵器は田辺編年のTK217型式に相当する。

#### 掘立柱建物S B106出土の遺物 (259・260)

図示できるものが極めて少ない。256の須恵器は、田辺編年のTK217型式のものであり、これ以降の遺構と考えるのが妥当である。

その他のピットからは、都城編年における平城Iに相当するものも見られる。

**包含層出土の遺物 (261～288)** 当該時期の包含層出土遺物は多く、質的にも良い。須恵器(261～271)、土師器(273～288)、土錐(272)がある。

**須恵器** 田辺編年のTK217型式に相当し、都城編年では飛鳥II～IIIするもの(261～268)、都城編年の飛鳥IVに相当するもの(269・270)がある。

**土師器** 土師器にも精良な土器が多く、都城編年の飛鳥III・IVに相当するものが見られる。273はミガキ調整を行わない杯で、口縁部付近には油煙痕が厚く残る。灯明用のなかでも、より強い火力を必要とした際に用いられたものであろう。277・278は杯で、内面には斜放射状の暗文がある。都城分類による杯Cに相当するが、口縁端部の形態が杯Aに類似する点が異なる。279は都城分類による杯Aで、内面は斜放射状暗文を2段、内面見込みには螺旋状暗文が施される。外面のケズリおよびミガキ調整も丁寧で、畿内からの搬入品ではないかと思われるものである。280は台付杯で、内面には斜格子状に暗文が施される。282は大形壺の蓋と考えられるものである。上部の摘み周囲にはおそらく5単位(方向)のミガキが施されるものである。全体の整形は、深めの杯Aを逆さにして整形したように見える。

284は都城分類では盤Aに相当するものであろう。内面には今一つ規則性のない螺旋状の暗文が施される。285は把手の付く盤ないし鉢である。286は口縁端部下方に焼成前穿孔を有する把手付の鉢ないしは甕である。焼成前穿孔を有するものは伊勢では珍しく、当遺跡からはこれとは別個体のものがあと2点ある。287は長胴甕、288は把手付鍋であろうか。

**土坑S K13出土土器 (289・290)** 289は灰釉陶器段皿、290は黒色土器で内面のみを黒化するものである。  
(伊藤)

#### e 中世の遺物

溝 S D 16出土土器 (293~296) 土師器皿・鍋、陶器碗がある。皿は南伊勢系B系統で、岩出分類のII a期後半に相当する。鍋も南伊勢系で、中形の第1段階bに相当。頸部外面に沈線状のものが巡る。陶器碗は藤澤編年の第6型式に相当する。全体的に見て、13世紀中葉頃のものであろう。

土坑 S K 41出土遺物 (297~300) 297の土師器小皿はいわゆる京都系。南伊勢系・中北勢系とも異なる。298の土師器皿は中北勢系。299は南伊勢系の鍋で第4段階bに相当。全体として、15世紀後葉頃のものと考えられる。

溝 S D 9・20出土遺物 (301~326) 301~305がS D 9、306~326がS D 20である。両溝は一連のものである。

S D 9では加工円盤、陶器碗、土師器鍋のほか、五輪塔を図示した。302の陶器碗は極めて薄手のもので、瀬戸北部ないしは東濃産かと思われる。303の鍋は南伊勢系で、小形の類に属する。304・305は五輪塔で、ともに一石五輪である。砂岩製で、井関石（一志郡一志町井関付近で産出）かと思われる。

S D 20では加工円盤、土錘、土師器皿類、土師器鍋、陶器壺・擂鉢のほか、石製品として硯がある。308の土錘は、もう少し古い時期のものかも知れない。

土師器皿類では、309~320は南伊勢系、321は中北勢系である。320は台付の小碗であろう。323は南伊勢系の鍋で第4段階並行である。陶器壺は常滑産と考えられる。陶器擂鉢は瀬戸大窯期のものである。硯は長楕円形を呈するものと考えられる。

S D 9とS D 20は連続する溝なので、全体的には同じ時期のものと考えられる。16世紀前葉を中心とした時期と考えられる。

土坑 S K 17出土土器 (327~382) 一括性の高い、非常によくまとまった土器群である。

土師器皿類では、南伊勢系のもの（327~331）、中北勢系のもの（332~336）がある。336はこれまで類例のないもので、大皿の類に相当するものであろうか。

陶器では天目茶碗（337）がある程度。瀬戸大窯期に相当する。

貿易陶磁器類では青磁碗（338）と白磁皿（339）がある。

土師器鍋類では、南伊勢系（340~356、363~367）、中北勢系（368~382）がある。南伊勢系のものは、中形の系統のものと半球形体部のものとがほぼ同数に近い状態である。353~356のように、より焰焰形に近いものも含む。363は鍋類の底部片で、焼成後の穿孔が5ヶ所見られる。甌状に用いたのであろうか。366は片口を持ち、把手を有する形態である。367は、A 1区溝 S D 1の159と同様のこれまでに類例のないものである。第4段階d~eにかけてのものであろう。中北勢系は、口縁部下に焼成前穿孔を持たないものである。外面のハケメ調整は全体的に認められる。

加工円盤は常滑産陶器甌片などを用いているものであるが、361は古墳時代の台付甌の脚台部上を転用した珍しいものである。

これらは、全体として16世紀中葉前後頃のものと考えられる。  
(伊藤)

#### 4 A 4 区出土の遺物

##### a 縄文時代晩期の遺物

遺構出土ではないが、石器と土器がある。383は水晶製のもので、R Fの可能性がある。384は口縁部直下の外面に薄い突帯を貼り付け、そこに条痕による押し引き施文を行うものである。385は口縁端部を欠損するが、それに近い位置までが残っているものと考えられるものである。突帯には施文がない。外面には二枚貝による条痕が施される。3片であるが、胎土・施文などの特徴から同一個体と考えてよい。383の時期は不明であるが、384・385は縄文時代晩期に相当することから、同じ時期のものかと思われる。  
(伊藤)

##### b 古墳時代前期の遺物

土器溜 S Z 81出土土器 (286~393) 高杯・壺・S字状口縁台付甌がまとまって出土した。高杯（386・387）は別個体であるが、同様の形態を呈するものと思われる。386は杯部が内弯して長くのびている。387の脚部はやや内弯して開く。

壺にはいわゆるパレススタイル壺（388）のほか、拡張口縁外面に綾杉文を施すもの（389）、受口状をなす口縁部外面に波状文を施すもの（390）、頸部に突帯を持ち、刻目文をもつもの（391）などがある。391の下半部欠損の状況は後述の394と共通する。392は口縁部外面にハケメ調整後、横方向のヘラミガキが施されている。

S字状口縁台付甕（393）は口縁端部に面を持ち、口縁部に押し引き刺突文が施されている。A類に相当する。

井戸S E 79出土土器（394）　遺構底面から壺が1点のみ出土した。壺の口縁部から体部上半部にかけては完存するが、体部下半部は全く確認できなかつた。391と比較すると、口縁端部に板状工具の木口による刺突を施すか否か、頸部凸帯を巡らせるか否かなど細部の差はある。しかし、口縁部の開き方や体部上半部が球形をなしている点で器形に共通点がみられることから、時期的にはほぼ並行するものと思われる。

土器群S Z 56出土土器（395～411）　小形器台・小形鉢・小形壺・高杯・壺・台付甕などが出土した。

小形器台（395）は受部と脚部が貫通するもので、受部が椀状を呈する。

小形鉢（396）には口縁部が内弯し、縦方向のヘラミガキが施されるものがある。404は小形壺かと思われるもので、外面がヘラケズリされている。

高杯には脚部が屈曲するもの（397）と脚部がそのまま広がるもの（398）がある。397は3方向に透かしが穿たれている。外面は縦方向のヘラミガキで調整され、内面はなでられている。398は杯部はヘラミガキで調整されている。脚部は外面が縦方向のヘラミガキで調整され、脚部内面はなでられている。

壺には二重口縁を呈するもの（406～408）、広口のもの（402・403）、および底部（409～411）がある。402は口縁部が直線状に開く。内外面に縦方向のヘラミガキが施されている。403は口縁部内外面と体部外面にヘラミガキが施されている。肩部には列点文が巡らされている。

406は二重口縁部の上部に、更に粘土紐を追加して成形し、「三重口縁」となっている。一次口縁外面は、素地を追加することで突帯状に張り出す。三

次口縁外面には綾杉文、一次口縁外面の突出部には刻目文が施される。口縁部内面には赤彩が施されている。407は口縁部に円形浮文が施されている。408は擬口縁である、一次口縁端部に面を持ち、その上に二次口縁を作り出している。口縁端部に面を持つ。409・411の壺底部の外面には砂粒が付着している。409・411は外面に横方向の、410は縦方向のヘラミガキが施されている。

甕は台付甕がある。399・400はS字状口縁台付甕で、口縁端部が外面に張り出す。401は前述の23ほかと同様の成形である。口縁端部は肥厚している。405は脚台である。台付甕の脚台であろうか。

周溝S D 55出土土器（412～449）　周溝の底付近から出土したのは壺（423）のみで、その他は上層に相当する。

423は口縁部は内弯して開き、体部にはハケメが見られる。体部下半の擬口縁上には焼成後穿孔されている。底部には木葉痕が見られる。

上層土器群には、小形鉢・高杯・壺・甕がある。小形鉢には、口縁部が直線状に開くもの（412）・口縁部が内弯するもの（413）・口縁端部に面を持つもの（414）・口縁端部がヨコナデにより外反するもの（416～418）・体部が丸底を呈するもの（415）がある。412は平底で、口縁部を縦方向に、体部を横方向にヘラミガキで調整されている。内外面に赤彩が施されている。413は平底を呈する。口縁部外面に縦方向のヘラミガキが見られる。414は内外面に赤彩が施されている。415は体部外面をハケメ後ヘラケズリされている。底部付近にはランダムなヘラミガキが見られる。416・417は口縁部に段を持つ。体部内面に横方向のヘラミガキが見られる。418は口縁部外面に赤彩が施されている。

高杯（422）は脚部が外反しながら開く。杯部内面と脚部外面はヘラミガキされている。脚部のヘラミガキは縦方向に施されている。内面はヘラケズリされており、屈曲している。

壺には、中形のもの（420・421）・大形のもの（424～434）などがある。大形壺は二重口縁を呈するもの（428～432）、広口のもの（424～427）、および底部（433・434）がある。419は口縁部に厚めの素地を用いることによって外面に段をなす。内外

面に赤彩が施されている。420は口縁部が短く、直線状を呈する。底部は平底である。421は直線状の口縁部に、安定感のある体部が付く。丸底に近いが、平底を呈する。口縁部内外面と体部外面に赤彩が施されている。424は外反する口縁部で、端部が上方に突出する。425は内外面ともに、ハケメ調整されている。426は口縁部が外反し、端部は外面に丸い面を持ち、刻目文が見られる。内外面ともに、ハケメ調整されている。427は口縁部が直線状に広がり、端部はやや肥厚する。体部は外面が縦方向のヘラミガキで調整されており、内面はなでられている。底の内外面には砂粒が付着している。

428・429はいわゆる柳ヶ坪形壺である。一次口縁の外面はハケメ調整され、口縁部内外面には綾杉文が施されている。430・431は上方に突出する擬口縁を持ち、その上に二次口縁を作り出している。口縁端部に面を持つ。432は粘土を付加して張り出させることで、二重口縁にしている。二次口縁の外面を横方向の、内面を縦方向のヘラミガキで調整している。434の内面にはヘラミガキが見られる。

甕には、口縁部を見ると、布留形甕（435・436）、く字状口縁甕（437・438）、S字状口縁台付甕（440～448）がある。底部を見ると、平底のもの（439）、脚台を持つもの（437・442・447～449）があり、435・436は丸底となるものである。

435・436は口縁端部が肥厚する。体部外面にはハケメ調整後、肩部に板状工具の木口のような原体で、左上から右下に向かって刺突<sup>(11)</sup>が施されている。内面はヘラケズリされている。436は接合しないが底部付近片も出土している。体部外面に煤が付着しているにもかかわらず、底部外面が磨滅していない。437は口縁部内外面と体部・脚台部の外面がハケメ調整されている。脚台部は意図的に打ち欠かれている。

439は壺形を呈するが、外面に付着した煤から煮沸用具として用いられたものである。外面調整の手法や製作技法はS字状口縁台付甕と共通する。

440・441はやや小振りの甕である。両者は図版・観察表では別個体として扱っているが、同一個体である。442～444・447は口縁端部が外面に張り出す。445はやや器壁の厚いものである。S字状口縁台付

甕の中では、446だけが口縁部の立ち上がりが深い・細いハケメ調整など、ほかの個体との差が目立つ。449は胎土が極端に荒く、被熱を受けており、磨滅が著しい。

上層土器群は、全体として元屋敷式に並行するであろう。

c 17 P i t 3 出土土器（450） 受部と脚部の貫通する小形器台（450）が出土している。

土坑 S K 80 出土土器（451） 遺構の底から浮いた状態で、小形器台（451）が出土している。外面のヘラミガキは図上では単位が切れるが、受部・脚部同時に調整している。受部に他の個体同様の凹凸がみられる。

土器群 S Z 48 出土土器（452～460） 小形鉢・高杯・壺・台付甕がまとめて出土した。小形鉢では、口縁部に段を持ち、端部はヨコナデにより外反するもの（452）、口縁部が短く外反するもの（453）がある。453は口縁部内外面と体部外面に赤彩されている。

高杯（454）は杯部がやや内弯し、口縁端部が凹線状に窪む。脚はやや内弯して直線状に延び、脚裾に面を持つ。

壺（455）は口縁部がやや内弯する。底部は丸底を呈するが、体部は安定感がある。器壁は薄く、口縁部と体部外面には縦方向のヘラミガキが見られる。特に体部のヘラミガキは暗文風である。体部内面はなでられている。口縁部は意図的に打ち欠かれていると考えられる。

甕（456～460）はS字状口縁台付甕である。457・458はC類に相当し、456はやや器壁の厚いものである。459・460は脚台で、端部は折り曲げて丁寧になでられている。

堅穴住居 S H 63 出土土器（461～494） 堅穴住居の下層溝（落ち込み）から出土したのは471の二重口縁壺のみである。その他は床面から出土している。小形鉢・小形壺・小形器台・鉢・壺・甕がある。475～479の壺は全て堅穴住居の壁際からの出土である。

小形鉢は口縁部に段を持ち、端部はヨコナデにより外反するもの（461）と口縁部が直線状にのびるもの（462）がある。461の外面は横方向のヘラミガキで調整されている。462は平底を呈し、内外面に

赤彩が施されているものと思われる。

小形器台では、口縁部が強くヨコナデされているもの（465・467）と脚部（466）がある。466は脚部がそのまま広がるものである。467は受部と脚部が貫通しない精製品であり、脚部は直線状にのび、脚裾端部は強いヨコナデによって下方に突出する。465・467の受部内面の器壁には凹凸の使用痕がみられる。

鉢には468～470がある。468は口縁部が内弯し、暗文風に縦方向のヘラミガキが施されている。469は口縁端部が外反する。口縁部外面には縦方向の、口縁部内面と体部には横方向のランダムなヘラミガキが施されている。470は扁平な体部に、内弯する長い口縁部が付く。器壁は特に薄い。

壺には小・中形壺（463・464・471・472）と大形壺（473～479）がある。463は口縁部内面に横方向の、外面には縦方向のヘラミガキが施されている。464は扁平な体部に平底を呈する。471は一次口縁が頸部から直立し、口縁端部は面を持つ。面上には竹管文が施されており、棒状浮文が剥離した痕跡もみられる。頸部には凸帯が巡らされ、その上に綾杉文が施されている。外面には横方向の、一次口縁内面には横方向のヘラミガキが見られる。472は球体状の体部に平底を呈する。

大形壺は二重口縁を呈するもの（479）、広口を呈するもの（473～475・477・478）、および体部（476）がある。479は、上方に突出する擬口縁を持ち、その上に二次口縁を作り出している。口縁端部に面を持つ。口縁部内外面と体部外面に縦方向のヘラミガキが見られる。473～475・477は口縁部が直線状に伸びる。473は口縁端部がやや肥厚する。474も口縁端部がやや肥厚し、口縁部内外面と体部外面には縦方向のヘラミガキが見られる。475は口縁端部内面にヨコナデが見られる。底部内面には砂粒が付着している。477は口縁部内外面と体部外面に縦方向のヘラミガキが施され、体部内面はなでられている。底部外面には砂粒が付着している。口縁部は打ち欠かれており、体部上半には焼成後の穿孔がある。478は口縁部がやや内弯している。体部下半の擬口縁より上にはハケメ調整が見られる。底内面には砂粒が付着している。口縁部は意図的に打ち欠かれている。

甕では、S字状口縁台付甕（483～494）、「く」の字甕（480・481）、布留形甕（482）がある。480の外面には荒いハケメの後ランダムなヘラミガキが施されている。482は口縁端部上面に強いヨコナデが施され、その結果内面が肥厚する。S字状口縁台付甕はB類に近いもの（486）もあるが、概ねC類に相当する。

この土器群は、全体として元屋敷式に並行するものである。

**S K 60出土土器（495～498）** 壺とS字状口縁台付甕が出土している。S字状口縁台付甕（495～497）はC類に相当する。壺（498）は器壁が厚い。口縁部は、意図的に打ち欠いている可能性がある。

**包含層出土土器（499～508）** 小形鉢・壺・甕などが出土している。小形鉢（499）は口縁部が内弯する。内外面に赤彩が施されている。高杯？（501）は中実で、外面はヘラミガキ後赤彩が施されている。一端は欠損しており、もう一端は高杯の脚部のように開き、内面は丁寧になでられている。中実の高杯にしてはやや小振りではある。

壺には、二重口縁を呈するもの（504・505）、短頸のもの（500・506）がある。500は口縁部が短く、端部が外反する。体部外面はヘラケズリ後、一部ヘラミガキされている。口縁部内外面と体部外面には赤彩が施されている。504・505は上方に突出する擬口縁を持ち、その上に二次口縁を作り出している。口縁端部に面を持つ。506は口縁端部外面に素地を付加し、肥厚させている。口縁部内外面と体部外面にはヘラミガキが施されている。

甕には、S字状口縁台付甕の類（507・508）、「く」字状口縁のもの（502）、および布留形甕（503）がある。502は外面ともにハケメ調整されている。503は内弯する口縁部で、口縁端部は内側に肥厚する。体部内面はヘラケズリ、外面はハケメで、外面のハケメは肩部付近に横方向のハケメが見られる。精緻な土器である。507はS字状口縁台付甕の口縁部に素地を付加することによって拡張しているものである。口縁端部は肥厚している。508はS字状口縁台付甕にしては頸部が締まらないものである。

（川崎）

### c 奈良時代の遺物

**豎穴住居 S H49出土土器 (509~526)** 須恵器・土師器がある。511・512・514~517・519~526は床面直上から出土したものであり、同時代性の高いものである。

**須恵器** 509は杯蓋、510は杯身である。510は都城分類による杯Gと考えたが、小片のため、蓋の可能性もある。518は外面にカキメを有するもので、須恵器の壺か甕の口縁部と思われる。

**土師器** 杯・皿・壺・甕・瓶・移動式カマドがある。515は他のものと比べて少し古い形態をなすが、都城分類による鉢Bの類と考えれば妥当なところか。519は高台を持つ壺になるが、口縁部の外反を見ると甕との共通性がある。甕には520のような極小形のものと、小形で丸底の521、長胴形をなすと考えられる522~524がある。524は直胴気味の体部から大きく外反する口縁部を持つもので、この地域ではあまり例を見ないものである。525は瓶で、貼り付けによる把手を持つ。底部には穿孔があり、復元すると直径約4cm程度の円孔が中央に1個・周囲に5個の計6個あったものと考えられる。526の移動式カマドは口縁部から右袖部分の破片である。復元すると裾広がりの形状となるが、左袖は右袖の角度から復元したため、本来の形状とは少し異なるかも知れない。貼り付けによる把手を持つ。焚口部の上部は笠状に張り出す。裾の下部には突堤状の貼り付けが見られる。袖接地部は下方へ突出していたものと考えられる。

これらの土器群は、都城編年による平城IIに並行するものと考えてよからう。

**ピット出土遺物 (527~529)** 527・528は志摩式製塩土器である。素地の積み重ね痕が若干確認できる。円盤状の底部に上積みして成形しているものと考えられる。

掲載した土器は、いずれも豎穴住居 S H49の床面下で検出したピットからの出土である。そのため、S H49と同時期か、あるいは若干古いものと考えられる。  
(伊藤)

#### d 中世の遺物

**溝 S D25出土土器 (534~539)** 土師器・磁器がある。土師器皿類 (534~537) はいずれも中北勢

系である。534は極めて小形のもので、中北勢系の資料としては珍しい。538は青磁香炉である。破片であるが、三足になるものと考えられる。内面は底部にまでは施釉が及ばない。539は土師器鍋で南伊勢系である。第4段階dに相当する。

**溝 S D27出土遺物 (540~549)** 土師器・陶器・瓦質土器のほか、瓦・加工円盤がある。540・541は土師器皿で、540は南伊勢系、541は中北勢系である。542は土師器の壺形をなすもので、南伊勢系である。かなり大形ものと考えられる。543は瓦質土器火鉢かと思われる。544・545は瀬戸産陶器の天目茶碗で、瀬戸大窯期に相当する。546は中北勢系の羽釜である。547は平瓦で、全体をナデ調整する。548・549は加工円盤で、548は外面敲打部を研磨する。

**井戸 S E 29出土土器 (550~553)** 550・551は陶器小皿と碗で、混入である。外面底部に墨書が見られるが記載内容は不明。552は瀬戸産擂鉢で、瀬戸大窯期に相当する。553は南伊勢系の鍋で、第3段階bに相当する。

**井戸 S E 31出土土器 (554~556)** 554・555は土師器皿で、554は南伊勢系、555は中北勢系である。556は南伊勢系の鍋で第4段階cに相当する。

**井戸 S E 34出土土器 (557・558)** いずれも南伊勢系の土師器で、557は第3段階bの鍋、558もほぼ同じ時期の羽釜である。

**井戸 S E 30出土土器 (559~563)** 559は青磁、560は青白磁。いずれも混入の可能性が高い。561・562は中北勢系の羽釜、563は南伊勢系の鍋で第4段階eに相当する。

**井戸 S E 33出土土器 (564・565)** 564は中北勢系の羽釜。565は底部外面に墨書のある陶器碗で混入である。

**包含層出土遺物 (566~569)** 566は南伊勢系の土師器鍋の体部を用いた加工円盤で、中央に円孔を持つ。567は南伊勢系の鍋で第2段階b、568も南伊勢系の鍋で第3段階bに相当。567は常滑産の練鉢である。  
(伊藤)

### 5 A 5区出土の遺物

#### a 古墳時代前期の遺物

**周溝 S D54出土土器 (570~575)** 570は二重口縁壺である。剝離が進んでいるが、外面に赤彩の痕跡が見られる。571の壺は溝の埋没する過程での出土である。体部は下膨れである。口縁部は立ち上がりを持ちながら大きく開き、端部に面をなす。口縁端部には2本単位で3方向?に棒状浮文が貼付されており、体部上半の外面には粗雑な櫛描直線文・波状文・刺突文が施されている。口縁部内外面と体部外面上半に赤彩が施されており、体部内面にも一部付着している。底部は焼成後穿孔で、きれいに研磨されている。

**S字状口縁台付甕 (572~575)** は口縁端部に面を持ち、572・573には口縁部外面に刺突文が、574・575には押引刺突文が施されている。A類に相当するものである。  
(川崎)

#### b 奈良時代の遺物

**堅穴住居 S H52・53出土土器 (576~581)** 重複関係から、S H52かS H53か区分できなかったものの(576~578)とS H53に特定できるもの(579~581)とがある。S H53に相当する土師器椀(579・580)は深手のもので、579は口縁部内面に面をなす。この特徴を重視すれば都城編年の飛鳥I頃かとも考えられるが、共伴資料がないため、特定できない。576~578は平城Iに相当しよう。

**井戸 S E 50出土土器 (582~600)** 比較的まとまった良好な資料である。須恵器(584~586)、土師器(587~600)がある。なお、図示していないが、志摩式製塩土器片が1点認められる。

**須恵器** 蓋杯がある。杯身は口縁部内面に弱い面をなすものである。

**土師器** 587~591は、都城分類の杯A、592・593は杯B、594は皿Aに相当すると思われるが、直接比較するには手法・形態とも差異が大きい。587は口縁内面に粗雑な鋸歯状の暗文を、内面底部には螺旋状の暗文を施す。590はミガキ調整が見られないもので、内外面に炭化物(煤)の付着が見られる。592は内外面を粗いミガキによって調整し、593ではさらに斜放射状の暗文を施しているようである。

甕では、口縁部径が15cm内外の小形のものが多く、600のみ大形で長胴形を呈するものと考えられる。

内外面ともに、体部上半はハケメ、下半はケズリという手法を採っていると考えられる。

これらの土器群は、全体として都城編年の平城IIに並行するものと考えられる。  
(伊藤)

#### c 中世の遺物

**溝 S D43出土遺物(603~605)** S D43からは、奈良時代前後の土器が混入したものは多いものの、溝そのものの時期の土器は少ない。

603は陶器小皿で、瀬戸産の志野焼と思われる。埋土最上層部から出土した。604は加工円盤、605は土錘である。  
(伊藤)

### 6 B地区出土の遺物

#### a 縄文時代晚期の遺物

606は打製石斧で基部を欠損する。結晶片岩製のものである。

607・608は口縁部付近に突帯を持たないもの。608の口縁部直下には条痕が見られる。609~618は外面に突帯を持つもので、口縁端部付近のもの(609~614)、口縁部からやや下がった位置にあるもの(617・618)、とに分かれる。616は口縁端部付近のみの破片であるが、後者に含めてよからう。615は口縁部付近に2条突帯を持つもので、下方の突帯のみが残存した破片と考えられる。

突帯上には、施文のあるものと無いものがある。609はヘラ状工具によるキザミに近いが、612・614は二枚貝腹縁部によって押し引き状に施文されている。

620・621は当該時期の底部片である。

これらは、大枠において縄文晚期、五貫森式に相当するものであろう。  
(伊藤)

#### b 古墳時代前期の遺物

**堅穴住居 S H76出土遺物 (622・623)** 622の脚台は堅穴住居床面から出土した。623は軽石製の砥石である。刃状の痕跡は1面のみである。面単位の研磨は多面にわたり、研磨方向の見える面もある<sup>(12)</sup>。

**B 2区 d72 P i t 1 出土土器 (624)** 壺(624)は内弯する口縁部を持ち、口縁端部が内側に肥厚する。

**堅穴住居 S H109出土土器 (625)** 脚の屈曲す

る高杯（625）が出土している。内面はヘラケズリされている。

堅穴住居S H95出土土器（626） S字状口縁台付甕（626）が出土している。頸部内面にはハケメが施されている。B類に相当すると考えられる。

土坑S K82出土土器（627） B類に相当するS字状口縁台付甕（627）が出土している。

堅穴住居S H78出土土器（628～632） 小形鉢・小形器台・壺・S字状口縁台付甕が出土している。

小形鉢（628）は口縁部がゆるやかに内弯する。横方向のヘラミガキが見られる。小形器台（629）は受部が直立気味に立ち上がるもので、屈曲部外面には刻目文が施されている。

二重口縁壺（630）は口縁端部内面に強いヨコナデを施すことによって上方に突出する。二次口縁外面にはハケメ調整が残っている。

S字状口縁台付甕（631・632）は口縁端部に面をもつ。

堅穴住居S H84出土土器（633） S字状口縁台付甕（633）が出土している。C類に相当する。

包含層出土土器（634・635） 634はいわゆる柳ヶ坪形壺である。口縁部内外面に綾杉文が施されている。635は台付甕の脚台であろう。

堅穴住居S H96出土土器（636～640） 鉢・高杯・台付甕・壺が出土している。鉢（636）・壺（640）が堅穴住居床面から、S字状口縁台付甕（639）がf 57 P i t 3からの出土である。

鉢（636）は平底で、口縁部の1ヵ所に片口を作り出している。高杯（637）は外反気味の脚裾を持ち、脚部内面はヘラケズリされている。

S字状口縁台付甕は2個体ある。638は口縁部外面に押し引き刺突文が施されており、頸部にはハケメが見られる。639は口縁端部に面を持つ。

壺（640）は口縁部が短く開き、端部に面を持つ。頸部には凸帯が巡らされている。体部外面にはヘラケズリ後ランダムなヘラミガキが、上半には粗雑な櫛描直線文と波状文が施されている。体部内面は板状工具によってなでられている。体部上半と底部附近に1ヵ所づつ焼成後の穿孔があり、研磨によって形を整えている。

これらの土器は、欠山式新段階あたりに並行する

であろう。

堅穴住居S H83出土土器（641～649） 壺

（643）は落ち込みから、高杯（641）・壺（642）・甕（645～649）は堅穴住居床面から出土している。

高杯（641）は丸みを帯びた杯下部の上に直線的な口縁を作り出している。全体を縦方向を基調としたヘラミガキで仕上げている。

壺は口縁部が頸部から大きく外反し、口縁端部に面を持つもの（642）、および体部（643）がある。642のヘラミガキは内外面共に横方向に調整されている。643は平底を呈し、内面はハケメ調整されている。

甕は受口状口縁のもの（644）とS字状口縁台付甕（645～649）がある。644は口縁端部上面に面を持ち、口縁部外面には刺突が施されている。混入かと思われる。645～649は口縁端部の面が退化しつつあり、B類新からC類古に相当する。

これらの土器群は、おおむね元屋敷式に並行するであろう。

堅穴住居S H73出土遺物（650～686） 堅穴住

居壁際から1m程度内側に集中して遺物が出土した。床面上あるいはやや浮いた状態のものが大半であるが、650・651・659・666・667は床面から20cm以上浮いていたものである。

石製品では叩石、土器ではミニチュア土器・小形鉢・小形器台・高杯・壺・S字状口縁台付甕がある。小型器種は数点づつまとめて出土している。小形鉢（652）は小形器台（658）の上に載ったまま倒れて出土した。更にその上に、高杯（664）が覆い被さっていた。655・661、656・659・660はそれぞれまとめて出土した。壺は670・676・677がそれぞれ分散して出土した。北東方向で出土した672・673・674は口縁部から頸部にかけての残存がよく、正立あるいは倒立していた。679・682～684は甕のみがまとめて出土した。北東方向で出土した654・665・668は混入の可能性がある。

叩石（650）は1面の中央付近が窪んでいる。被熱により劣化している。

ミニチュア土器（651）は指ナデによって、成形されている。

652～654・657は小形鉢、655は小形壺である。652は口縁部が直線状にのび、端部は外反する。底

部は平底を呈する。内外面に縦方向の、頸部外面には横方向のヘラミガキが施されている。653は直線状の長い口縁部を有する。頸部は強い指ナデによって作り出されている。654は短い口縁部に、扁平な体部を呈する。底部は平底である。体部外面にはヘラミガキが見られる。655は内面がヘラケズリ後丁寧になられており、底部付近には指頭圧痕がみられる。また、外面は細かいハケメで調整されている。成形は布留形甕そのものである。

656・657は中形壺である。656は内弯する口縁部である。内外面ともに、縦方向のヘラミガキ後赤彩が施されている。657は安定感のある体部を呈する。外面にはヘラミガキが施されている。口縁部は意図的に打ち欠かれている。

小形器台は受部と脚部が貫通するもの（658）としないもの（659～660）がある。658は受部に稜を有し、脚部はそのまま開く。受部外面と脚部外面には縦方向のヘラミガキが、脚部内面にはヘラケズリが施されている精製品である。659は脚部が直線状に広がる。脚部内面はヘラケズリ後なでられている。660は脚部がそのまま外反しながら広がる。

高杯には杯部が椀状を呈するもの（661）、屈曲するもの（662～664）、および脚柱部（665～668）がある。661の脚部は外反しながら大きく広がり、端部には面を持つ。杯部外面と脚部外面には縦方向にヘラミガキが施されている。脚部内面にはハケメ調整が見られる。杯中央部は欠損しており、器壁下に成形時の乾燥面らしいものが見えている<sup>(13)</sup>。

662は口縁端部内面に面を持つ。664は口縁端部外面に面を持つ。脚部はやや外反しながら直線的に伸びている。脚裾端部付近に接合痕が見える。杯部外面と脚部外面には縦方向のヘラミガキが見られる。脚内面はなでられており、成形時に爪痕跡が付着している。665・666には外面に縦方向のヘラミガキ後、脚柱部に櫛描文が巡らされている。665の脚部内面にはハケメ調整が見られる。667は外面に縦方向のヘラミガキが見られる。668は脚部が長く、広がっていく。外面には縦方向のヘラミガキが施されており、内面にはハケメ調整が見られる。

669～678は壺である。669は口縁部が直線状に開く。外面にはハケメ調整が見られる。670は口縁端

部外面に素地を付加し、拡張口縁状とする。体部外面はヘラミガキが、内面にはハケメ調整が見られる。671は口縁部を意図的に打ち欠いているものである。672～674は口縁部が短く開き、端部には面を持つ。673の口縁端部外面には綾杉文が、肩部には櫛描文が施されている。

674は口縁端部の面上に棒状浮文を2本単位で巡らせている。棒状浮文上には横方向に刺突されているが、その方法は2本単位を一度で横方向に刺突するものであり、先述の193と手法的に類似する。頸部には凸帯が巡らされ、その上に綾杉文が施されている。675は口縁部が大きく開き、端部に面を持つ。面上には棒状浮文をやはり2本単位で巡らせているものと思われる。棒状浮文上には櫛歯状の工具で横方向に刺突されている。

676は体部上面に櫛描文が施されている。おそらく二重口縁を持つものである。677は外面がハケメ・ヘラケズリされている粗雑な調整のものである。内面には強い板ナデが見られる。678は底部外面に木葉痕が付着している。

甕はS字状口縁台付甕（679～686）のみで、C類に相当する。686の体部底には砂粒が付着している。

この土器群は、全体として元屋敷式に並行するものであろう。

（川崎）

### c 古墳時代後期の遺物

堅穴住居SH70出土土器（687～690） この遺構出土遺物のなかで図示できたのはいずれも須恵器であるが、少量の土師器も伴っている。

687～689は須恵器杯蓋である。天井部のヘラケズリ範囲が広いもの（687）と比較的狭いもの（689）とがある。690は須恵器杯身である。これらの須恵器は田辺編年のTK47～MT15型式あたりに並行するものであろう。

堅穴住居SH98出土土器（691～694） 須恵器と土師器とがある。

691は須恵器杯身で天井部が平坦となる。田辺編年のTK10型式あたりに並行か。

692～694はいずれも台付甕で、S字状口縁をなしていたものの系統に属する。口縁部外面には屈曲部が消失し、口縁部内面の強いヨコナデが往時の形態

を残している。口縁端部は凹線状の窪みを持つ面をなしているが、これは往時の口縁端部に見られた強いヨコナデによる窪みが強調されたものである。外面は羽状のハケメをなし、693ではその境目付近に横方向の施文を意識した？ナデがある。

溝 S D99・100出土土器 (695～697) 696・687  
は S D99、695は S D99か S D100か特定できない。  
695は土師器鉢で、内面に斜放射状のハケメを施す。  
696は古墳時代前期に相当する椀形高杯の杯部と考えられ、混入であろう。697は台付甕の脚台部である。

土坑 S K102出土土器 (698～700) 須恵器・  
土師器がある。

698は須恵器杯身で、田辺編年のT K43型式に相当する。図示していないが、須恵器ではこの他に横瓶がある。

699・700は土師器で、699は台付椀の脚台部、700  
は小形の甕である。  
(伊藤)

#### d 平安時代以降の遺物

井戸 S E75出土土器 (701～703) 701は瓦器  
椀である。内外面ともヘラミガキされるている。小  
片につき、産地など不明。702は灰釉陶器で皿かと  
思われる。703は陶器椀で、藤澤編年の第5型式に  
相当。したがって、701・702は混入かと考えられる。  
(伊藤)

### 7 試掘調査ほか出土遺物

今年度の調査区内には含まれなかった試掘坑など  
から出土した遺物を紹介する。

試掘坑13出土土器 (704) 次年度においてB  
1区として調査される部分に相当する試掘坑である。  
近世の染付皿 (704) が出土している。

試掘坑28出土土器 (705) 次年度においてB 5  
区として調査される部分に相当する試掘坑。705は  
須恵器の杯蓋で、都城編年による平城Iに相当しよう。

試掘坑23出土土器 (706) 次年度においてB  
4区として調査される部分に相当する試掘坑。706  
は土師器の小形の壺である。古墳時代前期に相当。

試掘坑30出土土器 (707～710) 次年度におい  
てB 6区として調査される部分に相当する試掘坑。

707は土師器皿、708は瓦器椀、709は陶器小皿、710  
は陶器碗である。いずれも12世紀中葉頃のものである。

試掘坑31出土土器 (711・712) 次年度におい  
てB 7区として調査される部分に相当する試掘坑。  
710はロクロ土師器小皿、712は陶器碗で、いずれも  
12世紀後葉頃に相当する。

試掘坑33出土土器 (713～716) 次年度におい  
てB 7区として調査される部分に相当する試掘坑。  
713は瓦器小皿、714は瓦器碗、715はロクロ土師器  
小皿、716は白磁碗である。いずれも12世紀中葉前  
後のものであろう。

試掘坑34出土土器 (717～726) 次年度におい  
てB 7区として調査される部分に相当する試掘坑。  
717～719は土師器で広義の「て」の字口縁小皿。  
720は陶器小皿。721～723は土師器小皿。724・725  
は土師器皿。726は陶器碗。概ね12世紀前葉～中葉  
前後のものである。この試掘坑からはこの時期の土  
器がかなり多量に出土している。

試掘坑35出土土器 (727～728) 次年度におい  
てB 7区として調査される部分に相当する試掘坑。  
727は緑釉陶器で近江産のものと思われる。728は志  
摩式製塩土器。

試掘調査時出土の土器 (729～734) 試掘調査  
時に出土した出土地不明の土器である。729～732は  
弥生時代末期～古墳時代前期初頭の土器。729は壺  
で、受口気味となる口縁部で外面に櫛描の刺突文を  
持つ。730は受口状の口縁部を持つ。731は高杯で、  
内外面に縦方向を基調としたヘラミガキを施す。  
732は壺の体部片で、櫛描横線文の間に同一工具に  
よると思われる刻目文を持つ。733は土師器杯で、  
奈良時代後期頃のものか。734は陶器碗で鎌倉時代  
前期頃のものであろう。

字風ヶ久保出土土器 (735・736) かつて雲出  
島貫遺跡の東に隣接する字風ヶ久保地内から出土し  
た土器の寄贈を受けた。735・736はともに台付甕の  
脚台部である。古墳時代前期後半から中期にかけて  
のものである。  
(伊藤)

#### 註

(1)ここで言う「欠山式」「元屋敷式」は、山田猛氏による区分を基準とする  
(山田猛『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994)。

ただ、雲出川流域部は山城遺跡（龜山市）における動向と決して同一視はできないため、山田氏による区分を、伊勢湾沿岸地域における広義の区分と認識して用いることとする。

(2)赤塚次郎「廻間式土器」「土器・土群の形成」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1990

(3)赤塚次郎氏が「宇田型甕」とするもの（赤塚次郎「最後の台付甕」『古代』86号 1988）はS字状口縁台付甕の系譜上にあるものであり、特別にこれを「宇田型」として認識する必要性がないと考えられるので、これをD類に統くE類と呼称する。

(4)田辺昭三『須恵器大成』（1981 角川書店）

(5)古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』（1992）を参照した。

(6)以下、古瀬戸製品、瀬戸大窯製品については、藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」（『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』資料集（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 1996）および同氏「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 1986）を参照。

(7)以下、南伊勢系の土師器皿については、伊藤裕典『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1993）および伊藤『岩出地区内遺跡群破粧調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1996）に拠る。

(8)中北勢系の羽釜については、伊藤「安濃津に関する基礎検討」（『安濃津』三重県埋蔵文化財センター 1997）

(9)南伊勢系の鍋については、伊藤「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol.1 1990）および伊藤「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996）

(10)藤澤良祐「瀬戸地方の北部系山茶碗窯」（『尾呂』瀬戸市教育委員会 1990）ほか

(11)次山淳氏の分類では雨粒形列天文に相当する。（次山淳「波状文と列点文—布留形甕にみられる肩部文様の分類・系譜・分布ー」『文化財論叢II』奈良国立文化財研究所 1995）

(12)図化していないが、面単位の研磨痕跡が見られる軽石は数点出土している。また、周辺の四ツ野B遺跡・高茶屋大垣内遺跡（第3次調査）・小谷赤坂遺跡（第1次調査）でも出土しており（各調査担当者のご教示による）、堅穴住居に伴っている。

(13)前田町屋遺跡（1997年度三重県埋蔵文化財センター調査）でも、同様の断面をもつ器台が出土している。

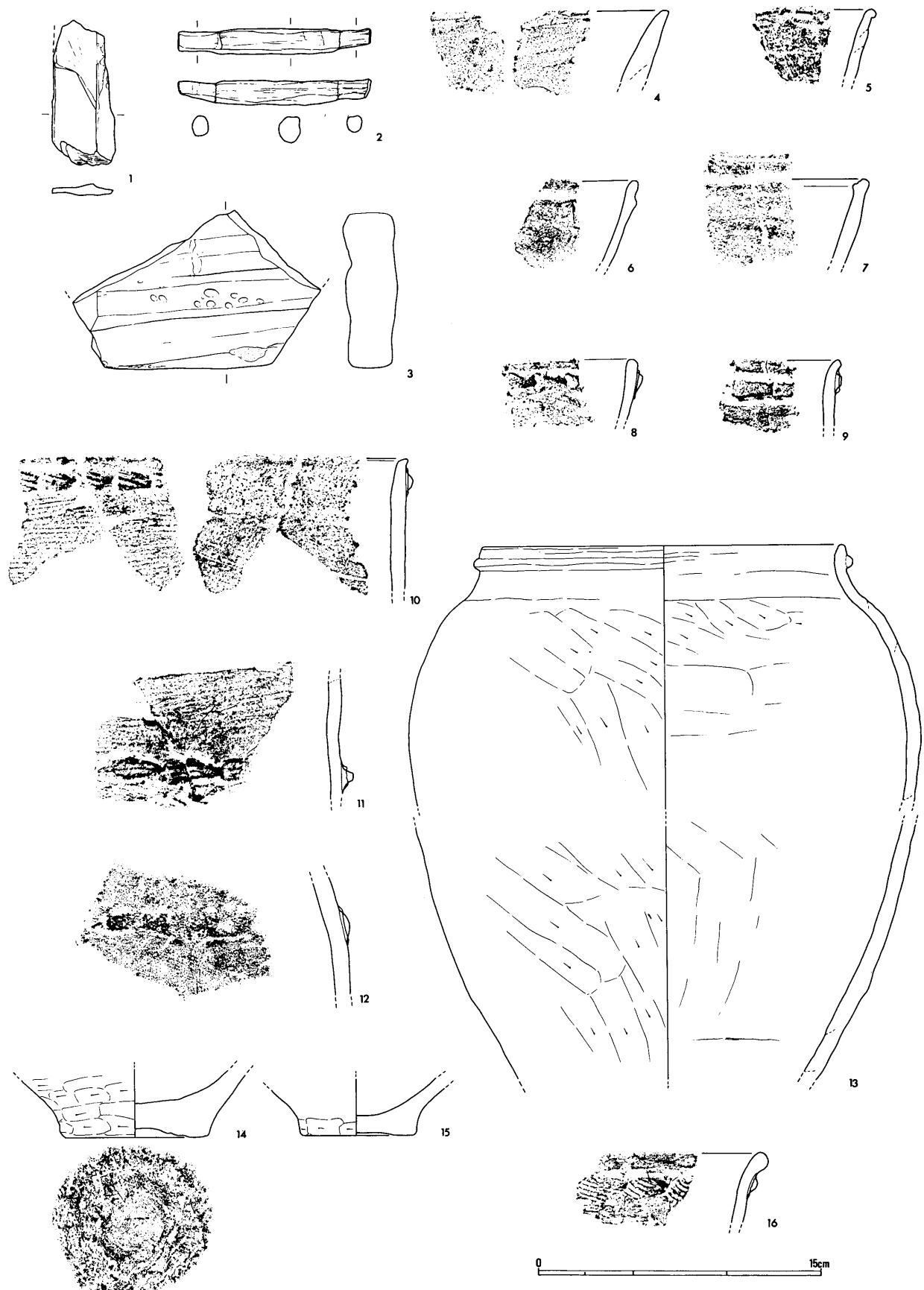
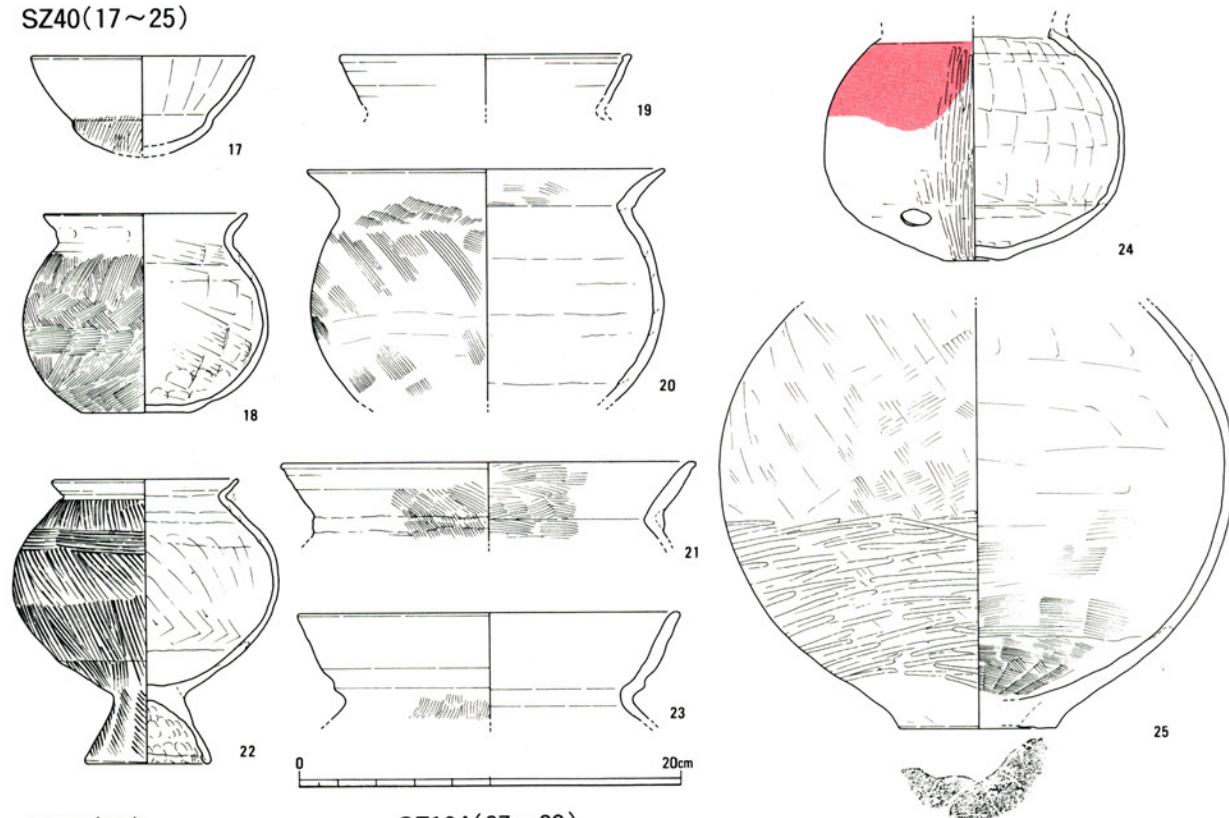
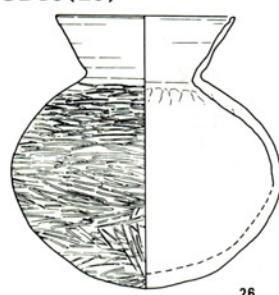


fig. 39 出土遺物実測図(1)A 1 区第4・5面 (1 : 3)

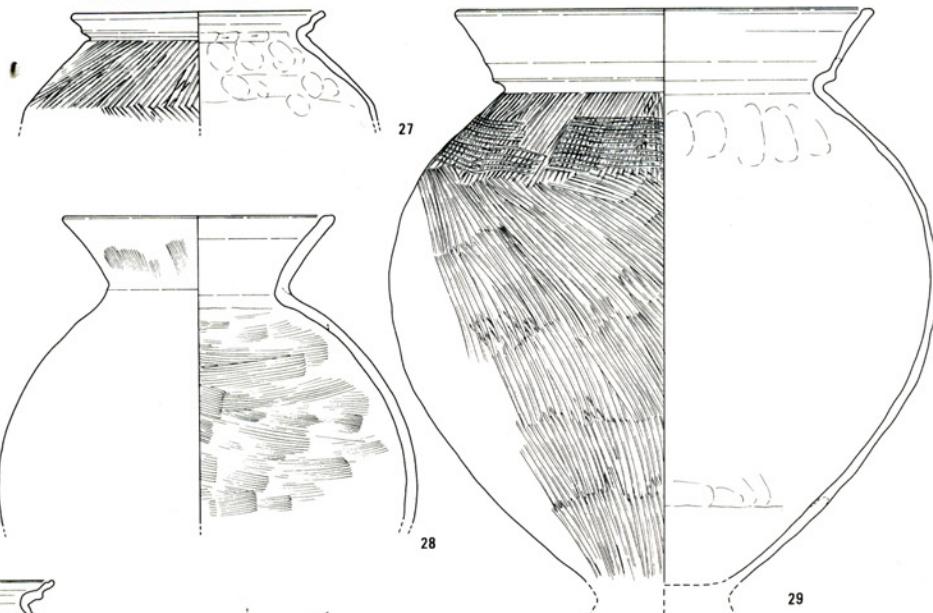
SZ40(17~25)



SD36(26)



SZ104(27~29)



SZ24(30~37)

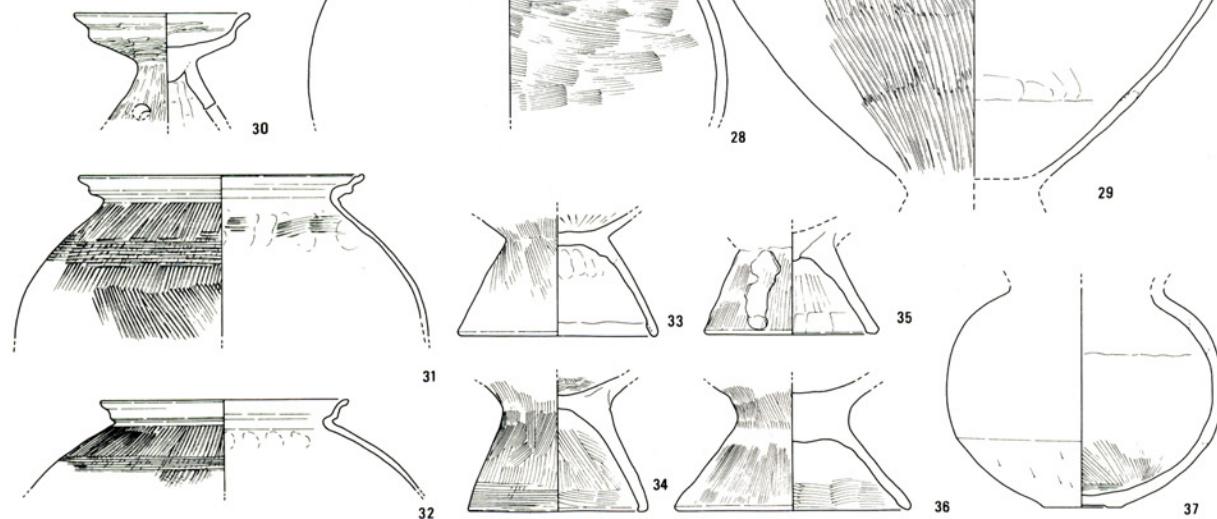


fig. 40 出土遺物実測図(2)A 1 区第3面 (1 : 4)

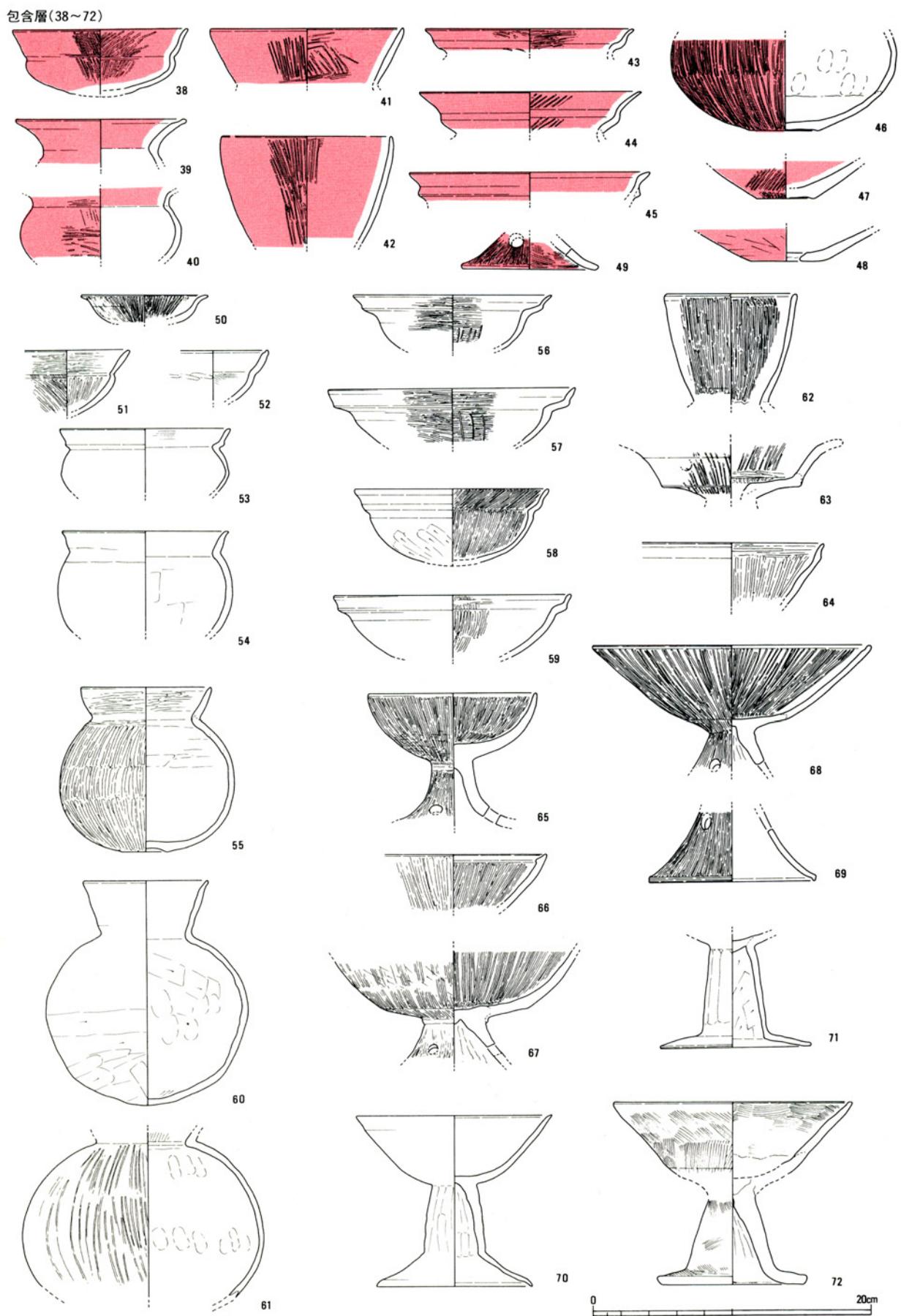


fig. 41 出土遺物実測図(3)A 1 区第3面 (1 : 4)

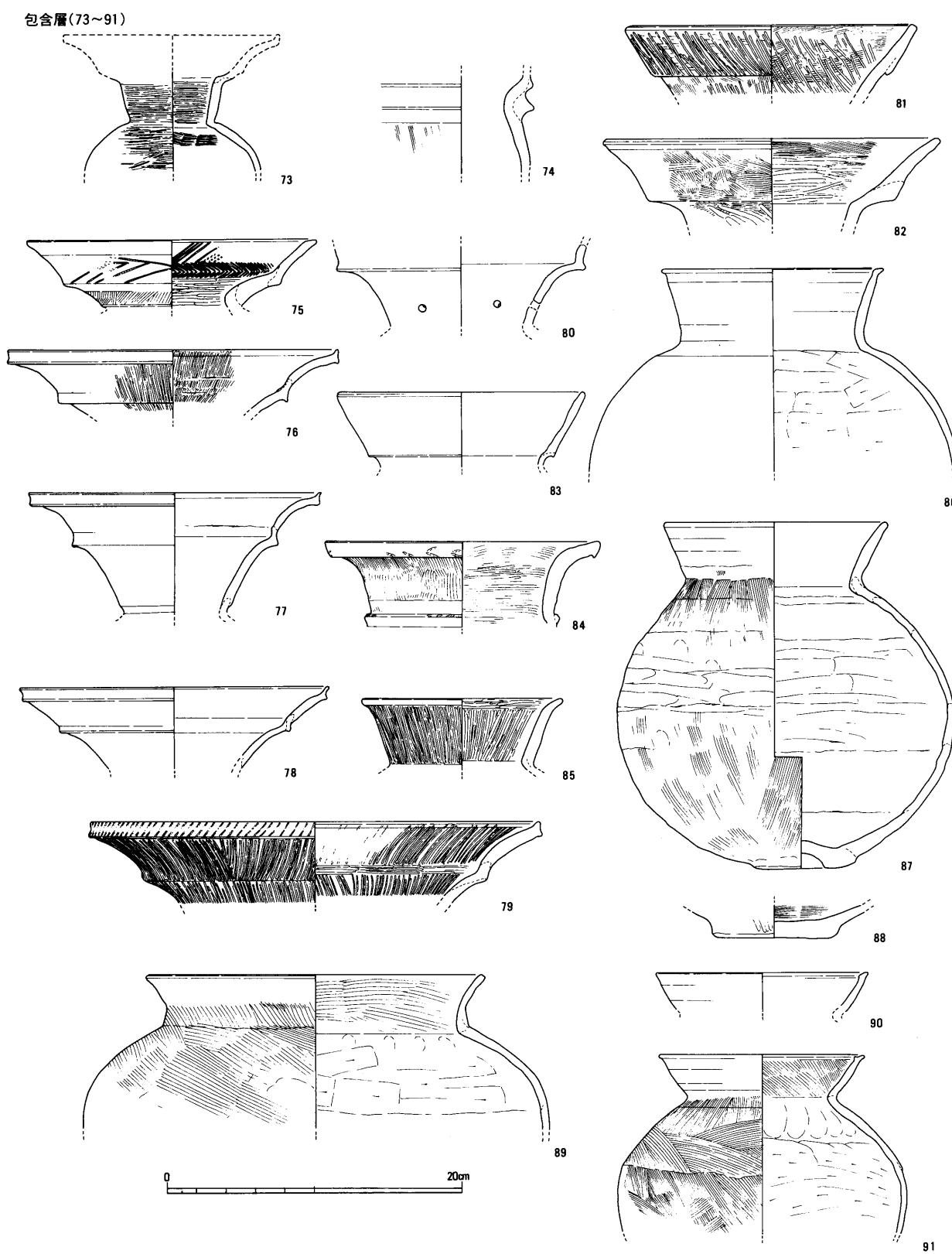


fig. 42 出土遺物実測図(4)A 1 区第3面 (1 : 4)

包含層(92~116)

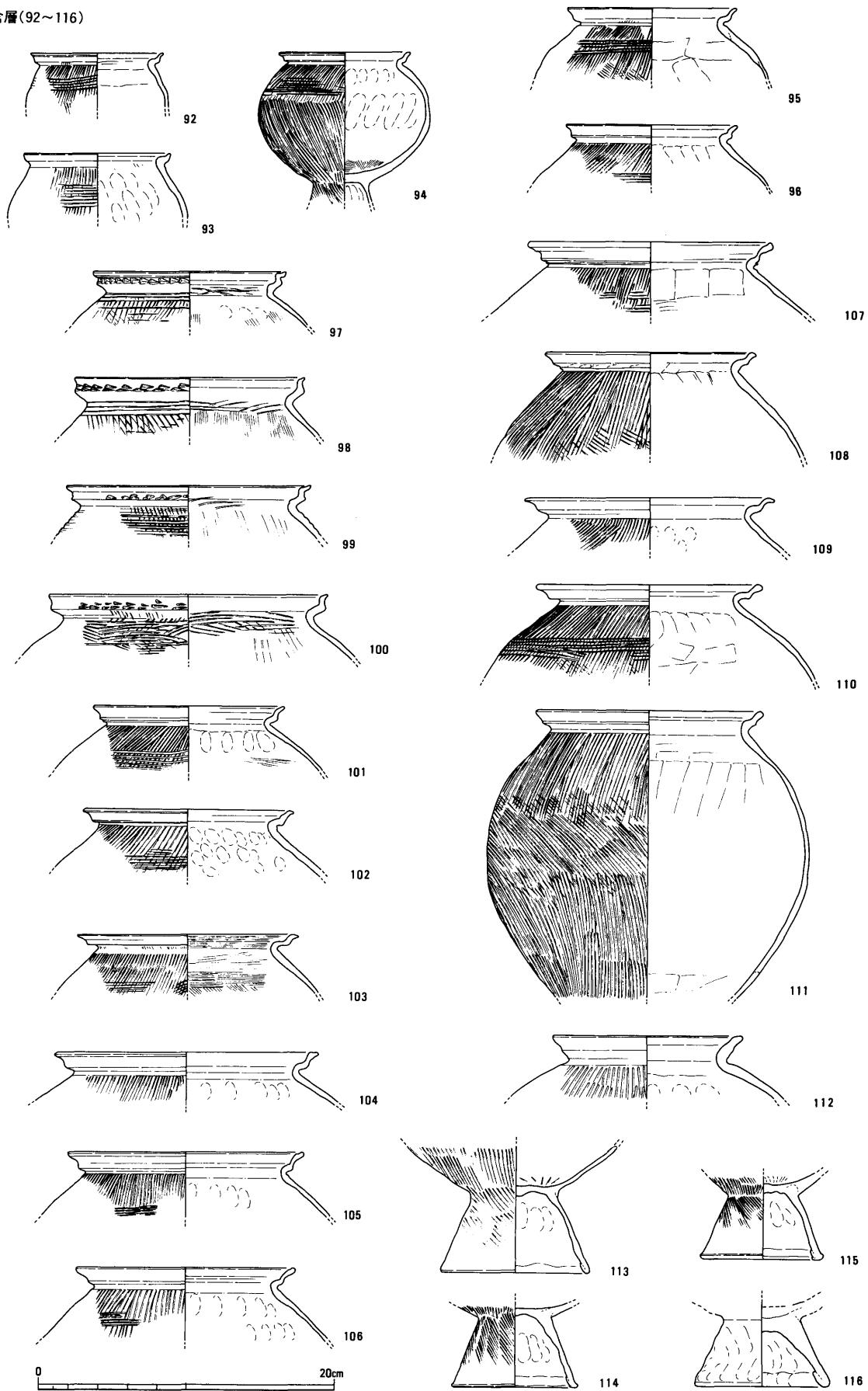
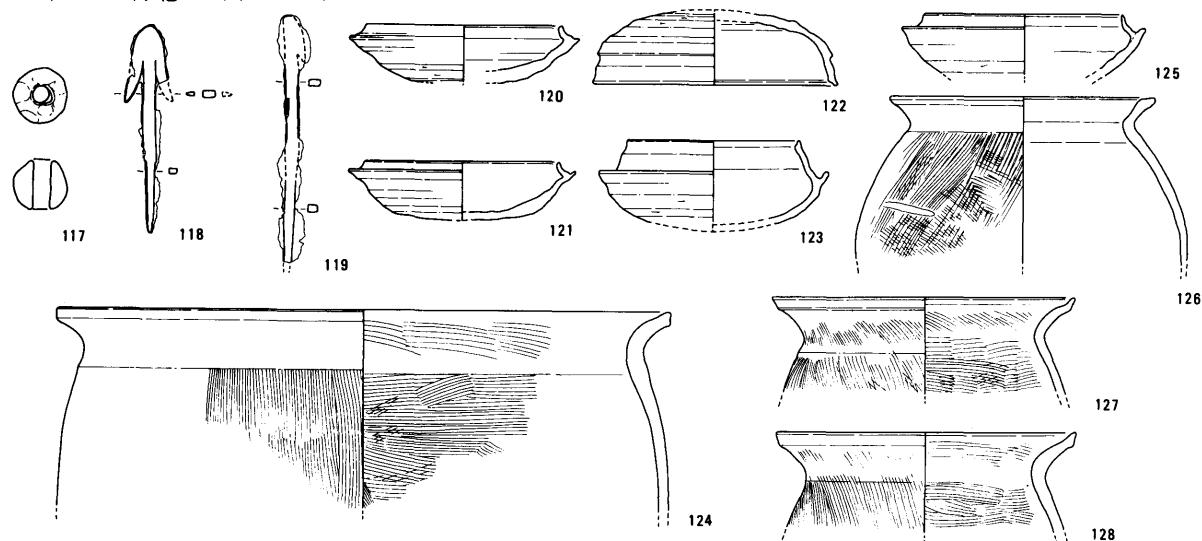
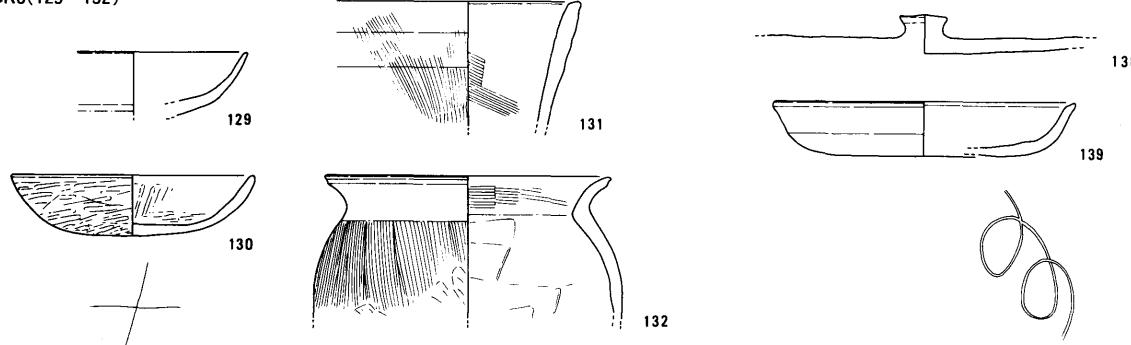


fig. 43 出土遺物実測図(5)A 1 区第 3 面 (1 : 4)

SB105(117~124)、他ピット(125~128)



SK6(129~132)



包含層(133~146)

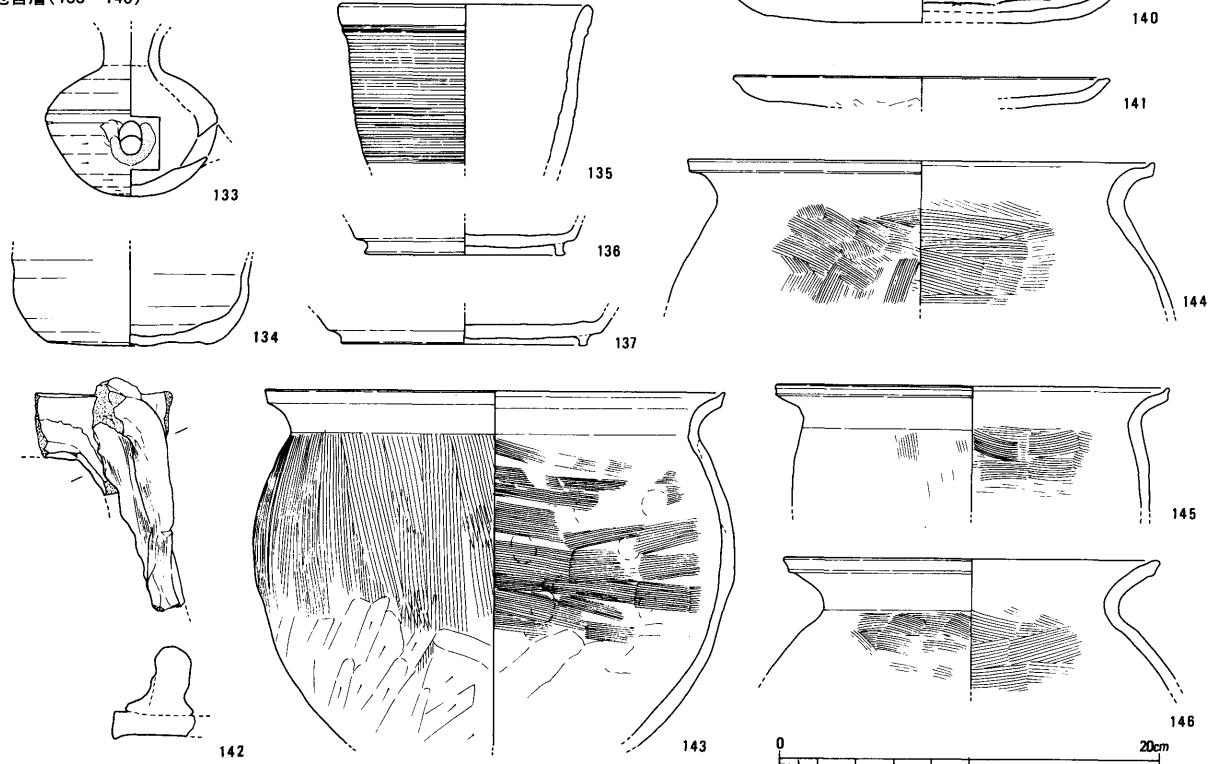


fig. 44 出土遺物実測図(6)A 1 区第 2 面 (1 : 4)

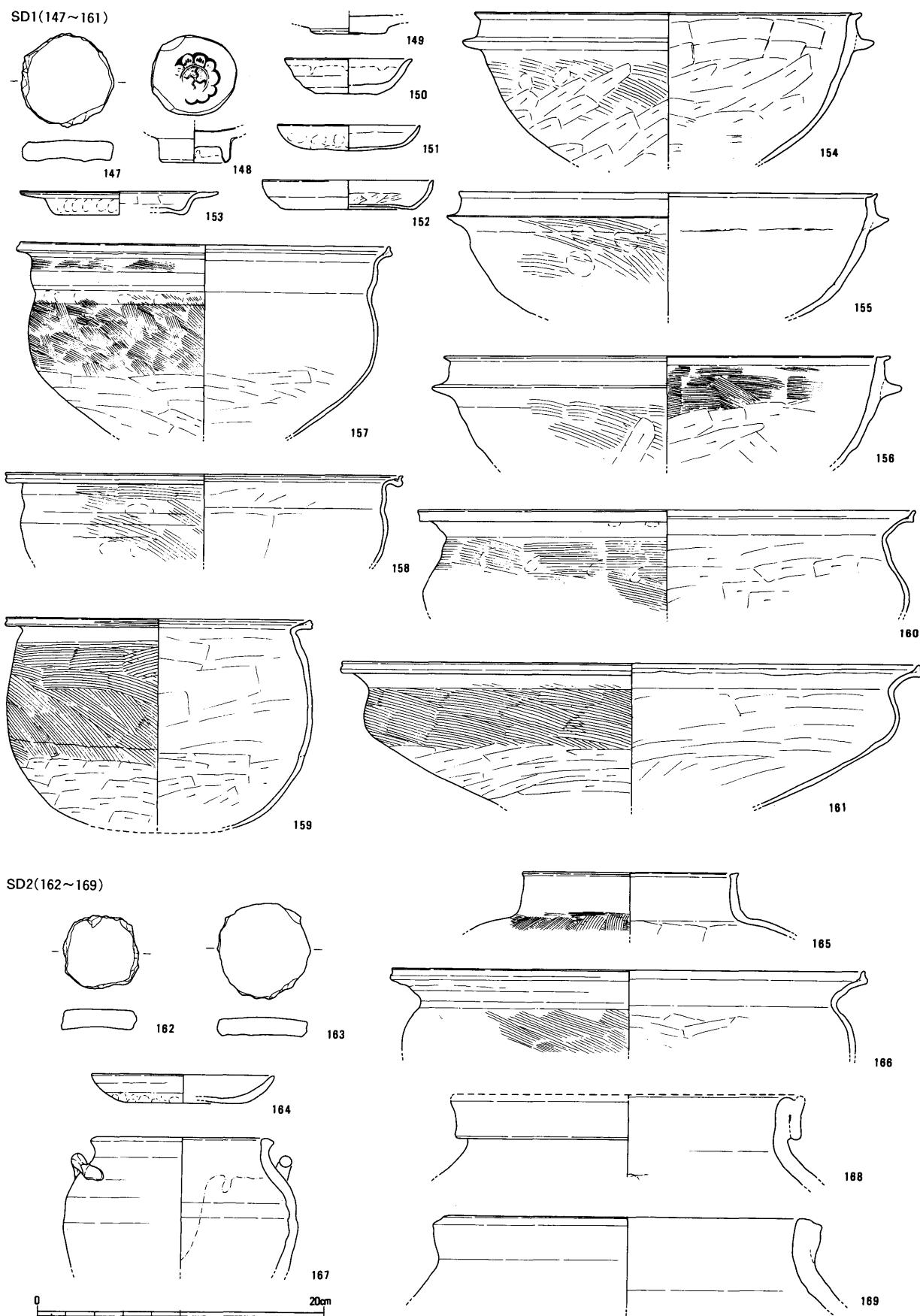
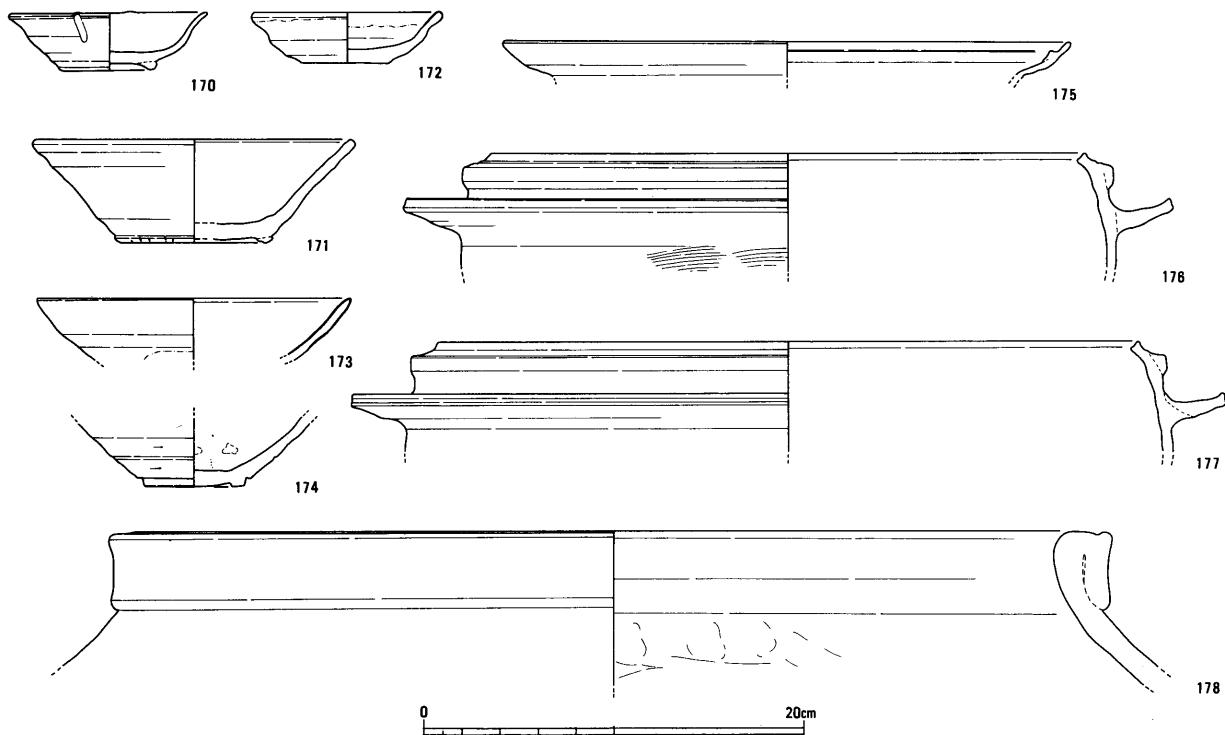
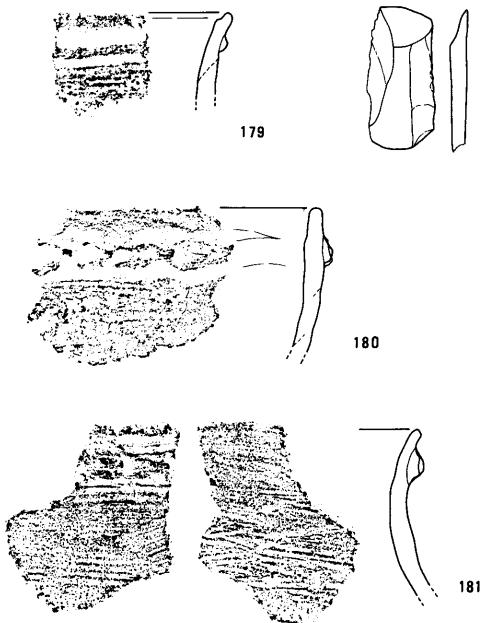


fig. 45 出土遺物実測図(7)A 1 区第 1 面 (1 : 4)

A1区包含層(170~178)



A3区包含層(179~181)



SX89(182・183)

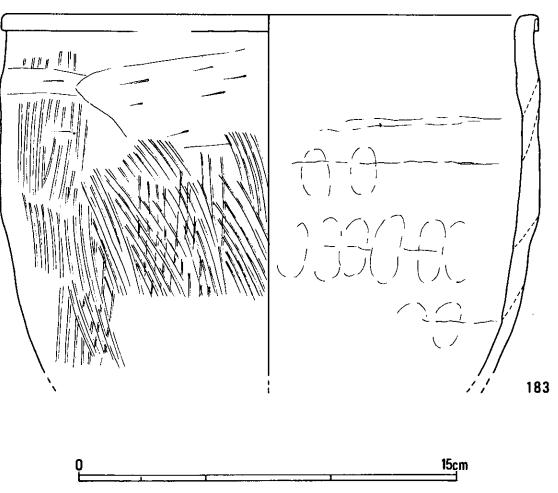


fig. 46 出土遺物実測図(8)A 1 区第 1 面・A 3 区第 4 面 (170~178は1 : 4、179~183は1 : 3)

SX88(184·185)

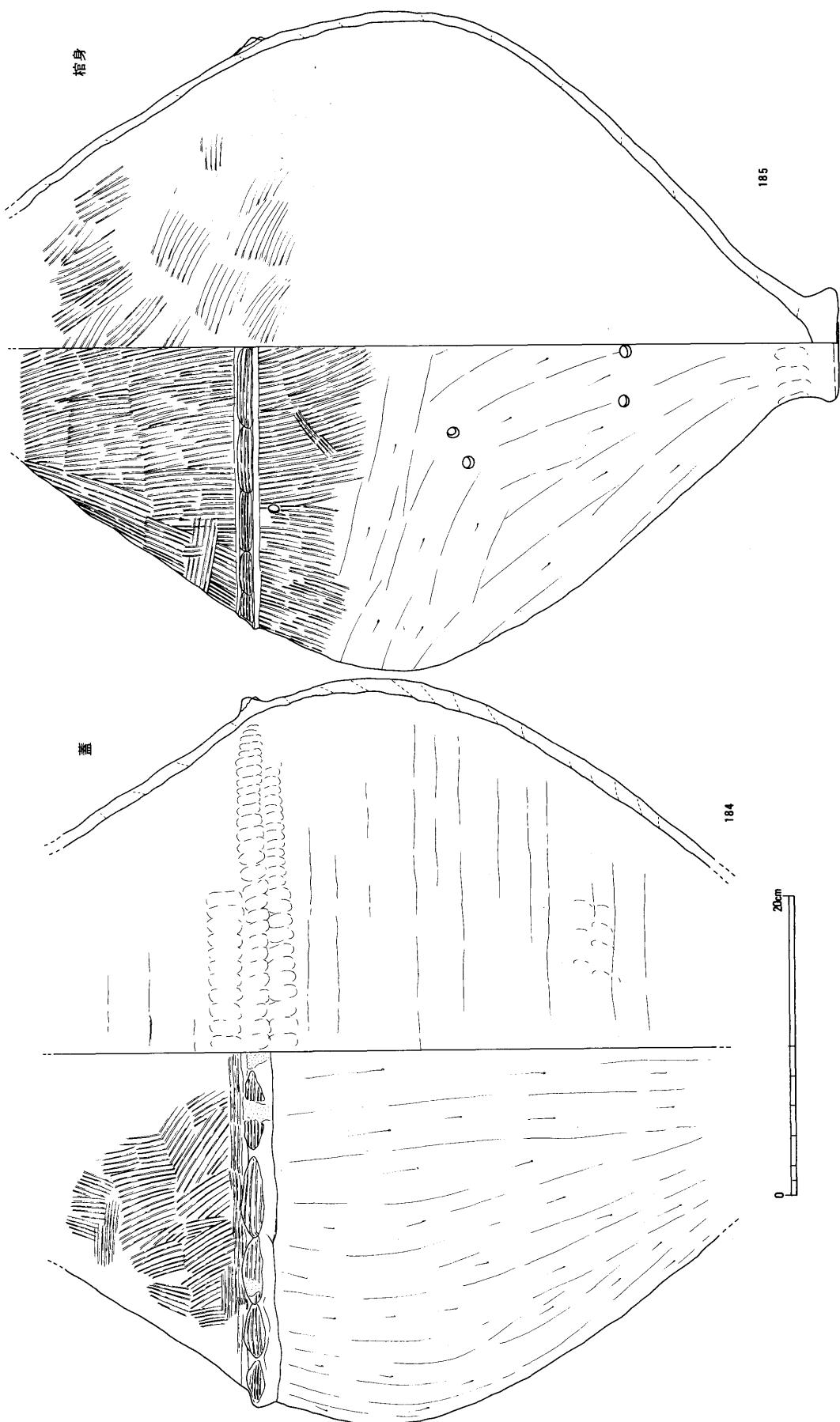


fig. 47 出土遺物実測図(9)A 3 区第4面 (SX88) (1 : 4)

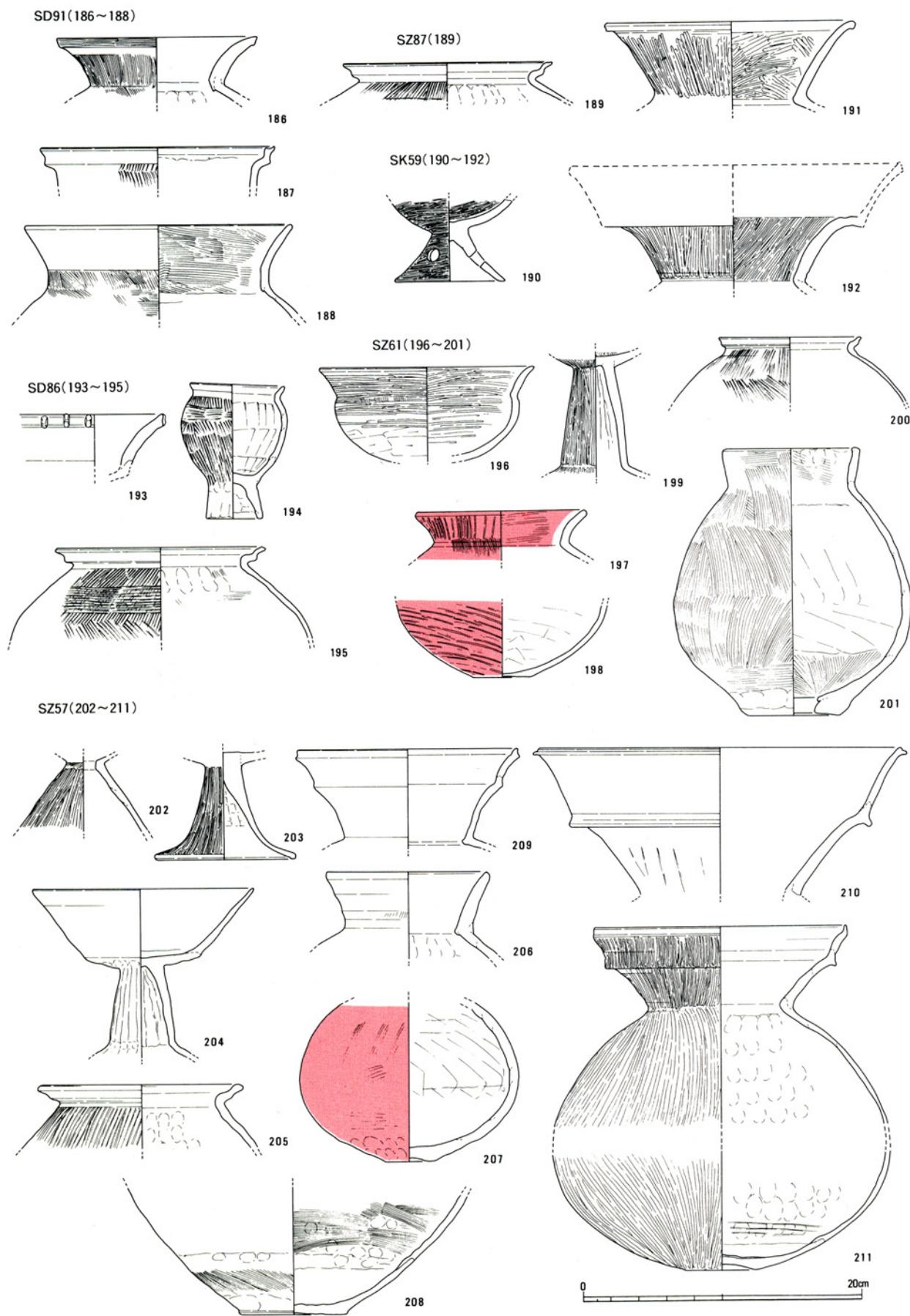


fig. 48 出土遺物実測図⑩A 3区第3面 (1 : 4)

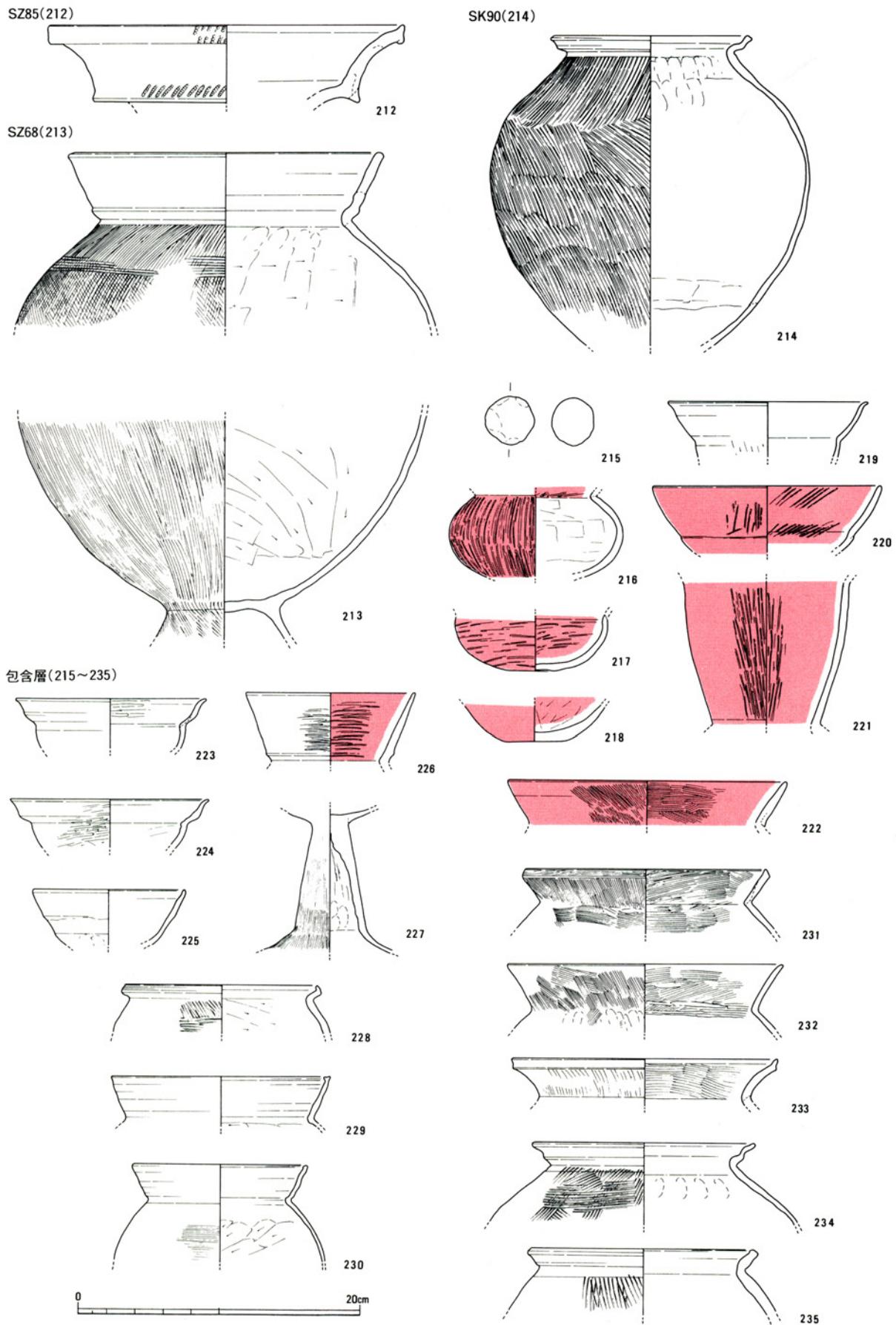
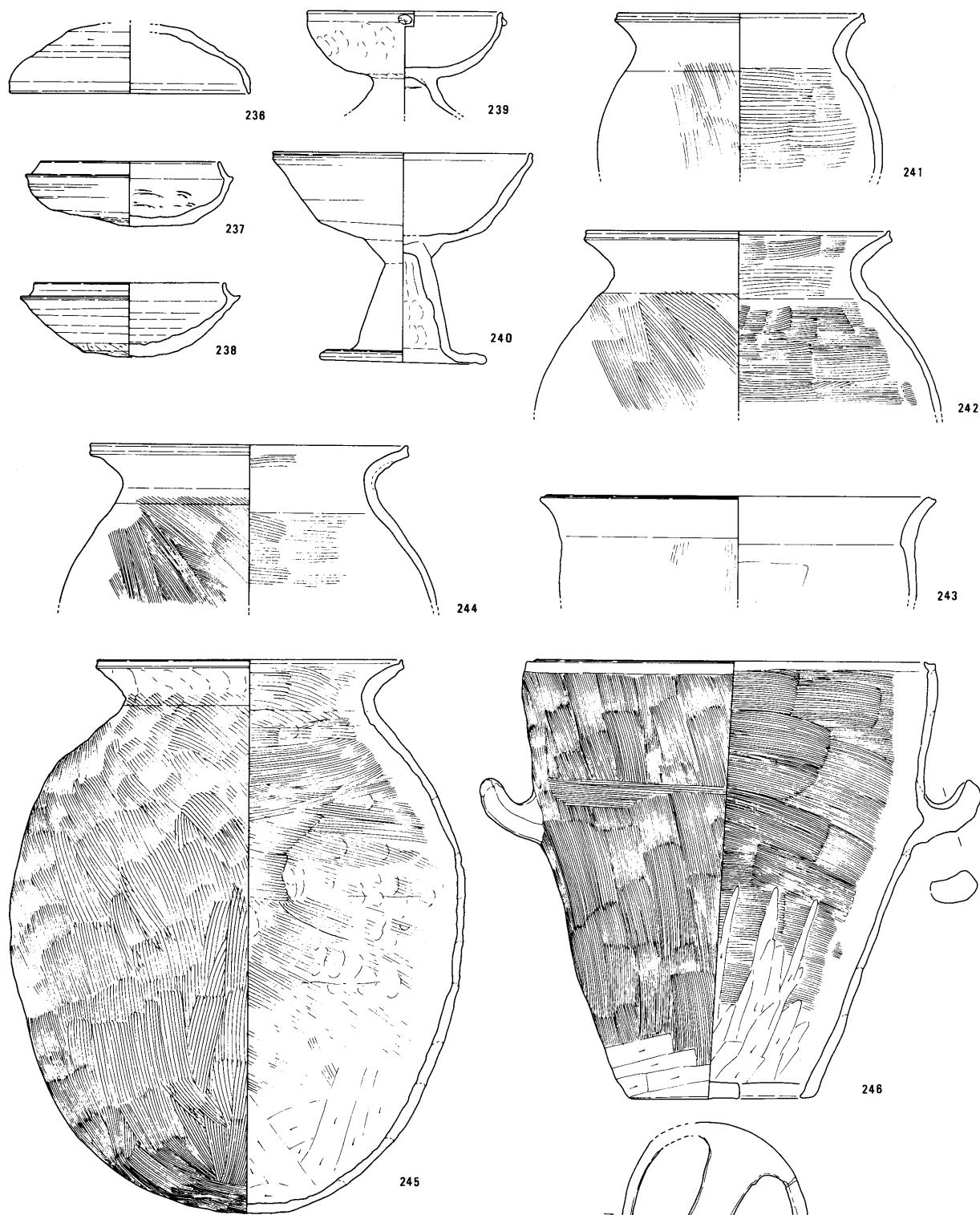


fig. 49 出土遺物実測図(1)A 3 区第3面 (1 : 4)

SH58(236~246)



包含層(247・248)

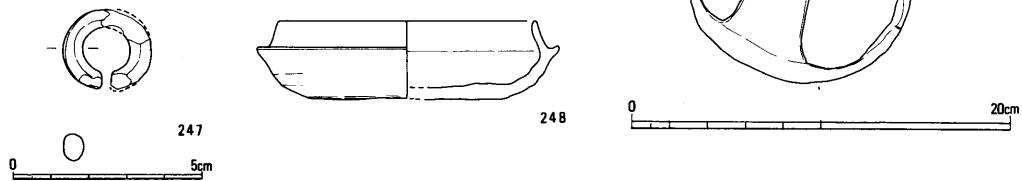


fig.50 出土遺物実測図(2)A 3 区第2面 (247は1:2、他は1:4)

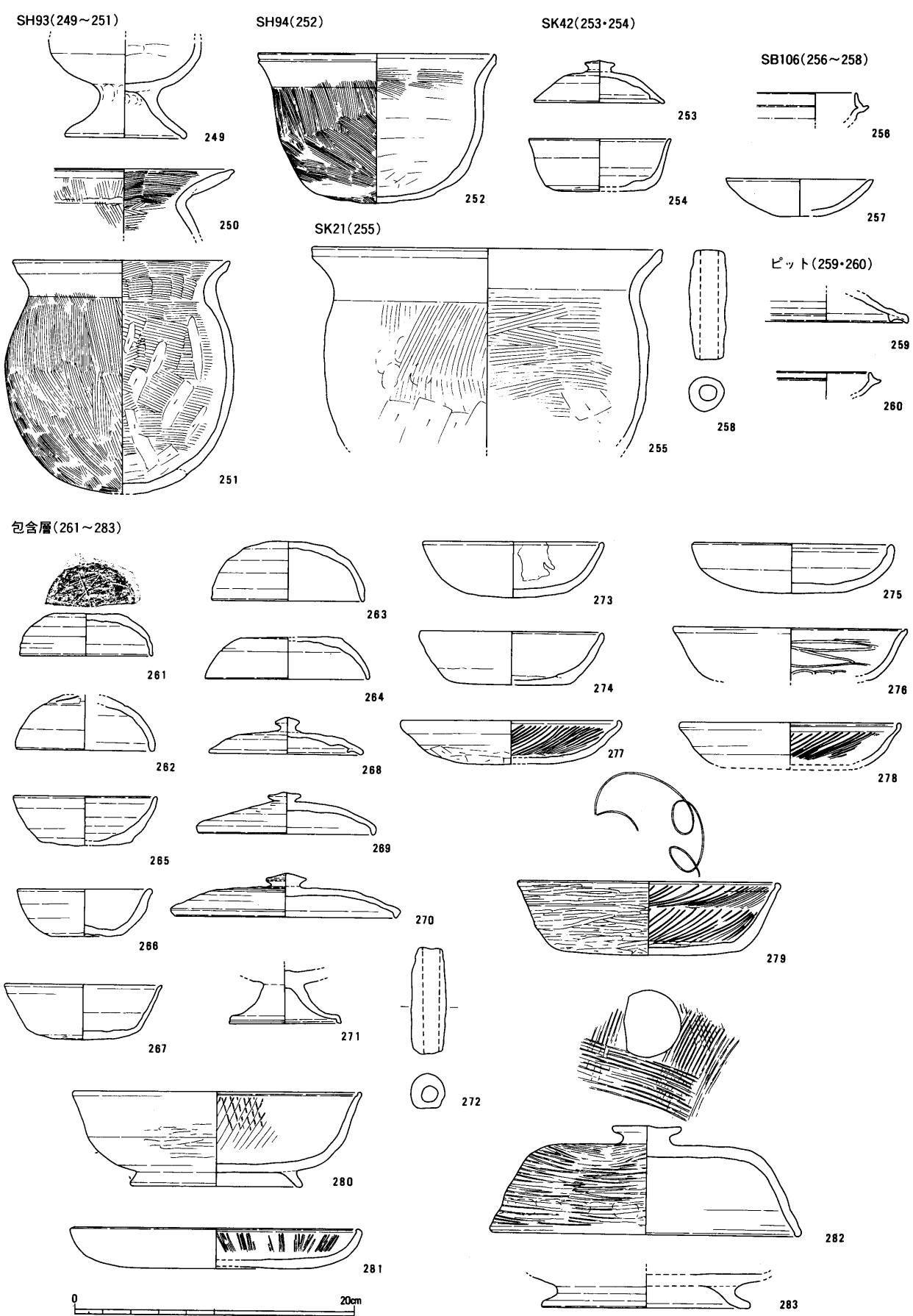
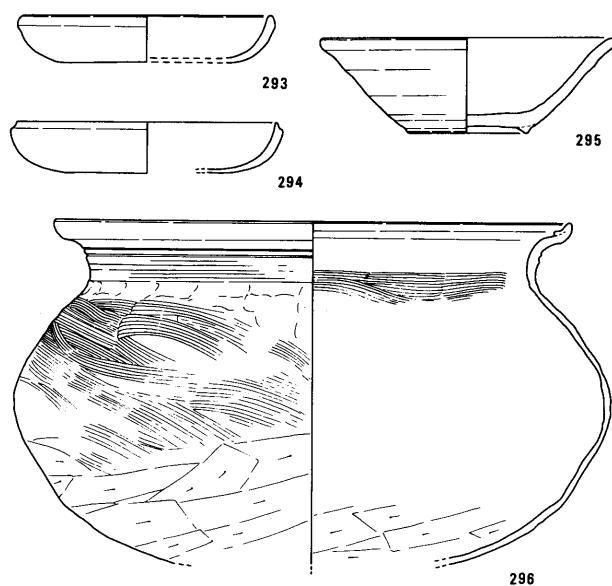


fig. 51 出土遺物実測図(3)A 3 区第 2 面 (1 : 4)

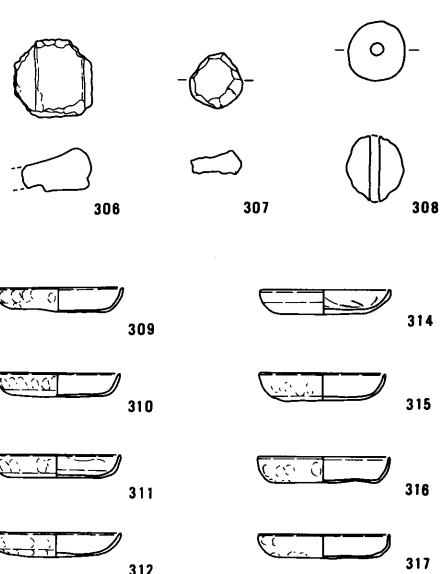


fig. 52 出土遺物実測図(1)A 3 区第 2 面 (1 : 4)

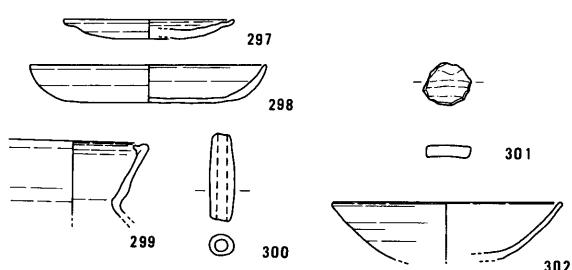
SD16(293~296)



SD9(306~326)



SK41(297~300)



SD20(301~305)

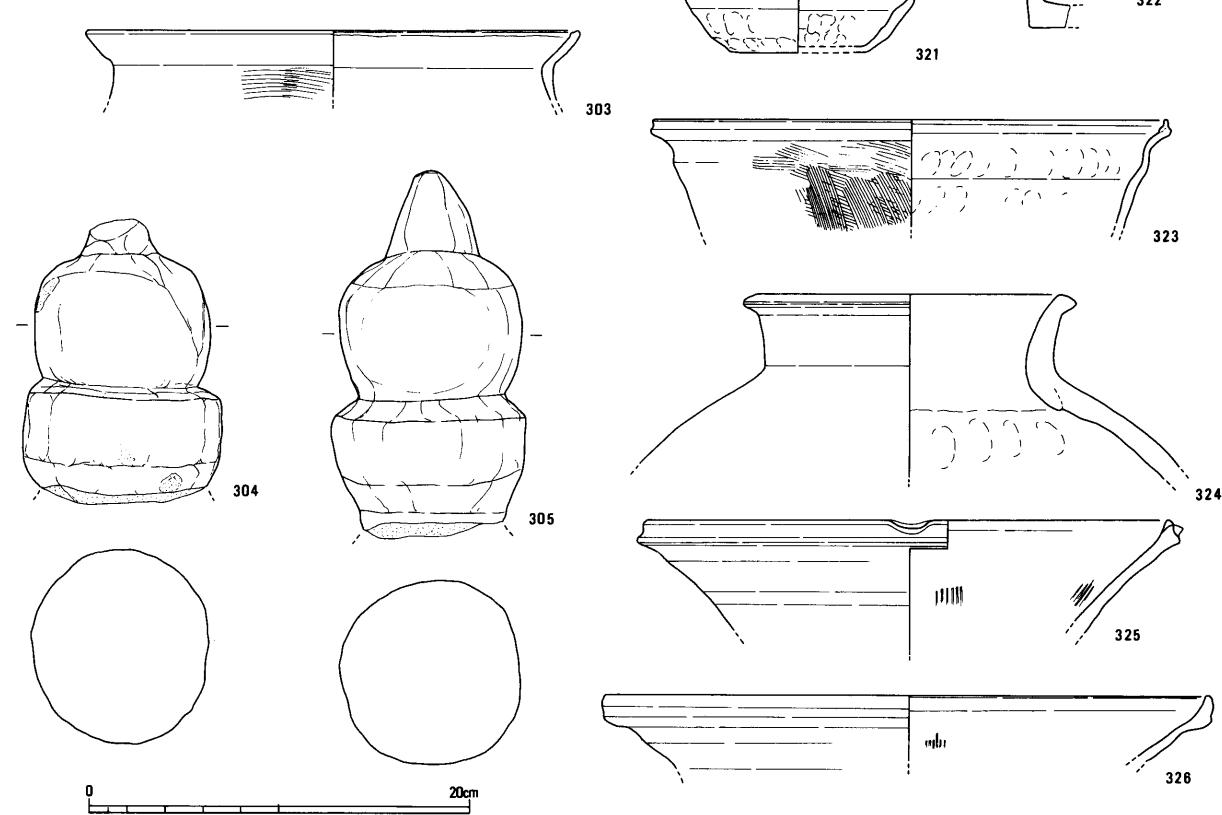


fig. 53 出土遺物実測図(5A 3区第1面 (1 : 4))

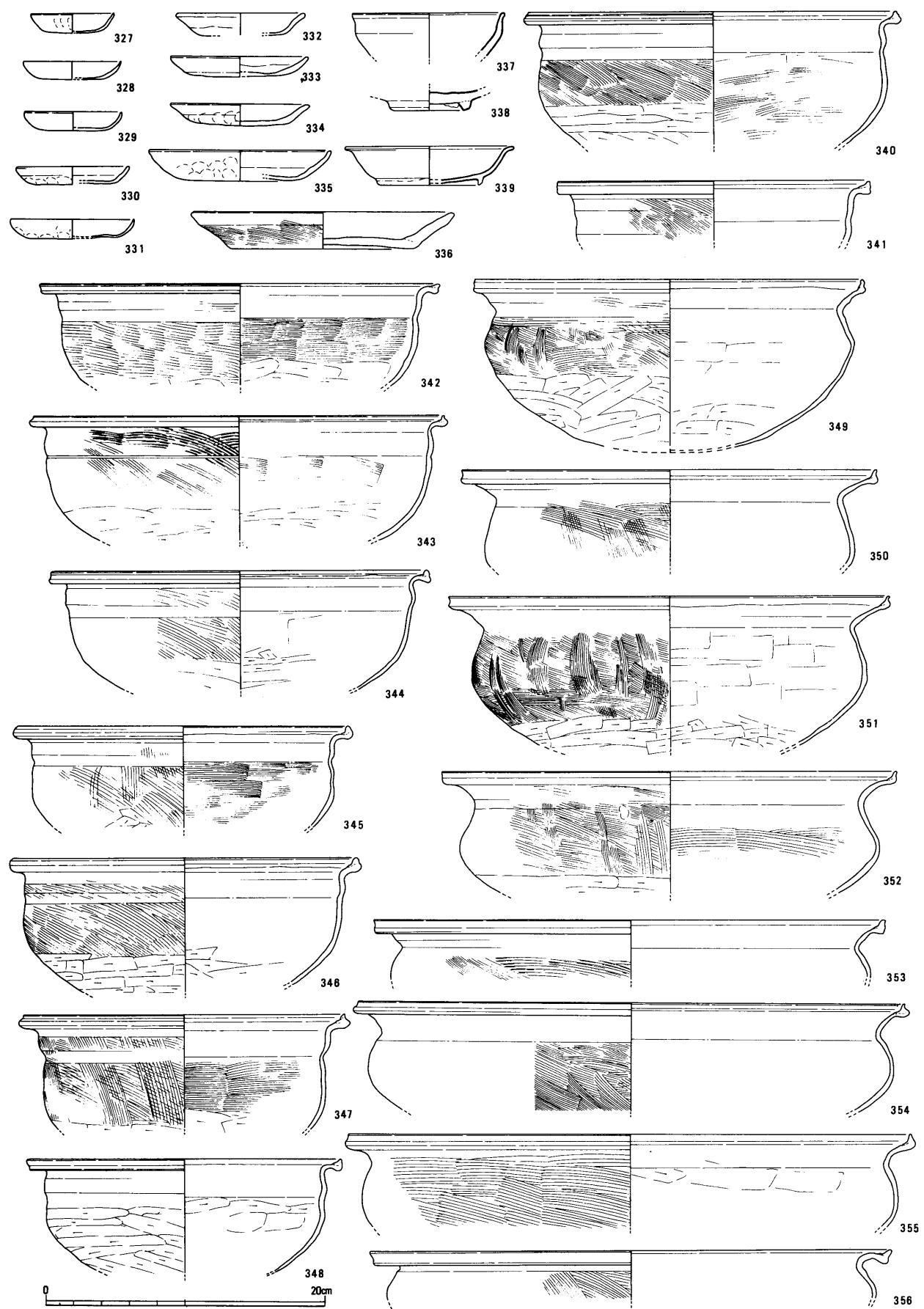


fig. 54 出土遺物実測図(16A 3区第1面 (SK17) (1 : 4)

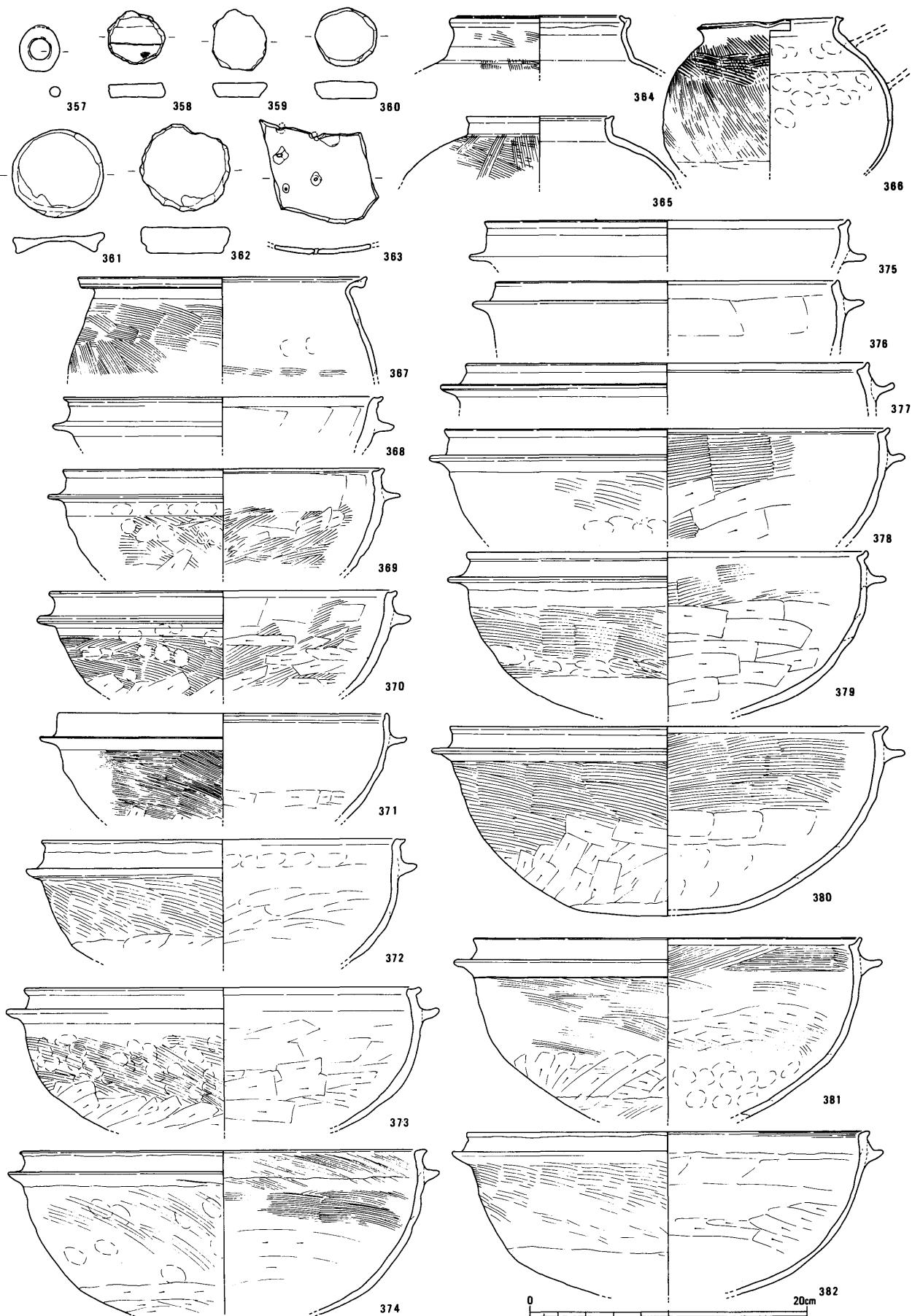


fig. 55 出土遺物実測図(1)A 3 区第 1 面 (SK17) (1 : 4)

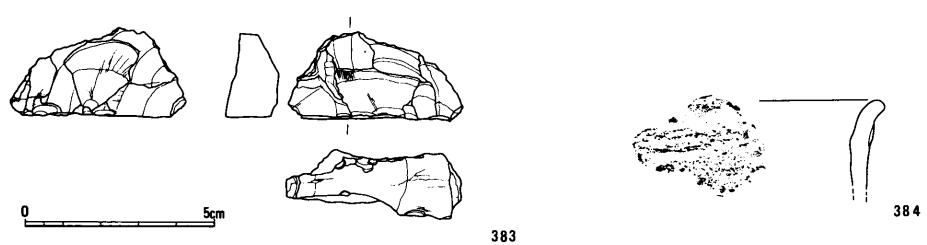


fig. 56 出土遺物実測図(8A 4 区 繩文 (383は 1 : 2、他は 1 : 3)

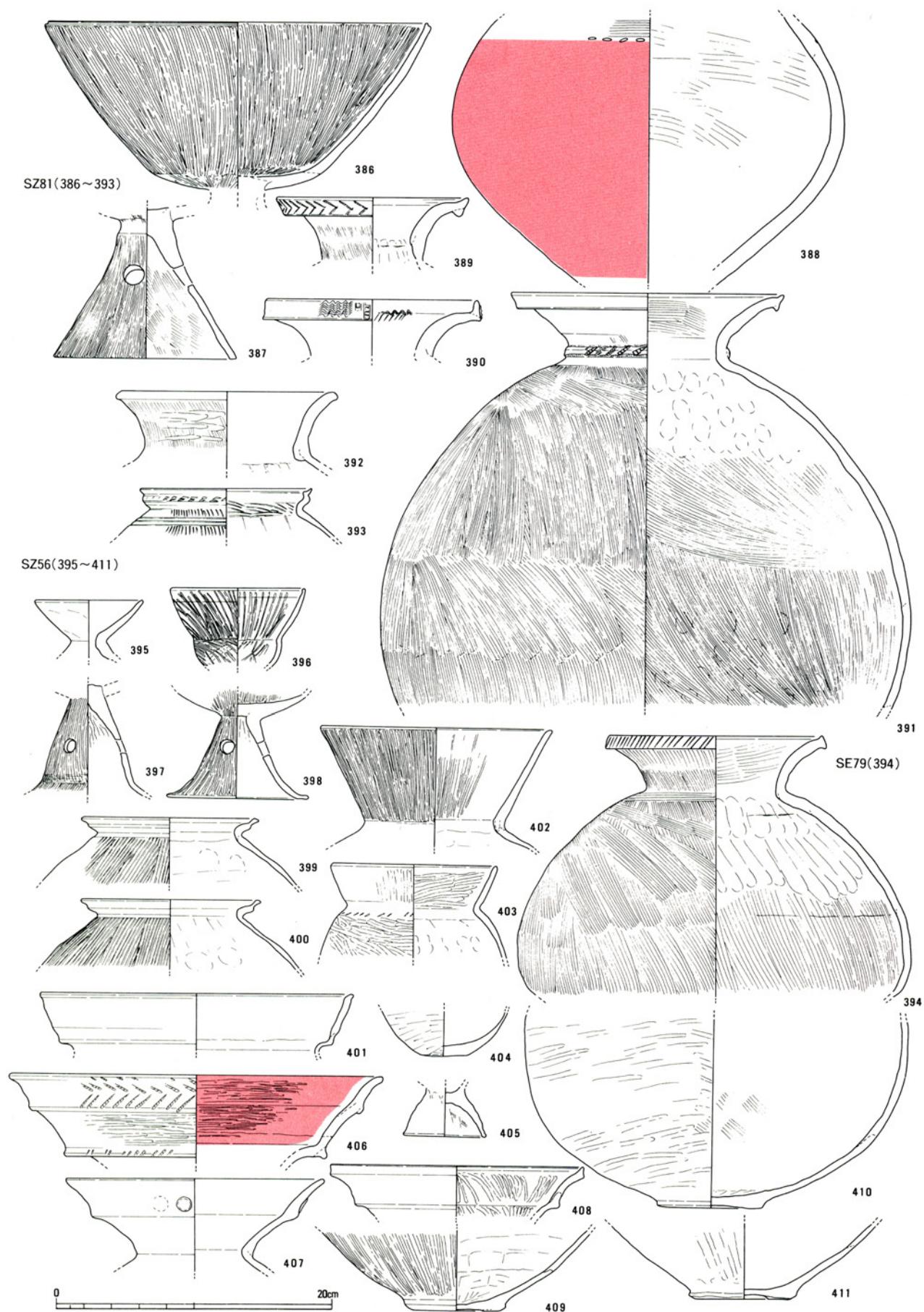


fig. 57 出土遺物実測図(19)A 4 区第3面 (1 : 4)

SD55(412~434)

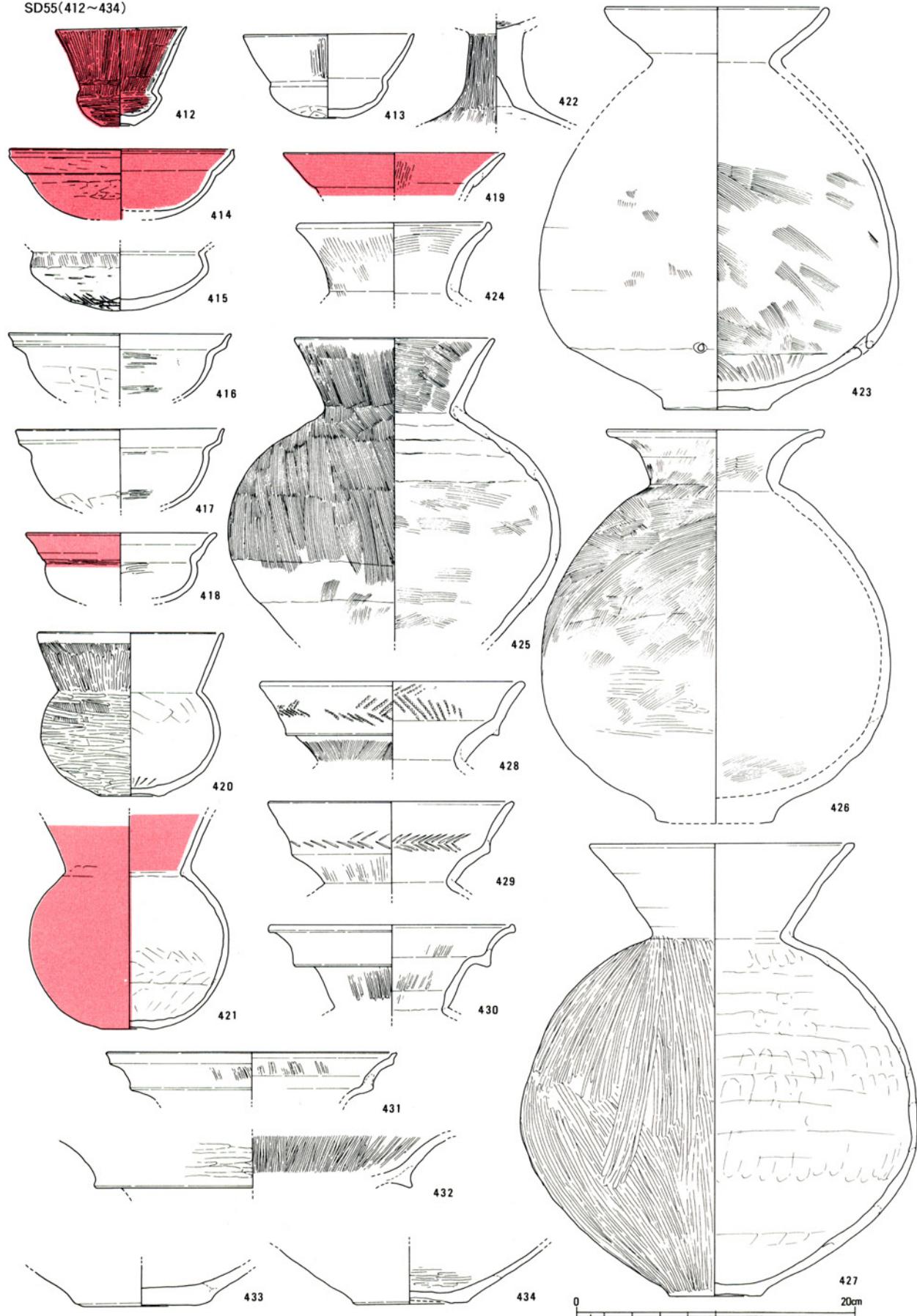
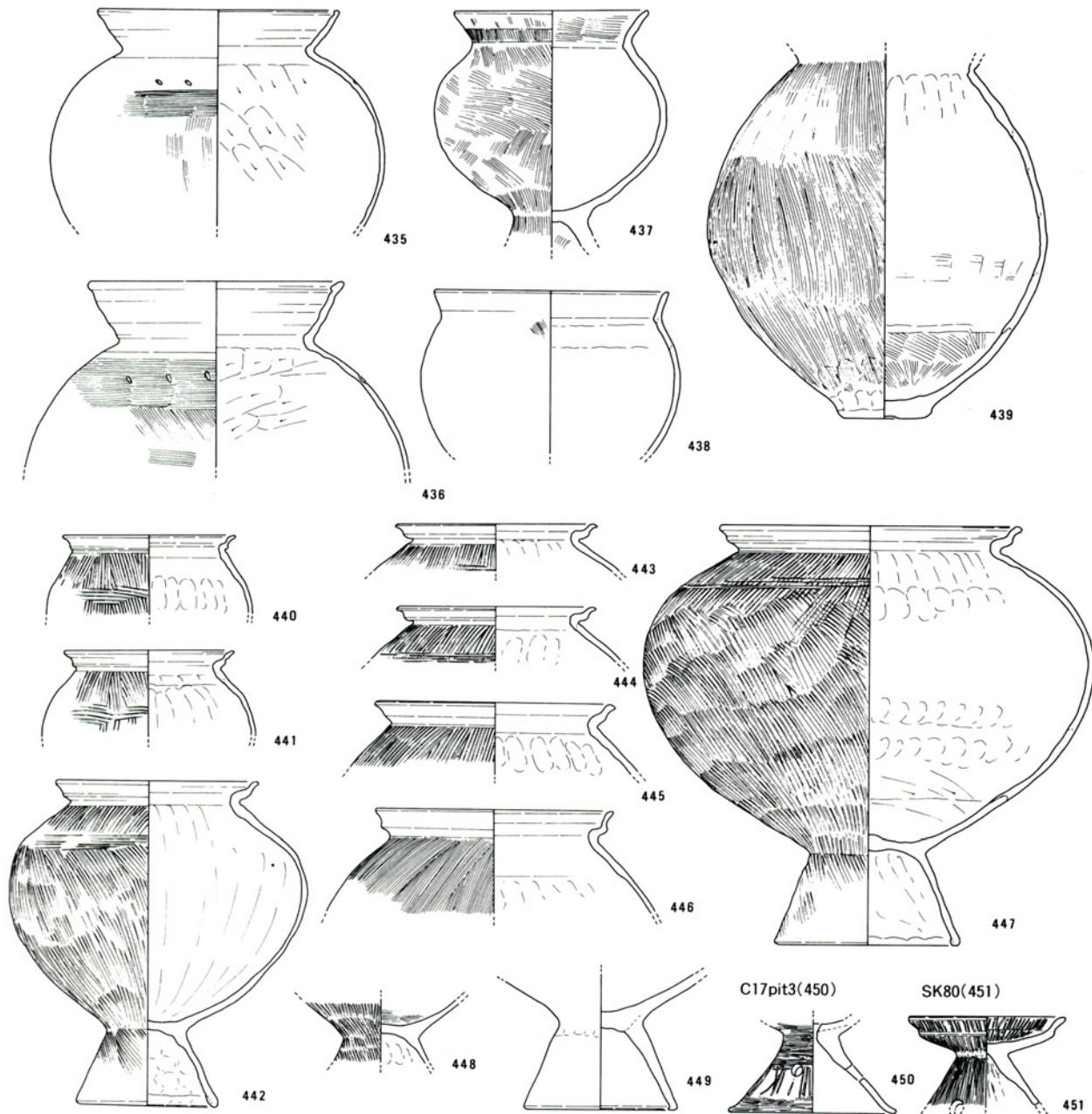


fig. 58 出土遺物実測図20A 4区第3面 (SD55) (1:4)

SD55(435~449)



SZ48(452~460)

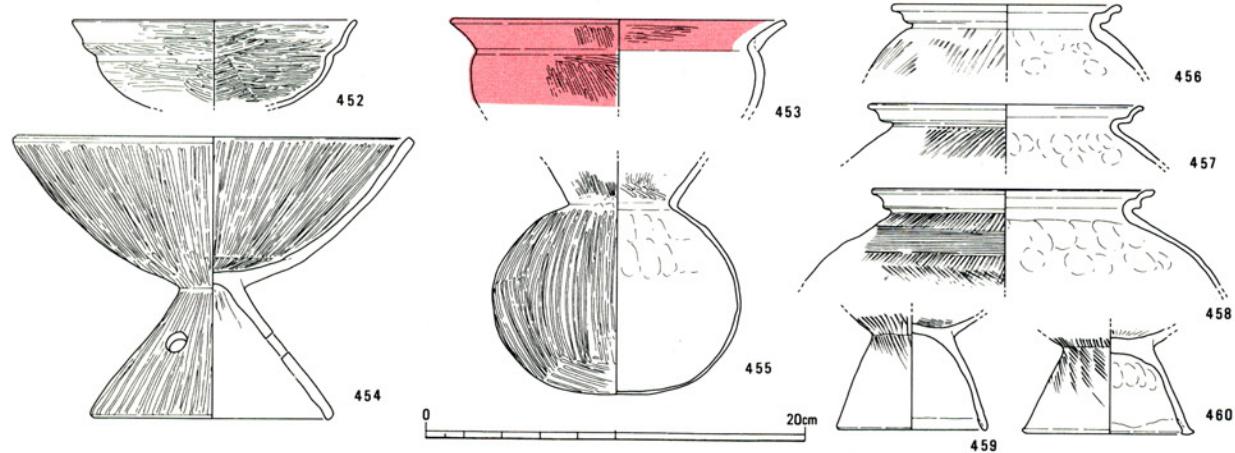


fig. 59 出土遺物実測図(2)A 4 区第3面 (1 : 4)

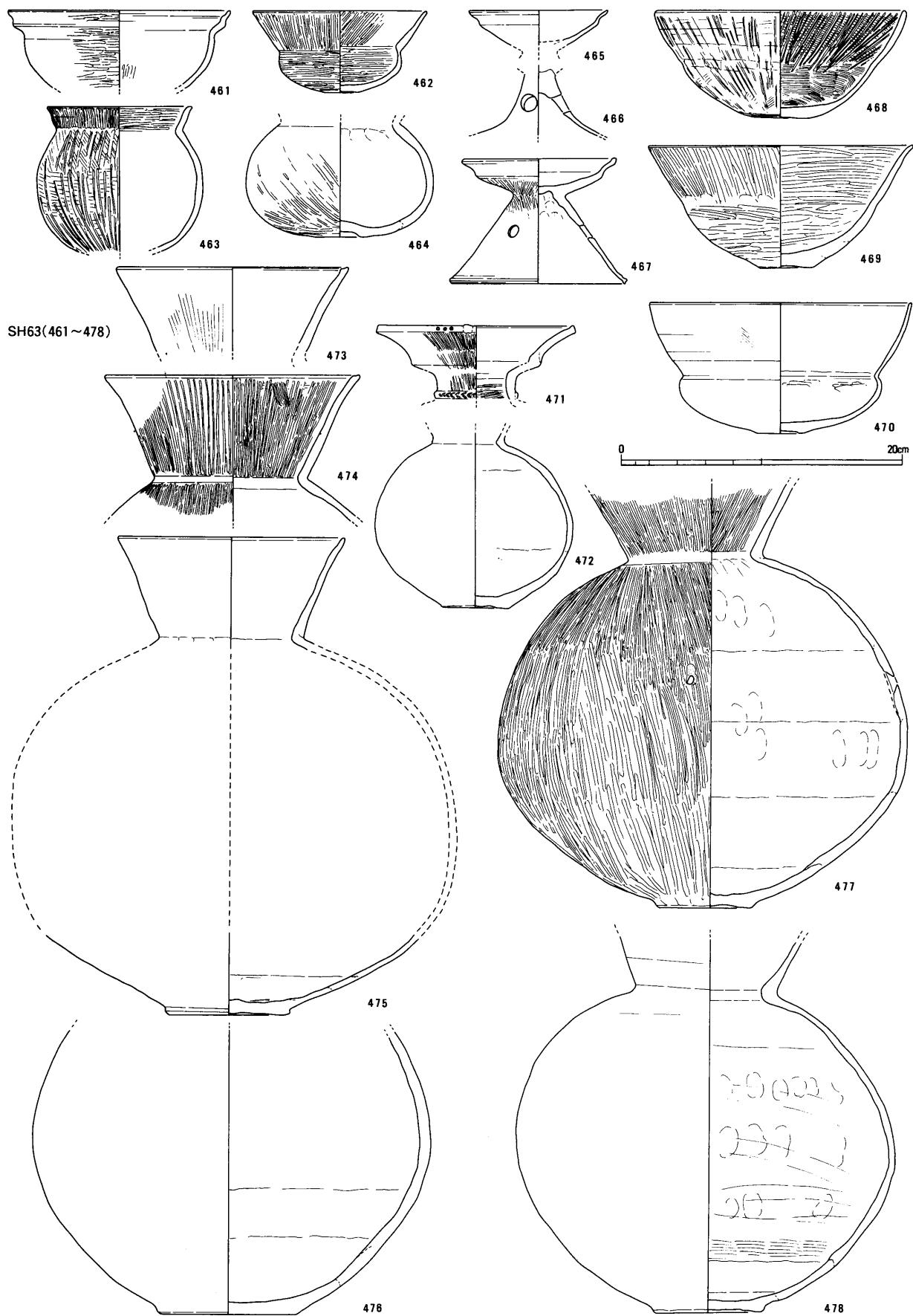


fig. 60 出土遺物実測図(2)A 4 区第3面 (S H 63) (1 : 4)

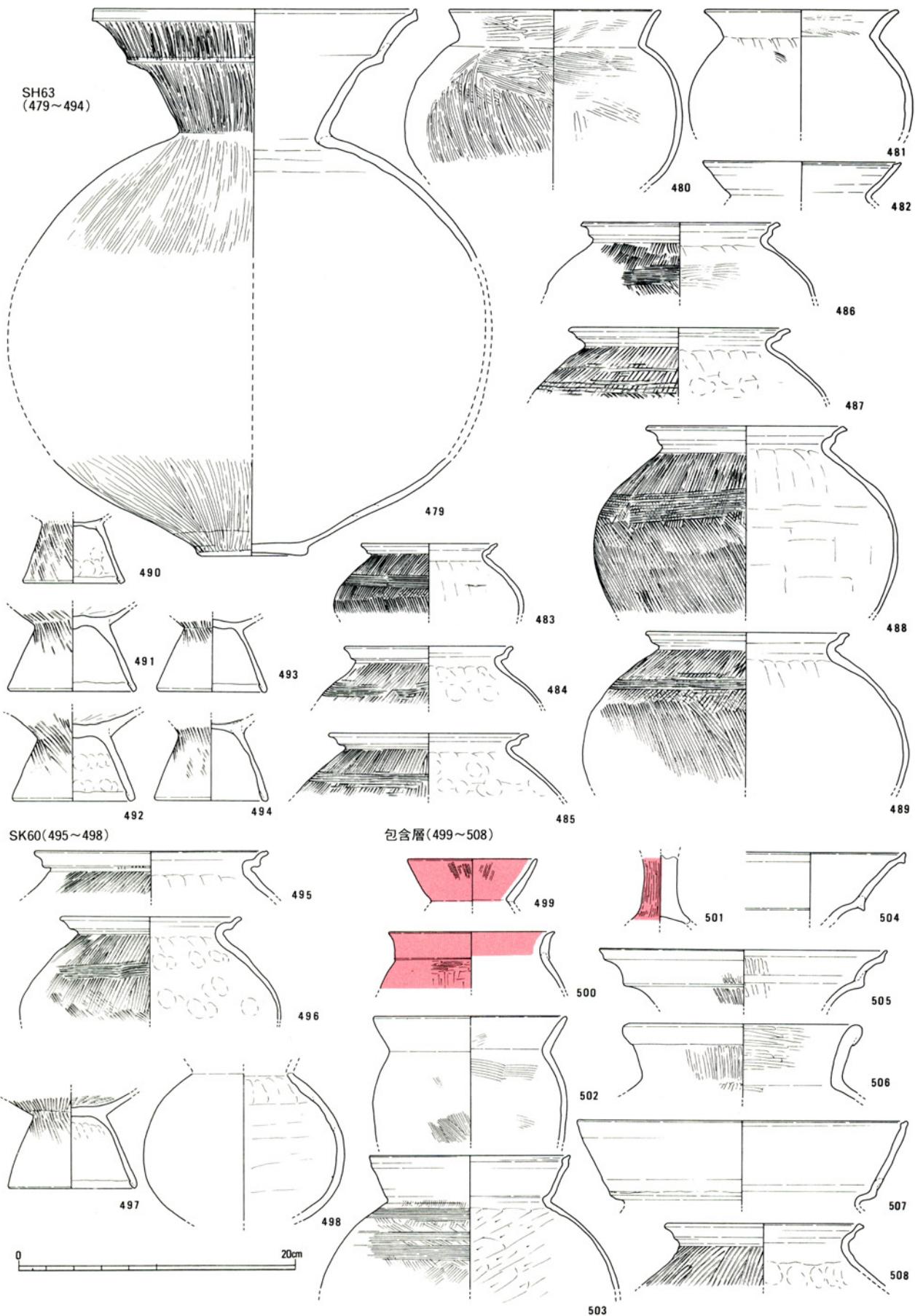


fig. 61 出土遺物実測図23A 4区第3面 (1 : 4)

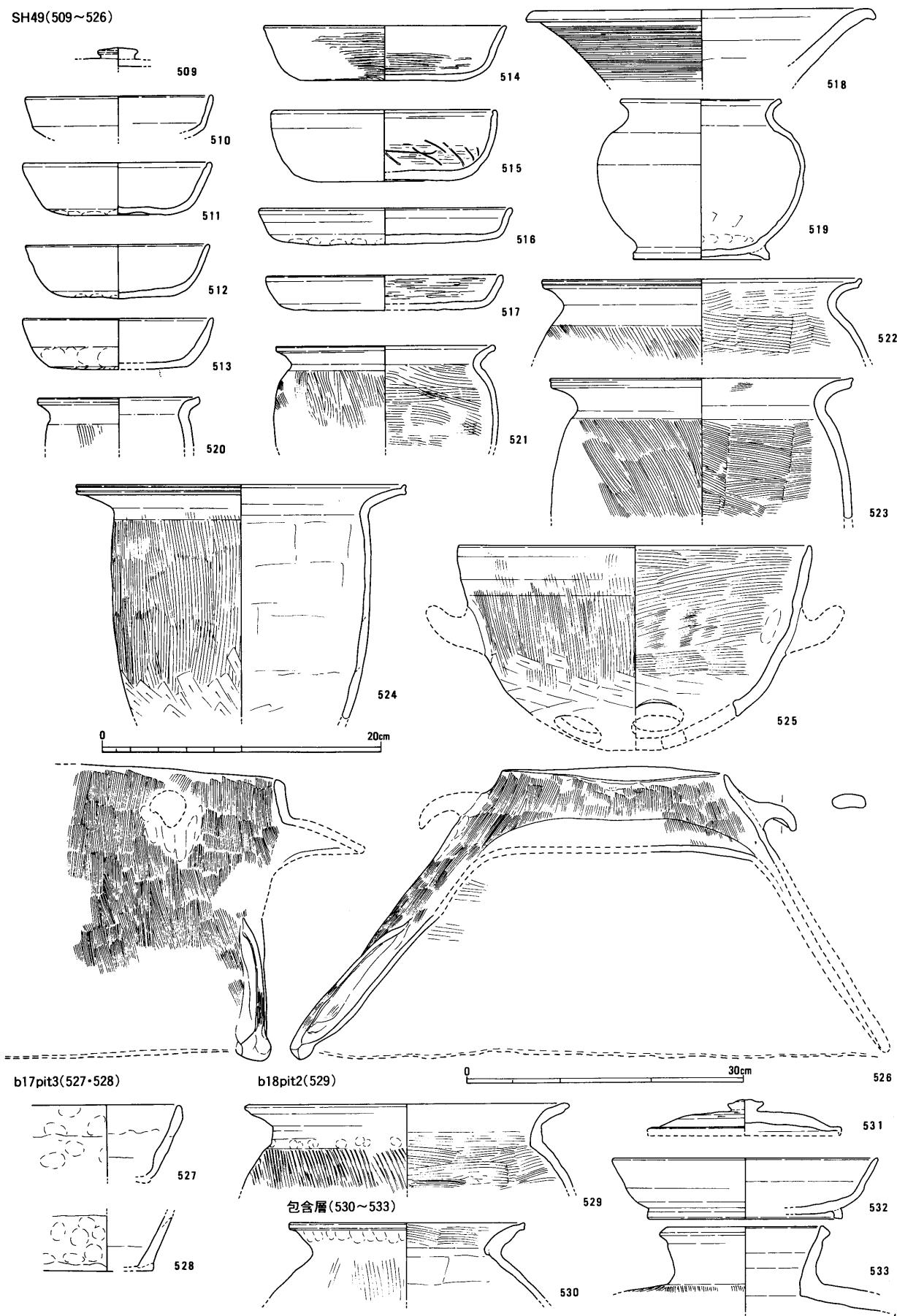


fig. 62 出土遺物実測図(4)A 4 区第2面 (526は1:6、他は1:4)

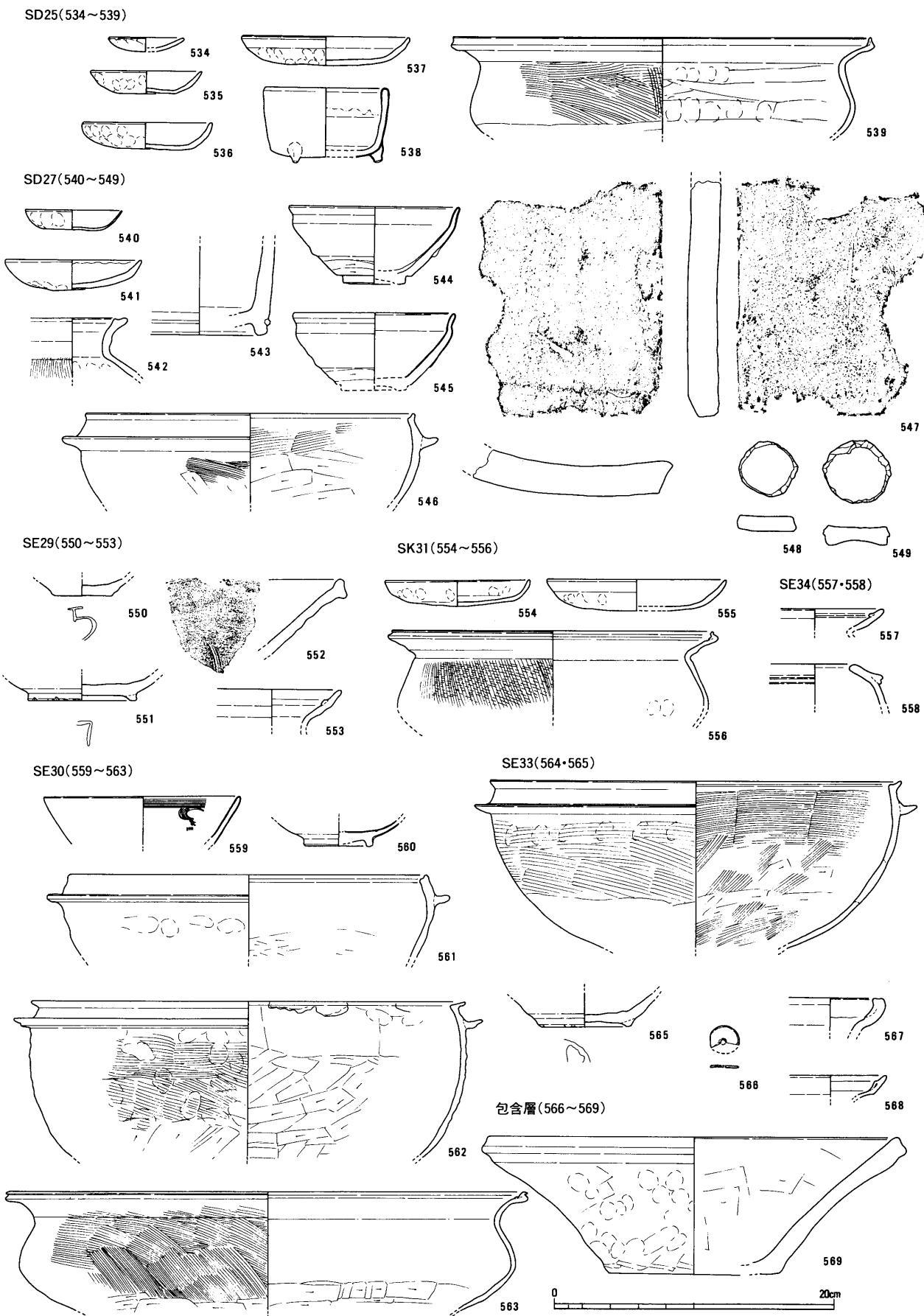


fig. 63 出土遺物実測図 25A 4 区第 1 面 (1 : 4)

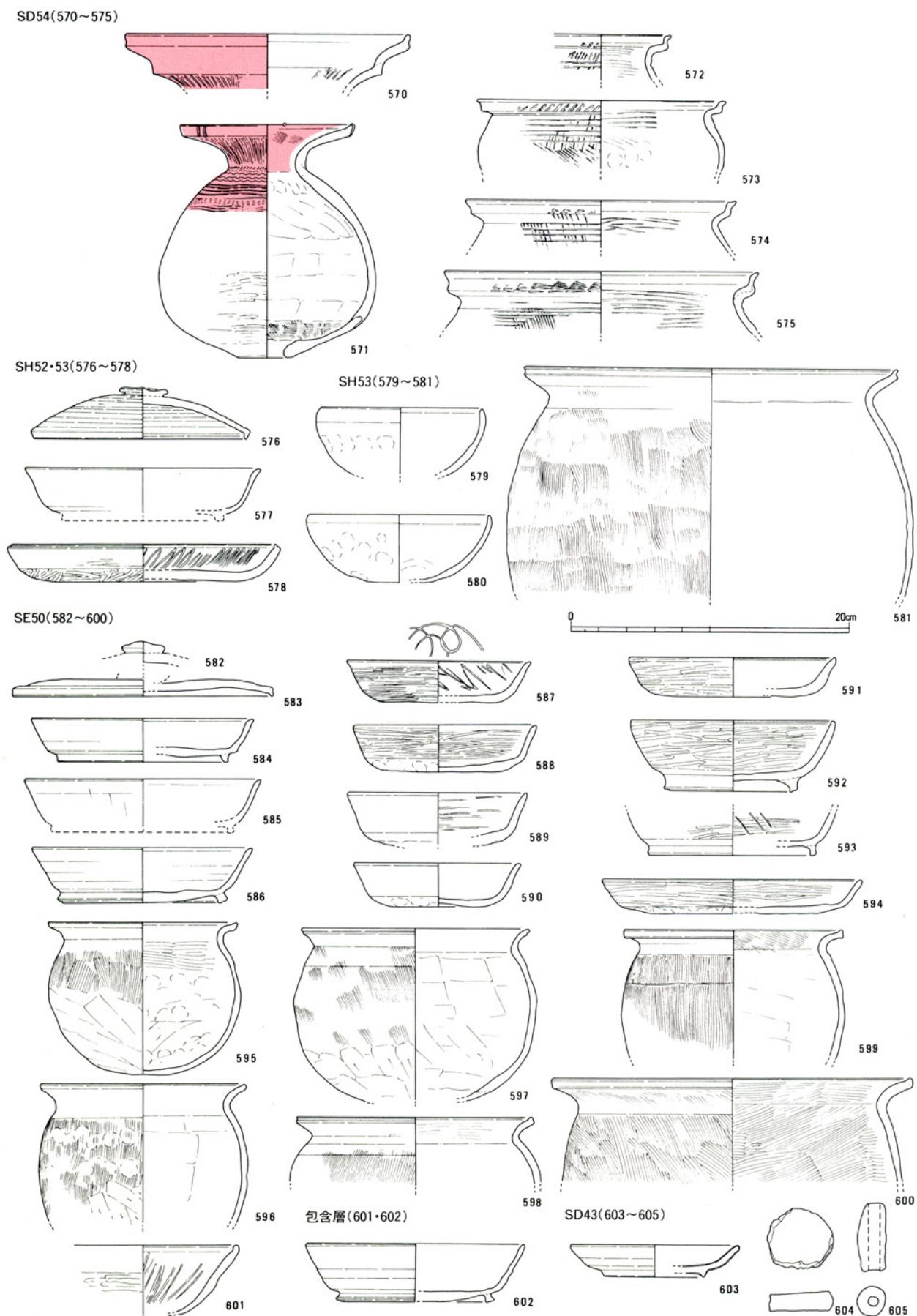


fig. 64 出土遺物実測図26A 5区第1～3面 (1 : 4)

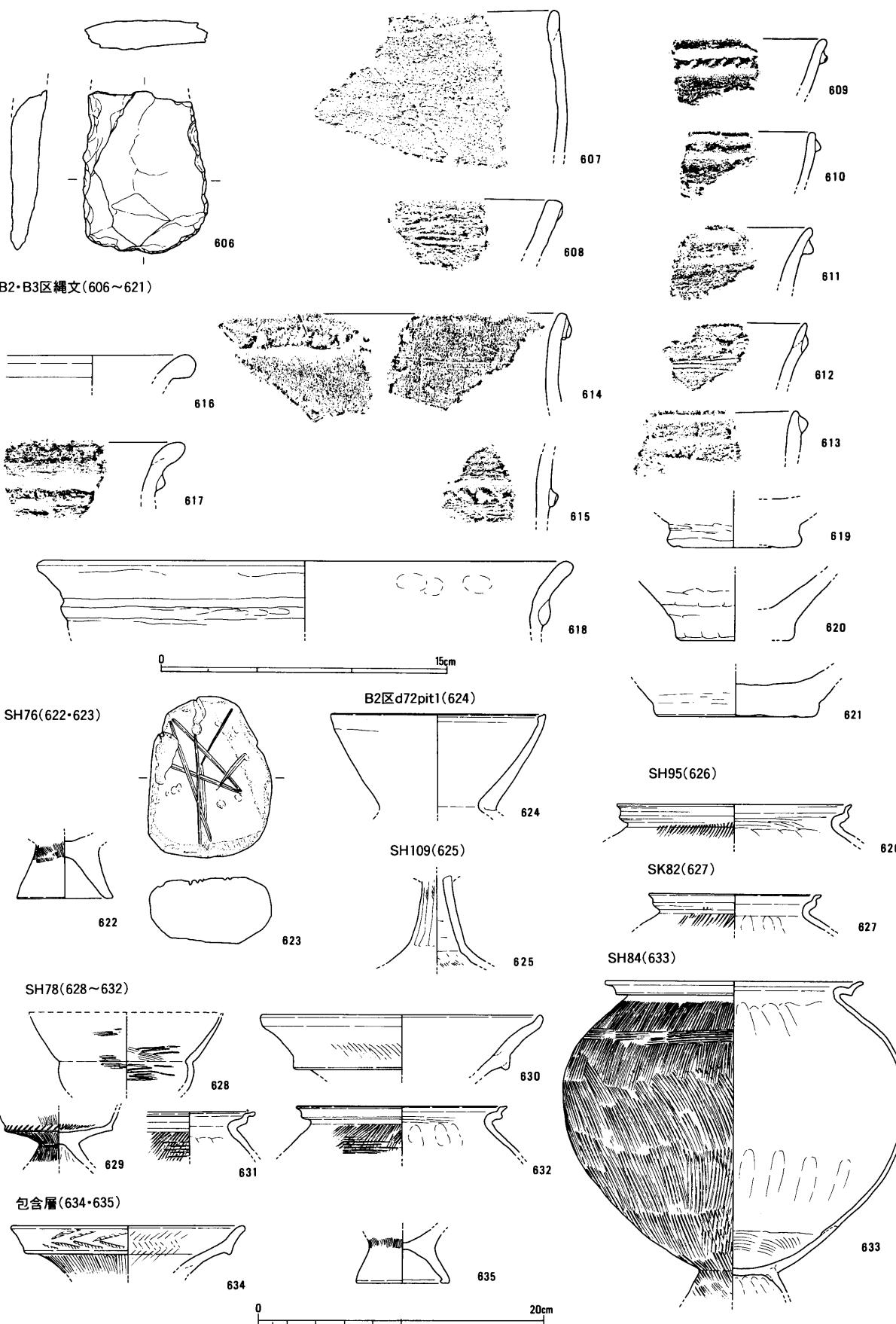
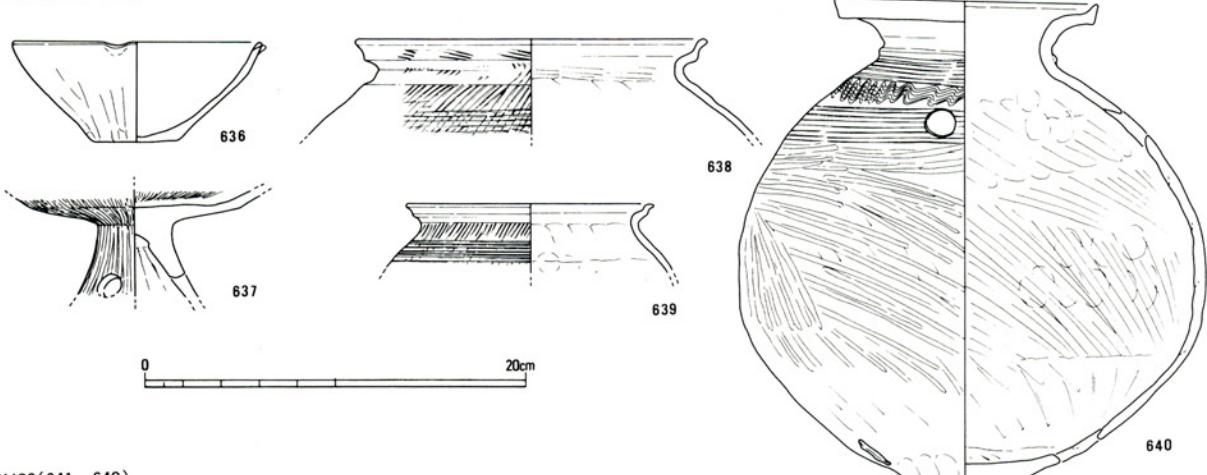
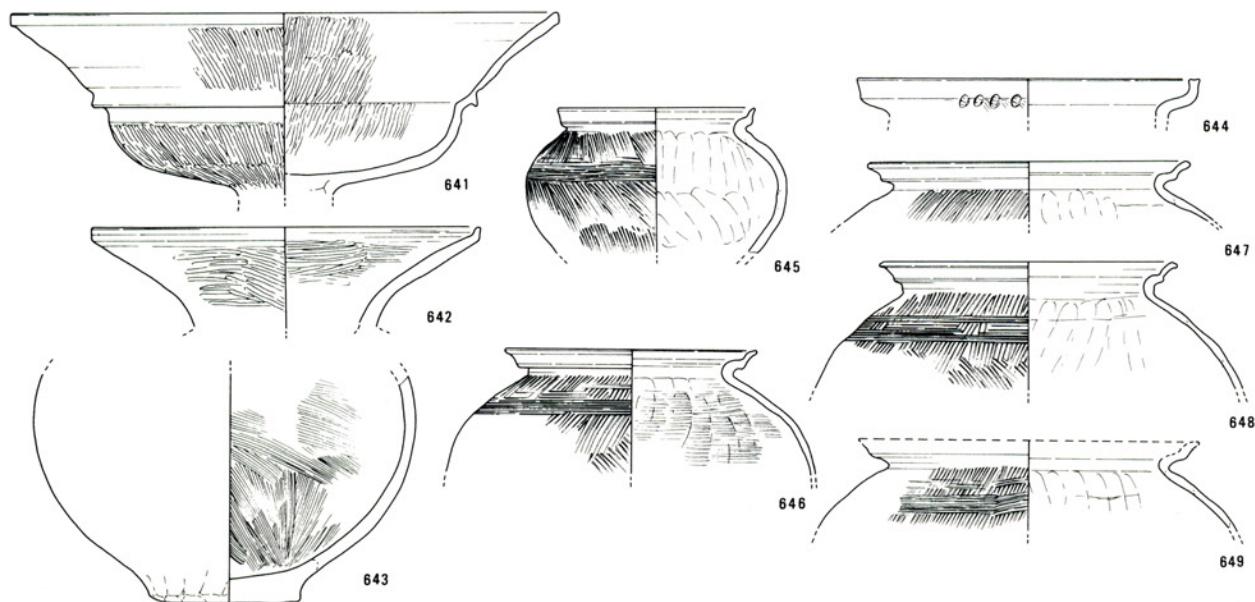


fig. 65 出土遺物実測図(?)B区縄文・古墳前期 (1 : 4)

SH96(636~640)



SH83(641~649)



SH73(650~661)

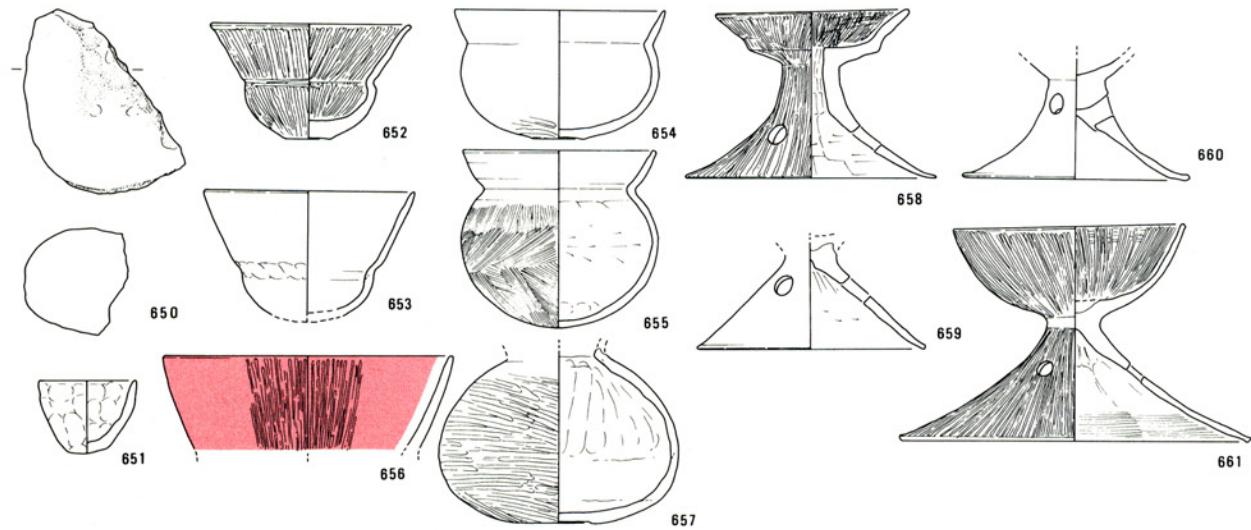


fig. 66 出土遺物実測図28B区古墳前期 (1 : 4)

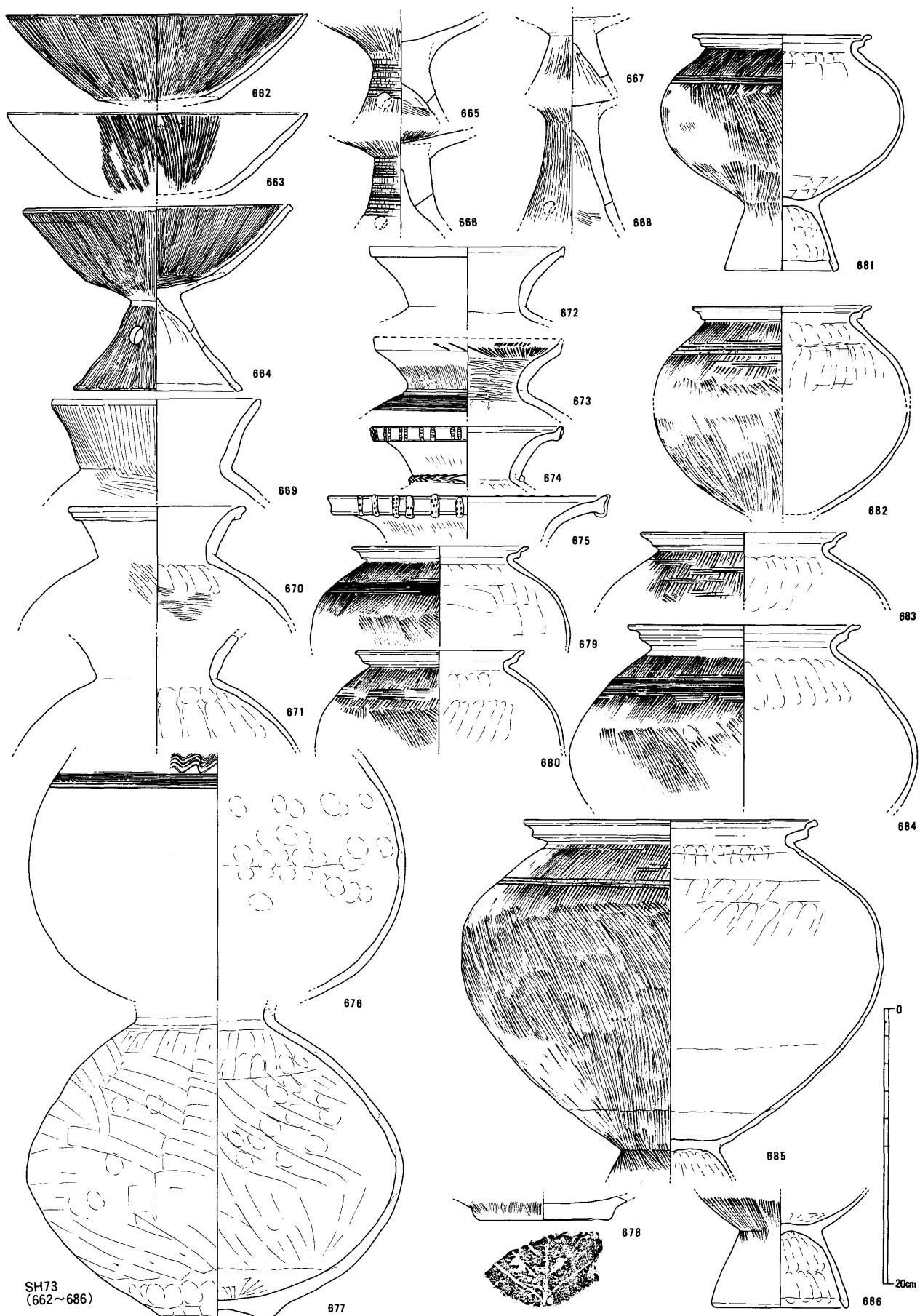


fig. 67 出土遺物実測図29B区古墳前期 (SH73) (1 : 4)

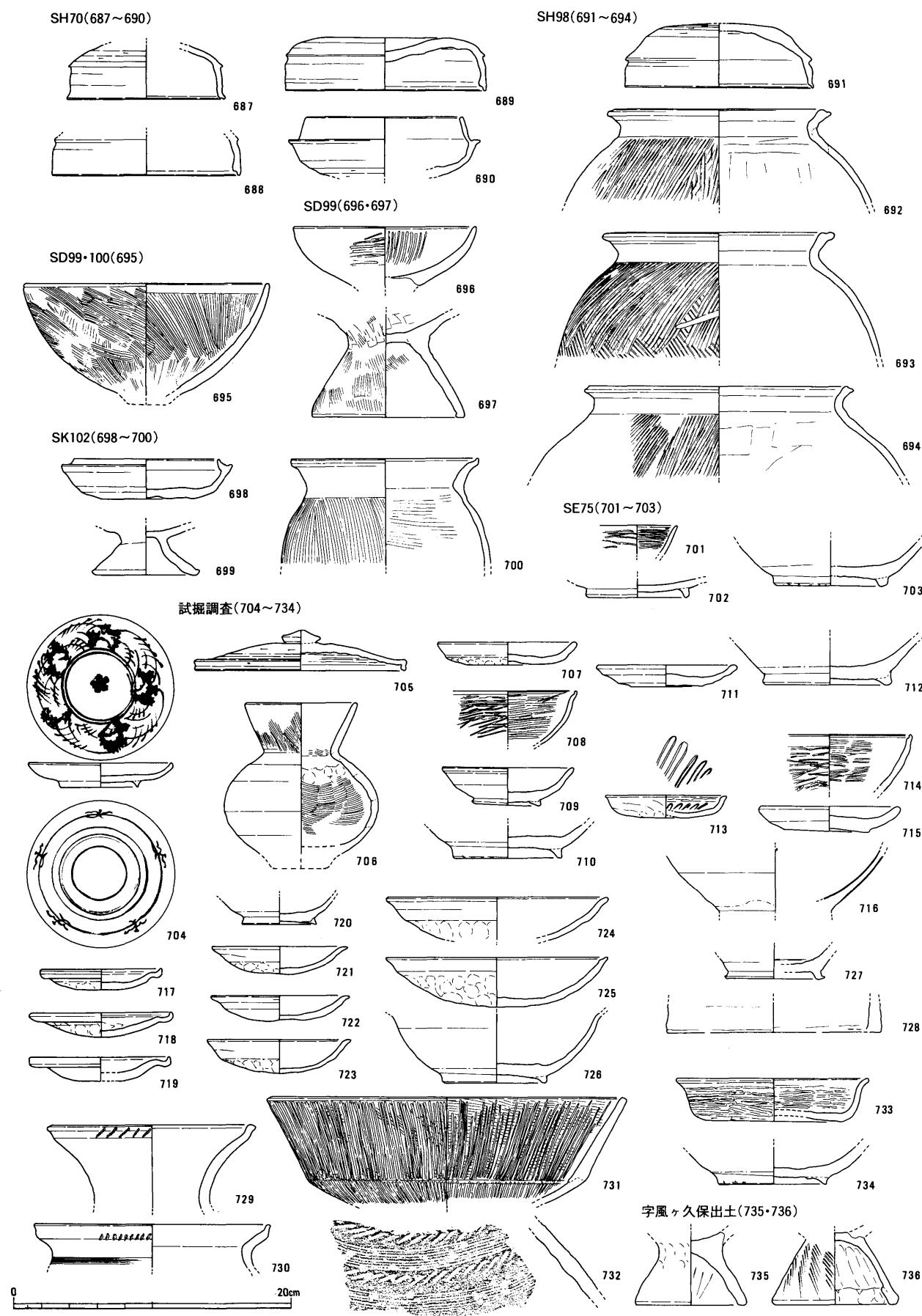


fig. 68 出土遺物実測図(30B区古墳後期ほか、試掘調査など (1 : 4)

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
1	4908	粘板岩 磨製石斧?	A1	b6	SZ103 S1						
2	4907	結晶片岩 石錐	A1	c6	包含層	長10.3 径1.4・1.1	両端に抉り			完存	
3	6705	砂岩 砕石	A1	c7	包含層						線上に使用痕
4	4902	縄文 深鉢	A1	b5	包含層	口縁一	ナデ→条痕	粗	黒褐	口縁片	
5	18105	縄文土器 深鉢	A1	b7	包含層	口縁一	ナデ→ハケメ?	粗	にぶい褐	口縁片	
6	4808	縄文 浅鉢	A1	b6	包含層	口縁一	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	暗灰黄	口縁片	
7	4802	縄文 浅鉢	A1	b5	SZ103	口縁一	ナデ→ヘラケズリ→沈線	粗	灰黄褐	口縁片	
8	4901	縄文 深鉢	A1	b6	包含層	口縁一	ナデ→ヘラケズリ→貼付凸帯→凸帯上に刻目(刃こぼれのあるヘラ)	粗	暗灰黄	口縁片	
9	4807	縄文 深鉢	A1	b6	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→凸帯上に刻目(ヘラ)	粗	にぶい黄橙	口縁片	
10	4906	縄文 深鉢	A1	b6	包含層	口縁一	ナデ→ヘラケズリ→条痕→貼付凸帯→凸帯上に刻目(貝)	粗	灰褐	口縁片	外面に煤付着
11	4905	縄文 深鉢	A1	b5	SZ103 P5	肩凸帯一	ナデ→条痕→貼付凸帯→凸帯上に刻目(貝)	粗	灰黄褐	肩凸帯片	外面に煤付着
12	4904	縄文 深鉢	A1	b5	SZ103 P6	肩凸帯一	ナデ→条痕→貼付凸帯→凸帯上に刻目(指)	粗	黄灰	肩凸帯片	
13	12201	縄文土器 壺	A1	b5	SZ103 P1・4・5	口縁19.7	ナデ→ヘラケズリ→貼付凸帯	粗	淡褐灰	口縁1/3	
14	4805	縄文 深鉢	A1	b6	SZ103	底7.6	ナデ・オサエ→ヘラケズリ	粗	灰	底完存	
15	4801	縄文 深鉢	A1	b6	SZ103 P3	底6.0	ナデ・オサエ→ヘラケズリ	粗	にぶい黄橙	底ほぼ完存	
16	4903	縄文 深鉢	A1	b9	SD37	口縁一	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ(内面)→貼付凸帯→凸帯上に刻目(貝)	粗	橙	口縁片	
17	4803	土師器 小形鉢	A1	c2	SZ40	口縁11.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	明黄褐	口縁1/5	
18	13803	土師器 壺	A1	c2	SZ40 P5	口縁10.7 高10.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	4/5	
19	19803	土師器 壺	A1	c2	SZ40	口縁一	ナデ	密	淡褐	口縁片	布留形壺 外面に煤付着
20	9503	土師器 壺	A1	c2	SZ40 P11	口縁19.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	明赤褐	口縁1/20	外面に煤付着
21	9504	土師器 壺	A1	c2	SZ40	口縁21.8	ナデ→ハケメ	粗	にぶい橙	口縁1/10	外面に煤付着
22	13301	土師器 台付壺	A1	c2	SZ40 P1	口縁9.9 高15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡赤褐	体下半完存	
23	9007	土師器 台付壺	A1	c2	SZ40	口縁20.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/12	
24	13302	土師器 壺	A1	c2	SZ40 P3	頸10.1	ナデ→ヘラケズリ・板状ナデ→ヘラミガキ 外間に赤彩(ベンガラ)	密	暗褐	体ほぼ完存	体焼成後穿孔
25	9601	土師器 壺	A1	c2	SZ40 P4・6	底8.3	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	底1/5	底部に敷いた痕跡
26	13401	土師器 壺	A1	b11	SD36	口縁9.5 高14.4	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	淡褐	ほぼ完存	
27	9205	土師器 台付壺	A1	b7	SZ104	口縁13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1/2	外面に煤付着
28	7801	土師器 壺	A1	b7	SZ104	口縁14.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	体上半ほぼ完存	
29	7701	土師器 台付壺	A1	b7	SZ104	口縁21.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁1/4	外面に煤付着
30	9106	土師器 小形器台	A1	b5	SZ24 P6	口縁9.3	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ	粗	浅黄橙	1/2	受部内面に凹凸使用痕
31	5702	土師器 台付壺	A1	b5	SZ24 P3	口縁15.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁1/4	外面に煤付着
32	3503	土師器 台付壺	A1	b5	SZ24	口縁13.1	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄	口縁1/20	
33	5601	土師器 台付壺	A1	b5	SZ24 P8	脚幅10.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	脚幅完存	外面に煤付着
34	6803	土師器 台付壺	A1	b5	SZ24 P4	脚幅9.55	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡橙	脚台1/2	
35	5603	土師器 台付壺	A1	b5	SZ24 P1	脚幅9.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	脚幅1/3	
36	5602	土師器 台付壺	A1	b5	SZ24 P7	脚幅12.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	脚幅1/4	内面に炭化物
37	5604	土師器 壺	A1	b5	SZ24 P2	底4.1	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ	粗	橙	体2/5	
38	5203	土師器 小形鉢	A1	b5	包含層	口縁12.6	ナデ→ヘラミガキ→内外面に赤彩(ベンガラ)	粗	橙	1/2	
39	11204	土師器 小形鉢	A1	a・b10	包含層	口縁12.3	ナデ→ヨコナデ、外面と口縁内面に赤彩(ベンガラ)	密	にぶい橙	口縁1/5	
40	11311	土師器 小形鉢	A1	b5	包含層	頸49.9	ナデ→ヘラミガキ、外面と口縁内面に赤彩(ベンガラ)	密	赤	頸1/20	

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
41	11303	土師器 壺	A1	b10	包含層	口縁14.0	ナデ→ヘラミガキ、内外面に赤彩(ベンガラ)	密	赤	口縁1/4	
42	11205	土師器 壺	A1	b3	包含層	口縁-	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ、内外面に赤彩(ベンガラ)	密	赤褐	口縁1/20	
43	11208	土師器 小形壺	A1	b2	包含層	口縁15.0	ナデ→ヘラミガキ、内外面に赤彩(ベンガラ)	密	明赤褐	口縁片	
44	11203	土師器 小形壺	A1	b11	包含層	口縁16.0	ナデ→ヘラミガキ、内外面に赤彩(ベンガラ)	密	橙	口縁1/5	
45	11207	土師器 小形壺	A1	b5	包含層	口縁17.4	ナデ→ヨコナデ、内外面に赤彩(ベンガラ)	密	橙	口縁片	
46	1804	土師器 壺	A1	b3	包含層	底4.8	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ→外面に赤彩(ベンガラ)	粗	にぶい橙	底完存	内面浸透による赤変色
47	2006	土師器 壺	A1	b5	包含層	底4.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→内面に赤彩(ベンガラ)	密	明赤褐	底1/10	外面黒斑につき不明
48	11310	土師器 壺	A1	a+b10	包含層	底5.0	ナデ→ヘラミガキ、外面に赤彩(ベンガラ)	密	橙	底1/3	底焼成後穿孔
49	2003	土師器 小形器台?	A1	b5	包含層	脚裾9.9	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→外面に赤彩(ベンガラ)、3方透かし	粗	橙	脚裾1/20	
50	2004	土師器 小形器台	A1	b5	包含層	口縁9.2	ナデ→ヘラミガキ	粗	にぶい橙	口縁1/20	受部内面に凹凸使用痕
51	2604	土師器 小形鉢	A1	b2	包含層	口縁-	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	にぶい橙	口縁片	
52	2603	土師器 小形鉢	A1	b5	包含層	口縁-	ナデ→ヘラミガキ	密	にぶい黄橙	口縁片	外面から口縁付近まで煤付着
53	2607	土師器 小形鉢	A1	b4	包含層	口縁12.4	ナデ→ヘラミガキ	粗	黄橙	口縁1/20	
54	2605	土師器 小形鉢	A1	b2	包含層	口縁12.0	ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁1/10	
55	12902	土師器 壺	A1	b3	包含層	口縁9.5 高11.8	ナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁完存	
56	9004	土師器 小形鉢	A1	b2	包含層	口縁14.4	ナデ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	口縁1/20	
57	1903	土師器 小形鉢	A1	b8	包含層	口縁13.0	ナデ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	1/10	外面と口縁内面に煤付着
58	12701	土師器 小形鉢	A1	b10	包含層	口縁14.0	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	粗	橙	3/10	内外面に煤付着
59	5205	土師器 小形鉢	A1	b4	包含層	口縁17.0	ナデ→ヘラミガキ	粗	浅黄橙	1/10	
60	12703	土師器 壺	A1	b6	包含層	口縁8.8 高16.2	ナデ→ヘラケズリ→ナデ	密	橙	4/5	
61	5703	土師器 壺	A1	b7	包含層	頸7.4	ナデ→ヘラミガキ	密	浅黄橙	体上半9/10	
62	6602	土師器 壺	A1	c7	包含層	口縁9.4	ナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁3/20	
63	5004	土師器 器台	A1	b5	包含層	擴口縁10.2	ナデ→ヘラミガキ、杯に透かしあり	密	にぶい橙	杯1/10	
64	2005	土師器 壺?	A1	c7	包含層	口-	ナデ→ヘラミガキ	粗	橙	口縁片	
65	906	土師器 高杯	A1	b4	包含層	口縁12.0	ナデ+シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ、3方透かし	密	橙	杯ほぼ完存	
66	2002	土師器 高杯?	A1	a6	包含層	口-	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	橙	口縁片	
67	2501	土師器 高杯	A1	b7	包含層	脚柱4.5	ナデ+シボリメ→ヘラケズリ→ヘラミガキ、3方透かし	粗	にぶい橙	脚柱完存	杯部内面に凹凸使用痕
68	5301	土師器 高杯	A1	a9	包含層	口縁20.3	ナデ+シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ、3方透かし	密	橙	杯7/10	
69	5304	土師器 高杯	A1	a9	包含層	脚裾12.1	ナデ→ヘラミガキ、3方透かし	密	淡赤橙	脚裾2/5	
70	12702	土師器 高杯	A1	a7	包含層	口縁14.2 高12.3	ナデ+シボリメ→メントリ→ヨコナデ	密	にぶい橙	脚4/5	
71	2502	土師器 高杯	A1	b6	包含層	脚裾11.0	ナデ+シボリメ→ヘラケズリ+ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	脚裾1/8	
72	2203	土師器 高杯	A1	b8	包含層	口縁17.4 脚裾10.9	ナデ+シボリメ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	脚裾4/5	
73	2201	土師器 壺	A1	a3	包含層	頸5.8	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	密	橙	頸1/2	
74	2602	土師器 壺	A1	b5	包含層	頸-	ナデ→ハケメ→貼付ナデ	密	にぶい橙	頸片	
75	3404	土師器 壺	A1	b11	包含層	口縁19.9	ナデ+オサエ→ハケメ→ヨコナデ→羽状文(板)	粗	浅黄橙	口縁1/20	
76	13802	土師器 壺	A1	b3	包含層	口縁22.6	ナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/20	
77	13801	土師器 壺	A1	b3	包含層	口縁20.0	ナデ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/2	
78	11401	土師器 壺	A1	b8	包含層	口縁21.0	ナデ	粗	橙	口縁1/4	
79	1701	土師器 壺	A1	b5	包含層	口縁31.2	ナデ→ヘラミガキ→口縁に刺突(板)	密	橙	口縁1/5	外面の一部に煤付着
80	1202	土師器 壺	A1	b+c4	包含層	頸部9.8	ナデ+オサエ、口縁に6方透かし	密	にぶい橙	頸1/10	

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
81	1702	土師器 壺	A1	b5	包含層	口縁20.2	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	浅黄橙	口縁1/4	
82	1902	土師器 壺	A1	b5	包含層	口縁23.3	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	口縁1/6	
83	2402	土師器 壺	A1		包含層	口縁17.0	ナデ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/7	
84	2103	土師器 壺	A1	b1	包含層	口縁19.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→貼付凸帯→凸帯にヨコナデ→口縁外面に羽状文・凸帯上に刺突	粗	にぶい橙	口縁1/4	
85	3303	土師器 壺	A1	b2	包含層	口縁13.8	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラミガキ	粗	橙	口縁1/4	
86	1901	土師器 壺	A1	b5	包含層	口縁15.4	ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁ほぼ完存	
87	15601	土師器 壺	A1	a6	包含層	口縁15.5 高23.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	7/10	
88	1206	土師器 壺	A1	b・c4	包含層	底8.7	ナデ・オサエ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	橙	底ほぼ完存	底部に木葉?痕
89	5401	土師器 瓢	A1	c5	包含層	口縁23.3	ナデ・オサエ→ハケメ・ヘラケズリ	粗	浅黄橙	口縁1/5	
90	2001	土師器 瓢	A1	c4	3包含層	口一	ナデ→ヨコナデ	粗	明黄褐	口縁1/20	布留形瓢
91	2202	土師器 瓢	A1	b8	包含層	口縁14.2	ナデ→ハケメ・ヘラケズリ	粗	浅黄橙	口縁1/10	外面に煤付着
92	4405	土師器 台付甕	A1	c6	包含層	口縁9.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1/10	
93	2404	土師器 台付甕	A1	b7	包含層	口縁10.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	口縁1/7	
94	1803	土師器 台付甕	A1	c4	包含層	口縁8.9	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	体7/10	外面に煤付着
95	5005	土師器 瓢	A1	b8	包含層	口縁11.6	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄	口縁1/10	外面に煤付着
96	1802	土師器 台付甕	A1	b3	包含層	口縁11.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/2	外面に煤付着
97	3306	土師器 台付甕	A1	b6	包含層	口縁13.1	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ→口縁に刺突(板)	粗	灰白	口縁1/6	
98	3505	土師器 台付甕	A1	b4	包含層	口縁15.6	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ→口縁に刺突(板)	粗	淡黄	口縁1/4	
99	2403	土師器 台付甕	A1	b7	包含層	口縁16.6	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ→口縁に刺突(板)	粗	灰白	頸1/10	
100	3304	土師器 台付甕	A1	b6	包含層	口縁19.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ→口縁に刺突(板)	粗	淡黄	口縁1/8	
101	1801	土師器 台付甕	A1	b9	包含層	口縁13.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰褐	口縁1/4	外面に煤付着
102	2102	土師器 台付甕	A1	c4	包含層	口縁14.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁1/5	
103	2104	土師器 台付甕	A1	b3	包含層	口縁15.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁1/8	
104	5403	土師器 台付甕	A1	b5	包含層	口縁18.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰白	口縁1/6	外面に煤付着
105	3502	土師器 台付甕	A1	a9	包含層	口縁16.1	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/4	
106	3506	土師器 台付甕	A1	c8	包含層	口縁15.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/10	
107	12901	土師器 台付甕	A1	b3	包含層	口縁16.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	淡褐灰	口縁1/5	
108	2105	土師器 台付甕	A1	b7	包含層	口縁14.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁1/10	外面に煤付着
109	3305	土師器 台付甕	A1	b5	SZ24	口縁17.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰白	口縁1/8	
110	5502	土師器 台付甕	A1	a9	包含層	口縁15.5	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄	口縁1/10	
111	1601	土師器 台付甕	A1		包含層	頸13.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰白	体1/4	外面に煤付着 内面に炭化物付着
112	4503	土師器 台付甕	A1		包含層	口縁13.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/6	
113	5302	土師器 台付甕	A1	a9	包含層	脚裾9.8	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡橙	脚台完存	
114	2305	土師器 台付甕	A1	b4	包含層	脚裾8.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	脚裾1/2	
115	2304	土師器 台付甕	A1	b4	包含層	脚裾8.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	脚裾1/3	
116	3901	土師器 台付甕	A1	b7	包含層	脚裾9.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	暗灰黄	脚台1/2	
117	9006	土師質 土錐	A1	b9	SB105 Pit1	直径2.9 重量17.78g				完存	
118	13402	鉄錐	A1	b9	SB105 Pit1	錐身幅1.8 頸幅0.6					
119	13403	鉄錐	A1	c10	SB105 Pit1	頸幅0.6				頸に木質付着	
120	3402	須恵器 杯身	A1	c10	SB105 Pit1	口縁10.4	回転ナデ→回転ヘラケズリ	密	オリーブ灰	1/20	

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
121	11502	須恵器 杯身	A1	a11	SB105 Pit2	口縁10.2	回転ナデ→ナデ	粗	青灰	1/5	
122	11501	須恵器 杯蓋	A1	c10	SB105 Pit3	口縁13.0	回転ナデ→回転ケズリ	粗	灰	1/5	
123	11503	須恵器 杯身	A1	c10	SB105 Pit3	口縁9.0	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰	1/5	
124	3301	土師器 蓋	A1	a9	SB105 Pit1	口縁32.6	ナデ→ハケメ・ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/10	
125	11406	須恵器 杯身	A1	c10	Pit2	口縁10.4	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	口縁1/8	
126	11403	土師器 台付甕	A1	b10	Pit9	口縁14.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁1/8	内面に炭化物付着
127	11402	土師器 甕	A1	b9	Pit3	口縁16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	明褐灰	口縁1/3	外面に煤付着
128	6601	土師器 甕	A1	b9	Pit2	口縁16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰白	口縁1/10	外面に煤付着
129	3403	須恵器 杯身	A1	b7	SK6	口縁-	回転ナデ→回転ヘラケズリ	密	灰	1/20	
130	2803	土師器 梶	A1	b8	SK6	口縁12.9 高3.3	ナデ・オサエ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	密	にぶい黄橙	口縁1/2	底にヘラ描きあり
131	3405	土師器 瓢	A1	b7	SK6	口縁-	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁片	
132	3302	土師器 甕	A1	b7	SK6	口縁15.2	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	灰白	口縁1/10	
133	1403	須恵器 甕	A1		包含層	体9.1	回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ	密	灰白	体ほぼ完存	
134	9104	須恵器 深碗	A1		包含層	底8.4	回転ナデ→ヘラ切り	密	灰白	底1/2	
135	3401	須恵器 すり鉢	A1		包含層	口縁13.5	回転ナデ→カキメ	密	灰	口縁1/3	
136	1402	須恵器 杯身	A1	b6	包含層	高台10.7	回転ナデ→回転ケズリ→貼り付け高台→ 高台にヨコナデ	密	灰白	底完存	
137	2506	須恵器 杯身	A1		包含層	高台13.1	回転ナデ→貼り付け高台→高台にヨコナ デ	密	灰白	高台1/10	
138	2503	土師器 杯蓋	A1		包含層	摘2.6	ナデ→貼付ナデ	密	橙	摘完存	
139	2505	土師器 皿	A1		包含層	口縁16.1 高2.85	ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ	密	橙	口縁1/7	内面に炭化物付着
140	6604	土師器 皿	A1	b6	包含層	口縁21.6	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/4	
141	2504	土師器 皿	A1		包含層	口径20.0	ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ	密	橙	口縁1/8	
142	9108	土師質 魚	A1		包含層			密	灰白		
143	1401	土師器 甕	A1		包含層	口縁24.4	ナデ・オサエ→ハケメ→ヘラケズリ	密	にぶい橙	口縁1/3	
144	2303	土師器 甕	A1		包含層	口縁25.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁1/8	外面に煤付着
145	2302	土師器 甕	A1		包含層	口縁21.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰白	口縁1/6	
146	2301	土師器 甕	A1		包含層	口縁20.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/10	
147	4610	加工円盤 陶器 甕 体部	A1	b3	SD1	直径6.6 重量66.46g		密	褐灰		常滑
148	4607	青磁 梶	A1	b3	SD1	高台4.95	ロクロナデ→ロクロケズリ→見込みに押 印→施釉高台は削り出し	密	釉 淡黄	高台完存	
149	4611	ロクロ土師器 皿	A1	a3	SD1	底5.3	ロクロナデ→糸切り	密	灰白	底完存	
150	4604	陶器 縁釉小皿	A1	b4	SD1 P3	口縁9.0 高2.5	ロクロナデ→糸切り→施釉	密	灰白	口縁1/2	瀬戸
151	4606	土師器 皿	A1	a5	SD1	口縁10.0 高1.8	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/5	南伊勢
152	4603	土師器 皿	A1	b3	SD1	口縁12.0	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	口縁1/5	南伊勢
153	4602	土師器 茶釜蓋	A1	b4	SD1	口縁14.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	灰白	口縁1/4	南伊勢
154	7502	土師器 羽釜	A1	b3	SD1 P5	口縁27.4	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケ ズリ	密	にぶい橙	口縁3/10	中北勢 外面に煤付着
155	12801	土師器 羽釜	A1	b3	SD1 P9	口縁29.6	ナデ→ハケメ・ヨコナデ	密	橙	口縁1/2	中北勢 外面に煤付着
156	9001	土師器 羽釜	A1	b4	SD1	口縁31.6	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケ ズリ	密	にぶい橙	口縁1/5	中北勢
157	1501	土師器 鍋	A1	a4	SD1 p1	口縁26.5	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケ ズリ	密	灰白	口縁ほぼ 完存	南伊勢 外面に煤付着
158	7602	土師器 鍋	A1	b3	SD1 P7	口縁28.0	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケ ズリ	密	浅黄橙	口縁1/5	南伊勢
159	7501	土師器 鍋	A1	b3	SD1 P10	口縁21.7	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケ ズリ	密	浅黄橙	口縁3/4	南伊勢 未使用?
160	4501	土師器 鍋	A1	b3	SD1	口縁35.2	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケ ズリ	密	灰白	口縁1/4	南伊勢 外面に煤付着

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
161	7601	土師器 鍋	A1	b4	SD1 P4	口縁41.2	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい黄橙	口縁1/5	南伊勢 内面に炭化物付着
162	404	加工円盤陶器 壺 体部	A1	b6	SD2	直径5.3 重量53.0g		密	にぶい橙		
163	4609	加工円盤陶器 壺 体部	A1	b6	SD2	直径6.7 重量72.72g		密	にぶい橙		常滑
164	4608	土師器 盆	A1	b6	SD2	口縁12.9 高2.0	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/5	中北勢
165	4504	土師器 茶釜	A1	c3	SD2	口縁15.1	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ	密	灰褐	口縁1/6	南伊勢
166	4502	土師器 鍋	A1	c3	SD2	口縁33.7	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ	密	明褐灰	口縁1/5	南伊勢 外面に煤付着
167	4705	陶器 釜形壺	A1	b2	SD2	口縁12.8	ロクロナデ→貼付ナデ→施釉(鉄釉)	密	釉 灰褐	口縁1/4	瀬戸
168	4703	陶器 壺	A1	c3	SD2	口縁一	ロクロナデ→施釉	密	にぶい赤褐	口縁付近片	常滑
169	4702	陶器 壺	A1	b7	SD2	口縁24.4	ロクロナデ→施釉	粗	浅黄橙	口縁片	常滑
170	2205	陶器 盆	A1	b5	SK3	高台4~4.4 高3.2	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	密	灰白	高台完存	輪花表現あり
171	9103	陶器 梗	A1		包含層	高台8.4 高5.5	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ、高台にモミガラ痕	粗	灰白	底1/3	知多 内面を研磨
172	9404	陶器 盆	A1		包含層	口縁9.7 高2.7	ロクロナデ→糸切り→口縁に施釉	密	釉 黒褐	口縁1/2	内面を研磨
173	4601	陶器 平碗	A1		包含層	口縁16.6	ロクロナデ→施釉	密	釉 オリーブ黄	口縁1/4	瀬戸
174	4605	陶器 平碗	A1		包含層	底5.3	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉 高台は削り出し 内面にトチン痕	密	淡黄	底4/5	瀬戸
175	4704	土師器 鍋	A1		包含層	口縁30.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	灰白	口縁片	南伊勢 外面に煤付着
176	2401	土師器 羽釜	A1	b4	包含層	口縁34.6	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/20	南伊勢
177	11601	土師器 羽釜	A1		包含層	口縁37.2	ナデ→ヨコナデ	粗	淡橙	口縁1/10	南伊勢 外面に煤付着
178	4701	陶器 壺	A1		包含層	口縁53.0	ロクロナデ→施釉	密	褐灰	口縁片	常滑
179	18106	繩文土器 深鉢	A3	a25	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→条痕→ヨコナデ	粗	橙	口縁片	
180	18108	繩文土器 深鉢	A3	b27	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→ヘラケズリ→凸帯上に刻目(指)	粗	灰黄褐	口縁片	
181	18110	繩文土器 深鉢	A3	c27	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→条痕→凸帯上に刻目(貝)	粗	にぶい黄橙	口縁片	
182	12102	磨製石斧	A3	b25	SX89	長5.6 幅2.8					
183	12101	繩文土器 深鉢	A3	b25	SX89	口縁21.5	ナデ→条痕→ヘラケズリ→ハケメ→貼付凸帯→部分的に凸帯上にナデ	粗	灰黄褐	口縁付近1/4	外面に煤付着
184	15101	繩文土器 深鉢	A3	b24	SX88 蓋	最大50.0	ナデ→ヘラケズリ→貼付凸帯→条痕→凸帯上に刻目(貝)	粗	にぶい黄橙	体3/10	内面に炭化物痕 転用時に打ち欠き形を整える
185	17701	繩文土器 深鉢	A3	b24	SX88	最大44.7 底7.6	ナデ→ヘラケズリ→条痕→貼付凸帯→凸帯上に刻目(貝)	粗	にぶい橙	口縁欠	補修孔2対+1
186	14503	土師器 壺	A3	b28	SD91	口縁14.4	ナデ→ハケメ	粗	赤褐	口縁4/5	
187	18406	土師器 台付壺	A3	c28	SD91	口縁17.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁片	
188	18401	土師器 壺	A3	c28	SD91	口縁19.4	ナデ→ハケメ	粗	明褐灰	口縁1/6	外面に煤付着
189	18404	土師器 台付壺	A3	b27	SZ87	口縁15.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁1/4	
190	11101	土師器 小形器台	A3	b27	SK59 P6	脚筋7.9	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ、3方向透かし	粗	灰白	脚完存	受部内面に凹凸使用痕
191	11004	土師器 壺	A3	b27	SK59 P3	口縁18.1	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	粗	にぶい橙	口縁1/4	
192	11006	土師器 壺	A3	b27	SK59 P5	頸10.4	ナデ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	頸1/5	
193	10902	土師器 壺	A3	b27	SD86	口縁一	ナデ、口縁外面に棒状浮文→浮文上に刺突	密	橙	口縁1/20	
194	14501	土師器 壺	A3	b28	SD86	口縁6.8 高9.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	ほぼ完存	
195	10703	土師器 台付壺	A3	b27	SD86	口縁15.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/20	外面に煤付着
196	8902	土師器 小形鉢	A3	b28	SZ61 P2	口縁15.4	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ、外面に赤彩(ベンガラ)?	密	橙	口縁1/4	外面に煤付着 内面に炭化物
197	8904	土師器 壺	A3	b28	SZ61 P6	口縁12.4	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ、口縁部内面と外面に赤彩(ベンガラ)	密	浅黄橙	口縁1/5	
198	11304	土師器 壺	A3	b29	SZ61	底4.0	ナデ→板ナデ→ヘラミガキ、外面に赤彩(ベンガラ)	粗	赤	底1/3	
199	7002	土師器 高杯	A3	b29	SZ61	脚柱3.0	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ	粗	橙	脚柱完存	
200	18403	土師器 台付壺	A3	b28	SZ61	口縁10.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁1/3	外面に煤付着

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
201	12401	土師器 壺	A3	b28	SZ61 P1	口縁9.0 高19.2	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	橙	3/5	底焼成後穿孔、研磨あり
202	11005	土師器 小形器台	A3	b26	SZ57 P1		ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	脚3/10	
203	3504	土師器 高杯	A3	b26	SZ57	脚幅10.2	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	脚3/5	
204	7103	土師器 高杯	A3	b25	SZ57	口縁15.9	ナデ・シボリメ→ヨコナデ・メントリ	粗	にぶい橙	1/2	
205	11002	土師器 台付甕	A3	b26	SZ57 P10	口縁14.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁3/5	外面に煤付着
206	11001	土師器 壺	A3	b26	SZ57 P8	口縁11.5	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	橙	口縁ほぼ 完存	
207	19102	土師器 壺	A3	b26	SZ57 P5	底3.2	ナデ→ハケメ、外面に赤彩(ベンガラ)	粗	にぶい黄橙	体7/10	
208	11102	土師器 壺	A3	b26	SZ57 P9	底7.8	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	にぶい褐	底完存	底外面に砂粒付着
209	11003	土師器 壺	A3	a・b25	SZ57	口縁16.1	ナデ	粗	橙	口縁1/5	
210	3501	土師器 壺	A3	b26	SZ57	口縁27.0	ナデ	密	にぶい橙	口縁片	
211	19101	土師器 壺	A3	b25	SZ57 P12	口縁18.0 頸10.4	ナデ・オサエ→板ナデ→ヘラミガキ→ヨ コナデ	密	橙	1/2	底内面に胎土の荒い粘土貼付
212	10901	土師器 壺	A3	a・b25	S285	口縁25.4	ナデ、口縁外面と擬口縁に刺突	粗	にぶい黄橙	口縁1/20	
213	10101	土師器 台付甕	A3	b26	SZ68 P3	口縁22.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	口縁3/5	外面に煤付着
214	15701	土師器 台付甕	A3	a25	SK90	口縁14.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁1/4	外面に煤付着
215	7204	土師質 土玉	A3	b29	包含層	直径3.5 重量32.99		粗	にぶい橙	完存	
216	11306	土師器 小形鉢	A3	b27	包含層	頸8.6	ナデ→板ナデ→ヘラミガキ、外面と口縁 内面に赤彩(ベンガラ)	密	にぶい赤	体1/3	
217	11305	土師器 小形鉢	A3	b27	包含層	底2.65	ナデ→ヘラミガキ、内外面に赤彩(ベンガ ラ)	密	赤	体1/2	
218	11307	土師器 小形鉢	A3	b26	包含層	底4.0	ナデ→板ナデ、内外面に赤彩(ベンガラ)	密	橙	底2/3	
219	11201	土師器 小形鉢	A3	b26	包含層	頸10.5	ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ、内外面に 赤彩(ベンガラ)	密	橙	頸1/5	
220	11302	土師器 小形鉢	A3	b28	包含層	口縁16.4	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ、内外面 に赤彩(ベンガラ)	密	明赤褐	口縁1/5	
221	11206	土師器 壺	A3	b28	包含層	頸7.8	ナデ→ヘラミガキ、内外面に赤彩(ベンガ ラ)	密	赤	頸1/20	
222	18601	土師器 甕	A3	b27	包含層	口縁20.0	ナデ→ハケメ、口縁内外面に赤彩(ベンガ ラ)	粗	にぶい橙	口縁1/10	
223	5204	土師器 小形鉢	A3	b27	包含層	口縁13.4	ナデ→ヘラミガキ	密	浅黄橙	口縁1/10	
224	6403	土師器 小形鉢	A3		包含層	14.1	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/8	
225	10804	土師器 小形鉢	A3	b29	包含層	口縁10.9	ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁3/5	
226	18503	土師器 小形鉢	A3	b27	包含層	口縁12.1	ナデ→ヘラミガキ、口縁内面に赤彩(ベン ガラ)	密	浅黄橙	口縁1/6	
227	5503	土師器 高杯	A3	b29	包含層	脚柱2.6	ナデ・シボリメ→ハケメ	粗	橙	脚柱完存	
228	9304	土師器 甕	A3	c28	包含層	口縁13.6	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	にぶい黄橙	口縁片	外面に煤付着
229	11903	土師器 甕	A3	b29	包含層	口縁15.6	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい橙	口縁1/20	布留形甕 外面に煤付着
230	12003	土師器 甕	A3	c28	包含層	口縁12.6	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい橙	頸1/4	布留形甕
231	8802	土師器 甕	A3	c27	包含層	口縁17.6	ナデ→ハケメ	粗	にぶい赤橙	口縁1/6	外面に煤付着
232	5402	土師器 甕	A3	b27	包含層	口縁19.8	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	橙	口縁1/5	
233	18402	土師器 甕	A3	b29	包含層	口縁19.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	橙	口縁1/4	外面に煤付着
234	8901	土師器 台付甕	A3	c27	包含層	口縁16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	口縁1/8	
235	6503	土師器 台付甕	A3	b29	包含層	口縁15.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	口縁1/5	
236	8702	須恵器 杯蓋	A3	c24	SH58	口縁16.0	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	口縁1/8	
237	8705	須恵器 杯身	A3	c24	SH58 P1・6	口縁12.0 高4.3	回転ナデ→回転ケズリ、内面に同心円印 痕	密	灰白	口縁3/4	
238	8704	須恵器 杯身	A3	c24	SH58 P1・3	口縁12.7 高4.9	回転ナデ→ヘラ切り	密	灰白	9/10	
239	8803	土師器 高杯	A3	c24	SH58 P2	口縁13.0	ナデ・オサエ・シボリメ→ヨコナデ、杯外 面に浮文(自然)	粗	橙	口縁3/10	
240	8701	土師器 高杯	A3	c24	SH58 P2・9	口縁17.2 ~17.6 高13.9	ナデ・シボリメ→ヨコナデ	粗	橙	口縁7/10	

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
241	11801	土師器 蔊	A3	c24	SH58 P5	口縁16.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡赤橙	口縁9/10	2次焼成による磨滅著しい
242	11701	土師器 蔊	A3	c24	SH58 P5	口縁20.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/2	
243	11602	土師器 蔊	A3	c24	SH58 P5	口縁26.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/8	
244	8801	土師器 蔊	A3	c24	SH58 P7	口縁21.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/5	
245	9901	土師器 蔊	A3	c24	SH58 P5	口縁20.0 高36.9	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	淡黄	4/5	
246	17901	土師器 酢	A3	c24	SH58 P4	口縁26.9 高30.2	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ→貼付ナデ、底2孔	粗	灰白	4/5	
247	10905	金環	A3	b29	包含層	環2.3 直径0.5~0.7					地金は銅
248	905	須恵器 杯身	A3		包含層	口縁13.5	回転ナデ→回転ケズリ	粗	灰白	2/5	
249	17206	土師器 台付碗?	A3	c29	SH93	脚裾8.8	ナデ	粗	にぶい黄橙	脚2/5	
250	17207	土師器 蔊	A3	c29	SH93	口縁一	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁片	
251	17101	土師器 蔊	A3	c29	SH93	口縁15.5	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	明褐灰	口縁9/10	2次焼成による変色・劣化著しい
252	17103	土師器 蔊	A3	a24	SH94	口縁17.1 高10.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	明褐灰	口縁1/4	内面に煤・炭化物付着
253	6904	須恵器 杯蓋	A3	b25	SK42	口縁9.5 高3.1	回転ナデ→貼付ナデ	密	灰白	完存	
254	6505	須恵器 杯身	A3	c25	SK42	口縁10.1 高3.8	回転ナデ→回転ケズリ	密	明青灰	口縁1/3	
255	6801	土師器 蔊	A3	c25	SK21	口縁25.4	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	灰白	口縁3/20	
256	18606	須恵器 杯身	A3	c28	Pit16(SB106)	口縁一	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰	口縁片	
257	18505	土師器 梶	A3	c28	Pit13(SB106)	口縁11.7	ナデ	粗	浅黄橙	1/4	
258	7006	土師質 土錐	A3	b27	Pit15(SB106)	長7.8 直径2.7 重量50.11g		粗	にぶい黄橙	完存	
259	18605	須恵器 杯蓋	A3	b30	Pit1	口縁一	回転ナデ	密	灰	口縁片	
260	18607	須恵器 杯身	A3	b27	Pit16	口縁一	回転ナデ	密	灰	口縁片	
261	11504	須恵器 杯蓋	A3	c27	包含層	口縁9.4	回転ナデ→ナデ、外面にヘラ記号	密	灰	1/5	
262	6508	須恵器 杯蓋	A3	b25	包含層	口縁9.6	回転ナデ→回転ケズリ 外面にヘラ記号	密	青灰	口縁1/4	
263	6906	須恵器 杯蓋	A3	c24	包含層	口縁11.0 高4.3	回転ナデ→ヘラ切り→ナデ	粗	明オリーブ 灰	口縁3/8	
264	5001	須恵器 杯蓋	A3	c25	包含層	口縁12.0 高3.1	ナデ→ヘラ切り	密	灰白	口縁1/2	
265	6506	須恵器 杯身	A3	b25	包含層	口縁10.2 高3.5	回転ナデ→ヘラ起こし	密	青灰	口縁1/6	
266	3103	須恵器 杯身	A3	b25	包含層	口縁9.7 高3.4	回転ナデ→ヘラ切り	粗	灰	口縁1/4	
267	5002	須恵器 杯身	A3	a26	包含層	口縁11.4 高4.0	回転ナデ→回転ケズリ	粗	灰	口縁1/6	
268	9101	須恵器 杯蓋	A3	a26	包含層	口縁11.2 高2.7	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	ほぼ完存	
269	16702	須恵器 杯蓋	A3	a26	包含層	口縁12.6 ~12.8	回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ	粗	灰	4/5	
270	8703	須恵器 杯蓋	A3	c25	包含層	口縁16.6 高3.1	回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ	密	灰白	口縁1/4	
271	5003	須恵器 高杯	A3	b25	包含層	脚裾8.1	回転ナデ	密	灰白	脚ほぼ完存	
272	9703	土師質 土錐	A3	c28	包含層	長7.7 直径2.5 重量44.32g		密	橙	ほぼ完存	
273	3101	土師器 杯	A3	b25	包含層	口縁12.9	ナデ→ヨコナデ	密	橙	口縁1/3	内面油煙痕
274	9002	土師器 杯	A3	a25	包含層	口縁13.4 高3.8	ナデ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/3	内面に黒色炭化物(護摩)?付着
275	6802	土師器 杯	A3	c24	包含層	口縁14.7 高3.55	ナデ→ヨコナデ	粗	橙	口縁2/3	
276	6507	土師器 杯	A3	b29	包含層	口縁16.8	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/10	
277	6605	土師器 杯	A3	b25	包含層	口縁15.8 高3.2	ナデ→ヘラケズリ・ヨコナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/8	
278	3102	土師器 杯	A3	b25	包含層	口縁15.9	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/5	277と同一個体であることが判明
279	10701	土師器 杯	A3	a26	包含層	口縁19.0	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	口縁2/5	
280	6703	土師器 台付杯	A3	b25	包含層	高台12.2 高6.8	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ、貼り付け 高台→高台にヨコナデ	密	浅黄橙	高台4/5	

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
281	5006	土師器 皿	A3	a26	包含層	口縁21.0 高2.9	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	粗	にぶい橙	口縁1/4	
282	12601	土師器 蓋	A3	b25	包含層	口縁22.6 高7.8	ナデ・オサエ→貼付ナデ→ヘラケズリ→ ヘラミガキ	密	赤橙	口縁1/3	
283	6702	土師器 台付杯	A3	b25	包含層	高台15.0	ナデ→ヨコナデ→貼り付け高台→高台に ヨコナデ	密	浅黄橙	高台1/10	
284	15001	土師器 取手付盤	A3	c24・25	包含層	口縁40.2 高13.3	ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ→ヘラミガ キ	密	橙	3/10	
285	3201	土師器 取手付鉢	A3	b25	包含層	口縁24.2	ナデ→貼付ナデ	粗	橙	口縁1/8	
286	5102	土師器 蔊	A3	c25	包含層	口縁28.2	ナデ→ハケメ・ヘラケズリ→ヨコナデ、貼 付ハケメ・ナデ、口縁部4方向に焼成前穿孔	粗	にぶい橙	口縁3/10	
287	3104	土師器 蔊	A3	c25	包含層	口縁22.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/5	外面に煤付着
288	3202	土師器 蔊	A3	b25	包含層	口縁30.2	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	灰白	口縁1/2	
289	9102	灰釉陶器 皿	A3	b28	SK13	高台6.9 高2.7	ロクロナデ→ヘラ切り→貼り付け高台→ 高台にヨコナデ	密	灰白	底完存	内面に重ね焼き痕
290	18504	黒色土器 碗	A3	b27	SK13	口縁15.0	ナデ→ヘラミガキ	密	浅黄橙	口縁1/10	
291	11802	灰釉陶器 皿	A3		包含層	高台9.1	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高 台にヨコナデ	密	灰白	高台1/4	
292	18602	陶器 梶	A3	c28	包含層	高台6.8	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高 台にヨコナデ、高台にモミガラ痕	粗	にぶい黄橙	底1/2	底に墨書あり 内面に炭化物付着
293	4303	土師器 皿	A3	c27	SD16	口縁13.6 高2.5	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	口縁3/8	南伊勢
294	4301	土師器 皿	A3	c27	SD16	口縁13.7 高2.7	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/4	南伊勢
295	5303	陶器 梶	A3	c27	SD16	高台6.4 高5.1	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高 台にヨコナデ	粗	灰白	高台1/2	知多 内面を研磨
296	8001	土師器 鍋	A3	c27	SD16・Pit6	口縁27.2	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケ ズリ	粗	浅黄橙	口縁7/10	南伊勢 外面に煤付着
297	6207	土師器 小皿	A3	b28	SK41	口縁9.0 高1.6	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/6	京都系
298	6210	土師器 皿	A3	b28	SK41	口縁12.5 高2.0	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	口縁1/4	中北勢
299	6302	土師器 鍋	A3	b28	SK41	口縁一	ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁片	南伊勢 外面に煤付着
300	6303	土師質 土錐	A3	b28	SK41	長4.5 直径1.4 重量4.81g		密	橙	完存	
301	18608	加工円盤 陶器 盤	A3	b28	SD20	直径2.3 重量4.23g		密	釉 浅黄		瀬戸
302	18604	陶器 小皿	A3	b28	SD20	口縁12.2	ロクロナデ	密	灰白	口縁1/8	東濃?
303	18501	土師器 鍋	A3	b28	SD20	口縁26.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/10	南伊勢 外面に煤付着
304	2702	五輪塔 空・風輪	A3	b28	SD9 S2						砂岩(井関石)
305	2701	五輪塔 空・風輪	A3	b28	SD20 S1						井関石
306	4406	加工円盤 陶器 蔊 体部	A3	b28	SD9 P14	直径4.2 重量40.9g		密	赤		常滑
307	4407	加工円盤 陶器 練鉢 底部	A3	b28	SD9	直径2.8 重量7.86g		粗	橙		
308	4409	土師質 土錐	A3	b28	包含層	直径3.0 重量31.38		密	浅黄橙	完存	
309	4402	土師器 小皿	A3	b28	SD9 P8	口縁6.8 高1.3	ナデ・オサエ・ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁7/8	南伊勢
310	4403	土師器 小皿	A3	b28	SD9 P5	口縁6.6 高1.2	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	口縁1/2	南伊勢
311	4404	土師器 小皿	A3	b28	SD9 P12	口縁6.7 高1.2	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	口縁1/2	南伊勢
312	4309	土師器 小皿	A3	b28	SD9 P9	口縁6.9 高1.3	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	ほぼ完存	南伊勢
313	4306	土師器 小皿	A3	b28	SD9 P13	口縁7.9 高1.4	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/2	南伊勢 油煙痕
314	4307	土師器 小皿	A3	b28	SD9	口縁6.9 高1.4	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/2	南伊勢
315	4308	土師器 小皿	A3	b28	SD9 P10	口縁6.7 高1.4	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	完存	南伊勢
316	4401	土師器 小皿	A3	b28	SD9 P3	口縁7.0 高1.4	ナデ・オサエ・ヨコナデ	粗	灰白	ほぼ完存	南伊勢
317	4310	土師器 小皿	A3	b28	SD9 P2	口縁7.0 高1.3	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	口縁3/4	南伊勢
318	4304	土師器 小皿	A3	b28	SD9 P6	口縁8.6 高1.6	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	ほぼ完存	南伊勢 器壁が薄い為有孔
319	4302	土師器 皿	A3	b28	SD9 P1	口縁11.8 高2.0	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	ほぼ完存	中北勢?
320	5504	土師器 台付小鍋	A3	b28	SD9	口縁9.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	明褐橙	口縁1/2	

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
321	4305	土師器 皿	A3	b28	SD9 P13	口縁12.2 高3.2	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/8	中北勢
322	4408	片岩 砥	A3	b28	SD9 S1			密	褐灰		
323	4203	土師器 鍋	A3	b28	SD9	口縁27.2	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	浅黄橙	口縁1/10	南伊勢 外面に煤付着
324	5501	陶器 壺	A3	b28	SD9	口縁17.8	ロクロナデ	粗	にぶい橙	口縁片	
325	4201	陶器 摶鉢	A3	b28	SD9 P11	口縁27.6	ロクロナデ→ハケメ・オサエ→ヨコナデ	密	暗赤灰	口縁2/5	瀬戸 大窯
326	4202	陶器 摶鉢	A3	b28	SD9	口縁32.2	ロクロナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰赤	口縁1/12	瀬戸 大窯
327	2808	土師器 皿	A3	c26	SK17 P14	口縁6.0	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	1/10	南伊勢
328	9702	土師器 小皿	A3	c26	SK17	口縁7.0 高1.3	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	1/5	
329	9701	土師器 小皿	A3	c26	SK17	口縁7.0 高1.35	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	3/10	油煙付着
330	16502	土師器 小皿	A3	c26	SK17	口縁8.0	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁2/5	南伊勢
331	6501	土師器 小皿	A3	c26	SK17	口縁8.8 高1.4	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	口縁1/4	南伊勢
332	8105	土師器 小皿	A3	c26	SK17	口縁9.3	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	褐灰	口縁1/4	中北勢
333	6502	土師器 小皿	A3	c26	SK17	口縁9.8 高1.5	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	口縁1/4	中北勢
334	2804	土師器 皿	A3	c26	SK17 P14	口縁10.0 高2.0	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	口縁1/4	中北勢
335	11405	土師器 皿	A3	c26	SK17	口縁13.0	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	にぶい橙	1/10	
336	1203	土師器 皿	A3	c26	SK17	口縁18.6 高2.6	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁1/4	
337	6504	陶器 天目茶碗	A3	c26	SK17	口縁11.0	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉	密	釉 褐	口縁1/5	瀬戸 大窯
338	5007	青磁 梗	A3	c26	SK17	高台5.9	ロクロナデ→糸切り→削り出し高台→施釉(高台・底の一部も)	密	釉 オリーブ灰	底2/3	
339	12802	白磁 皿	A3	c26	SK17	口縁12.1 高2.8	ロクロナデ→削り出し高台→施釉	密	釉 灰白	口縁1/4	
340	15902	土師器 鍋	A3	c26	SK17	口縁27.4	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい橙	口縁1/4	南伊勢
341	1001	土師器 鍋	A3	c26	SK17	口縁22.6	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/10	南伊勢 外面に煤付着
342	16001	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P2	口縁28.9	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい橙	口縁1/3	南伊勢
343	10601	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P9	口縁25.6	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	黄灰	口縁1/10	南伊勢 外面に煤付着
344	8301	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P14	口縁27.6	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	浅黄橙	口縁1/4	南伊勢 外面に煤付着
345	16401	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P3	口縁23.9	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	明褐灰	口縁1/5	南伊勢 外面に煤付着
346	16501	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P3	口縁24.8	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい褐	口縁完存	南伊勢
347	2902	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P8	口縁24.0	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	浅黄橙	口縁1/2	南伊勢 外面に煤付着
348	15901	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P14	口縁22.7	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ	密	浅黄橙	口縁4/5	南伊勢
349	10002	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P6	口縁28.0	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい黄橙	1/3	南伊勢 外面に煤付着
350	16101	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P7	口縁30.2	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	灰白	口縁1/10	南伊勢
351	10001	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P7	口縁29.8	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	浅黄橙	1/3	南伊勢 外面に煤付着
352	16002	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P6・7	口縁33.0	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	灰白	口縁1/4	南伊勢
353	10603	土師器 鍋	A3	c21	SK17 P1	口縁36.8	ナデ→ハケメ・ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/10	南伊勢 外面・口縁内面に煤付着
354	8302	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P14	口縁40.3	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	浅黄橙	口縁1/10	南伊勢 外面に煤付着
355	2901	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P14	口縁41.5	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/5	南伊勢 外面に煤付着
356	1101	土師器 鍋	A3	c26	SK17	口縁37.7	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ	密	淡橙	口縁1/4	南伊勢 外面に煤付着
357	6704	環状鉄製品	A3	c26	SK17	環3.3 直径0.8					
358	5202	加工円盤 陶器 瓢	A3	c27	SK17	直径4.1 重量18.54g		粗	にぶい橙		常滑
359	6701	加工円盤 須恵器 瓢?	A3	c26	SK17	直径4.4 重量26.0g		密	釉 オリーブ灰		
360	403	加工円盤 陶器 練鉢 体部	A3	c26	SK17	直径4.5 重量28.5g		粗	淡黄		常滑

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
361	11404	加工円盤 土師器 台付甕	A3	d26	包含層	直径5.6 重量49.0g		粗	橙		S字状口縁台付甕の脚台を転用
362	5201	加工円盤 瓦or瓦質土器	A3	c26	SK17	直径6.5 重量83.42g		粗	灰		
363	11505	土師器 鍋	A3	c26	SK17 P12	底一		密	浅黄橙	底片	底に穿孔多数
364	304	土師器 茶釜	A3	c26	SK17	口縁13.2	ナデ→ハケメ・ヨコナデ	密	淡黄	口縁1/5	南伊勢
365	16102	土師器 茶釜	A3	c26	SK17 P12	口縁10.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/4	南伊勢
366	10602	土師器 取手付鍋	A3	c26	SK17 P4	口縁9.6 ~10.3	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ、貼付ナデ	粗	にぶい黄橙	口縁3/5	南伊勢 外面に煤付着(取手剝離後も付着)
367	5101	土師器 壺形鍋?	A3	c26	SK17 P15	口縁21.0	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁1/4	南伊勢
368	901	土師器 羽釜	A3	c26	SK17	口縁23.2	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/8	中北勢 外面に煤付着
369	401	土師器 羽釜	A3	c26	SK17	口縁23.2	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	橙	口縁1/6	中北勢 外面に煤付着
370	402	土師器 羽釜	A3	c26	SK17	口縁25.3	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	淡橙	口縁1/8	中北勢 外面に煤付着
371	904	土師器 羽釜	A3	c26	SK17	口縁24.0	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい橙	口縁1/10	中北勢 外面に煤付着
372	13502	土師器 羽釜	A3	c26	SK17 P13	口縁26.4	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	橙	口縁1/2	中北勢 外面に煤付着
373	16402	土師器 羽釜	A3	c26	SK17	口縁28.5	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい橙	口縁1/10	中北勢 外面に煤付着
374	10501	土師器 羽釜	A3	c26	SK17	口縁29.4	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	橙	口縁2/5	中北勢 外面に煤付着
375	903	土師器 羽釜	A3	c26	SK17	口縁26.4	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	橙	口縁1/10	中北勢 外面に煤付着
376	902	土師器 羽釜	A3	c26	SK17	口縁25.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	淡橙	口縁1/6	中北勢
377	303	土師器 羽釜	A3	c26	SK17	口縁29.5	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	橙	口縁1/6	中北勢 外面に煤付着
378	10301	土師器 羽釜	A3	c26	SK17 P10	口縁32.4	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい橙	口縁1/10	中北勢 外面に煤付着
379	3001	土師器 羽釜	A3	c26	SK17 P5	鍔32.0	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	橙	鍔3/8	中北勢 外面に煤付着
380	10201	土師器 羽釜	A3	c26	SK17 P14	口縁31.9	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	橙	口縁1/3	中北勢 外面に煤付着
381	10502	土師器 羽釜	A3	c26	SK17 P11	口縁28.0	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	橙	口縁1/5	中北勢 外面に煤付着
382	13501	土師器 羽釜	A3	c26	SK17 P13	口縁29.4	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	明橙	口縁1/2	中北勢 外面に煤付着
383	19701	水晶 刺片	A4	c14	包含層	長1.74 幅3.43			透明		
384	18104	繩文土器 深鉢	A4	c12	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→ヘラケズリ?→凸帯上に刻目(貝)	粗	橙	口縁片	
385	18202	繩文土器 深鉢	A4	b10	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→条痕・板ナデ(内面)	粗	にぶい橙	口縁片	条痕左手による
386	14705	土師器 高杯	A4	c13	SZ81	口縁28.3	ナデ→ヘラミガキ	密	橙	杯3/10	
387	14706	土師器 高杯	A4	c13	SZ81	脚幅13.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ、3方向透かし	粗	浅黄橙	脚7/10	
388	16701	土師器 壺	A4	c13	SZ81	体最大28.8	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→刺突、外面に赤彩(ベンガラ)	粗	赤褐	体1/6	
389	14703	土師器 壺	A4	c13	SZ81	口縁14.0	ナデ→ハケメ→口縁に羽状文(板)	粗	淡橙	口縁2/5	ハケメは左手による 2次焼成による変色
390	14702	土師器 壺	A4	c13	SZ81	口縁15.4	ナデ→横描文→口縁に棒状浮文→浮文上と口縁内面に刺突(貝)	密	橙	口縁1/20	
391	19601	土師器 壺	A4	c13	SZ81	口縁20.0 頸11.6	ナデ→ハケメ→貼付凸帯→ヨコナデ→凸帯上に刺突(板)	粗	明赤褐	体上半のみ 3/5	
392	14704	土師器 壺	A4	c13	SZ81	口縁15.4	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	橙	口縁9/10	
393	14701	土師器 台付甕	A4	c13	SZ81	口縁12.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→口縁に刺突(板)	密	灰白	口縁3/10	
394	13001	土師器 壺	A4	c15	SE79 P1	口縁15.6	ナデ→ハケメ→ナデ→口縁に刺突(板)	粗	橙	体上半完存	
395	6804	土師器 小形器台	A4	b11	SZ56	口縁7.9	ナデ→ヘラケズリ?→ナデ?	粗	にぶい橙	杯3/10	
396	6805	土師器 小形鉢	A4	b11	SZ56	口縁9.9	ナデ→ヘラケズリ・ヨコナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/10	
397	3706	土師器 高杯	A4	b11	SZ56 P7	脚柱2.6	ナデ・シボリメ→ヨコナデ→ヘラミガキ、3方透かし	密	橙	脚柱3/10	
398	7003	土師器 高杯	A4	b11	SZ56	脚柱10.2 脚高5.9	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ	粗	橙	脚3/10	
399	5903	土師器 台付甕	A4	b12	SZ56	口縁13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁1/8	
400	3702	土師器 台付甕	A4	b11	SZ56 P13+14	口縁13.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁3/10	

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
401	5904	土師器 台付甕	A4	a・b12	SZ56	口縁23.0	ナデ→ヨコナデ	密	にぶい褐	口縁1/2	
402	5902	土師器 壺	A4	b12	SZ56	口縁17.0	ナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁3/10	
403	3704	土師器 壺	A4	b11	SZ56 P4	口縁12.0	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ→体肩部に刺突	粗	橙	口縁1/2	外面に煤付着
404	5905	土師器 壺	A4	b12	SZ56	底3.2	ナデ→ヘラケズリ	密	にぶい橙	底完存	
405	3705	土師器 台付甕	A4	b11	SZ56 P3	脚裾6.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	脚台3/5	
406	13601	土師器 壺	A4	b11	SZ56 P6	口縁27.0	ナデ→ヘラモガキ→口縁に羽状文・擬口縁に刺突(板)、口縁内面に赤彩(ベンガラ)	粗	赤褐	口縁1/10	
407	5901	土師器 壺	A4	b12	SZ56	口縁18.9	ナデ・外面に円形浮文	粗	橙	口縁1/2	
408	3802	土師器 壺	A4	b11	SZ56 P9	口縁18.5	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	粗	にぶい黄橙	口縁1/10	
409	5802	土師器 壺	A4	b12	SZ56	底7.4~8.0	ナデ・オサエ→板状ナデ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	底完存	底外面に砂粒付着
410	3601	土師器 壺	A4	b11	SZ56 P1	底7.7	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラミガキ	粗	浅黄橙	体下半完存	
411	5803	土師器 壺	A4	b12	SZ56	底7.5~8.0	ナデ・オサエ→板状ナデ→ヘラミガキ	粗	にぶい橙	底完存	底外面に砂粒付着
412	13603	土師器 小形鉢	A4	b10	SD55 P1	口縁9.6 高7.1	ナデ→ヘラミガキ、内外面に赤彩(ベンガラ)	密	赤褐	完存	
413	10803	土師器 小形鉢	A4	b10	SD55 P41	口縁12.3	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	粗	にぶい橙	口縁1/3	
414	11202	土師器 小形鉢	A4	c10	SD55	口縁16.2	ナデ→ヘラケズリ→ヨコナデ、内外面に赤彩(ベンガラ)	密	橙	口縁1/5	
415	7306	土師器 小形鉢	A4	b10	SD55 P9	頸12.4	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	密	浅黄橙	体3/10	
416	16905	土師器 小形鉢	A4	b11	SD55 上層	口縁16.0	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/6	
417	16906	土師器 小形鉢	A4	b11	SD55 P31	口縁15.0	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/10	
418	10802	土師器 小形鉢	A4	a10	SD55	口縁13.8	ナデ→ヘラミガキ、口縁外面に赤彩(ベンガラ)	密	橙	口縁1/10	
419	19802	土師器 小形鉢	A4	b10	SD55	口縁16.0	ナデ→ヘラミガキ、内外面に赤彩(ベンガラ)	密	暗赤	口縁1/10	
420	16901	土師器 壺	A4	b11	SD55 P36	口縁13.4 高11.8	ナデ→ヘラケズリ・ハケメ→ヘラミガキ→ヨコナデ	密	にぶい橙	底1/2	
421	13203	土師器 壺	A4	b10	SD55 P15	頸9.1	ナデ→ハケメ、外面と口縁内面に赤彩(ベンガラ)	密	暗赤	体ほぼ完存	
422	17003	土師器 高杯	A4	b11	SD55 上層	脚柱3.9	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	密	にぶい黄橙	脚柱完存	
423	18801	土師器 壺	A4	b10	SD55 P42	口縁16.0 底7.3	ナデ→ハケメ、底に木葉痕	密	橙	底付近ほぼ完存	体焼成後穿孔
424	8903	土師器 壺	A4	b11	SD55上	口縁14.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	橙	口縁1/5	
425	15801	土師器 壺	A4	b10	SD55 P39	口縁14.5	ナデ→ハケメ	粗	にぶい橙	口縁1/2	外面に煤付着
426	9803	土師器 壺	A4	b10	SD55 P16	口縁15.8 高28.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→口縁に刺突	密	橙	口縁3/5	体外面のハケメは左手による
427	12301	土師器 壺	A4	c10	SD55 P17	口縁19.0 高33.0	ナデ・オサエ→板状ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	橙	3/5	底外面に砂付着 外面に炭化物付着
428	7302	土師器 壺	A4	b10	SD55	口縁19.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→羽状文(板)	粗	にぶい橙	口縁1/10	
429	7301	土師器 壺	A4	b10	SD55 P11	口縁17.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→羽状文(板)	粗	橙	口縁1/2	
430	16902	土師器 壺	A4	b11	SD55 P30	口縁17.8	ナデ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	口縁1/10	
431	16903	土師器 壺	A4	c11	SD55	口縁21.0	ナデ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	口縁1/20	
432	7401	土師器 壺	A4	b10	SD55 P4	擬口縁23.0	ナデ→ヘラミガキ	密	浅黄橙	擬口縁1/6	
433	7403	土師器 壺	A4	b10	SD55 P8	底9.8	ナデ?	粗	橙	底完存	
434	7402	土師器 壺	A4	b11	SD55 P6	底8.3	ナデ→ヘラミガキ	粗	にぶい橙	底完存	
435	12002	土師器 甕	A4	c10	SD55 P21・下層	口縁14.6	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ、体肩に木口状の刺突(2カ所残)	密	にぶい橙	口縁1/10	布留形甕 外面に煤付着
436	11901	土師器 甕	A4	c10	SD55 P18・26	口縁15.4	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ、体肩に木口状の刺突(3カ所)	密	橙灰	口縁ほぼ完存	布留形甕 外面に煤付着するが底付近片の外面は磨滅せず
437	15402	土師器 台付甕	A4	b10	SD55 P2	口縁11.6	ナデ→ハケメ	粗	にぶい黄橙	体1/2	脚打ち欠き
438	8201	土師器 甕	A4	b10	SD55 P3	口縁14.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	橙	口縁1/10	
439	19202	土師器 甕	A4	b10	SD55	頸10.7 底4.8	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	浅黄橙	体4/5	内面に炭化物付着 2次焼成による変色著しい
440	17004	土師器 台付甕	A4	b10	SD55	口縁10.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁1/20	

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
441	10801	土師器 台付甕	A4	b10	SD65 P29	口縁10.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄	口縁1/8	
442	9801	土師器 台付甕	A4	b10	SD65 P14	口縁12.0 高19.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄	口縁1/3	外面に煤付着
443	16904	土師器 台付甕	A4	b10	SD55	口縁12.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁1/5	
444	7305	土師器 台付甕	A4	b10	SD65 P19	口縁12.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁1/2	
445	7304	土師器 台付甕	A4	b10	SD65 P7	口縁14.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/3	外面に煤付着
446	5701	土師器 台付甕	A4	b10	SD65 P27	口縁14.4	ナデ→細かいハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁ほぼ完存	ハケメ左手による
447	7901	土師器 台付甕	A4	c10	SD55 P19	口縁18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄	口縁9/10	外面に煤付着
448	5701	土師器 台付甕	A4	b10	SD65 P27	脚接合4.6	ナデ→細かいハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	脚台片	
449	8804	土師器 台付甕	A4	b11	SD65上	脚裾9.3	ナデ	超粗	浅黄橙	脚1/5	~0.6cmの縁を多量含 二次焼成を受ける、摩滅著しい
450	7001	土師器 小形器台	A4	c17	Pit3	脚裾9.8 ~10.2	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ、3方向透かし	密	にぶい赤褐	脚ほぼ完存	
451	9105	土師器 小形器台	A4	b14	SK80上	口縁9.5	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ、3方向透かし	密	橙	口縁ほぼ完存	受部内面に凹凸使用痕
452	3703	土師器 小形鉢	A4	c17	SZ48	口縁15.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヘラミガキ	密	にぶい黄橙	口縁1/5	
453	19801	土師器 小形鉢	A4	c17	SZ48 P7・12	口縁17.8	ナデ→ヘラミガキ、外面と口縁内面に赤彩(ベンガラ)	密	淡赤	類1/5	
454	13101	土師器 高杯	A4	c17	SZ48 P6・8	口縁21.2 高14.9	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ、3方向透かし	密	淡橙	脚4/5	
455	13602	土師器 壺	A4	c17	SZ48 P3	類5.8	ナデ→ヘラミガキ	密	橙	体完存	
456	9201	土師器 台付甕	A4	c17	SZ48 P12	類10.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	類1/10	
457	9301	土師器 台付甕	A4	c17	SZ48 P12	口縁14.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁1/3	外面に煤付着
458	9303	土師器 台付甕	A4	c17	SZ48 P12	口縁15.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁3/4	外面に煤付着
459	9405	土師器 台付甕	A4	c17	SZ48 P12	脚裾 7.5~7.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	脚台7/10	外面に煤付着
460	7404	土師器 台付甕	A4	c17	SZ48 P9	脚裾9.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	脚台完存	
461	7202	土師器 小形鉢	A4	b16	SH63	口縁15.8	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	密	橙	1/10	
462	14404	土師器 小形鉢	A4	c16	SH63	口縁12.4 高5.8	ナデ→ヘラミガキ、内外面に赤彩(ベンガラ)?	密	橙	口縁ほぼ完存	外面に煤付着
463	15302	土師器 壺	A4	c15	SH63 P27	口縁10.2	ナデ→ハケメorヘラケズリ→ヘラミガキ	粗	にぶい橙	口縁1/4	
464	15205	土師器 壺	A4	c16	SH63 P17	類8.6	ナデ→ヘラミガキ	粗	浅黄橙	体下半1/3	
465	16203	土師器 小形器台	A4	c15	SH63	口縁9.8	ナデ	密	にぶい橙	杯1/3	受部内面に凹凸使用痕
466	15201	土師器 高杯	A4	c15	SH63 P22	脚柱2.1	ナデ、3方向透かし	粗	橙	脚柱完存	
467	14402	土師器 小形器台	A4	c15	SH63 P23	口縁10.8 高8.9	ナデ→ハケメ→ヨコナデ、3方向透かし、 脚裾に植物敷着	密	橙	3/4	受部内面凹凸使用痕 脚内面に爪痕
468	15303	土師器 鉢	A4	c17	SH63 P11	口縁17.6 ~17.8	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	9/10	
469	14401	土師器 鉢	A4	c16	SH63 P15	口縁18.9 高9.7	ナデ→ヘラミガキ	粗	にぶい橙	ほぼ完存	
470	19302	土師器 鉢	A4	c15	SH63 P28	口縁18.8 高9.3	ナデ→板ナデ	粗	橙	3/5	
471	9202	土師器 壺	A4	c15	SH63 下SD	類5.6	ナデ→ヘラミガキ、貼付凸带上に羽状文、 口縁に竹管文・棒状浮文	密	橙	類1/4	
472	16205	土師器 壺	A4	b16	SH63 P5	類5.1	ナデ	粗	淡橙	底完存	
473	16201	土師器 壺	A4	c17	SH63	口縁16.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	褐灰	口縁1/2	
474	15401	土師器 壺	A4	c16	SH63 P29	類11.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	密	橙	類完存	
475	16301	土師器 壺	A4	b16	SH63 P6	口縁16.2 底8.3	ナデ	粗	橙	底完存	底内外面に砂付着
476	18701	土師器 壺	A4	c16	SH63 P32	底9.7	ナデ	粗	にぶい橙	体下半9/10	
477	17801	土師器 壺	A4	b16	SH63 P6	類9.6 底6.8~7.0	ナデ→ヘラミガキ	粗	にぶい橙	7/10	口縁打ち欠き、体焼成後穿孔 底外面に砂付着
478	10401	土師器 壺	A4	b16	SH63 P9	底7.5	ナデ・オサエ→板状ナデ	粗	にぶい橙	底ほぼ完存	口縁打ち欠き 底内面に砂粒付着
479	14901	土師器 壺	A4	c16	SH63 P16・14	口縁23.2	ナデ→ヘラミガキ、体外面に赤彩(ベンガラ)?	密	浅黄橙	7/10	
480	16202	土師器 壺	A4	c16	SH63 P21・26	口縁15.4	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	粗	にぶい橙	口縁2/3	外面に煤付着

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
481	15206	土師器 蓋	A4	b15	SH63 P13	口縁13.8	ナデ→ハケメ	粗	橙	口縁1/4	外面に煤付着
482	11902	土師器 蓋	A4	c16	SH63	口縁14.4	ナデ→ヨコナデ	密	淡橙灰	口縁1/10	布留形甕 外面に煤付着
483	14403	土師器 台付甕	A4	c16	SH63 P30	口縁9.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰黄	上半ほぼ 完存	外面と口縁内面に煤付着
484	16602	土師器 台付甕	A4	c16	SH63 P33	口縁11.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/4	
485	16604	土師器 台付甕	A4	c16	SH63 P33	口縁14.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/4	
486	16204	土師器 台付甕	A4	c16	SH63 P21	口縁14.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄	口縁1/4	
487	16605	土師器 台付甕	A4	c16	SH63 P33	口縁15.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/3	
488	15501	土師器 台付甕	A4	b15	SH63 P10	口縁14.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰白	口縁1/5	外面に煤付着 内面に炭化物付着
489	15301	土師器 台付甕	A4	c16・17	SH63 P31	口縁14.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	口縁3/5	外面に煤付着
490	15202	土師器 台付甕	A4	b16	SH63 P7	脚裾7.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	脚台ほぼ 完存	外面に煤付着 2次焼成による変色
491	15203	土師器 台付甕	A4	c16	SH63 P24	脚裾9.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	脚台4/5	外面に煤付着 2次焼成による変色
492	7005	土師器 台付甕	A4	c17	SH63	脚裾7.7 ~8.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	脚台ほぼ 完存	
493	16601	土師器 台付甕	A4	c16	SH63 P33	脚裾7.3 ~7.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰黄褐	脚台ほぼ 完存	
494	15204	土師器 台付甕	A4	c16	SH63 P18	脚裾7.6 ~7.9	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	脚台2/5	2次焼成による変色
495	7203	土師器 台付甕	A4	c16	SK60 P3	口縁16.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	橙	口縁1/5	
496	7102	土師器 台付甕	A4	c16	SK60 P1	口縁12.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	口縁1/3	外面に煤付着
497	7004	土師器 台付甕	A4	c16	SK60 P4	脚裾9.1 ~9.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	脚台ほぼ 完存	内面に炭化物付着
498	9502	土師器 壺	A4	c16	SK60	体最大14.6	ナデ	粗	にぶい橙	体上半完存	
499	18507	土師器 小形鉢	A4	b13	包含層	口縁9.4	ナデ→ヘラミガキ、内外面に赤彩(ベンガラ)	密	赤	口縁1/5	
500	11308	土師器 壺	A4	b14	包含層	口縁12.0	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ、外面と 口縁内面に赤彩(ベンガラ)	粗	明赤褐	口縁1/8	
501	11309	土師器 高杯?	A4	b17	包含層	脚柱2.3	ナデ→ヘラミガキ、外面に赤彩(ベンガラ)	密	赤	脚柱片	
502	7303	土師器 蓋	A4	c11	包含層	口縁14.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	橙	口縁1/4	外面に煤付着
503	12903	土師器 蓋	A4	c12	包含層	口縁14.6	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	淡褐	口縁1/3	布留形甕 外面に煤付着
504	9003	土師器 壺	A4	b15	包含層	口縁一	ナデ	密	にぶい橙	口縁片	
505	2802	土師器 壺	A4	c11	包含層	口縁21.0	ナデ→ヘラミガキ	密	にぶい黄橙	口縁3/10	
506	1104	土師器 壺	A4	b・c12	包含層	口縁16.5	ナデ・オサエ→ヘラミガキ	粗	浅黄橙	口縁1/20	
507	3801	土師器 台付甕	A4	b14	包含層	口縁24.0	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/10	
508	3701	土師器 台付甕	A4	b・c13	包含層	口縁14.2	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁1/4	
509	4103	須恵器 杯蓋	A4	b17	SH49	摘2.9	貼付ナデ	密	青灰	摘ほぼ完存	
510	4105	須恵器 杯身	A4	b17	SH49	口縁13.6	回転ナデ	密	灰	口縁1/10	
511	4004	土師器 杯	A4	a17	SH49 P15	口縁13.7 高3.8	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/3	
512	4003	土師器 杯	A4	b17	SH49 P6	口縁13.4 高3.9	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/3	内面に有機物付着
513	2805	土師器 杯	A4	a17	SH49	口縁13.9 高3.7	ナデ・オサエ→ヘラケズリ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁1/3	内面に煤付着
514	4002	土師器 皿	A4	b17	SH49 P9	口縁17.6 高4.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	浅黄橙	口縁1/6	
515	6002	土師器 杯	A4	b17	SH49 P14	口縁16.0 高5.2	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	淡橙	口縁1/3	
516	4001	土師器 皿	A4	b17	SH49 P11	口縁18.4 高2.7	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	橙	口縁3/4	
517	6001	土師器 皿	A4	a17	SH49 P17	口縁17.0 高2.5	ナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/3	
518	8602	須恵器 壺	A4	b17	SH49	口縁25.6	回転ナデ→カキメ	密	灰	口縁3/20	
519	6004	土師器 壺	A4	b17	SH49 P12・13	口縁11.5 高11.7	ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼り付け高台 →高台にヨコナデ	粗	橙	口縁1/3	
520	4005	土師器 蓋	A4	b17	SH49 P10	口縁11.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁3/10	外面に煤付着

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
521	6003	土師器 壺	A4	a17	SH49 P16	口縁15.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	淡黄	口縁ほぼ完存	
522	8601	土師器 壺	A4	b17	SH49 P4	口縁23.4 ～23.9	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁完存	
523	8502	土師器 壺	A4	a18	SH49 東カマド	口縁22.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/3	
524	8501	土師器 壺	A4	b17	SH49 P5	口縁24.0	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	明褐灰	口縁1/20	外面に煤付着
525	8401	土師器 風	A4	b17	SH49 P7	口縁25.8	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ、5方+1孔、取手は貼り付け	密	浅黄橙	口縁1/2	
526	18301	土師器 瓶	A4	b17	SH49 P7・8	上端24.0 高32.0	ナデ→ハケメ→貼付ナデ	密	灰白	上端1/2	
527	16803	土師器 製塙土器	A4	b17	Pit3	口縁－	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁片	外面に煤付着
528	16606	土師器 製塙土器	A4	b17	Pit3	底付近－	ナデ・オサエ	粗	橙	底付近片	
529	7101	土師器 壺	A4	b18	Pit2(SH49下)	口縁23.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄	口縁1/4	
530	1103	土師器 壺	A4		包含層	口縁17.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁1/4	
531	4804	須恵器 杯蓋	A4	c12	包含層	口縁14.0 高2.4	回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ	密	淡黄	口縁1/6	内面2次焼成を受ける
532	4104	須恵器 杯身	A4	b・c13	包含層	高台14.1 高4.4	回転ナデ→貼り付け高台→高台にヨコナデ	密	灰	高台1/6	
533	4102	須恵器 俵瓶	A4		包含層	口縁12.4	回転ナデ→タタキ	密	灰	口縁3/10	内面に自然釉付着
534	6204	土師器 小皿	A4	b16	SD25	口縁5.2	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/2	中北勢
535	6208	土師器 小皿	A4	b16	SD25	口縁7.9 高1.6	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	口縁3/8	中北勢
536	6202	土師器 小皿	A4	b16	SD25	口縁9.3 高1.9	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	ほぼ完存	中北勢
537	17002	土師器 皿	A4	a14	SD25	口縁12.1 高2.1	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/3	中北勢
538	4806	青磁 香炉	A4	b15	SD25	口縁8.8 高5.4	ロクロナデ→貼付ナデ→施釉	密	釉 オリーブ灰	口縁1/6	足1カ所のみ残
539	6401	土師器 鍋	A4	b16	SD25	口縁30.4	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい橙	口縁3/10	南伊勢 外面に煤付着
540	6201	土師器 小皿	A4	b10	SD27	口縁6.6～6.9 高1.4	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁3/4	南伊勢
541	6203	土師器 小皿	A4	c10	SD27	口縁9.8 高2.1	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	口縁1/2	中北勢
542	2806	土師器 壺	A4	c10	SD27	口縁－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁片	
543	6301	瓦質 火鉢?	A4	b10	SD27	高台－	ナデ→ヘラミガキ	密	灰白	高台片	
544	6209	陶器 天目茶碗	A4	c10	SD27	口縁12.2 高5.5	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉 高台は削り出し	密	釉 黒	口縁3/8	瀬戸
545	6211	陶器 天目茶碗	A4	c10	SD27	口縁11.7	ロクロナデ→ロクロケズリ→施釉	密	釉 赤褐	口縁3/4	瀬戸
546	2801	土師器 羽釜	A4	c10	SD27	鈎27.1	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	橙	鈎1/4	中北勢 外面に煤付着
547	6305	平瓦	A4	b10	SD27		ナデ	粗	灰		
548	6304	加工円盤 陶器 壺	A4	c10	SD27	直径4.3 重量21.77g	打ち欠き→研磨	粗	橙		常滑
549	6404	加工円盤 陶器 天目茶碗	A4	c10	SD27	直径4.9 重量33.11g		密	釉 黒褐		瀬戸
550	11604	陶器 皿	A4	b16	SE29 挖形	底4.3	ナデ→糸切り	粗	灰白	底7/10	
551	11803	陶器 梗	A4	a・b16	SE29	高台7.6	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ、高台にモミガラ痕	粗	灰白	高台1/2	知多 底に墨書きあり
552	11702	陶器 すり鉢	A4	a・b16	SE29	口縁－	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	暗赤灰	口縁片	
553	11603	土師器 鍋	A4	b16	SE29 挖形	口縁－	ナデ→ヨコナデ	粗	明褐灰	口縁片	南伊勢 外面に煤付着
554	6206	土師器 皿	A4	b18	SK31	口縁10.4 高1.8	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁5/8	南伊勢
555	6205	土師器 皿	A4	b18	SK31	口縁12.9 高2.2	ナデ・オサエ・ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/3	中北勢
556	6402	土師器 鍋	A4	b18	SK31	口縁23.8	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/5	南伊勢 外面に煤付着・内面に炭化物付着
557	17006	土師器 鍋	A4	a19	SE34	口縁－	ナデ→ヨコナデ	密	黄灰	口縁片	南伊勢
558	17005	土師器 羽釜	A4	a19	SE34	口縁－	ナデ→ヨコナデ	密	灰白	口縁片	南伊勢
559	11703	青磁 梗	A4	b・c17	SE30 挖形	口縁14.2	ロクロナデ→施釉	密	釉 オリーブ黄	口縁1/20	
560	11704	青白磁 梗	A4	b・c17	SE30 挖形	高台5.0	ロクロナデ→削り出し高台→施釉	密	釉 灰白	底1/3	

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
561	1102	土師器 羽釜	A4	c17	SE30	口縁25.6	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁1/6	中北勢 外面に煤付着
562	703	土師器 羽釜	A4	c17	SE30	口縁31.5	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい橙	口縁3/10	中北勢 外面に煤付着
563	801	土師器 鍋	A4	c17	SE30	口縁37.8	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	明褐灰	口縁1/5	南伊勢 外面に煤付着
564	5801	土師器 羽釜	A4	b・c18	SE33	口縁29.7	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	にぶい橙	口縁1/2	中北勢 外面に煤付着
565	11804	陶器 梶	A4	c18	SE33	高台6.8	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ、高台にモミガラ痕	粗	灰白	高台1/4	知多 底に墨書きあり、未使用
566	11605	土師器 鍋	A4	b15	包含層	重量0.51g		密	浅黄橙	3/5	南伊勢
567	2807	土師器 鍋	A4	b14	包含層	口縁一	ナデ→ヨコナデ	密	灰白	口縁片	
568	2807	土師器 鍋	A4	b14	包含層	口縁一	ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁片	
569	4101	陶器 練鉢	A4	b・c17	包含層	底12.4 高9.8	ナデ・オサエ→ヘラケズリ→ヨコナデ	粗	にぶい赤褐	底1/6	常滑
570	9302	土師器 壺	A5	b7	SD54	口縁20.4	ナデ→ヘラミガキ、外面に赤彩(ベンガラ)	粗	橙	口縁1/20	
571	13202	土師器 壺	A5	b5	SD54	口縁12.6 高16.8	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描文、口縁に棒状浮文(2本単位3方向?) 内外面に赤彩(ベンガラ)	密	淡橙	ほぼ完存	
572	9107	土師器 台付甕	A5	b4	SD54	口縁一	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→口縁に刺突(板)	粗	淡黄	口縁片	
573	13201	土師器 台付甕	A5	b4	SD54	口縁18.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→口縁に刺突(板)	密	灰白	口縁1/5	
574	6902	土師器 台付甕	A5	b4	SD54	頸17.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ→口縁に刺突(板)	粗	淡黄	頸1/10	
575	6901	土師器 台付甕	A5	b4	SD54	口縁22.8	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ→口縁に刺突(板)	粗	灰白	口縁1/8	
576	6905	須恵器 杯蓋	A5	b4・5	SH52・53	口縁16.7	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	口縁1/4	
577	7201	須恵器 杯身	A5	b4・5	SH52・53	口縁16.8	回転ナデ	密	黄灰	口縁1/2	
578	302	土師器 皿	A5	b4・5	SH52・53	口縁19.9 高2.7	ヘラケズリ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/3	
579	6603	土師器 梶	A5	a5	SH53	口縁13.7	ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	橙	口縁2/5	
580	6903	土師器 梶	A5	a5	SH53	口縁13.2	ナデ・オサエ→工具ナデ→ヨコナデ	粗	橙	口縁1/3	
581	6101	土師器 甕	A5	a5	SH53 P1	口縁27.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙	口縁1/4	
582	17305	須恵器 杯蓋	A5	b5・6	SE50	摘3.1	貼付ナデ	密	灰白	摘完存	
583	8106	須恵器 杯蓋	A5	b5・6	SE50	口縁18.8	回転ナデ、外面灰かぶり	粗	灰	口縁1/8	
584	17302	須恵器 杯身	A5	b5・6	SE50	口縁16.0 高3.1	回転ナデ→回転ケズリ→貼付高台→高台にヨコナデ	密	灰白	口縁1/10	
585	17303	須恵器 杯身	A5	b5・6	SE50	口縁17.0	回転ナデ	密	灰白	口縁1/5	
586	17301	須恵器 杯身	A5	b5	SE50	口縁15.9 高4.0	回転ナデ→回転ケズリ→貼付高台→高台にヨコナデ	密	灰	口縁1/10	
587	8104	土師器 杯	A5	b5・6	SE50	口縁13.3 高3.0	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/5	
588	8101	土師器 杯	A5	b5	SE50	口縁11.3 高3.4	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁2/3	
589	17204	土師器 杯	A5	b5・6	SE50	口縁14.0	ナデ→ヘラミガキ	密	黄橙	口縁1/3	
590	8103	土師器 杯	A5	b5	SE50	口縁12.1 高3.15	ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	口縁1/4	外面に煤付着 内面に煤or炭化物付着
591	17202	土師器 皿	A5	b5・6	SE50	口縁15.0 高2.8	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	密	橙	口縁1/4	
592	17201	土師器 杯	A5	b5・6	SE50	口縁14.8 高5.1	ナデ→貼付高台→高台にヨコナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁2/5	
593	17203	土師器 杯	A5	b5・6	SE50	高台12.2	ナデ→貼付高台→高台にヨコナデ→ヘラミガキ	密	橙	高台1/6	
594	8102	土師器 皿	A5	b5	SE50	口縁18.9 高2.5	ナデ・オサエ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	淡橙	口縁1/5	
595	17102	土師器 甕	A5	b5・6	SE50	口縁13.7 高11.0	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	灰黄褐	口縁1/2	外面に煤付着
596	8203	土師器 甕	A5	b5	SE50	口縁15.0	ナデ・オサエ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	浅黄橙	口縁1/4	口縁内面と外面に煤付着 体内面に炭化物付着
597	9501	土師器 甕	A5	b5	SE50	口縁16.6	ナデ→ハケメ・ヨコナデ→ヘラケズリ	密	灰褐	口縁1/5	
598	17205	土師器 甕	A5	b5・6	SE50	口縁17.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/5	
599	8202	土師器 甕	A5	b5	SE50	口縁16.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/4	
600	8204	土師器 甕	A5	b5	SE50(掘形)	口縁26.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/5	外面に煤付着

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
601	3406	土師器 杯	A5	b5	包含層	口縁一	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	橙	口縁片	
602	6806	須恵器 杯身	A5	b6	包含層	高台11.5 高4.2	回転ナデ→回転ケズリ→貼り付け高台→ 高台にヨコナデ	密	灰白	高台2/5	
603	17304	陶器 小皿	A5	b7	SD43	口縁12.2 高2.3	ロクロナデ→削り出し高台→施釉	密	釉 オリーブ黄	口縁3/10	志野
604	6907	加工円盤 陶器 覆	A5	b6・7	SD43	直径4.6 重量37.4g		粗	灰赤		常滑
605	9704	土師質 土鍤	A5	b6・7	SD43	長4.9 直径2.1 重量18.77g		密	にぶい橙	ほぼ完存	
606	9005	結晶片岩 打製石斧	B3	f54	包含層						
607	18109	繩文土器 深鉢	B3	g51	包含層	口縁一	ナデ→ヘラケズリ	粗	灰	口縁片	
608	18102	繩文土器 深鉢	B3	f・g50	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→条痕→凸帯上に刻目(貝)	粗	灰白	口縁片	
609	18007	繩文土器 深鉢	B3	f51	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→凸帯上に刻目(ヘラ)	粗	にぶい褐	口縁片	外面に煤付着
610	18008	繩文土器 深鉢	B3	f・g51	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	橙	口縁片	
611	18006	繩文土器 深鉢	B3	f・g51	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→ヨコナデ	粗	褐	口縁片	外面に煤付着
612	18101	繩文土器 深鉢	B3	f・g51	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→条痕	粗	淡黄	口縁片	
613	18103	繩文土器 深鉢	B3	f・g51	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→ヨコナデ	粗	灰黄褐	口縁片	
614	18201	繩文土器 深鉢	B3	f・g51	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→条痕orヘラケズリ?→ ナデ→凸帯上に刻目(貝)	粗	黑褐	口縁片	
615	18107	繩文土器 深鉢	B3	f・g52	包含層	肩凸帯一	ナデ→貼付凸帯→ヘラケズリ→凸帯上に 刻目(不明)	粗	灰褐	肩凸帯片	外面に煤付着
616	18002	繩文土器 深鉢?	B3	f・g53	包含層	口縁一	ナデ+オサエ→ヨコナデ	粗	灰褐	口縁片	外面に煤付着
617	18009	繩文土器 深鉢	B3	f・g52	包含層	口縁一	ナデ→貼付凸帯→ヨコナデ	粗	にぶい褐	口縁片	
618	18001	繩文土器 深鉢	B3	f55	包含層	口縁27.6	ナデ+オサエ→貼付凸帯→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁1/8	外面に煤付着
619	18003	繩文土器 深鉢?	B2	c59	包含層	底6.6	ナデ+オサエ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	底1/3	
620	18004	繩文土器 深鉢?	B3	f・g51	包含層	底5.6	ナデ+オサエ→ヨコナデ	粗	橙	底1/10	外面に煤付着
621	18005	繩文土器 深鉢?	B3	g51	包含層	底8.0	ナデ→条痕	粗	浅黄橙	底1/3	
622	17404	土師器 台付甕	B3	f50	SH76 P1	脚裾6.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰褐	脚台1/3	
623	14504	軽石 低石	B3	f・g50	SH76	長11.3 重量135.56g					刃物痕は1面のみ、面単位の研磨は 多面にわたる
624	10806	土師器 壺	B2	d72	Pit1	頸8.2	ナデ	密	にぶい橙	頸1/5	
625	17403	土師器 高杯	B2	c50・51	SH109	脚柱2.2	ナデ→ハケメ→ヘラケズリ	粗	にぶい橙	脚柱完存	
626	14502	土師器 台付甕	B3	g25	SH95	口縁16.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/10	
627	18407	土師器 台付甕	B3	f53	SK82	口縁12.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/8	
628	18506	土師器 小形鉢	B3	f・g53	SH78	頸9.6	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	密	橙	頸1/5	内面に炭化物付着
629	18603	土師器 小形器台	B3	f・g52	SH78	脚柱2.8	ナデ→ヘラミガキ→杯に刺突	密	橙	脚柱完存	
630	18502	土師器 壺	B3	f・g53	SH78	口縁20.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁片	
631	17406	土師器 台付甕	B3	f・g52	SH78	口縁一	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	褐灰	口縁片	
632	18405	土師器 台付甕	B3	f・g53	SH78	口縁14.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	口縁1/7	
633	201	土師器 台付甕	B2		SH84	口縁18.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/4	外面に煤付着 試掘時出土
634	17604	土師器 壺	B2	c67	包含層	口縁16.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→口縁内外面に 羽状文(板)	粗	橙	口縁1/8	
635	17402	土師器 台付甕	B2	c69	包含層	脚裾6.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	橙	脚台1/2	
636	17503	土師器 鉢	B3	f57	SH96 P2	口縁13.0 高5.3	ナデ→ヘラケズリ	粗	橙	ほぼ完存	口縁部片口 外面に煤付着
637	17603	土師器 高杯	B3	f57	SH96	脚柱3.8	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ、3方向透 かし	粗	橙	脚柱完存	
638	17502	土師器 台付甕	B3	f57	SH96	口縁18.3	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→口縁に刺突 (板)	粗	淡黄	口縁1/4	外面に煤付着
639	16603	土師器 台付甕	B3	f57	SH96 Pit1	口縁12.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	淡黄	口縁1/4	
640	12501	土師器 壺	B3	f57	SH96 P1	口縁13.8 高25.6	ナデ→ヘラケズリ→板状ナデ→ヨコナデ →ヘラミガキ→貼付ナデ→拂描文	粗	浅黄橙	完存	2カ所に穿孔、研磨あり

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
641	12001	土師器 高杯	B2	b71	SH83 P5	口縁29.2	ナデ→ヨコナデ→ヘラミガキ	密	浅黄橙	杯下半1/4	外面に煤付着
642	19301	土師器 壺	B2	b71	SH83 P2	口縁20.6	ナデ→ヘラミガキ→ヨコナデ	密	橙	口縁3/5	
643	19303	土師器 壺	B2	b72	SH83 P8	底8.0	ナデ・オサエ→ハケメ	粗	橙	底完存	被熱による変色
644	10805	土師器 壺	B2	b72	SH83	口縁18.2	ナデ→ヨコナデ→口縁に刺突	粗	にぶい橙	口縁1/10	
645	19401	土師器 台付壺	B2	b71	SH83 P7	口縁10.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰白	口縁2/5	外面に煤付着
646	19501	土師器 台付壺	B2	b71	SH83 P6	口縁13.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁1/5	外面に煤付着
647	10704	土師器 台付壺	B2	b72	SH83	口縁17.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	口縁1/5	外面に煤付着
648	19403	土師器 台付壺	B2	b71	SH83 P4	口縁15.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰白	口縁1/8	
649	19402	土師器 台付壺	B2	b71	SH83 P3	頸14.9	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	頸1/8	外面に煤付着
650	14603	砂岩? 叩き石	B2	c69	SH73 P13	厚5.6 重量470.8g					被熱による劣化
651	14601	土師器 ミニチュア土器	B2	b69	SH73 P51	口縁4.8 ~5.2	ナデ・オサエ	粗	橙	ほぼ完存	
652	13701	土師器 小形鉢	B2	c68	SH73 P27上	口縁10.5 高6.1	ナデ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	5/6	
653	14602	土師器 小形鉢	B2	b69	SH73上	口縁11.0	ナデ	密	灰黄	1/5	
654	14002	土師器 小形鉢	B2	b69	SH73 P55	口縁11.2 高6.8	ナデ→ヘラミガキ	粗	黄橙	1/2	
655	14004	土師器 小形鉢	B2	c68	SH73 P22	口縁10.1 高9.4	ナデ→ヨコナデ→ヘラケズリ→ナデ	密	橙	ほぼ完存	
656	11301	土師器 壺	B2	b70	SH73上	口縁15.5	ナデ→ヘラミガキ、内外面に赤彩(ベンガラ)	粗	橙	口縁1/5	
657	14003	土師器 壺	B2	c69	SH73 P7	頸5.4	ナデ→ヘラミガキ	密	にぶい黄橙	体完存	
658	13702	土師器 小形器台	B2	c68	SH73 P27	口縁10.1 高8.9	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ、3方向透かし	密	橙	9/10	
659	14101	土師器 小形器台	B2	c69	SH73 P1	脚裾12.0	ナデ・シボリメ→ヘラケズリ→ナデ、3方向透かし	密	にぶい橙	脚3/5	
660	14102	土師器 小形器台	B2	c69	SH73 P2	脚裾11.6	ナデ、3方向透かし	粗	浅黄橙	脚7/10	
661	13902	土師器 高杯	B2	c68	SH73 P24	口縁12.2 高11.5	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ、3方向透かし、脚内外面に赤彩(ベンガラ)	密	明赤褐	4/5	
662	14001	土師器 高杯	B2	c68	SH73 P30	口縁22.0	ナデ→ヘラミガキ	粗	橙	口縁1/5	
663	14202	土師器 高杯	B2	c69	SH73 P34	口縁21.8	ナデ→ヘラミガキ	密	明赤褐	口縁1/20	
664	13901	土師器 高杯	B2	c68	SH73 P26	口縁19.1 高13.6	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ、3方向透かし、脚裾に植物痕付着	密	橙	ほぼ完存	脚内面に爪痕
665	14103	土師器 高杯	B2	c69	SH73 P15	脚柱4.0	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描文、3方向透かし	粗	明赤褐	脚柱完存	
666	14104	土師器 高杯	B2	c69	SH73 P49	脚柱4.1	ナデ→ヘラミガキ→櫛描文、3方向透かし	密	橙	脚柱完存	
667	14105	土師器 高杯	B2	c68	SH73 P25	脚柱3.4	ナデ・シボリメ→ヘラミガキ、透かし1カ所のみ残存	粗	浅黄橙	脚柱完存	
668	14106	土師器 高杯	B2	c69	SH73 P18	脚柱3.8	ナデ・シボリメ→ハケメ→ヘラミガキ、3方向透かし	粗	橙	脚柱完存	
669	13905	土師器 壺	B2	c70	SH73 P61	口縁15.0	ナデ→ハケメ	粗	浅黄橙	口縁1/4	
670	19203	土師器 壺	B2	c69	SH73 P46	口縁12.9	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ	密	淡橙	口縁ほぼ完存	
671	13903	土師器 壺	B2	c68	SH73 P20	頸8.8	ナデ	粗	橙	頸3/4	
672	14008	土師器 壺	B2	c70	SH73 P58	口縁14.2	ナデ	粗	浅黄橙	口縁ほぼ完存	
673	13904	土師器 壺	B2	c70	SH73 P59	頸8.8	ナデ→ハケメ→ヘラミガキ→櫛描文→口縁内外面に羽状文(板)	粗	浅黄橙	頸完存	
674	14007	土師器 壺	B2	c70	SH73 P21	口縁13.9	ナデ→ハケメ、口縁に棒状浮文→浮文上に刺突(板)、貼付凸带上に羽状文(板)	密	橙	口縁7/10	
675	14006	土師器 壺	B2	c70	SH73	口縁20.2	ナデ→ハケメ→口縁に棒状浮文→浮文上に刺突(棒)	粗	浅黄橙	口縁1/10	
676	16801	土師器 壺	B2	b69	SH73 P37	体最大28.0	ナデ→櫛描文	粗	明黄褐	体1/6	
677	18901	土師器 壺	B2	c68	SH73 P28	頸10.0 底7.8	ナデ→ヘラケズリ→ハケメ	粗	にぶい赤褐	体ほぼ完存	
678	16802	土師器 壺	B2	c69	SH73 P48	底9.4	ナデ→ハケメ、底外面に木葉痕	密	橙	底3/10	
679	14302	土師器 台付壺	B2	c69	SH73 P11	口縁12.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁4/5	2次焼成による変色著しい
680	14201	土師器 台付壺	B2	c69	SH73 P36	口縁12.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	灰白	口縁1/2	2次焼成による劣化・変色著しい

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
681	19201	土師器 台付甕	B2	c68	SH73 P29	口縁12.6 高17.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	1/2	
682	14304	土師器 台付甕	B2	c69	SH73 P11・10	口縁13.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	浅黄	口縁4/5	外面に煤付着 2次焼成による変色著しい
683	14303	土師器 台付甕	B2	c69	SH73 P11	口縁14.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/2	
684	14301	土師器 台付甕	B2	c69	SH73 P11・5	口縁16.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	口縁3/5	外面に煤付着
685	19001	土師器 台付甕	B2	b68	SH73 P33	口縁21.4	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白	体2/5	外面に煤付着
686	14005	土師器 台付甕	B2	c69	SH73 P4	脚幅9.6	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	脚台完存	体底に砂粒付着 外面に煤付着、内面に炭化物付着
687	10903	須恵器 杯蓋	B2	b71	SH70	口縁11.5	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰	1/20	
688	9402	須恵器 杯蓋	B2	b70	SH70	口縁13.4	回転ナデ	密	灰	口縁1/9	
689	19304	須恵器 杯蓋	B2	b71	SH70 P1	口縁14.5 高3.8	回転ナデ→回転ケズリ→内面の一部ヘラケズリ	粗	明青灰	2/5	
690	10904	須恵器 杯身	B2	b70	SH70	口縁11.4	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰	口縁1/4	
691	9401	須恵器 杯蓋	B3	f63	SH98上	口縁13.6	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰	口縁1/3	
692	9204	土師器 台付甕	B3	f63	SH98上	口縁15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	口縁1/10	外面に煤付着
693	17601	土師器 台付甕	B3	f63	SH98	口縁15.0	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/4	
694	17501	土師器 台付甕	B3	f63	SH98	口縁18.7	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙	口縁1/2	外面に煤付着
695	10702	土師器 鉢	B3	f55	SD99・100	口縁17.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/2	
696	17504	土師器 高杯	B3	f55	SD99 P1	口縁13.2	ナデ→ヘラミガキ	粗	橙	杯1/4	
697	17505	土師器 台付甕	B3	f55	SD99 P2	脚幅11.1	ナデ→ハケメ→ヨコナデ→ヘラケズリ	粗	淡橙	脚台1/3	2次焼成による劣化著しい
698	17401	須恵器 杯身	B2	c69	SK102 P2	口縁10.5	回転ナデ→回転ケズリ→ヘラ切り	粗	灰	口縁1/2	
699	17405	土師器 台付碗?	B2	c69	SK102 P3	脚幅7.1	ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	脚台ほぼ完存	
700	17602	土師器 甕	B2	c69	SK102	口縁13.5	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙	口縁1/8	内面に炭化物付着 2次焼成による劣化著しい
701	9203	瓦器 梗	B2	c・d52	SE75	口縁一	ナデ→ヘラミガキ	密	灰	口縁片	
702	9403	灰釉陶器 盆	B2	c・d52	SE75	高台6.9	ロクロナデ→貼り付け高台→高台にヨコナデ	密	灰白	高台3/10	内面を研磨
703	9305	陶器 梗	B2	c・d52	SE75	高台7.6	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ、高台にモミガラ痕	粗	灰白	高台1/2	猿投 内面に重ね焼き痕
704	1303	陶器 盆	試掘 No.13			口縁10.5 高1.8	ロクロナデ→貼り付け高台→高台にヨコナデ→施釉	密	染付 暗青灰	完存	
705	702	須恵器 杯蓋	試掘 No.28			口縁15.4 高2.8	回転ナデ→回転ケズリ→貼付ナデ	粗	灰	口縁1/2	
706	602	土師器 壺	試掘 No.23			口縁8.2	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	浅黄橙	口縁1/4	
707	101	土師器 小皿	試掘 No.30			口縁10.1 高1.6	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	4/5	中北勢
708	105	瓦器 梗	試掘 No.30			口縁一	ナデ→ヘラミガキ	密	灰	口縁1/20	
709	501	陶器 小皿	試掘 No.30			高台5.0 高2.75	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	粗	灰白	高台完存	内面を研磨
710	805	陶器 梗	試掘 No.30			高台7.9	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ、高台部にモミガラ痕	密	灰白	高台ほぼ完存	知多・猿投 内面にやや墨痕・研磨
711	502	ロクロ土師器 小皿	試掘 No.31			底5.1 高1.5	ロクロナデ→糸切り	密	浅黄橙	底完存	
712	802	陶器 梗	試掘 No.31			高台9.5	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	粗	灰白	高台1/4	知多 内面をやや研磨
713	106	瓦器 小皿	試掘 No.33			口縁8.9 高1.6	ナデ→ヘラミガキ	密	灰白	1/4	
714	107	瓦器 梗	試掘 No.33			口縁一	ナデ→ヘラミガキ	密	灰白	口縁1/20	
715	503	ロクロ土師器 小皿	試掘 No.33			口縁10.4 高1.9	ロクロナデ→糸切り	密	灰白	完存	
716	504	青磁 梗	試掘 No.33			体一	ロクロナデ→削り出し高台→施釉	密	釉 灰白	1/10	
717	104	土師器 小皿	試掘 No.34			口縁9.9 高1.5	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	灰白	9/10	ての字もどき
718	605	土師器 盆	試掘 No.34			口縁10.5 高1.8	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ	密	橙	7/10	
719	1105	土師器 盆	試掘 No.34			口縁10.2	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/3	ての字
720	806	陶器 梗	試掘 No.34			高台8.6	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	密	灰白	高台完存	瀬戸

番号	実測番号	器種等	大地区	小地区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存	特記事項
721	103	土師器 小皿	試掘 No.34			口縁10.4 高1.9	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	橙	3/5	
722	604	土師器 皿	試掘 No.34			口縁10.2 高1.8	ナデ・オサエ・ヨコナデ 底部にモミガラ痕	密	にぶい橙	ほぼ完存	
723	102	土師器 小皿	試掘 No.34			口縁10.4 高2.4	ナデ・オサエ・ヨコナデ 底部にモミガラ痕	密	にぶい橙	3/5	
724	1204	土師器 皿	試掘 No.34			口縁15.8	ナデ・オサエ・ヨコナデ	密	浅黄橙	口縁1/3	
725	601	土師器 皿	試掘 No.34			口縁16.2 高3.6	ナデ・オサエ・ヨコナデ 底部にモミガラ痕	粗	浅黄橙	口縁3/4	
726	803	陶器 梗	試掘 No.34			高台7.5	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ	密	灰白	高台3/4	瀬戸 内面を研磨
727	907	綠釉陶器 杯	試掘 No.35			高台6.9	ロクロナデ→貼り付け高台→高台にヨコナデ→施釉	密	釉 暗オリーブ	高台1/5	断面にも釉付着
728	908	製壺土器	試掘 No.35		底付近一		ナデ・オサエ	粗	浅黄橙	底付近片	
729	1201	土師器 壺	試掘 不明			口縁14.3	ナデ・オサエ→口縁に刺突(板)	粗	橙	口縁1/10	
730	1205	土師器 壺	試掘 不明			口縁17.0	ナデ・オサエ→ハケメ→ヨコナデ→口縁に刺突(板)	粗	にぶい橙	口縁1/15	
731	1301	土師器 高杯	試掘 不明			口縁26.2	ナデ・オサエ→ハケメ→ヘラミガキ	密	にぶい橙	口縁1/3	
732	1302	土師器 壺	試掘 不明		体一		横描横線文・刺突文	密	浅黄橙	体部片	
733	701	土師器 杯	試掘 不明			口縁14.1 高3.1	ナデ→ヘラケズリ→ヘラミガキ	密	橙	口縁3/4	
734	804	陶器 梗	試掘 不明			高台7.9	ロクロナデ→糸切り→貼り付け高台→高台にヨコナデ 高台部にモミガラ痕	密	灰白	高台完存	知多・猿投 内面に墨痕・研磨
735	14801	土師器 台付甕	雲出本郷町	字風ヶ久保		脚裾8.0	ナデ	粗	明赤褐	脚台完存	2次焼成による変色
736	14802	土師器 台付甕	雲出本郷町	字風ヶ久保		脚裾8.8	ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	にぶい橙	脚台完存	2次焼成による変色

### 遺物観察表 凡例

遺物観察表については、以下のような方法によって表記している。

番号；図版に対応する番号である。

実測番号；実測図作成段階での番号である。3桁以上の番号が実測用紙番号で、下2桁の番号が実測用紙内の番号である。（例）12304→123-04

器種等；陶器・土師器などの別と、器種（壺・皿・鍋）などを記した。

大地区；調査区名である。

小地区；調査区内のグリットである。

遺構・層名等；遺構から出土したものについては遺構を表記している。

計測値；口縁=口縁部径、底=底径、高台=高台径、高=器高などと略した。

調整・技法の特徴；焼成時に生じた特徴的な事項を含め、簡単に記した。施文されている刺突などで原体の特徴が表れているものは貝=貝殻、板=板状工具（ハケメ原体）、櫛=櫛描文原体などと記した。

胎土；粗密のみを表記した。胎土中に見られる重要な特徴については「特記事項」に記した。

色調；『新版標準土色帖』（小山・竹原編 9版 1989）を基準とした色調を表記した。

残存；口縁部・高台部などの残存の度合いを分数で表現した。

特記事項；土器に見られる特徴的な要素などを記した。中世土器類については、産地・系統を記した。

# V 調査のまとめと展望

今回の調査は、2ヶ年以上にわたる調査のうちの1年次目であり、調査区全体の状況が把握できるのは次年度以降である。したがって、当章では今年度の調査によって確認された事柄や、新たに認識が必要となった問題を抽出することとし、遺跡全体の総論的な問題については、次年度以降の報告書などにおいて指摘することとした。

## 1 縄文時代の遺跡動向

### a 晩期集落の状況

縄文時代では、晩期五貫森式から馬見塚式までの遺物が認められた。五貫森式並行期における遺構は明確ではないものの、A 1区で見られたS Z 103およびB 3区 S Z 77からはある程度まとまった土器の出土が見られたことから、この付近における集落跡の存在を想定してもよいと思われる。とくにS Z 103では、遺構の輪郭こそ把握できなかったものの、周囲には少量ながら炭の散布が見られたことからも、住居跡が存在していた可能性も大いにあるものと考えられる。

馬見塚式並行期では、A 3区において土器棺墓を2基検出することができた。これは、前段階の五貫森式並行期以上に、当地における集落跡の存在を確定するものである。

さて、雲出島貫遺跡近隣では、四ツ野B遺跡および向山遺跡（いずれも津市高茶屋小森町）において晩期の土器棺墓が確認されており<sup>(1)</sup>、丘陵部における遺跡は一定程度の把握が進んでいる。しかし、雲出島貫遺跡のような低地部における当該時期の遺跡の把握例は、三重県下全体を見ても決して多くはなく、上箕田遺跡（鈴鹿市上箕田町）<sup>(2)</sup>、前田町屋遺跡（三雲町星合）<sup>(3)</sup>などが見られるに過ぎない。とくに、海岸部における遺跡となると、前田町屋遺跡における土器の出土が知られる程度であり、雲出島貫遺跡において遺構として確認されたのは、これまで予想されていたこととはいえない画期的なこと

である。

今後は、晩期における人間活動を丘陵・山間部に限定することなく、海岸部における当該時期の活発な活動を考慮していく必要がある。さらに、近接する高茶屋丘陵に相当する四ツ野B遺跡や向山遺跡との対比という視点も重要である。

### b 晩期の土器

今回の調査では、予想以上に当該時期の土器資料を提示することができたものの、全形を知ることのできる遺物は少ない。それでも、一定の傾向を指摘することは可能であろう。

まず、外面調整としては、二枚貝条痕を多様していることと、それと関連して突帯上の押し引き施文も二枚貝腹縁を用いているものが顕著に見られることである。これは、伊勢湾沿岸部における動向にはほぼ一致するものであり、当遺跡出土資料もその範疇で考えられることを示している。

外面に施される突帯は、口縁部および体部上半部の2ヶ所に見られるという傾向がある。それが同一個体中で確認されたものは残念ながら無いが、破片の状況を観察すれば、いわゆる二条突帯を有するものが多く存在していると考えてよからう。この二条突帯は、鈴木克彦氏によって雲出川流域を中心とする地域において顕著に見られる傾向とされており<sup>(4)</sup>、当遺跡についても概ねその指摘に符合するものと考えられる。

### c 土器棺墓

A 3区で検出した土器棺墓のうち、S X88は極めて良好に残っていたものである。

興味深いのは、棺身・棺蓋に使用された土器が共に口縁部を欠損していることである。調査の段階では、棺身の口縁部は棺蓋の中に納まっており、上部も崩落して内部へと落ち込んでいたことから、後世の削平や調査中における欠損ではない。これは、復元した棺身が口縁部付近で見事に終わっていること

からも理解できる。また、棺蓋についても、縦方向に割ったような体部片であることから口縁部が存在していてもよさそうなものであるが、一切見られなかった。

これらの状況から想定されるのは、土器棺埋納時点において口縁部が意識的に削除されたということである。この目的はよくわからないとするのが無難なところであるが、同様な例は愛知県一宮町鎧水遺跡にも見られる<sup>(5)</sup>。

三河地域における条痕文土器には当遺跡のような壺形をなすものも多く見られる。これを佐藤由紀男氏は伊勢をひとつの起点として東海東部へと広がる「変容壺」として理解している<sup>(6)</sup>。海を介した土器形態・埋葬方法の類似を指摘することができるかも知れない。

(伊藤)

## 2 弥生時代の空白

雲出島貫遺跡では、縄文時代晩期以降遺跡の形成が途絶え、古墳時代前期初頭の再開までの間の空白期がある。この間は弥生時代のほぼ全体を占める時期である。通常、遺構が確認されないまでも少量の遺物が出土することはよくあるものの、弥生時代に相当するものが皆無に近い状況にあるという事実は興味深い。

当該時期の周辺では、木造赤坂遺跡（久居市木造町）が弥生時代前期から後期にかけての拠点的集落である。また、近年の調査により、高茶屋大垣内遺跡（津市高茶屋小森町）<sup>(7)</sup>や向山遺跡からも弥生前期の土器が確認されている。さらに、四ツ野B遺跡では、近畿突線紐II式の銅鐸（高茶屋銅鐸）が出土しており<sup>(8)</sup>、銅鐸を有する集落は周辺の拠点的な集落であるという観点に立てば、この付近に大規模な集落が存在していた可能性は高いと考えなければならない。

その意味からも、当遺跡における“弥生の空白”が示す意味は興味深い。これは、当遺跡が古墳時代前期に大規模に展開するという状況と対照的であるばかりでなく、周辺の低地遺跡および高茶屋丘陵における動向とも基本的に合致するものである。微視的には、当遺跡と木造赤坂遺跡との関係に、場所的

な集落移動という観点での追求が必要である。さらに巨視的には、古墳時代前期という時期の低地部への進出の意義、言葉を換えれば、弥生時代との生活体系上の差異を考慮する必要があると考えられる。

(伊藤)

## 3 古墳時代前期の遺跡動向

今回の調査で、質・量ともに充実していたのが古墳時代前期に相当する時期のものである。

### a 島貫集落の状況

今回の調査では、中央の砂堆をはさんで東西に集落の広がりが確認できた。土器の散布も調査区全体に及んでいることから、A 1区以東の調査区外、およびB 2・3区以西にまで当該時期の遺跡が展開していることは確実である。

砂堆の東側にあたるA区では、大形竪穴住居・墳墓のほか、区画溝と考えられるもの（S D67）などがある。S D67は、砂堆の東側に沿うように南北に走る溝であり、断面がV字形をなすことから、後述の墳墓に見られる形状とは異なる。これが集落を区画する溝（環濠）に相当する可能性もあると考えられ、次年度に調査されるA 6区およびB 1区の砂堆上の遺構の状況が極めて興味深い。

砂堆の西側にあたるB区では、竪穴住居群が確認された。良好な出土遺物のあったS H73・83はともに焼失家屋で、両者は壁方向もほぼ揃えている。両者の土器には若干の時期的な隔たりがあり、幾度となく火災が発生した状況を想定できるかも知れない。焼失家屋と考えられるものはほかにS H78があり、これはS H83と時期的には合う。一連の火災で数棟が焼け落ちた状況も想定できるかと思われる。

A区とB区とでは、検出できた遺構の性格に上記のような違いがある。同一時期におけるこれらの相違は地点毎の土地利用方法の違いが考えられるものである。砂堆上の調査終了後に、再度この点について考えてみたい。

### b 島貫の墳墓群

A 4・5区で確認した溝S D54・55については、

L字形に屈曲する形態と、S D54から出土した赤彩された底部穿孔壺から、墳墓<sup>(9)</sup>と考えてよい。時期的には前期初頭直前に位置づけられるものである。ともに、次年度に行われるA 4・5区間の調査によって、よりはっきりした形態を把握することができるものである。

S D55の周溝は、底付近を明瞭に削り出しており、墳墓を区画する意識が非常に強いものと考えられる。南辺の溝底は、東角から西にかけて次第に浅くなる状況が観察できることから、前方部状のものが確認される可能性が高い。次年度の調査で明確にできるので、その時点で再度検討したい。

S D55では、埋土下層相当から出土した土器はfig. 58-423に示した壺のみで、他は全て周溝がほぼ埋没した段階で廃棄？された上層相当の土器群である。上層土器群は木下正史氏による編年（以下、木下編年）の布留1式<sup>(10)</sup>に並行するものであり、墳墓構築時期はこれより古い時期と見なすのが妥当である。

このような、墳墓構築時期から時間の経過した段階で土器群をまとめて廃棄？するという状況が果たして何を意味するのかはよく判らないが、周溝に沿う状況で存在することから見て、意識的な行為であると考えられる。赤彩土器を持つことから見て、墳墓構築後にも何らかの祭祀的な行為を行っているのであろうか。

（伊藤）

#### 4 雲出島貫遺跡の古式土師器

今回の調査では、当該時期に相当する古式土師器類が豊富に確認された。S H63・S D55・S H73などの一括性の高い資料も多い。これらの資料群は、木下編年でいう布留1式、東海地方では赤塚次郎氏のいう廻間II～III式<sup>(11)</sup>を中心としたものである。充実した資料が多く、伊勢中央部の基準資料となり得るものである。

（伊藤）

##### a 形式分類について

雲出島貫遺跡出土土器について、主な器種について分類を試み、tab. 23～27のようにまとめた。なお、分類には雲出島貫遺跡出土土器のみを扱っている。以下、器種ごとに概観したい。

壺 大きさから、大形壺（A～E）と中形壺（F～J）に分け、更に口縁部形態から細分した。

壺A a・B aは口縁端部に面をもつ。壺A a 2から続けて口縁部を伸ばしたものが壺A a 3であり、口縁端部を擬口縁として二次口縁を作り出しているものが壺B aである。口縁端部の面の向きは上向きから垂直に変化する。

壺A b・壺B bはパレス壺の系譜を引くものである。壺A b→B b 1→B b 2と口縁部が拡張していく。

壺A x 1・2は駿河、壺B x 1は近畿、壺b x 3・4は三河、壺B x 5は山陰地方からの搬入もしくは影響の強いものと考えられる。壺A dは東日本でもみられるものであり、搬入等の可能性もある。

壺C a・壺D aは口縁部の形態が内弯しているか直線状にのびているという点が異なるだけである。壺D a・壺D bは器形が類似する。壺D aはやや大きく、ヘラミガキで仕上げられているのに対し、壺D bは小振りで、ハケメ調整で仕上げられている。壺D aは近畿地方の直口壺に祖形を求められるが、成形は伊勢で見られる技法であり<sup>(12)</sup>、他の器種と共に通する。壺D cは内面にヘラケズリがみられ、近畿地方からの搬入もしくは強い影響が伺われる。壺C dは壺C cや壺C bの影響を受けている可能性があるが、成形は他の機種と共に通する。

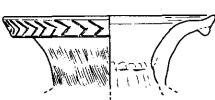
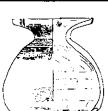
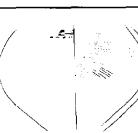
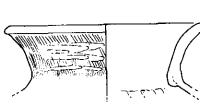
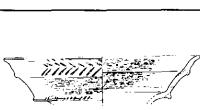
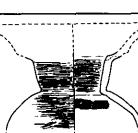
壺E aは成形・器壁調整ともに他の器種と共に通する。

通常、壺A～Eは平底を呈するが、211は壺F～Jや小形鉢にみられる凹み底を呈している。

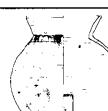
中形壺F・G・Hはそれぞれ口縁部と体部・底部に相関関係がある。壺I・Jは体部のみしか確認できなかったが、数点づつ出土しており、上記の相関関係が崩れているとは考えにくいため積極的に分類した。壺H bは近畿地方の直口壺に祖形を求められるであろう。

鉢 鉢は有段か否かで鉢A・Bに分類した。鉢Bは更に口縁部形態から細分することができる。

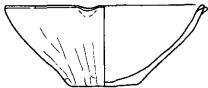
甕 甕は機能性を重視し、1次概念は底部形態からA・B・Cに分類した。量的にはAが大半を占める。甕A aはS字状口縁台付甕であり、おおむねA a 1→2→3→4（→6）→5という流れである。結果的には赤塚次郎氏の分類と内容的にはほぼ差はないため、

器種	器形	器形細分	形態	特徴	
壺	A	a	1		口縁部は短く外反し、端部は上向きに面をなす
			2		口縁部は短く外反し、端部は垂直に面をなす
			3		口縁部は大きく外反し、端部は垂直に面をなす
			4		口縁部は短く強く外に張り出す 端部は垂直に面をなす
		b			パレス壺の系譜を引くもの
		c			端部に面を持たない
		d			端部を外反させる 端部内面に横方向の ヘラミガキ
		x	1		口縁部は外反し、端部に面を持つ 面上に刺突
			2		口縁端部を丸く収める
	B	a			擬口縁である一次口縁端部に面を持ち、 その上に二次口縁を作り出す 端部は垂直に面をなす
		b	1		いわゆる柳ヶ坪型壺
			2		擬口縁を持つ一次口縁の上に柳ヶ坪型壺 の口縁部を作り出す
		x	1		直立した一次口縁から二次口縁が大きく 広がる

tab.23 古式土師器分類(1)

器種	器形	器形細分	形態	特徴	
壺	B	x	2		突出する擬口縁を持たず、凸帯を貼付することで段を目立たせる
			3		直立した一次口縁から二次口縁が大きく広がる ハケメ調整を残す
			4		口縁部を折り返すことで2重口縁とする
			5		頸部から口縁部が立ち上がる
			a		口縁部は内弯する 体部は下膨れ底部は平底
		C	b		口縁部は内弯し、端部が肥厚する 体部は球体状 底部は平底
			a		口縁部は直線状に開き、端部が肥厚する 体部は球体状 底部は平底
	D	b			aより小振りのもの
			c		口縁部は直線状に開く 体部は球体状
		x			口縁部は直線状に開き、端部が肥厚する 体部は球体状
	E	a			口縁端部は内面に肥厚させる 体部は下膨れ底部は平底
		b			口縁部は短く直線状
		c			口縁端部が横ナデにより内弯する

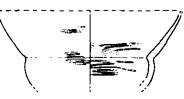
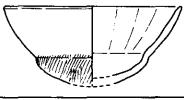
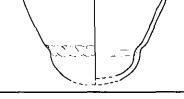
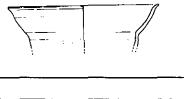
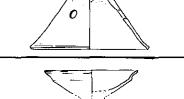
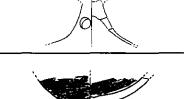
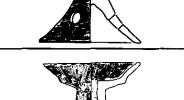
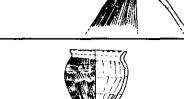
tab. 24 古式土師器分類(2)

器種	器形	器形細分	形態	特徴			
壺	F			中形内弯口縁壺 底部は丸底で、器壁を薄く仕上げた精製品			
	G			中形短頸壺 底部は凹み底で安定感のある体部がつく			
	H	a		口縁部は直線状に開く 底部は凹み底		中形直口壺	
		b		口縁部は直線状に開く 底部は丸底で球体状の体部を呈するため、 安定感がない			
	I			底部は凹み底であるが、体部が偏球状をなし安定感がない			
	J			体部は下膨れ氣味で器壁が厚い 底部は凹み底			
鉢	A	a		体部は内弯ぎみに広がり片口を有する 底部は平底			
	B	b		内湾する体部に大きく開く口縁部をもつ 底部は平底			
甕	A	1		< A類 > 口縁端部に面を持つ 口縁部外面に押引刺突文 頸部外面にハケメ調整	S字状口縁台付甕	台付甕	
		2					
		3					
		4					
		5					
		6					
		x					
		b					

tab.25 古式土師器分類(3)

器種	器形	器形細分	形態	特徴	
甕	B	a		口縁部は短く端部は丸みを帯びる 体部内外面にS字甕同様のハケメ原体を使用	平底甕
		b		体部は壺形を呈する 外面と内面下半をハケメ調整する	
	C	x		布留形甕 搬入もしくは他地域の影響の強いもの	丸底甕
高杯	A	1		杯部は内弯し大きく開く 脚部は内弯する	杯部に凌をもつ
		2		杯部はA 1より小形化する脚部は直線上に伸びる	
		3		脚部はそのまま広がる	
	B			杯部は椀形を呈する 脚部は杯部からそのまま大きく広がる	
	C			杯部は直線的に開く 脚部は脚柱部にふくらみをもち屈曲して広がる	
	X			椀状の杯部に直線状の口縁部がつく	搬入もしくは他地域の影響の強いもの
器台	A			受部に透かしをもつ 受部と脚部が貫通する器台	
小形壺	A			口縁部の形態が小形鉢B aと類似するが、頸部から体部径が広がると予想される精製品	
	X	a		形態が甕C xに類似する	搬入もしくは他地域の影響の強いもの
		b		頸部から立ち上がる口縁部を持つ	
小形鉢	A	a		口縁部は短く、底部は凹み底	
		b		口縁部は短く外反する 精製品	
		c		精製品で赤彩されることもある 底部は凹み底で口縁部は直線状に伸び端部が外反する	いわゆる小形丸底壺
		d		赤彩された精製品 底部は凹み底で口縁部は直線状に伸びる	

tab. 26 古式土師器分類(4)

器種	器形	器形細分	形態	特徴
小形鉢	A	e		口縁部は内弯気味に広がる 底部は凹み底 精製品
		f		口縁部は内弯し、体部はハケメで調整される
		g		強い指ナデにより口縁部と体部の境を作り出す 口縁部は直線状に広がる
	B	h		口縁部は短く、体部はやや扁平になる 精製品
		a		口縁部に段をもち外反しながら立ち上がる 精製品
	B	a'		B a と手法的に類似するが、口縁部の屈曲がゆるやかなもの
	C	a		口縁部は内弯し端部に面をもつ
		b		底部は尖り底に近い丸底 ヘラミガキは底部付近に見られるのみで、ハケメ・ヘラケズリが残る
小形器台	A	a		受部は屈曲し、変換点に刺突が巡らされる
		b		受部は強い横ナデにより外反する口縁部を有する 脚部はほぼ直線状に広がる精製品
		c		受部は口縁部がゆるやかに外反する 脚部は受部からそのまま広がる
		d		受部は椀状を呈する 脚部は直線状に開く精製品
	B	a		受部に凌を有する 脚部は受部からそのまま広がる精製品
		b		受部・脚部ともに内弯しながら開く
ミニチュア土器				甕A a を祖形とする
手捏ね土器				指押さえによって成形されたもの

tab.27 古式土師器分類(5)

便宜上赤塚氏の分類との対応も示した。甕A a 6は山陰系口縁台付甕<sup>(13)</sup>と称されているもので、S字状口縁台付甕の口縁部上に粘土紐を追加して成形されている。他の器種と同様の擬口縁を持つ手法が用いられている。これは大形甕に限られており、体部の大形化に伴っているとも言えないだろうか。甕A a xは東日本から搬入されたものであろう。中南勢地域では、S字状口縁台付甕に先行して受口状口縁甕が存在しており<sup>(14)</sup>、それから独自の型式変化を追うことができる。

「く」の字状口縁甕の底部形態が確実なものは、台付甕しか確認できなかった。「く」の字状口縁甕には面をもつものとそうでないものとがあるが、いずれも台付甕であろうか。また、232等にはハケメ後ヘラミガキが見られることから、これらの「く」の字状口縁甕の中には東日本からの搬入あるいは影響を受けたものが含まれていると考えられる。

甕B bは周辺に類例を求められないし、ドーナツ底を呈する器種はほぼ見られないが、成形技法・器壁調整は他の器種にも共通する手法である。大阪府垂水南遺跡ではS字状口縁平底甕が出土しており<sup>(15)</sup>、壺B bはS字状口縁台付甕ほど肩が張らないが同様のものの可能性がある。

甕C xは布留形甕である。229は口縁端部上面に面を持つものであるが、その他は口縁端部が肥厚・内傾する。

**高杯** 高杯Aは1→2→3へ型式変化を追うことができる。高杯Cは広義の布留式高杯である。本来ヘラケズリにより器壁を薄く成形するが、ナデ成形によるものであったり、口縁部を肥厚させていたり、という点では高杯Aの手法が受け継がれているものもみられる。高杯Xは北陸地方からの搬入もしくは影響を受けているものである<sup>(16)</sup>。

**器台** 器台Aは受部と脚部が貫通する器台で、受部に円形の透かしをもつ。

**小形壺** 小形壺Aと分類した43・44は類例がなく、器形が不明であるが、頸部から体部径が広がると予想されることから設定した。口縁部の形態が小形鉢B aに類似する。小形壺Xは形態が布留形甕に類似するX aと山陰系口縁を有するX bがある。X aの成形は布留形甕そのものであり、X bはS字状口縁

を擬口縁にもつ甕A a 6とは異なる。いずれも精製品である。

**小形鉢** 小形鉢は基本的に平底（凹み底）である。小形鉢A c～gは底部形態が異なるものの、いわゆる小形丸底壺の範疇に入るものと考えられる。器形・調整とともにバリエーションに富む。小形鉢B aの底部は出土しておらず、同様に平底の可能性もある。小形鉢B aは全て口縁部の外反するものである。周辺の遺跡では納所遺跡<sup>(17)</sup>で出土している程度であるが、当遺跡では一定量の出土があり、けして客体的な存在ではない。

**小形器台** 小形器台は受部と脚部が貫通するものとしないものに分類することができる。小形器台B bには精製品と粗製品がある。精製品は近畿地方の小形器台の影響を受けているものである。（川崎）

### a 変遷

雲出島貫遺跡では、欠山期新段階から遺構が再び確認され、自然堤防上で微高地を選地しながら集落を形成している。純粹に土器編年として当該期の土器を検討するには、先学が検討されているように弥生時代後期からの流れを汲む必要がある。しかし、当遺跡では縄文時代晚期から欠山期新段階にかけて自然堆積が見られ、再び遺構の確認されるのが欠山式新段階以降であることから、遺跡に合わせて見ていくことにしたい。

次年度の調査による資料のさらなる充実も充分考えられるため、ここではおおよその変遷を見ておこう。古式土師器の器形からは、大きく3時期に区分することができる。なお、ここで触れる区分は、第1次調査の成果のみを使用したものであり、第2次調査の成果を踏まえて再考されるべきものである。

#### 島貫1期

資料的にはA 3区S D91、A 4区S Z81・S E79・S D55下層、A 5区S D54が該当する。器形的には、高杯A 1・壺A a 1・2・3・E b・甕A a 1が該当する。S字状口縁台付甕（以下、「S字甕」）は赤塚氏による分類<sup>(18)</sup>のA類に相当する。高杯は、S Z81の資料程度しかないが、やや内彎気味の杯上部で、いわゆる欠山期の杯部の形態を残している。壺には、口縁部外面が面をなすものがあり、口縁部

外面を若干垂下させるものや外面に綾杉文を施すものもある。S D54の加飾壺(571)は二重口縁壺の上部を取り除いたような形態である。

### 島貫 2期

古相と新相に分かれる。

古相はB 3区 S H78・S H96、新相はA 1区 S Z 40・S Z 104、A 4区 S D55上層一括・S Z 48・S H63、B 2区 S H73がある。B 2区 S H83は古相・新相の過渡的な様相である。古相の資料は乏しい。今後の調査で資料的に充実すれば、古相と新相をそれぞれ独立・分離することができる。

古相 壺A a 4・鉢A・甕A a 2・小形鉢A e・小形器台A aが該当する。S字甕では、古相は赤塚分類のB類～C類古である。布留甕は、包含層中ではあるが、229のような形態がこの段階に相当しう。小形丸底壺が古相の段階で見られる。

新相 壺A a 2・A a 3・A x 1・A x 2・B a・B b 1・B x 2・C a・D a・D b・E b・G・H a・Jがある。Dは新たに見られるようになる。鉢はBがある。甕はA a 3・A b・B b・C xがある。台付甕だけでなく、平底甕も存在する。S字甕は赤塚分類のC類である。高杯はA 2・B・Xがある。小形壺はX a 小形鉢はA a・A c・A d・B a・B a'・C bがある。小形器台はA b・A c・B aがある。小形精製器種が出揃い、搬入土器が激増する。小形丸底鉢・小形丸底壺・高杯などに布留式の影響が色濃く見える。同じ伊勢湾西岸の亀山市山城遺跡S H1と比較すると、高杯の脚部が外反が遅れることや小形鉢は平底を呈することや小形鉢B aの存在など様相が異なる。二重口縁壺では、深長古墳(松阪市深長町)や前田町屋1号墳(三雲町星合)に見られるものと同形のもの(479)が見られる。

2期新相は木下編年の布留1式並行、遺跡では、大和の平城宮 S D6030下層<sup>(19)</sup>・纏向遺跡辻土壙4上層<sup>(20)</sup>に並行する。

### 島貫 3期

資料的には乏しいが、A 1区 S Z 104、A 3区 S Z 61・S K90、A 4区 S Z 56がこの段階に相当する。前時期の混入が多いが、A 3区 S Z 57も当該期のものを含む。

壺はB 1・B b 2・D a・D b・E bがある。甕

はA a 4・A a 6がある。高杯はA 3・Cがある。Cは当該期以降、普遍的に見られる。小形器台はB bがある。S字甕は、赤塚分類のC類新～D類に相当する。布留甕は確認できないが、199の高杯は木下編年による布留2式に相当するものであろう。

以上、おおまかに当遺跡の古式土師器類の変遷を見、島貫1～3期に区分した。当遺跡最大の特徴は、島貫2期新相において、小形鉢・高杯、あるいは布留形甕の出土など、いわゆる元屋敷式純粹ではなく、布留式が確実に一定量を占めることにある。これは、これまで伊勢地域で確認された遺跡ではあまり見られなかった傾向といえる。近畿地方との並行関係を再検証する際に重要な資料群であろう。

(伊藤・川崎)

### c 外来系土器

ここでは、当該地域において形態的、あるいは手法的に系譜をたどることのできないものを外来系土器として扱う。そして、その系統が追えると考えた地域を選んで記述する。そのため、胎土や細部における調整などについては、抽出した地域のものとは相違があるかも知れない。伊勢における外来系土器を考えるための第一次的基礎作業であることをあらかじめ断っておく。

#### 駿河～関東

21・89・480の甕は、外面に粗いハケメを持つ。480はさらに外面にミガキ調整を行うものである。85も口縁端部にわずかな屈曲を持つもので、あまり類例がない。駿河から関東にかけてのいすれかの地に系譜を持つ土器と考えられる。最も類似するのは北関東の群馬県付近から東京都にかけてのもので、東京都足立区伊興遺跡<sup>(21)</sup>出土のものと類似するようと思われる。

81の壺は外反する口縁部の外面に素地粘土を付加することによって外形を二重口縁状にしている。82の壺は肉厚な器壁で粗いハケメを施すもので、一部にはミガキ調整が見られる。駿河あたりかそれ以東からの影響を受けたものと考えられる<sup>(22)</sup>。

#### 近畿

前述のように、布留式に相当するものが多く確認

されている。

甕では、19・229のように、初現的な布留甕と考えられるものがある。また、435・436のように、体部上に横方向の精緻なハケメを持ち、列点文を有するものなどは、手法的には当地で見られないものであり、直接的な搬入品あるいは当地で如上の出身者が製作したものと考えられる。

壺では、73・471の二重口縁壺はミガキの方向が横であることや直立する頸部を持つ点などから、近畿地方の土器と見られるが、途中に1クッションあるかも知れない。86の壺は、内面にケズリを施す点から、近畿の影響が見られる。

小形丸底鉢は、横方向のミガキを基調とする56・57・452などがある。当地域の土器が、全体的に縦方向のヘラミガキを基調とすることを踏まえれば、より純粋な意味での搬入品の可能性が高い。

#### 北陸

641の高杯は、椀状となる杯下部から段をなして大きく開く杯上部となる。形態的には北陸からの影響が充分考えられるが、口縁部外面の面、およびミガキ調整が縦方向であることなど、北陸からの純粋な搬入品とするのは若干躊躇がある。

また、63の受部に円形透かしを持つ器台についても、あるいは北陸の影響も考えられる<sup>(23)</sup>。

#### 山陰

83の壺は、短い頸部から段をなして直線的に開く口縁部を持つ。226の小形壺も同様なものである。形態的には山陰からの影響が考えられるが、器形のイメージのみの伝播である可能性もある。

#### 山陽？

228の甕は、頸部から強く屈曲する短い口縁部を持ち、口縁部外面に面をなすものである。口縁部外面には弱い擬凹線がある。山陽方面からの影響が考えられるが、口縁部外面の面が小さいことや外面の擬凹線の状態など、山陽と断定するのは少々難しい。口縁部を短くする形態は、播磨地域あたりで見られるものであるため、あるいは播磨あたりの影響も考慮しなければならないかも知れない。いずれにしても、当地で系譜は追えないものの、どこの地域なのかの特定が難しい土器である。

以上、当遺跡における外来系土器を見てきた。厳密な検討は今後の課題であるが、見通しとして東日本の土器が確認できた意義は大きい。

これまで、東日本に搬出された西日本の土器は注目されているが、逆に東から西へと向かった土器についてはほとんど注目されていなかった。これは、東日本の土器が見分けにくいという実態とともに、古墳時代の文化伝播における東から西への影響をほとんど考慮してこなかったことによるものであろう。

文化の一方通行は本来的にあり得ず、今後東日本からの搬入土器については意識的に抽出作業を行う必要を強く感じるのである。そして、その作業を積極的に行わなければならないのが、他ならぬ伊勢の資料を直接取り扱う研究者であるという認識が、今後確実に必要となろう。

(伊藤)

#### d 赤彩土器

当該時期の土器群中における赤彩土器の多い点も注目できる。塗布された赤彩は、そのほとんどがベンガラと考えられるものである<sup>(24)</sup>。いわゆるパレススタイル壺以外にも、小形鉢・小形壺・高杯などに見られる。調査区では、A 1・3 区にとくに集中して出土している。

(伊藤・川崎)

#### e 細工された土器

S D54に見られた底部穿孔壺以外にも、いくつかの穿孔土器と、意図的にある部分を欠いたと思われる個体がある。いずれも出土状況からそのように判断されるものである。

##### 1) 底部の中心を穿孔するもの

底部の中心に穿孔が見られるものとして、48・201・571がある。このうち、571は穿孔部を丁寧に削るものであるが、201は粗雑である。

##### 2) 体部に穿孔のあるもの

24・423は体部下半に、477は体部上半に、640は体部下半と上半に1ヶ所づつ、それぞれ穿孔する。640の穿孔はかなり丁寧で、ほぼ正円形である。

##### 3) 体部下半を欠くもの

391・394は体部下半を意図的に打ち欠いていると考えられるものである。394はS E79から出土したもので、図示した部分は全て完存の状態であること

から、このような意識を想定できる。

#### 4) 口縁部を欠くもの

421・477・478・498・657・677は、意図的に口縁部を欠いたと考えられるものである。とくに477は口縁部全体ではなく、上半部分のみを欠いている興味深いものである。

#### 5) 脚台を欠くもの

437の甕は意識的に脚台部のみを打ち欠いていると考えられるものである。可能性はやや薄いが、685についても、出土状況から判断してその可能性がある。

これらの、製品完成後になされる行為については、仮器化として考えられているものである。1)～3)の行為については、そのような理解で概ね良いと思われる。しかし、4)・5)および2)の体部上半の穿孔については、実用に伴う行為の可能性も大きい。今後、“単なる割れ”ではないこのような事例についても注意を払っていきたい。  
(伊藤)

#### f 底部に充填のある土器

壺の底部や台付甕の体部底に砂粒または粘土を充填しているものが数点見られた。内面または外面のどちらか一方のみを基本とし、器種が限られている。壺や甕に見られるということは、強固のために充填しているのであろうか。  
(川崎)

#### g 雲出島貫遺跡の古式土師器の傾向と展望

雲出島貫遺跡出土の古式土師器で型式変化を追うことができる器種は、甕A a (S字状口縁台付甕)と高杯Aがある。S字甕は伊勢湾岸でも低地部を中心に分布する甕であるが、上記のように雲出川流域ではS字甕に先行して、受口状口縁甕が存在しており独自の型式変化を追うことが可能である。高杯Aは脚の型式変化にやや時間差があるようである。この他、壺B aは壺A aから派生する器種であるが、伊勢型二重口縁壺<sup>(25)</sup>と称されているものである。壺A aは壺B aの基となる器種というだけでなく、A a 1→A a 2への型式変化がみられ、I期から壺の主流を占めていることより、B aと合わせて注目する必要があろう。

煮沸具については、外面に煤の付着した甕C xの

底部に磨滅痕跡が認められることから、使用方法が近畿地方と異なると考えられる。本来、丸底甕を使用しないこの地域では、台付甕同様に体部を床面に着けずに使用したのであろう。また、甕以外の器種が、段階的に近畿地方の影響を受け、変容していく中で、甕だけは丸底化せず台付甕を使い続いている。根本的に煮沸形態が変化しないことに対応する為であり、竈が導入されるまでは東日本的な文化圏の範疇に入るのであろう。

周辺の遺跡と比較すると、遠方各地との交流を彷彿させる土器はどこでも確認されているわけではない。雲出川下流域ですぐ伊勢湾に出ることもでき、陸路だけでなく積極的に海路を取ることが可能という立地によるものであり、雲出島貫遺跡の特徴を示すものであるといえよう。また、高茶屋台地上の高茶屋大垣内遺跡（島貫2期新相並行）と四ツ野B遺跡（島貫1期・3期並行）<sup>(26)</sup>と比較すると、台地上で出土しているものは胎土が粗く、雲出島貫遺跡出土土器は雲出川から阪内川（松阪市）にかけての流域の低地の遺跡群<sup>(27)</sup>の様相に近い。このことは海だけでなく、川も媒介にした周辺の遺跡との交流の結果とみられ、水運が交通網として重要な位置を占めていたことを反映していると考えられる。

散発的に出土する土器とは別に壺D a・壺H b・小形鉢B aが一定量出土していることは、同じ伊勢湾岸といえども、濃尾平野の様相とは異なり、より近畿地方との交流が強いことを反映しているのであろう。  
(川崎)

### 5 古墳時代中後期の遺跡動向

今回の調査では、古墳時代中後期の遺構として堅穴住居4棟以上が確認されている。ただし、旧参宮街道が乗る砂堆を挟んで東側には6世紀後半代、西側には5世紀末～6世紀初頭頃の堅穴住居が存在しているのであり、そのあり方は一様ではない。とくに、古墳時代前期の遺構群が調査区全域に広がっているのに対し、中後期のそれは極めて少ない。事実、前期とはいっても前期前半が当遺跡の中心であり、前期後半にはほぼ断絶した状況にあるのであり、中後期の遺構群と前期とでは継続性はほとんど無いと

いってよいほどである。

中後期には、近隣の高茶屋丘陵において、高茶屋大垣内遺跡が大規模に展開している時期に相当している<sup>(28)</sup>ことから、当遺跡の一部がそこへと吸収されている状況も考慮するべきかと考える。（伊藤）

## 6 一志郡と嶋抜郷～古代前半期の状況～

当遺跡における7～8世紀の状況は、大形掘立柱建物の存在に示されるように、非常に重要な地域的位相を備えていたものと考えられる。

### 大形掘立柱建物

まず、A 1区で検出された掘立柱建物S B105は、柱掘形が長方形を呈し、長辺約1.4mという大形のものである。掘形埋土中に鉄鏃を入れている点など、状況・規模こそ違うものの、飛鳥寺塔心礎における古墳副葬品と類似した文物を埋納<sup>(29)</sup>する発想と共に通した意向をうかがうことができる。この掘立柱建物は、当該時期の雲出川・安濃川流域を含めた地域における最大規模のものといえ、後続する大形掘立柱建物の先行形態として重要である。

S B105に続くものとしてA 3区で検出した大形掘立柱建物S B106がある。この建物は南に庇を持つもので、身舎の柱掘形が一辺約1.4mの非常に規模の大きい建物である。建物の時期が明確に判断できないのが非常に残念であるが、周辺から出土している土器類が都城編年で飛鳥III～平城I<sup>(30)</sup>に相当することから、7世紀後半代と考えて大過ないものである。

この2棟の掘立柱建物については、後者がほぼ真北を主軸とした建物であることに最も大きな特徴がある。調査区が狭隘なため、この建物をとりまく状況が全く判らないのが残念極まりないが、その状況を補完するいくつかの状況は観察できる。掘立柱建物S B106の時期における状況を考えてみよう。

### 搬入品を含む土師器類

まず、周囲から出土している土器類のうち、とくに土師器類には精緻なものが多く、畿内からの直接的な搬入を想定させるものがいくつか含まれていることである。これは、当地における情報伝達が、畿内と直接的な関係にあったことを示すものと考えてよいかと思われる。

### 地割

つぎに、後述する中世後期に見られる地割が、真北を意識したものが多いことである。当地が条里地割とは何ら関係ない地域であることを考慮すれば、中世後期に見られる真北方向の地割がこの段階における地割と何らかの関連を有している可能性は非常に高いと考える。

さらに、『倭名類從抄』<sup>(31)</sup>において「嶋抜郷」として認識されていること、あるいは『正倉院文書』に嶋抜郷が「壹志君挨祖父」を戸主とすること<sup>(32)</sup>を考慮すると、嶋抜の地が中央政府にもかなり明確に認識された場であることを想定できるのである。

### 古代嶋抜郷の意義

このようないくつかの状況を踏まえて、掘立柱建物S B106が建てられた要因を考慮しなければならない。平川南氏は、郡符木簡を出土する遺跡を検討するなかで、郡家が各在地において多様な機能を集約した一大拠点として存在していたことを指摘し、そのうえで水上・陸上交通の要地に郡家関連施設が存在するとしている<sup>(33)</sup>。

古代嶋抜郷については、雲出川河口付近であること、あるいは北部に潟湖（藤方）を擁しているなど、水運との関わりが非常に強い場所である。平川氏の指摘を踏まえれば、当遺跡からは木簡こそ出土していないものの、水上交通の要地として、一志郡家に関わる重要な施設が存在していた可能性を考慮すべきであろう。

（伊藤）

## 7 中世の動向

今回確認できた中世の遺構は、A 3区で若干の中世前期のものが見られる他は、大部分が中世後期、とくにそのなかでも16世紀代に相当するものである。

中世前期の遺物は、次年度以降に調査が行われるB 5～7区における試掘調査において、極めて濃密に確認されているため、次年度以降の調査で全体の評価を行いたいと思う。

### a 中世後期集落の区画

さて、16世紀代に相当する遺構・遺物はA 1～A 4区にまで認められ、区画溝・井戸・掘立柱建物な

どが見られることから、当該時期の集落が上記調査区周辺に展開していたことは明らかである。ただ、古墳時代前期には同様の土地条件であったと考えられるB 2・3区には当該時期の遺構が展開していないことは一応注意しておく必要がある。明治年間に作成された地籍図においても、A区付近の地割の細かさに比べるとB区のそれは粗く、耕地が広がっていたものと考えておくのが妥当であろう。

16世紀代の遺構で注意したいのが、A 1区S D 1・2、A 3区S D 9・20およびS B107・110、A 4区S D27、A 5区S D43である。これらは総じて溝方向および建物方向が揃うもので、方向は真北に近い方向を向く。当地に見られる明治段階に地籍図においてもこのような地割は確認できず、非常に興味深いものである。当地が条里地割とは無縁の地であり、中世以前には古代の段階で真北方向の建物群が存在していたことを考慮すれば、前述のように古代の段階で何らかの区画が存在し、それが中世まで踏襲されていた可能性も充分考慮されるべきであろう。

#### b 中世後期の土師器類

中世後期の遺物として注目したいのが、A 3区S K17出土の土器類である。S K17からは多量の土師器煮沸具が出土しており、廃棄の状態から見ても同時性は高いものと考えられるものである。

雲出島貫遺跡の周辺では、安濃津遺跡群が調査されており、そこにおける中世後期の土器相としては、煮沸具では南伊勢系の鍋と中北勢系の羽釜とが共に相当量出土することが確認されている<sup>(34)</sup>。当遺跡においても原則的には同じ状況が観察できる。

tab.28はS K17出土土器の口縁部計測法による

器 形	南 伊 勢	中 北 勢	計
鍋	279	0	279
把手付丸鍋	8	0	8
羽 釜	0	72	72
茶 釜	6	0	6
計	293	72	365

川崎志乃作成

tab.28 A 3区第1面土坑S K17土器組成

集計である。煮沸具を南伊勢系と中北勢系とで対比するとおおよそ4:1の比率で南伊勢系が優勢である。雲出川対岸に所在する前田町屋遺跡（三雲町星合）では、中北勢系の羽釜が一点も確認されていない状況を考慮すれば、雲出川下流域では当遺跡が中北勢系の南限を示すと考えてよからう。

雲出川流域では、最上流部の多気遺跡群（美杉村上・下多気）<sup>(35)</sup>においては南伊勢系がほぼ100%、多気よりはやや下流の下之川富田遺跡<sup>(36)</sup>（美杉村下之川）では南伊勢系が圧倒的に優勢ながらも少量の中北勢系が出土することが知られている。雲出川支流の中村川流域は状況が今一つ判然としないが、上野垣内遺跡（嬉野町島田）では中北勢系羽釜の出土が知られる<sup>(37)</sup>。雲出川流域より南では中北勢系の羽釜の出土は極めて点的であるため、雲出川が中北勢系羽釜の分布の南限を示すとほびいえるが、より細かな状況についてはさらなる資料の増加を待ちたい。

（伊藤）

## 8 小結

以上、雲出島貫遺跡の第1次調査による所見を述べてきた。確認できた遺構・遺物の示す各時代で、それぞれ興味深い事実があることがわかった。これらはいにしえの「嶋抜」の地名が示すとおり、「海」というキーワードでつながっていると予想されるのである。

「海」のキーワードは、何も雲出島貫遺跡を追求するためのものだけではない。伊勢、あるいは広く列島規模での物流を考察するためのものである。近年の考古学的な成果を見ていると、「西日本」、「東日本」という区別はあり、そのエリア内での調整は図られるものの、東西の関係や列島規模での考察は、一部を除いてほとんど進展していない状況にある。このような文化交流の場として、雲出島貫遺跡、ひいては伊勢地域について、今後理解を深めていく必要があると考える。

第2次調査では、砂堆上では近世の遺構が期待でき、調査区西端の微高地上では11~12世紀代の良好な遺跡の存在が確実である。また、今回の調査におけるB地区の続きからは、連続して古墳時代前期の

集落跡が確認されるものと考えられる。第1次調査の成果も、全調査区の終了後、まとめてみたいと考える。

(伊藤)

## 註

- (1)村木一弥「津市四ツ野B遺跡の発掘調査」(『三重の古文化』74 1995)  
(2)新田剛ほか『上箕田遺跡』(鈴鹿市教育委員会 1993)  
(3)1996・1997年度三重県埋蔵文化財センター調査  
(4)鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸蒂文深鉢の様相—伊勢地方からの視点」(『三重県史研究』6 1990)  
(5)紅村弘『東海の先史遺跡 総括編・復刻版』1984)  
(6)佐藤由紀男「変容壺をめぐって」(『安帝文土器から条痕文土器へ』第1回東海考古学フォーラム 1993)  
(7)1997年度三重県埋蔵文化財センター調査  
(8)註(1)文献  
(9)この遺構は、時期的には古墳時代と考えることもでき、底部穿孔壺や明瞭な区画の存在など古墳と考えるための一定の要素も満たす。しかし、砂堆積のあまり良好とはいえない場所に立地することや、規模が不明などなど、積極的に「古墳」というには躊躇を覚えるのも事実である。そのため、ここではひとまず「墳墓」として逃げておく。  
(10)安達厚三・木下正史「飛鳥地域の古式土師器」(『考古学雑誌』60-2 1974)  
(11)赤塚次郎「V 考察」(『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990)ここでは赤塚氏による編年を純粹に土器編年として用い、古墳時代の成立に関する問題については触れないこととする。  
(12)擬口縁部をつくりながら器形を整える成形技法は、伊勢の特徴として捉えられている。(伊藤裕偉「古墳時代前期における土器製作技法の検討—伊勢地域における事例を通して—」『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会 1991)  
(13)註(1)赤塚文献  
(14)穂積裕昌ほか『橋垣内遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1997)、山本義浩・杉本寿範『上ノ庄北出遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1998)などを参照されたい。  
(15)米田文孝「搬入された古式土師器—攝津・垂水南遺跡を中心として—」(『考古学論叢』関西大学考古学研究室三十周年記念論集 1983)  
(16)津市太田遺跡、嬉野町天花寺北瀬古遺跡(1997年度三重県埋蔵文化財センター調査)などでは擬口縁をもつ手法によるものが出土している。(中村光司ほか『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1993)  
(17)伊藤久嗣ほか『納所遺跡—遺構と遺物—』三重県教育委員会 1980  
(18)赤塚次郎「S字甕覚書'85」(『年報 昭和60年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1986)  
(19)井上和人はか『平城宮発掘調査報告』X(奈良国立文化財研究所 1981)  
(20)関川尚功「纏向遺跡の古式土師器—纏向1~4式の設定」(『纏向』桜井市教育委員会 1976)  
(21)青木孝夫・三ヶ島誠次男ほか『伊興遺跡』(足立区伊興遺跡調査会 1997)  
甕の形態と製作技法・調整手法の状況を実測図から判断すると、伊興遺跡報告書中の図75-13、15、図81-26などを挙げることができる。但、実物は未実見。  
(22)東京都伊興遺跡(前掲註(2)文献)では、図57-15、図59-48・50、図74-5などが類似する(未実見)。なお、駿河~関東の土器については、全体的に以下の文献を参照した。  
静岡県考古学会『古墳時代の土師器』(1985)

古墳時代土器研究会『古墳時代土器の研究』(1984)

(23)北陸の土器については、原田幹氏(愛知県教育委員会)にご教示いただいた。

(24)赤彩の種類の判断にあたっては、奥義次氏(県立度会高等学校)、田村陽一氏(県立相可高等学校)、森川幸雄氏(三重県埋蔵文化財センター)にご教示いただいた。

(25)田口一郎「二重口縁壺の系譜の検討」(『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会 1981)

(26)津市教育委員会のご厚意により実見の機会を得た。

(27)三雲町貝塚遺跡・前田町屋遺跡・宮ノ腰遺跡・嬉野町堀田遺跡・松阪市大足遺跡・深長古墳など

伊藤克幸『貝塚遺跡』(『昭和51年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 三重県教育委員会 1977)

伊藤裕偉『宮ノ腰遺跡発掘調査報告』I(三重県埋蔵文化財センター 1997)

小林秀「大足遺跡」(『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 三重県埋蔵文化財センター 1990)

中川明ほか『堀田遺跡第3次発掘調査概報』(三重県埋蔵文化財センター 1996)

増田安生「深長古墳」(『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 三重県教育委員会 1987)

(28)三重県埋蔵文化財センター『高茶屋大垣内遺跡』(1998)パンフ

(29)奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告』(1958)

(30)古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』(1992)を参照した。

(31)京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』本文編(臨川書店 1968)を参照した。

(32)『正倉院文書』所収「西南角領解」?(『大日本古文書』編年之13)この史料は、天平勝宝9(757)年と考えられている。

(33)平川南『郡符木簡~古代地方行政論に向けて~』(『律令国家の地方支配』吉川弘文館 1995)

(34)伊藤裕偉ほか『安濃津』(三重県埋蔵文化財センター 1996)

(35)多気については、伊藤裕偉・越賀弘幸『多気遺跡群発掘調査報告』I・II・III・IV(三重県埋蔵文化財センター 1993・1996・1996・1997)を参照。

(36)伊藤裕偉『下之川富田』(三重県埋蔵文化財センター 1998)

(37)田中喜久雄『上野垣内遺跡』(『昭和55年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981)

# P l a t e



遺跡を北方上空から望む（中央は雲出川）





A 4 区付近（東から）



B 2 区付近（東から）

調査の状況



A 1 区



A 3 区



土器と土層（南西から）



出土状況（南から）



北から



北西から



土器群 S Z 104 と 土層（南から）



土坑 S K 6 （西から）

A-1区第2遺構面  
掘立柱建物SB-105(1)



西から



東から



北側柱列（西から）



北側柱列北端部土層（南から）



全景（西から）

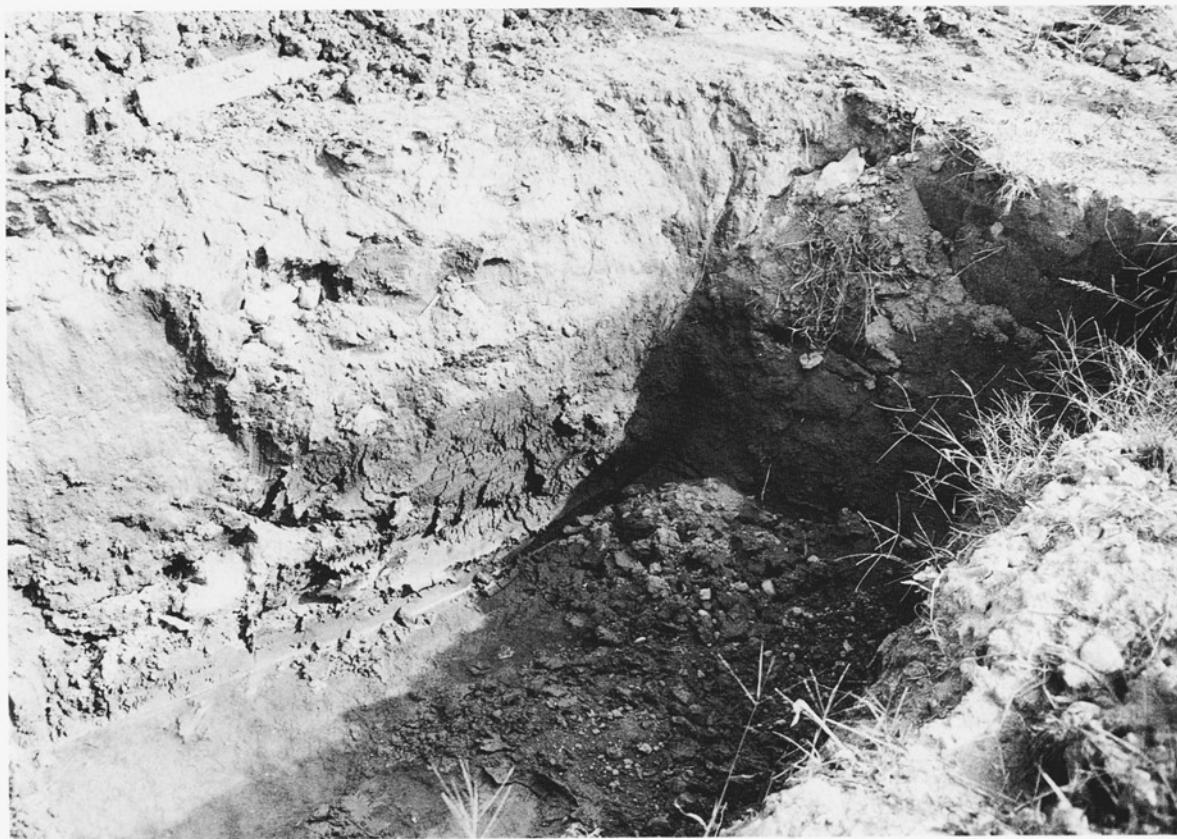


溝SD1土器出土状況（東から）

A2区の状況



南西から



北東から



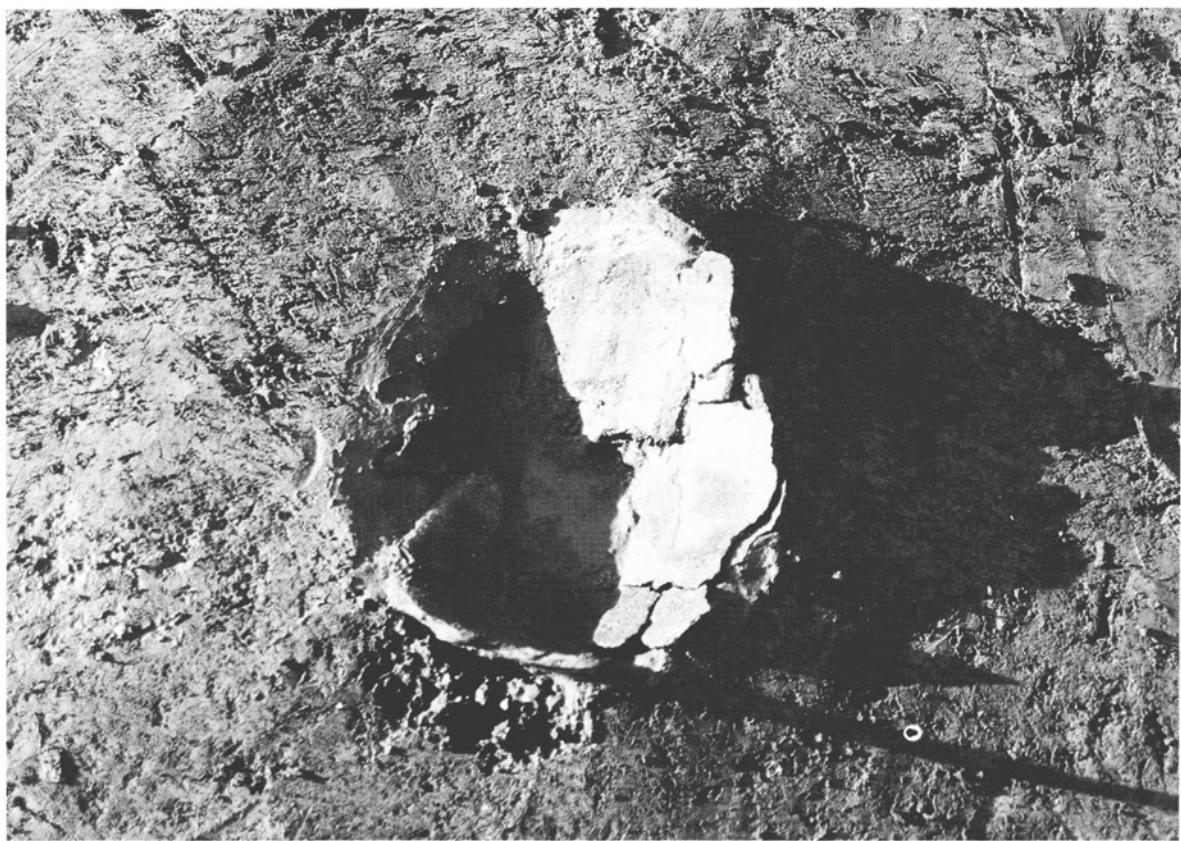
西から



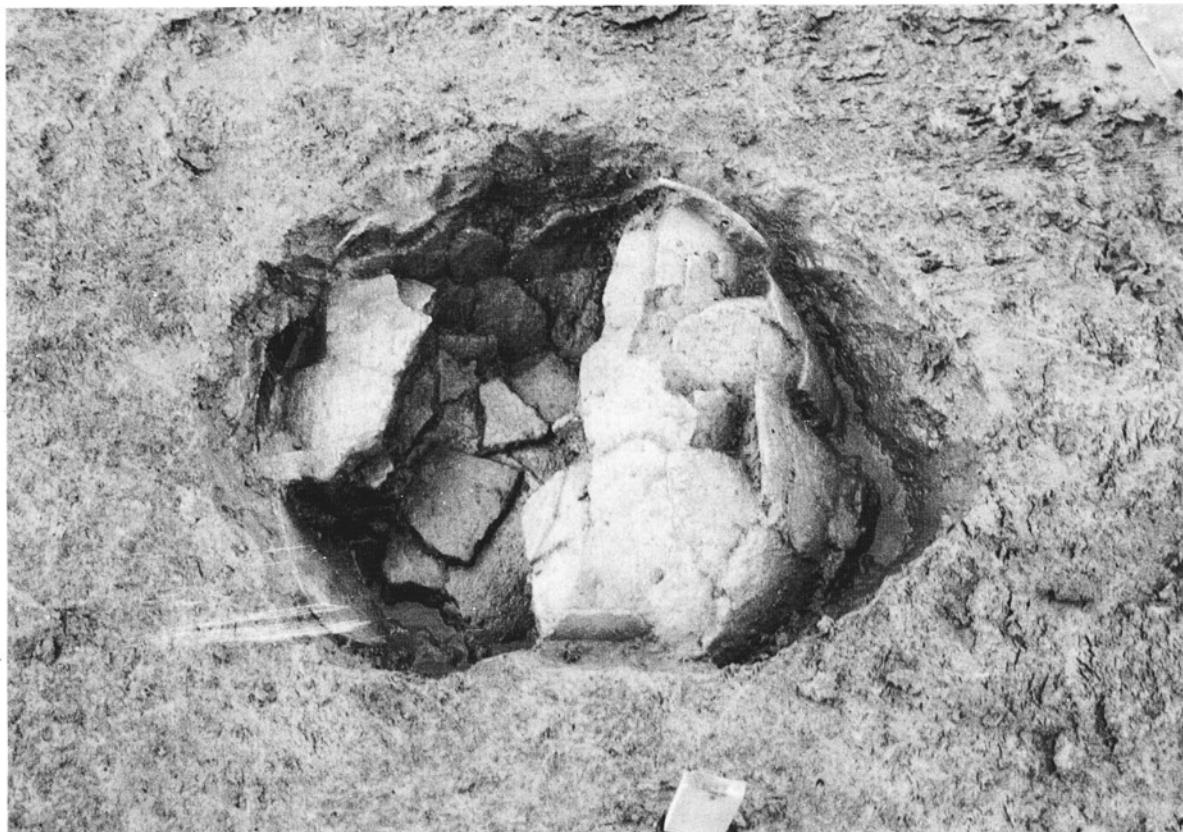
東から



S X 88・89 (南から)



S X 89東から



検出状況（南から）



崩落破片除去後（南から）



調査区東部（西から）



溝 S D91（西から）



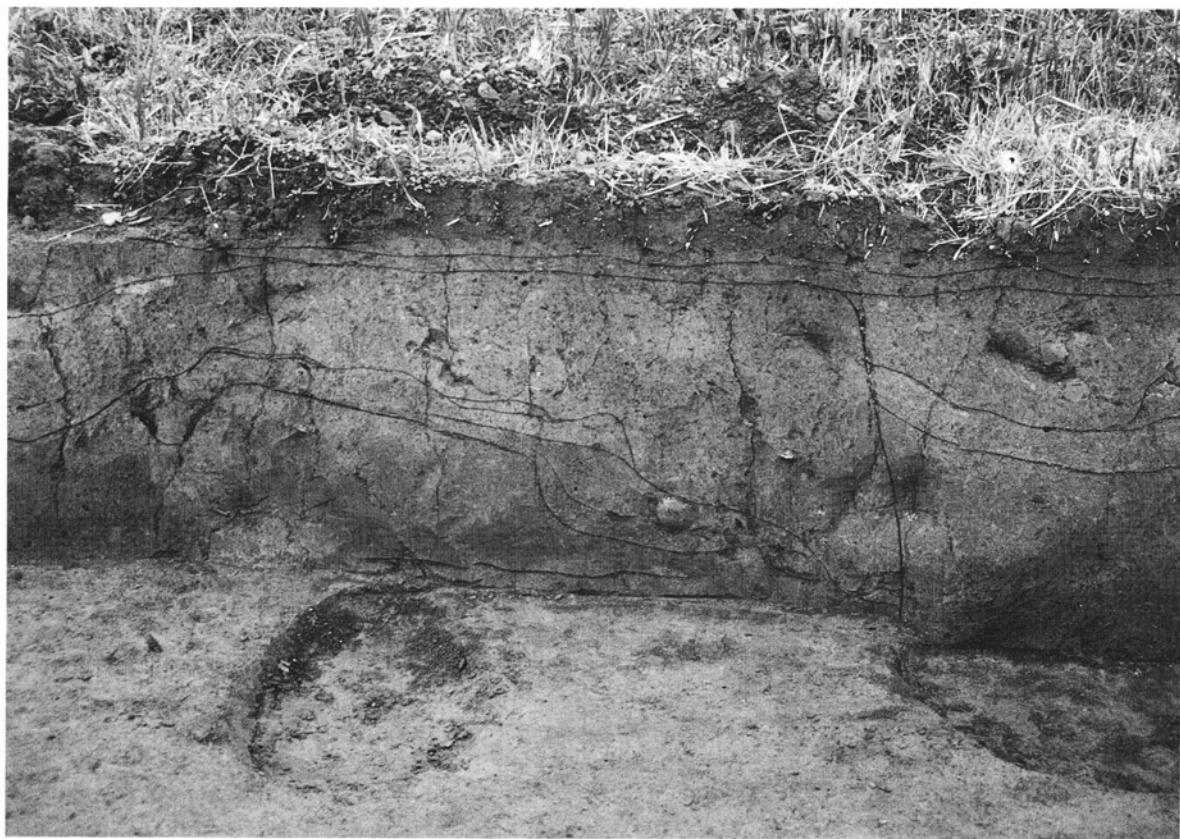
落ち込み S Z 57 (西から)



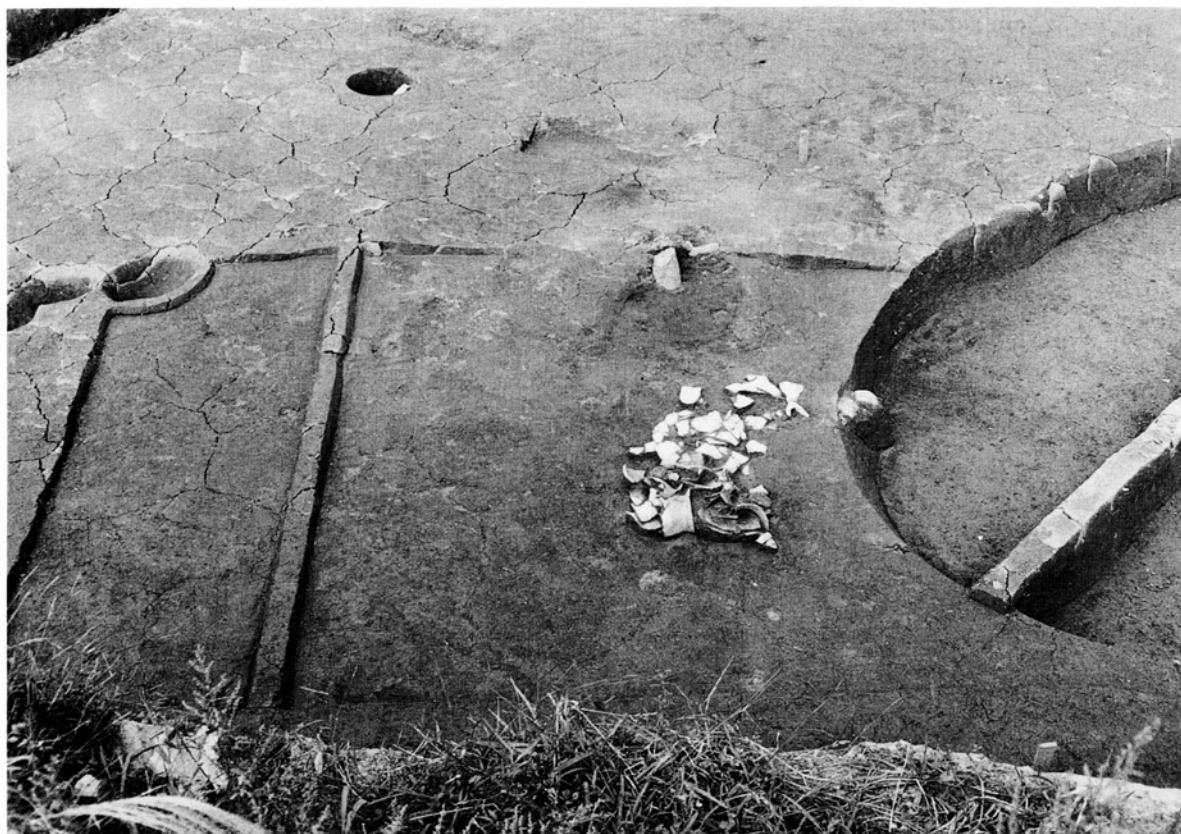
土坑 S K 59 (南から)



全 景



焼土坑 S F 93 (西から)



南から



カマドと土器群（南から）

A3区第2遺構面 挖立柱建物SB—〇六(1)



南から

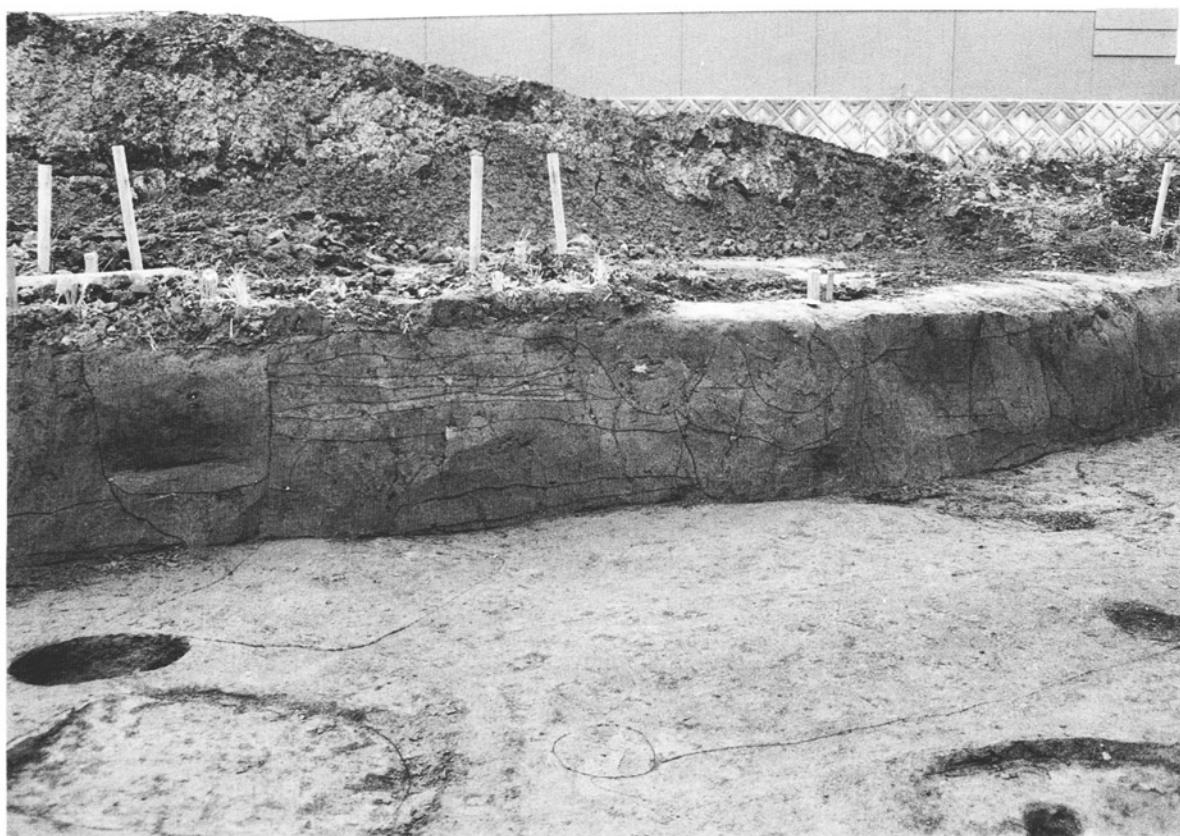


北東から

A3区第2遺構面  
掘立柱建物SB—〇六(2)



北から



調査区北壁土層 版築状のものが見える



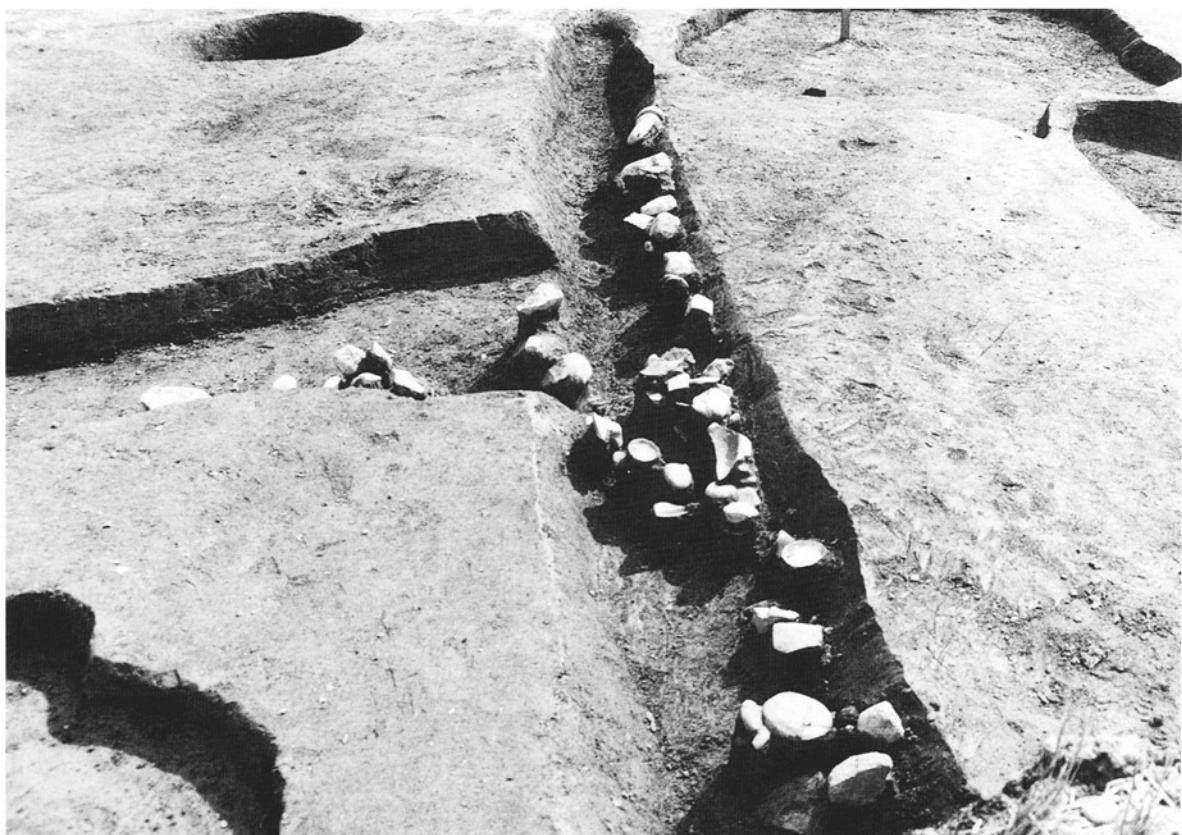
北東から



西から



土坑SK17（北から）



溝SD9・20（北から）



全景（東から）



全景（南から）

A  
4  
区  
第  
3  
遺  
構  
面  
周  
溝  
S  
D  
五  
五  
(2)

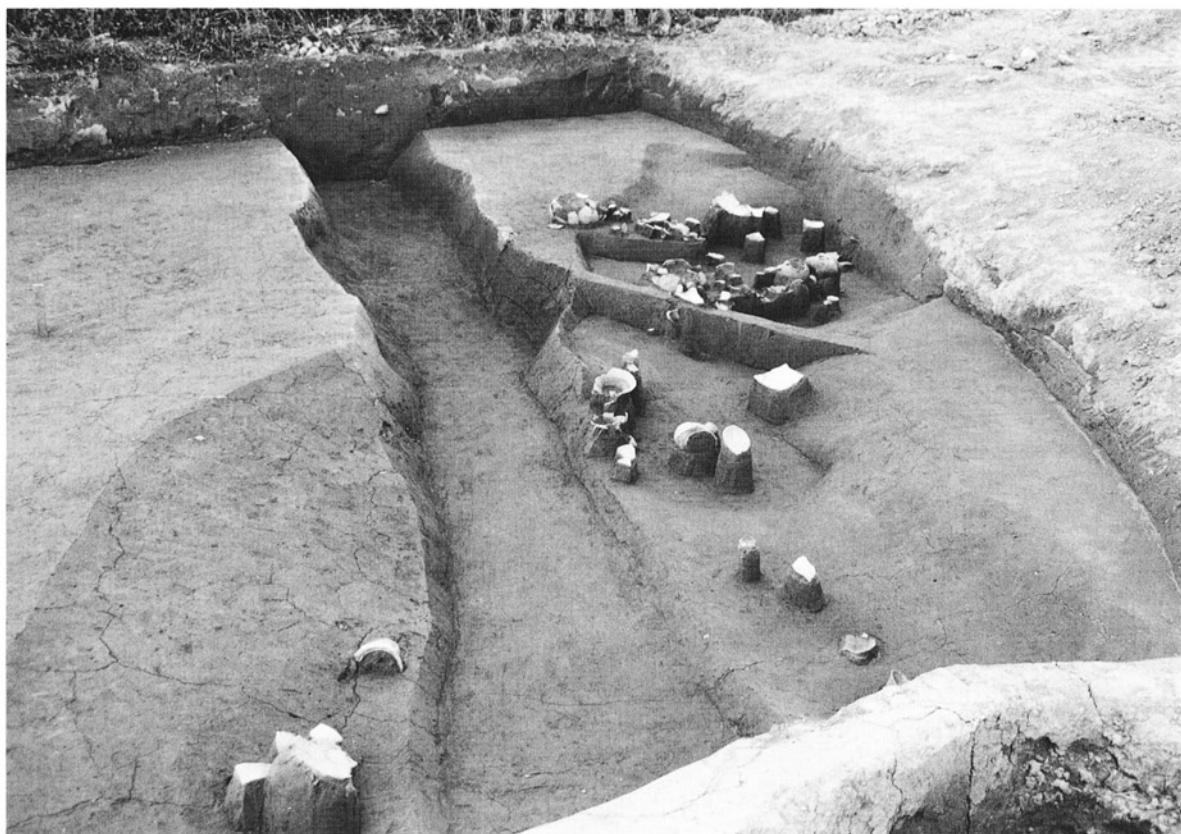


下層の土器ほか（北から）

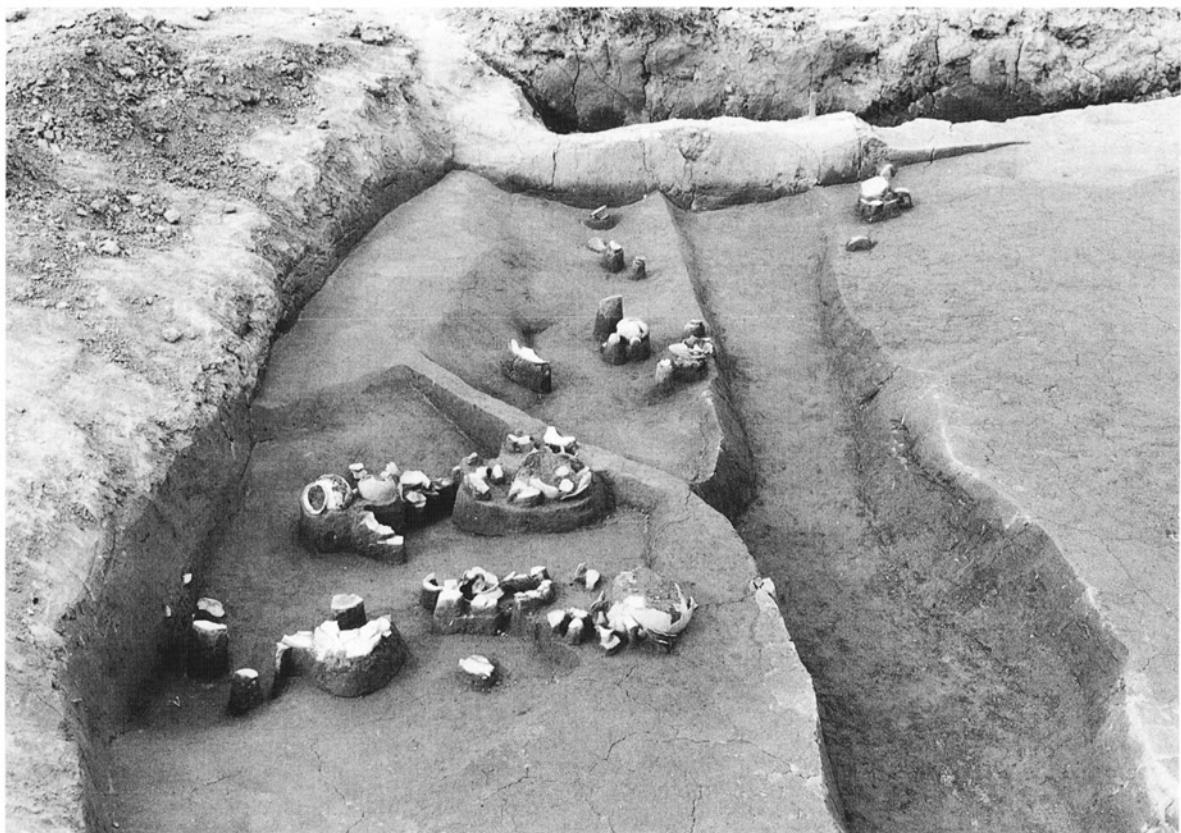


下層の土器と土層（北から）

A 4 区第3遺構面  
周溝SD五五(3)

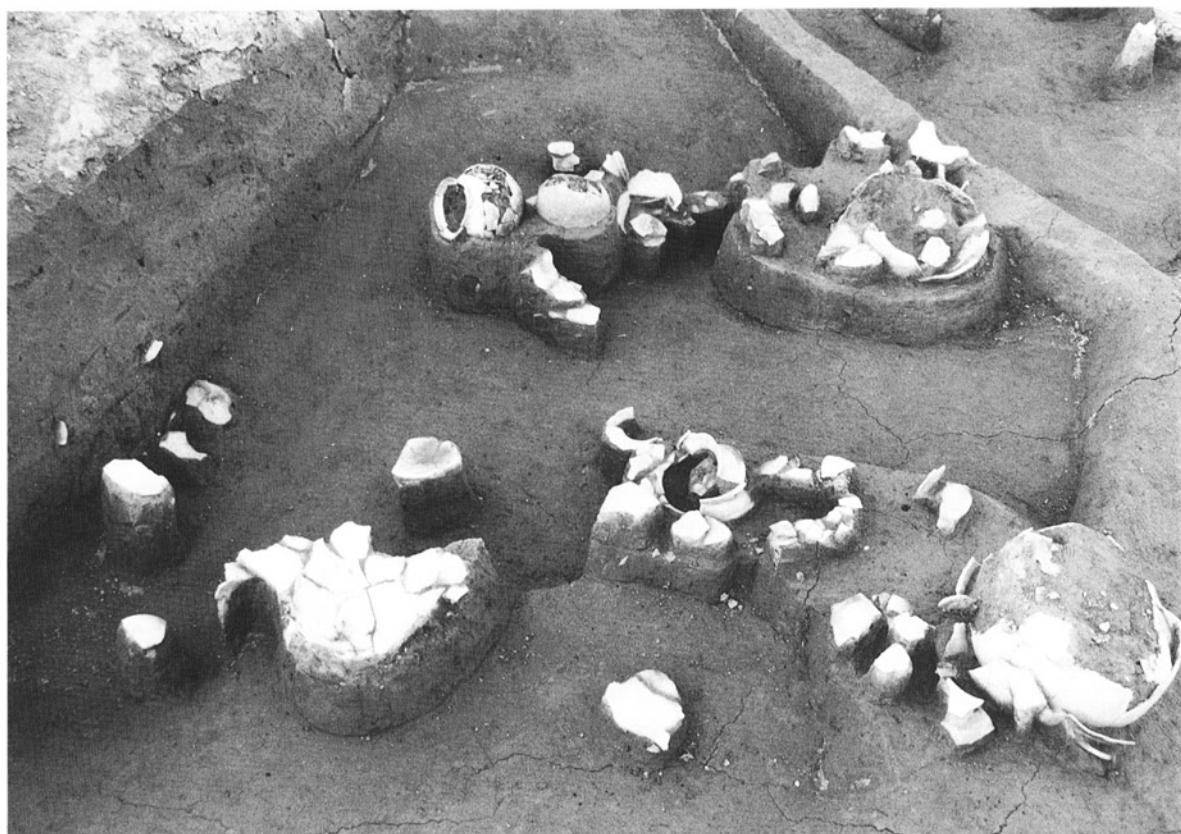


上層土器群（北から）



上層土器群（南から）

A 4 区第3遺構面  
周溝SD五五  
(4)



上層土器群（北から）



上層土器群（北から）

A4区第3遺構面 周溝SD五五(5)



上層土器群（南から）



土層（南から）

A4区第3遺構面  
竪穴住居SH六三(1)



全景（北から）



全景（南から）

A4区第3遺構面  
竪穴住居SH六三(2)

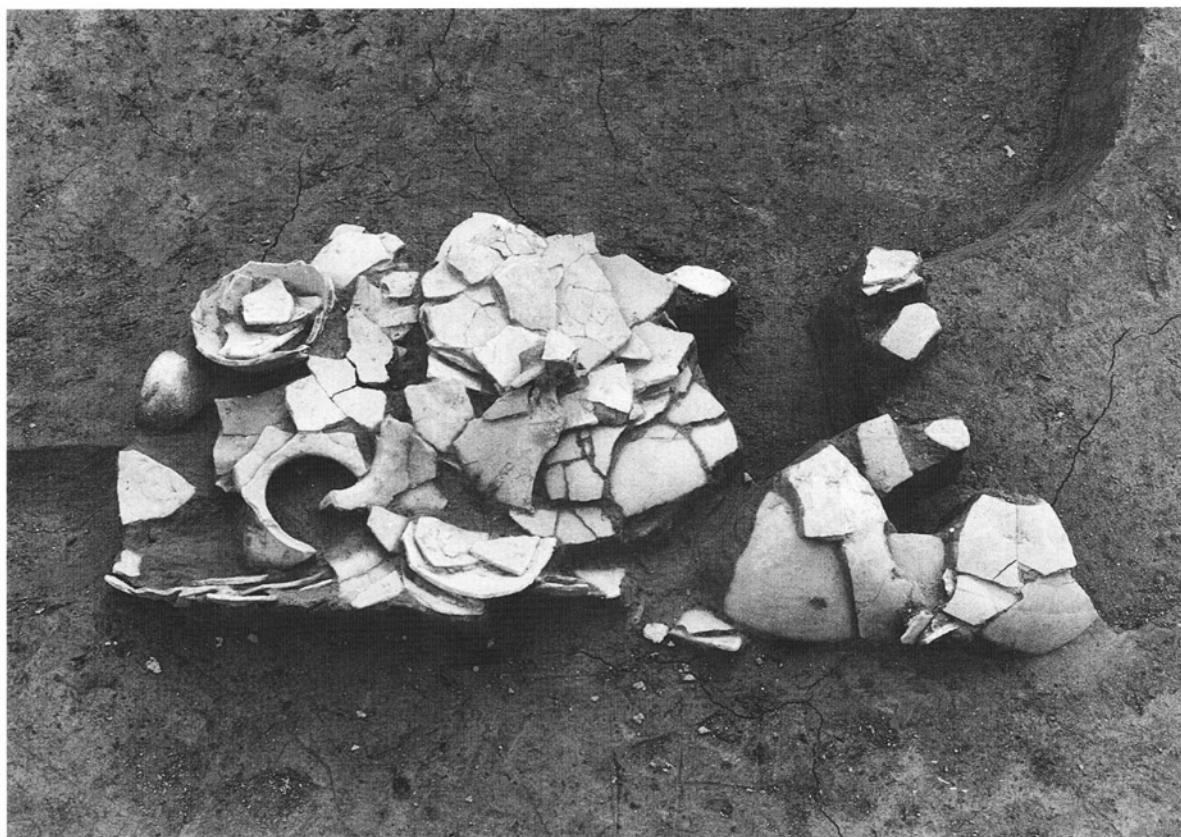


全景（西から）



建物北西隅部分（西から）

A4区第3遺構面 積穴住居SH六三(3)



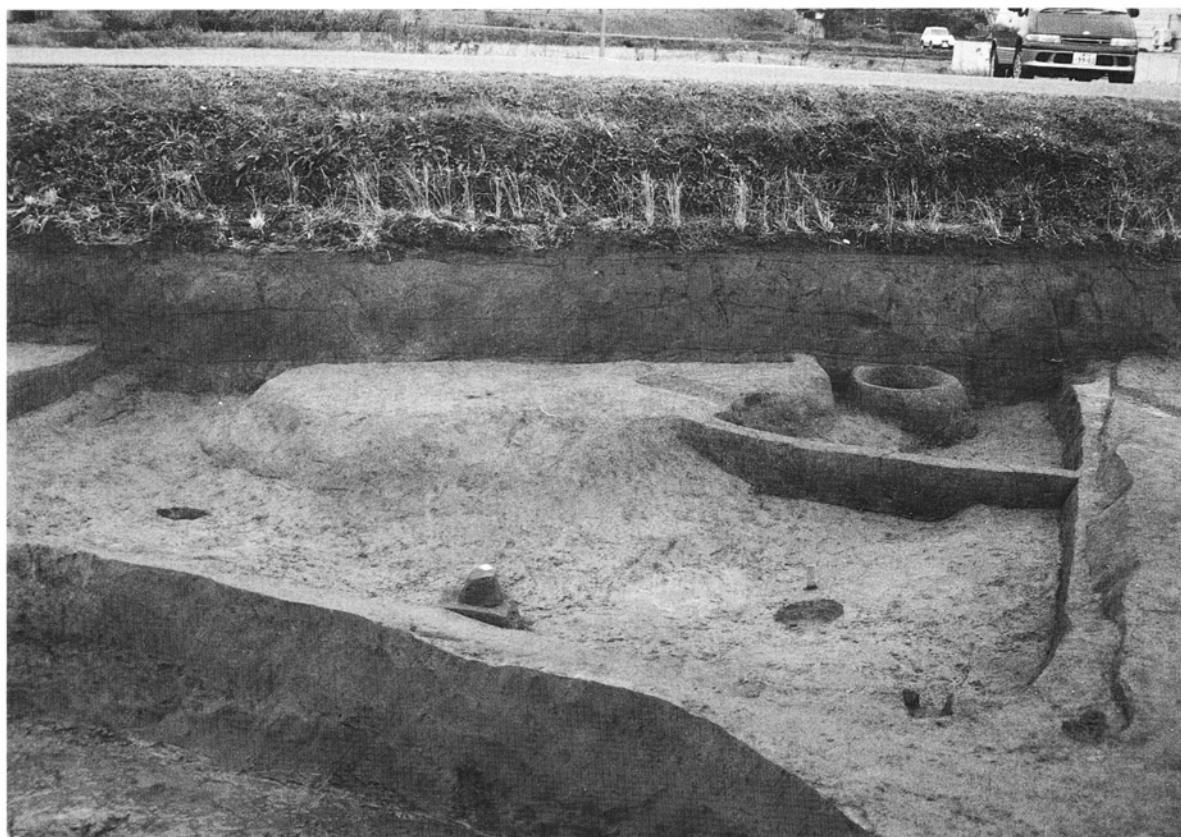
北西隅土器出土状況（北から）



西壁土器出土状況（西から）



南壁土層（北から）



床下埋土除去後（北から）



土坑 S K 60 (西から)



落ち込み S K 81 (西から)



北から



東から

A4区第3遺構面 井戸SE79・土坑SK80



S E 79・80 (南から)



S E 79 (南から)

A4区第2遺構面 墓穴住居SH四九



全景（西から）



移動式カマド出土地付近の被熱部分（西から）



第3遺構面 土器群 S Z 56 (南から)



第2遺構面 堅穴住居 S H 65 (南から)



東から



西から

A 4 区第1遺構面  
遺構



溝 S D 25・26 (東から)



井戸 S E 29 (南から)



西から



東から



壺出土状況（東から）



壺出土状況（西から）

A5区第3遺構面 周溝SD五四(2)



北西隅部分（西から）

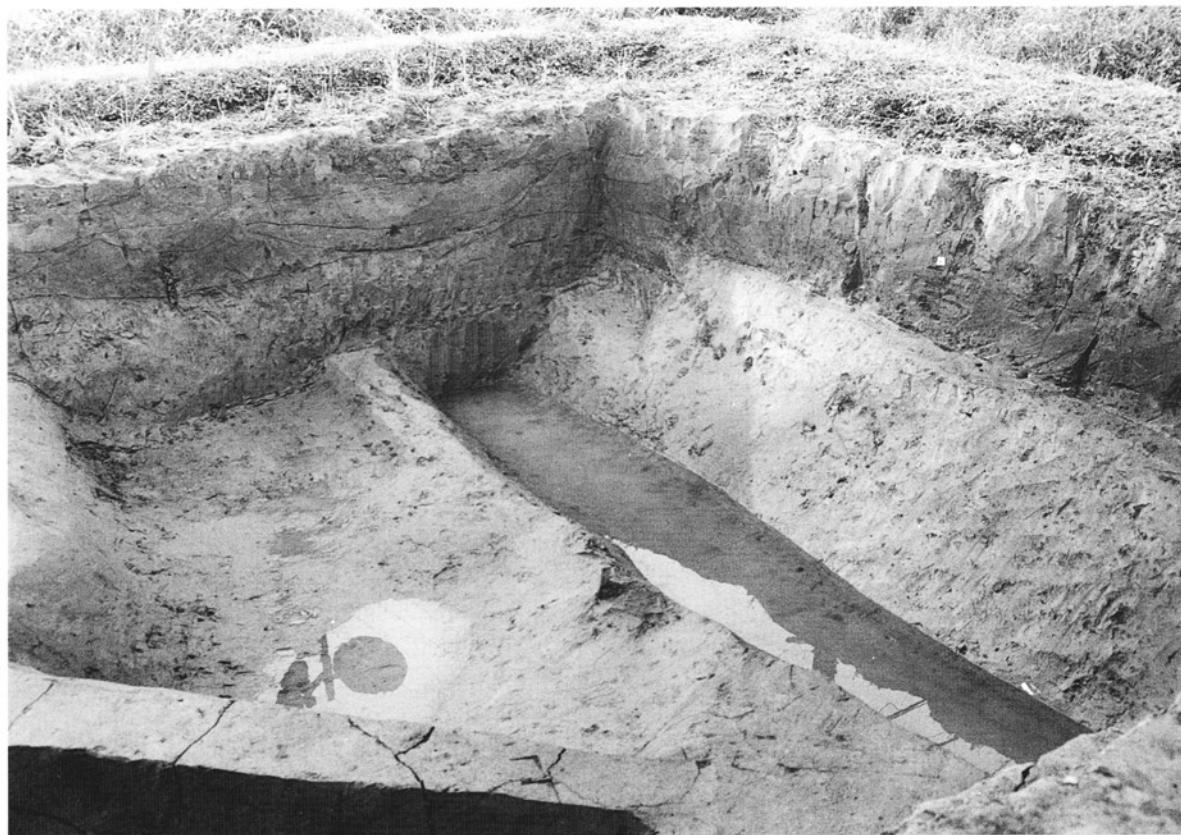


土層（東から）

A 5区第3遺構面  
溝SD六七



土層（南から）



北東から



全景（東から）



井戸 S E 50（北から）

B2区  
全景



西から



西から



全景（南東から）



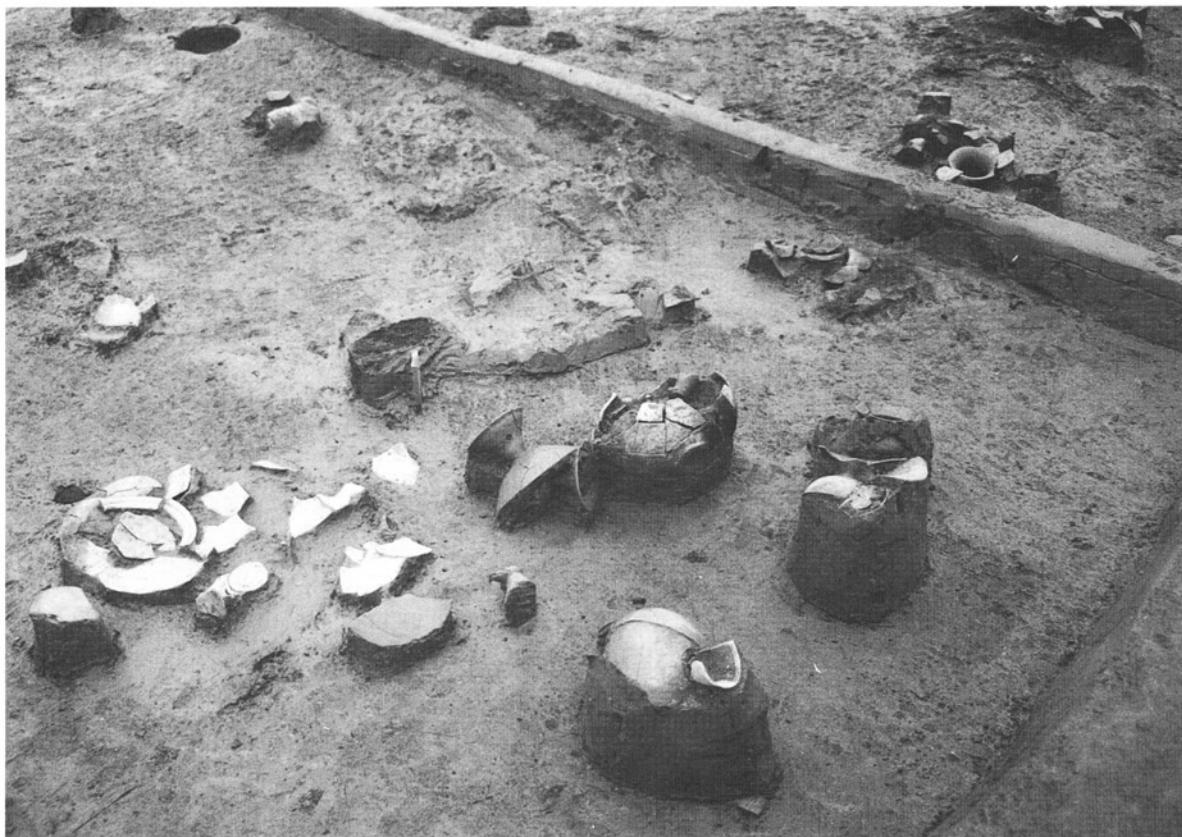
全景（北西から）



土器と炭化材（北から）



出土状況（南西から）



出土状況（西から）



出土状況（北西から）



出土状況（西から）



高杯・小形器台・小形壺の重なり（西から）

B2区堅穴住居SH八三(1)



全景（南西から）



炭化材検出状況（西から）

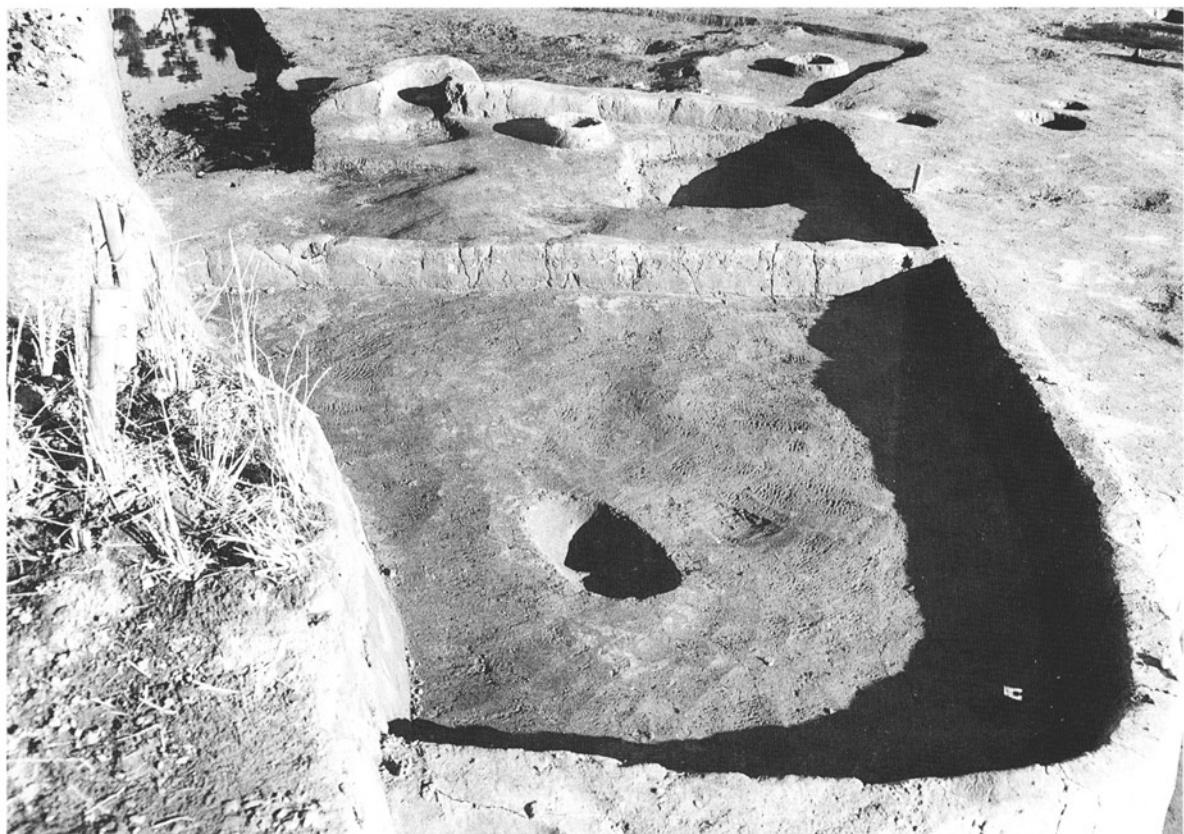


全景（北西から）



炭化材検出状況（西から）

B2区  
竪穴住居 SH六九・七〇



S H 70 (西から)



S H 69 (西から)



全景（北から）



結桶の状況（北から）

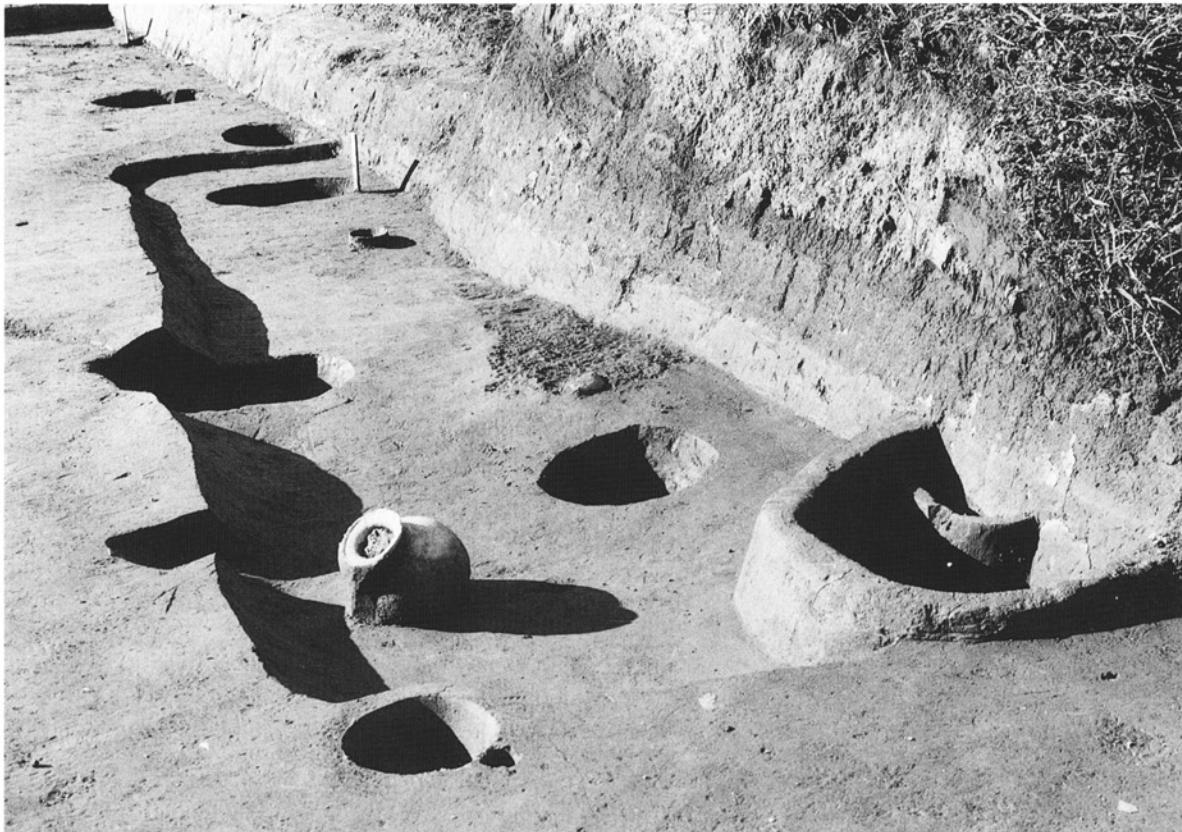


全景（東から）

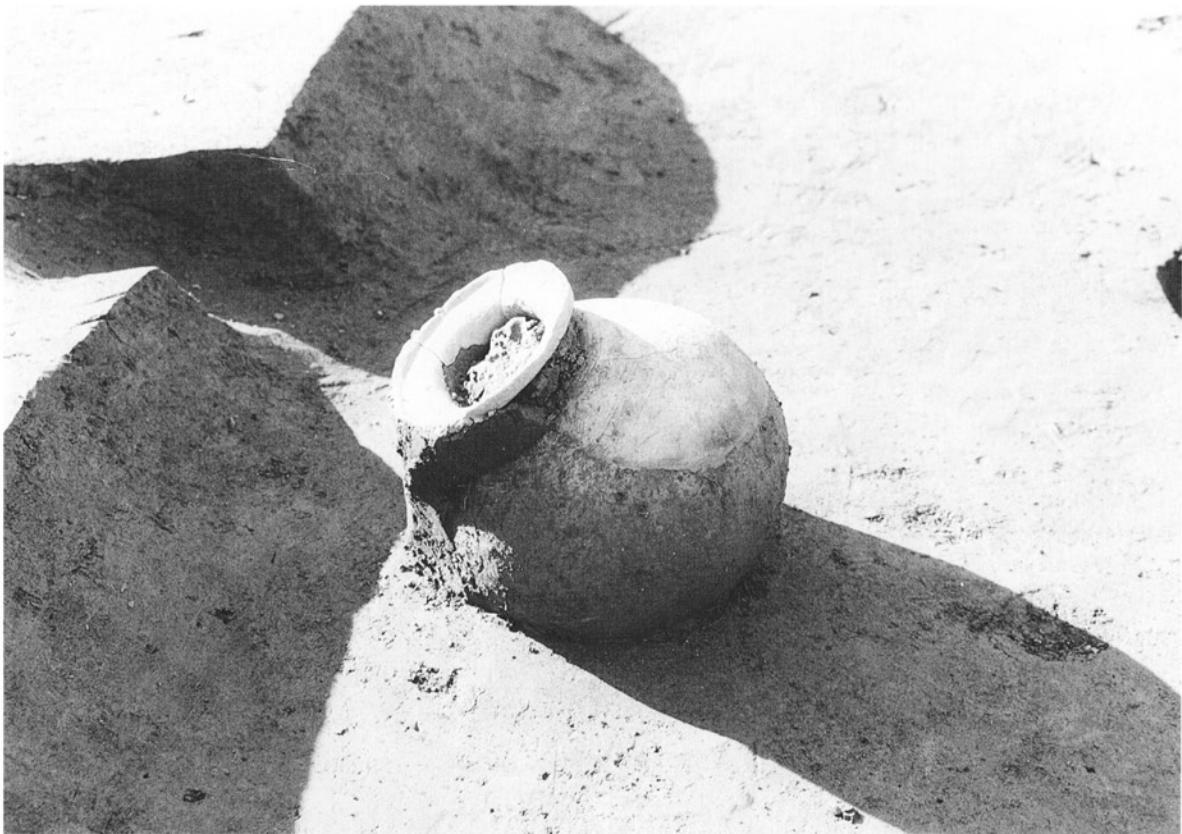


竖穴状況 S H 78付近（南東から）

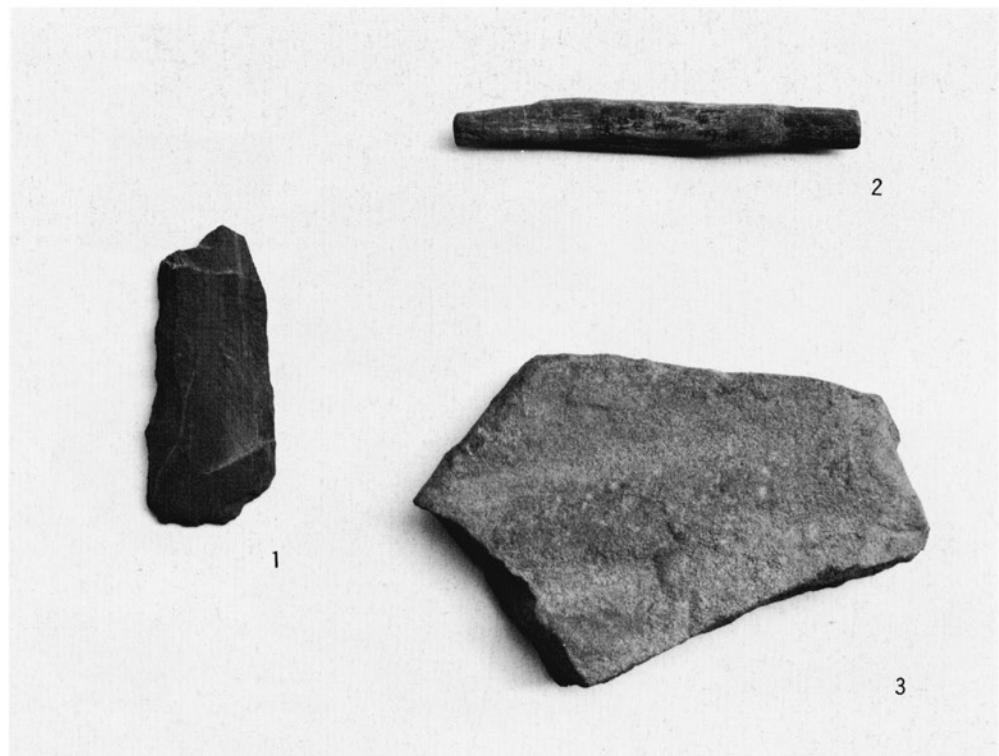
B3区竪穴住居SH九六



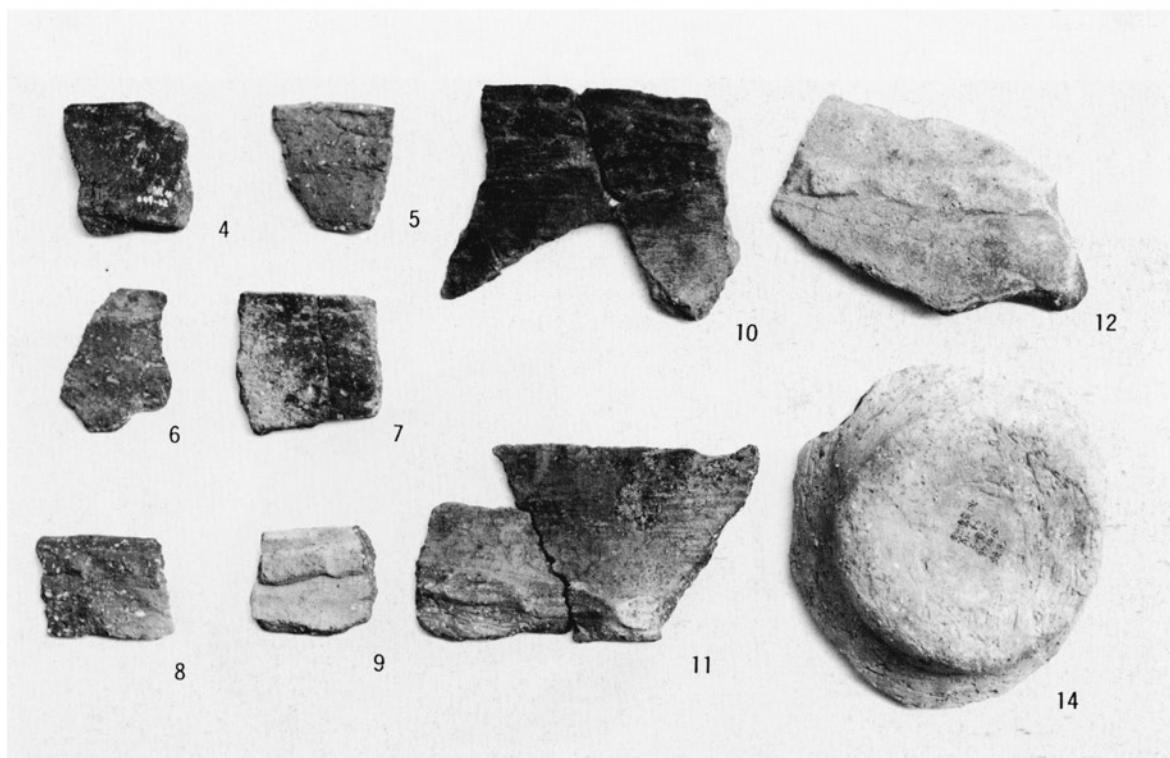
全景（西から）



壺出土状況（東から）

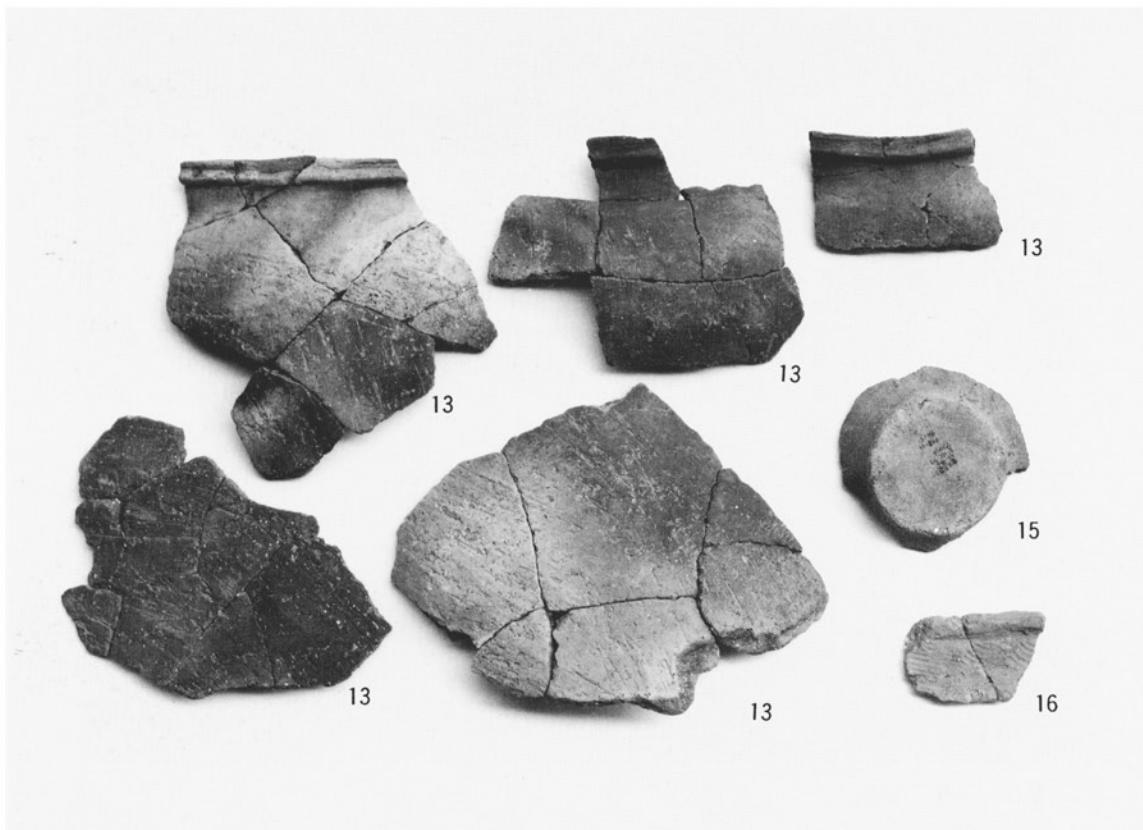
出土遺物(1)A  
1区

第 5 • 4 面石製品

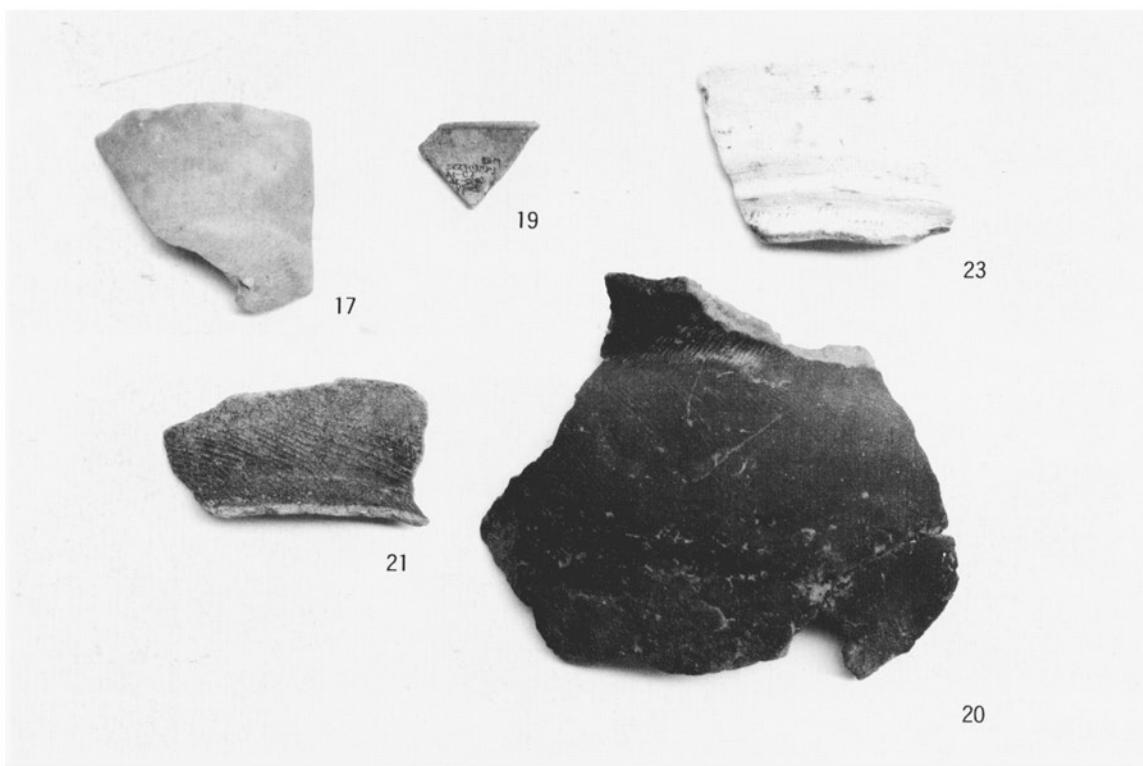


縄文土器

出土遺物(2)  
A 1区



縄文土器



S Z 40出土土器



18



28



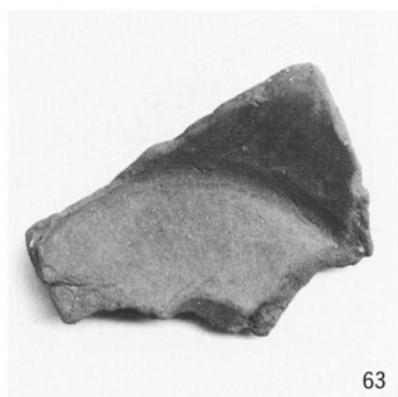
61



22



29



63



24



55



70



26

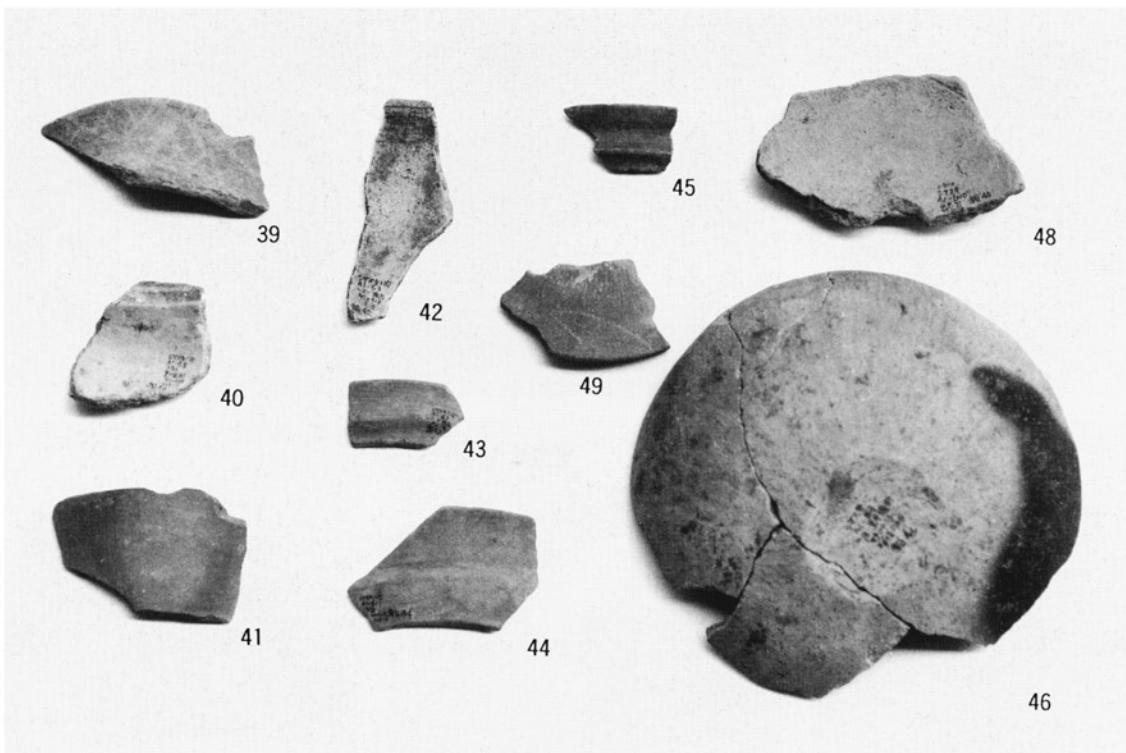


60

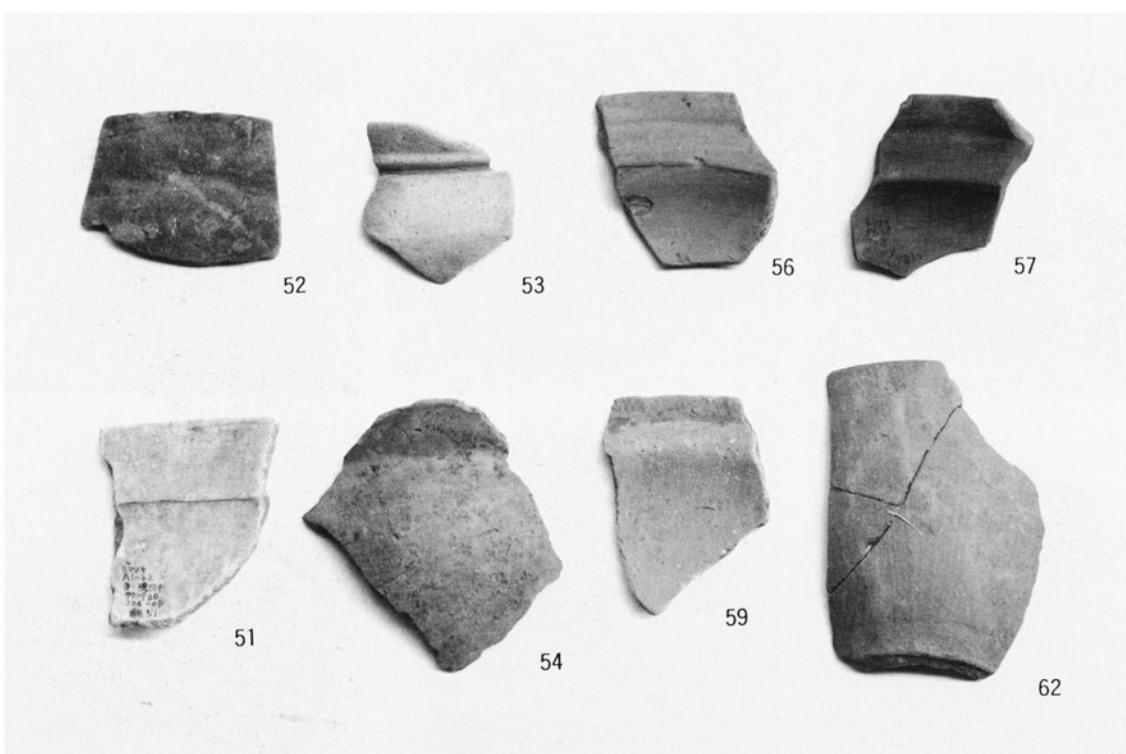


87

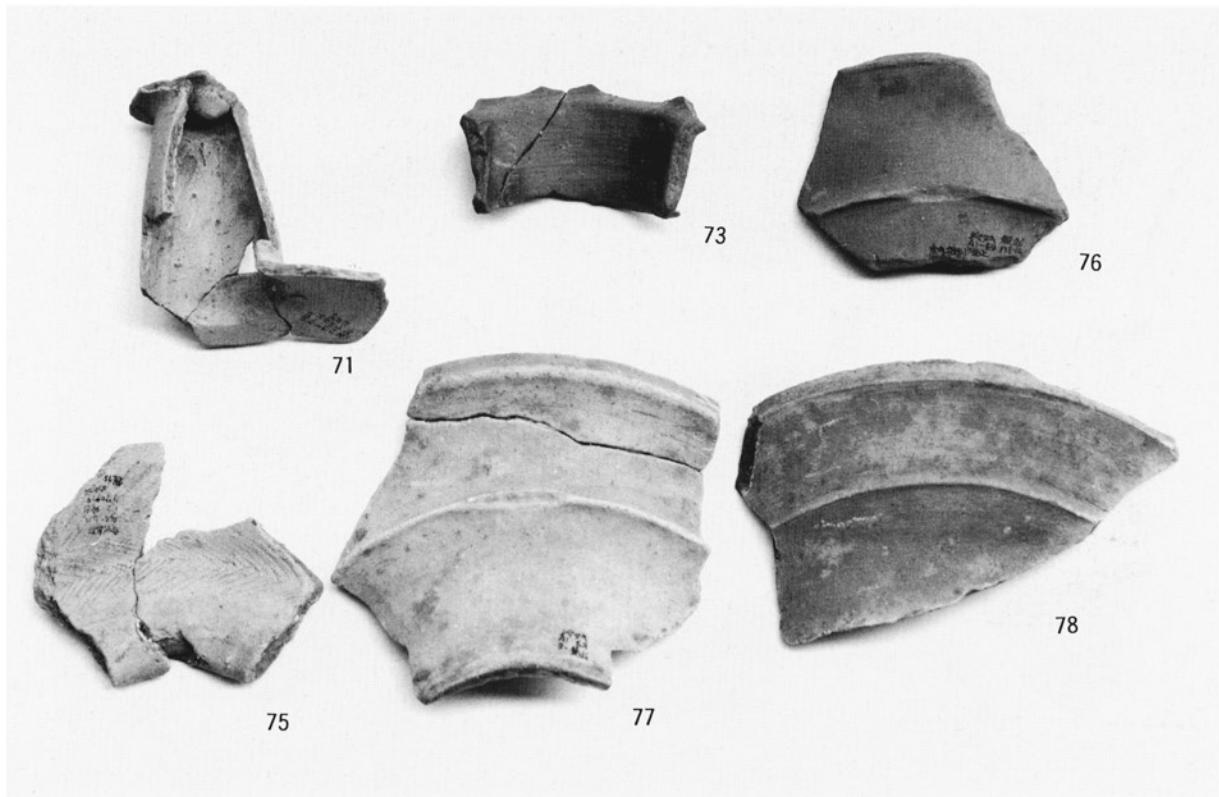
出土遺物(4)  
A  
1  
区



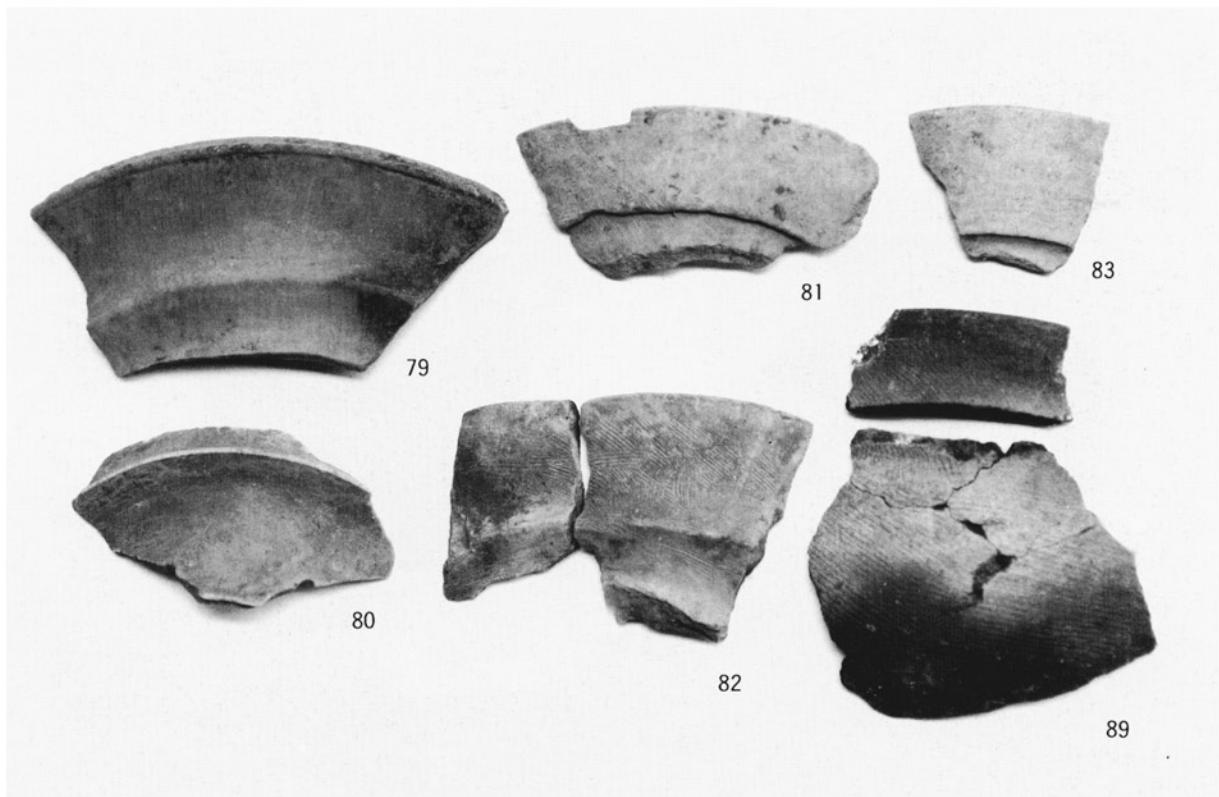
赤彩土器



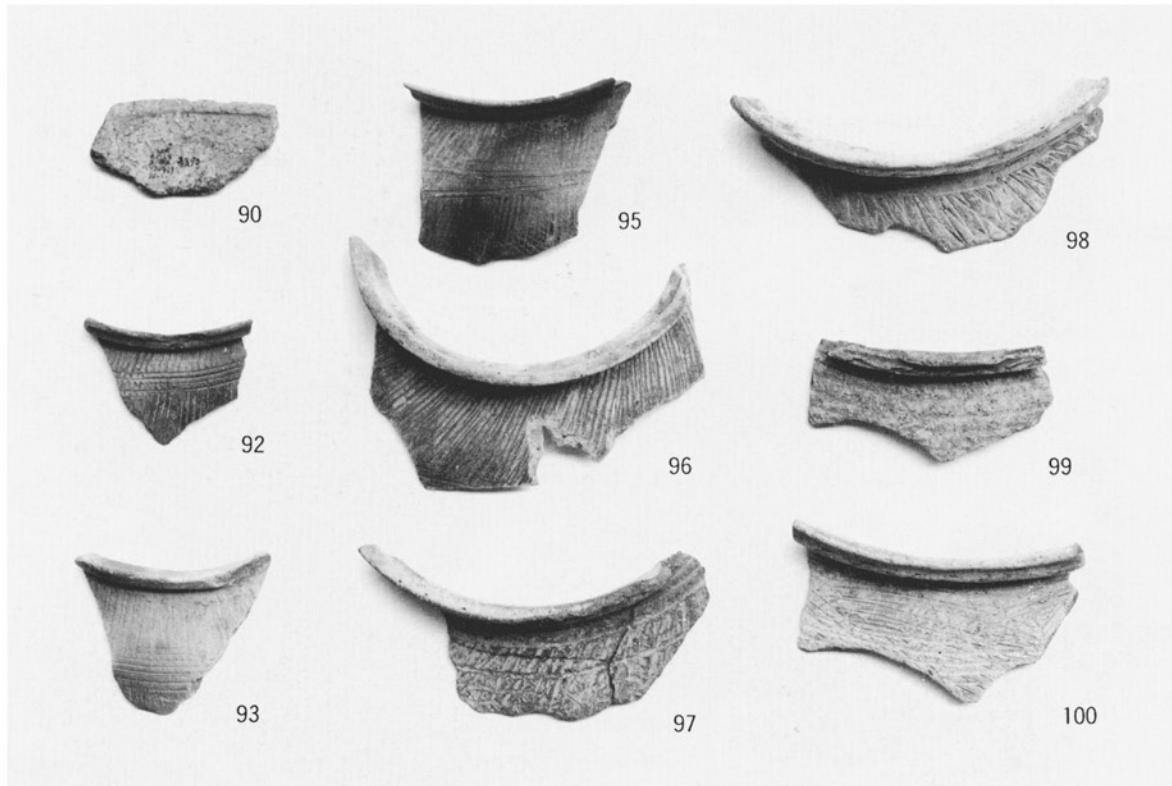
小形鉢ほか



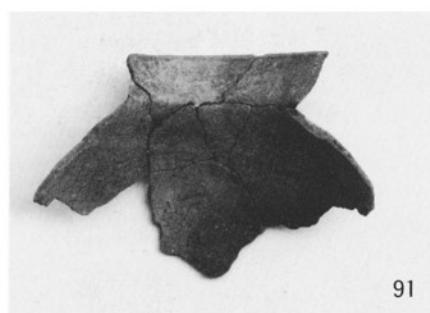
二重口縁壺ほか



外来系土器ほか



台付甕、布留形甕ほか

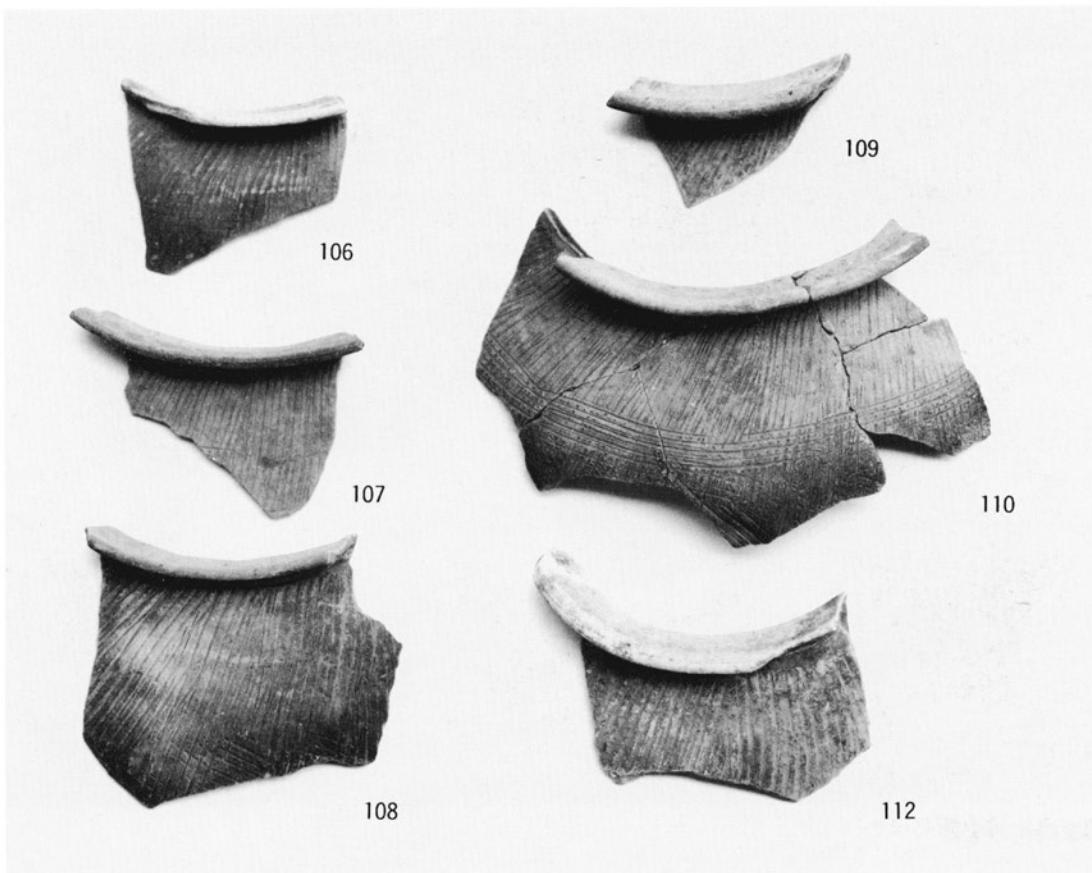


91

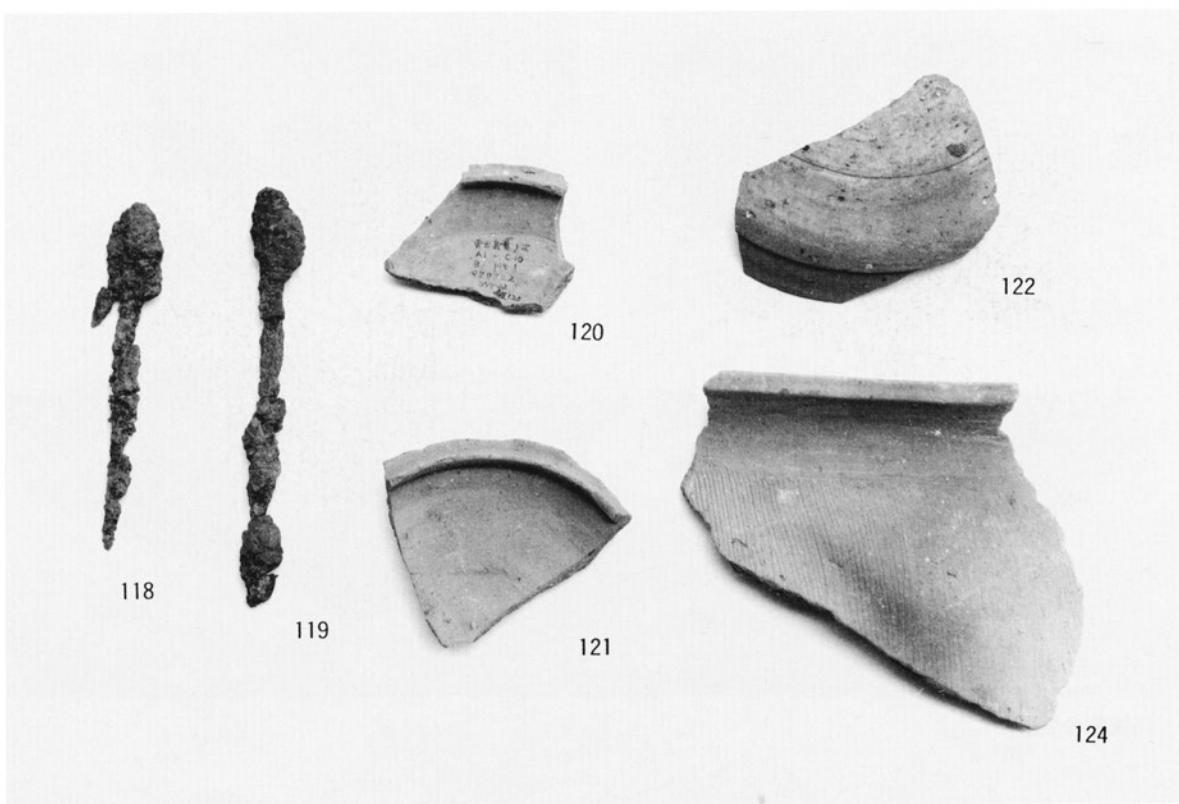


94

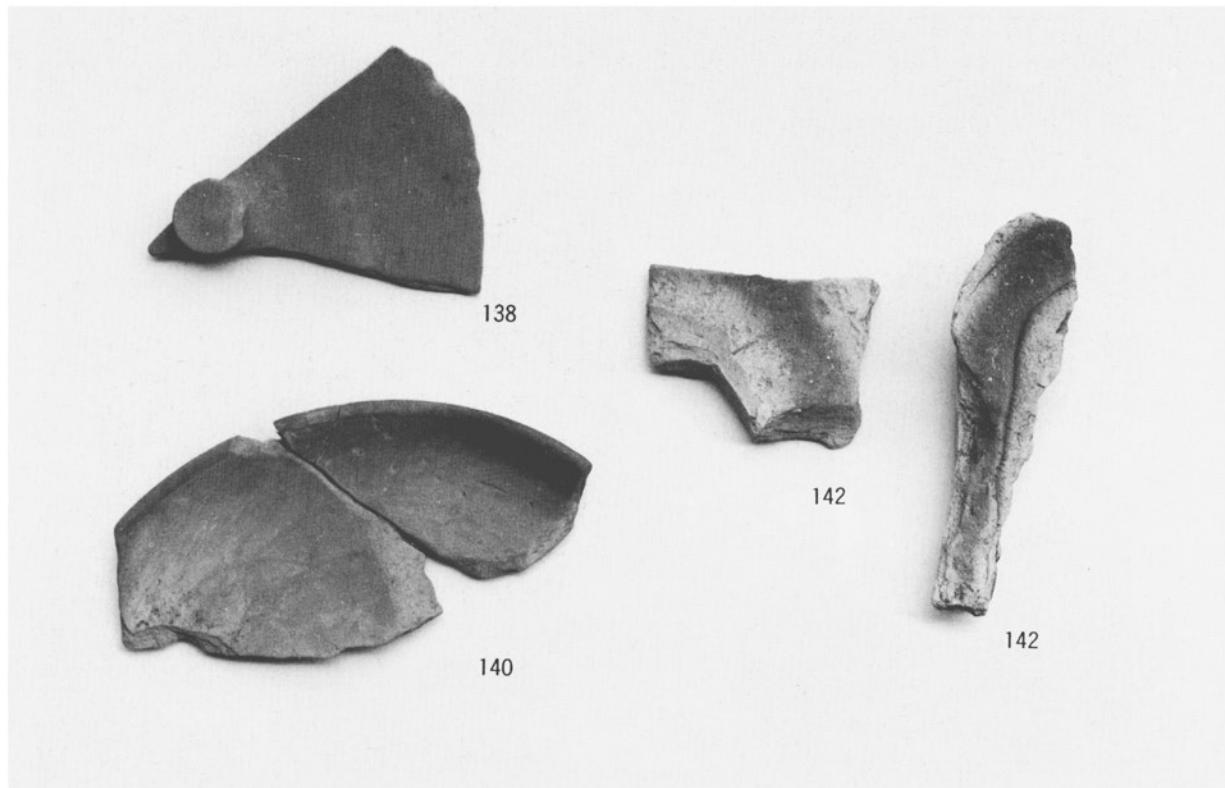
出土遺物(7)  
A 1区



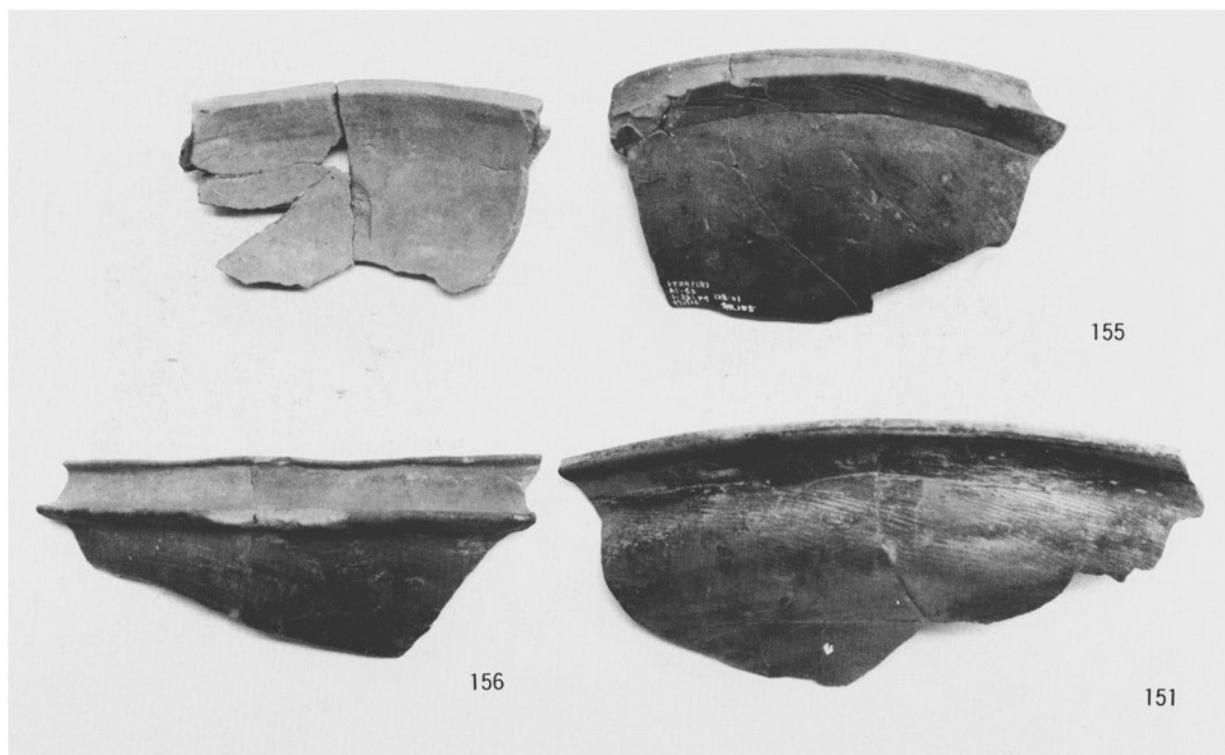
台付甕



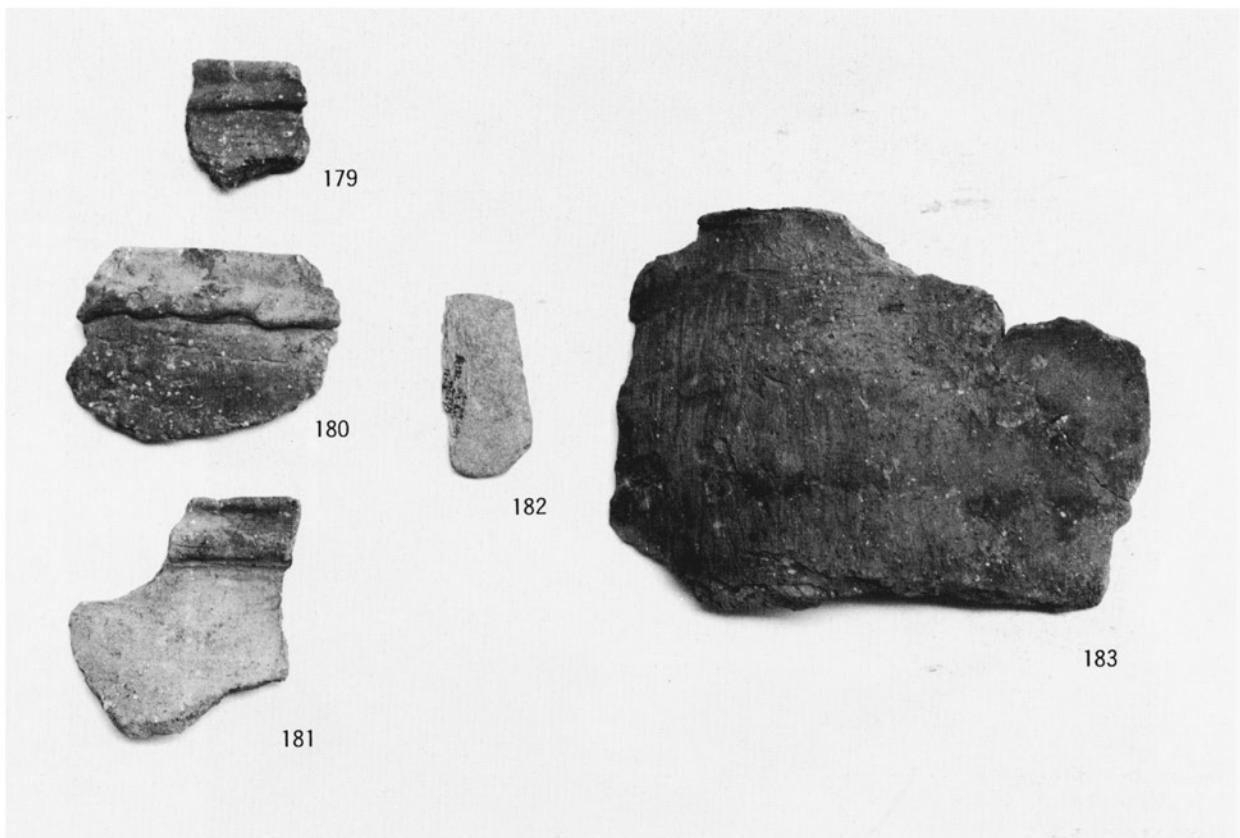
掘立柱建物 S B 105関連



奈良時代の土器



16世紀の羽笠



縄文時代の遺物



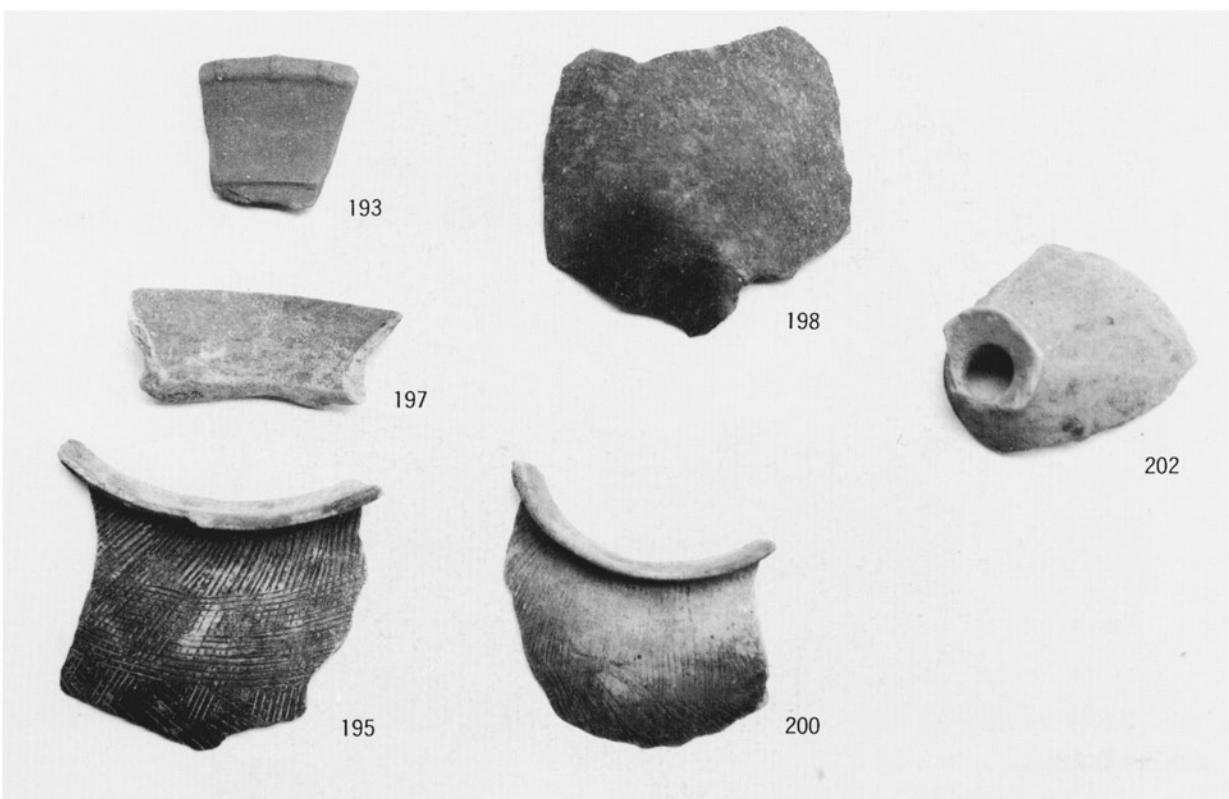
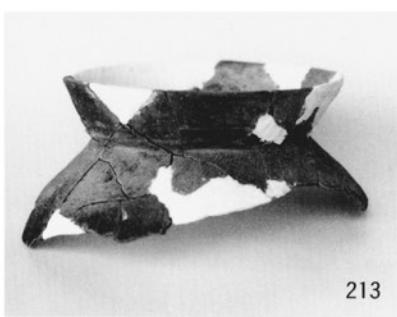
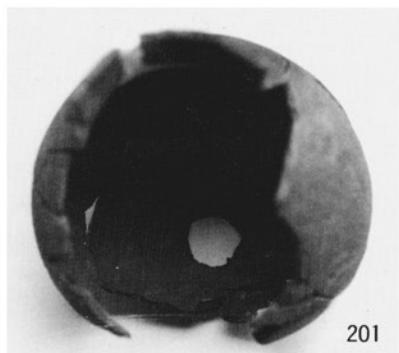
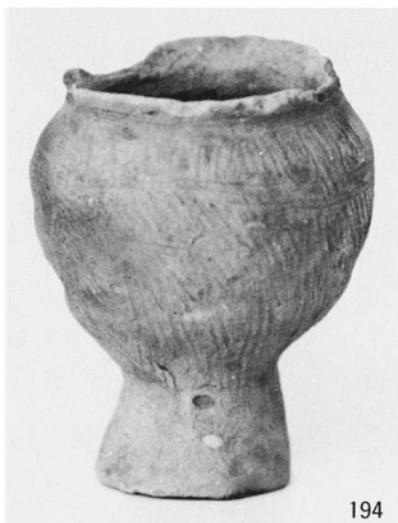
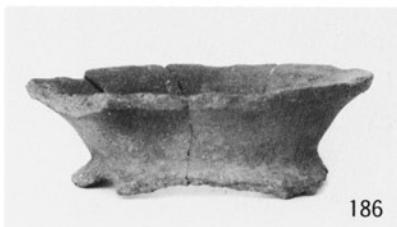
出土遺物(10)  
A  
3区

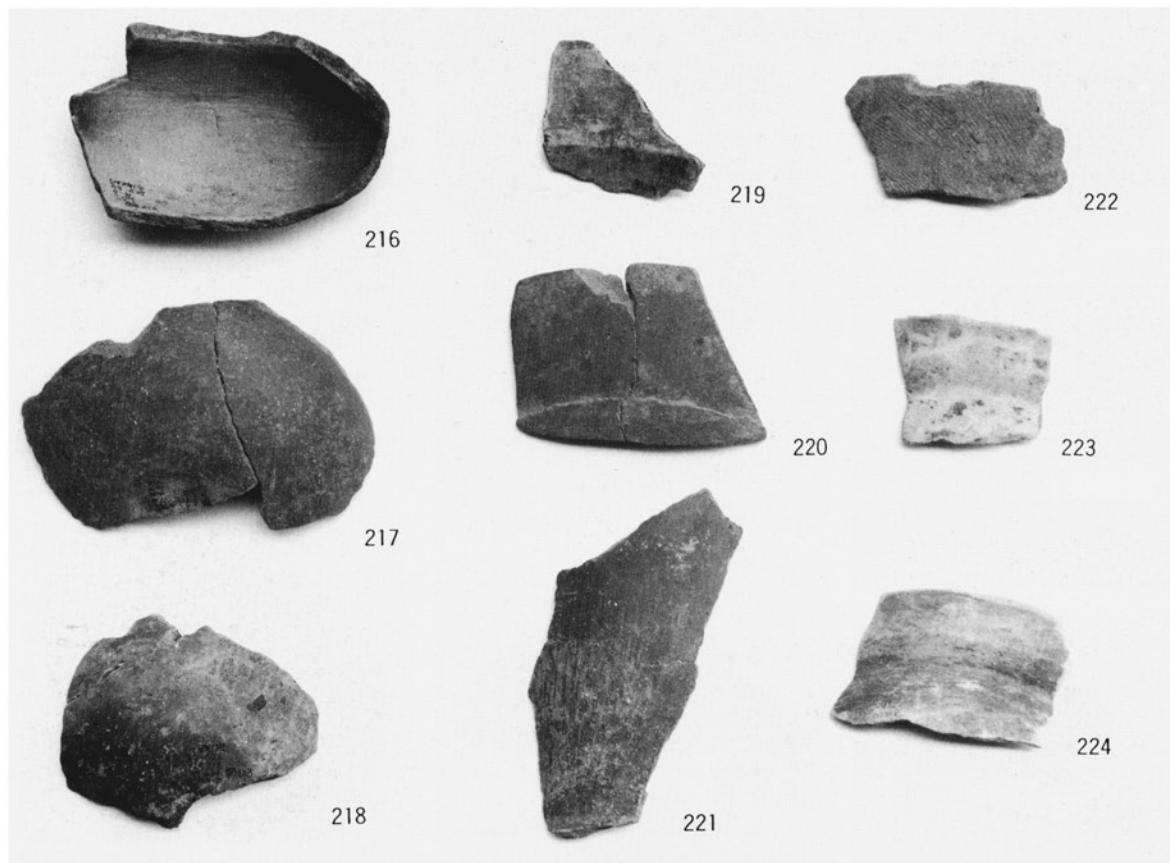


S X 88棺身

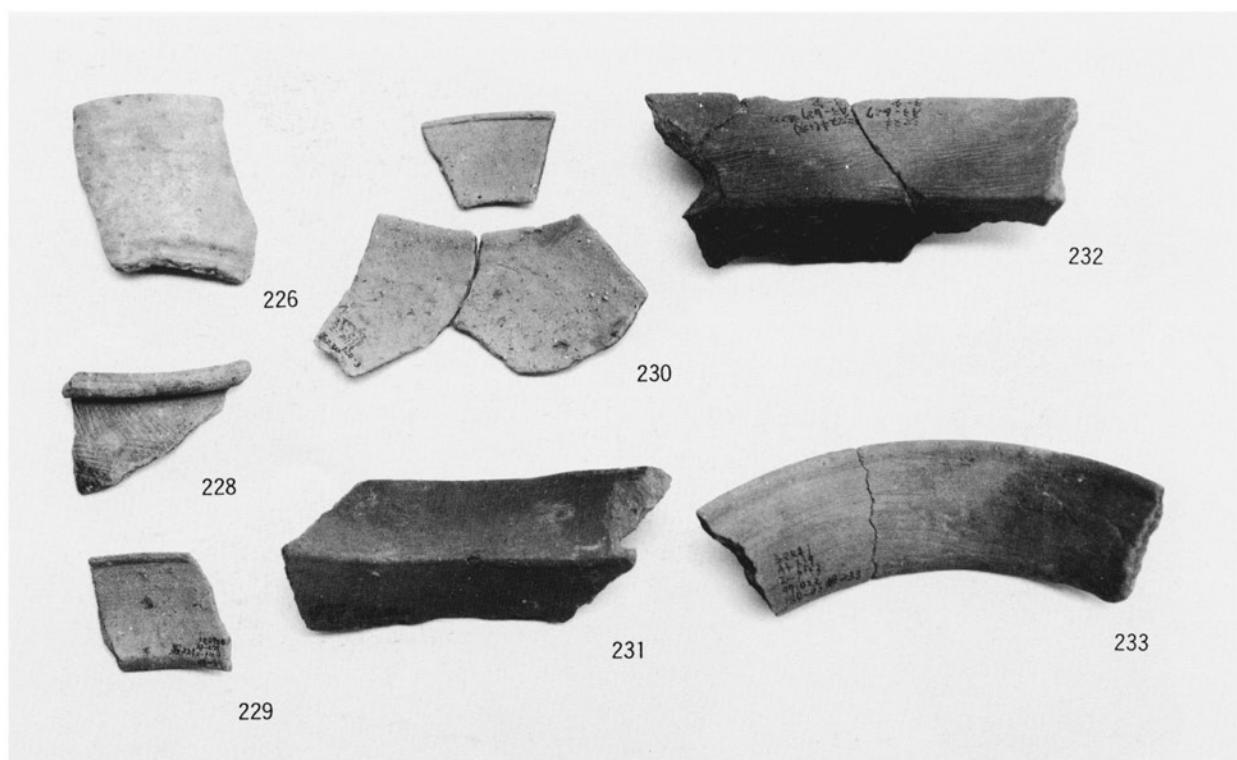


S X 88棺身





赤彩土器



外来系土器ほか



237



238



240



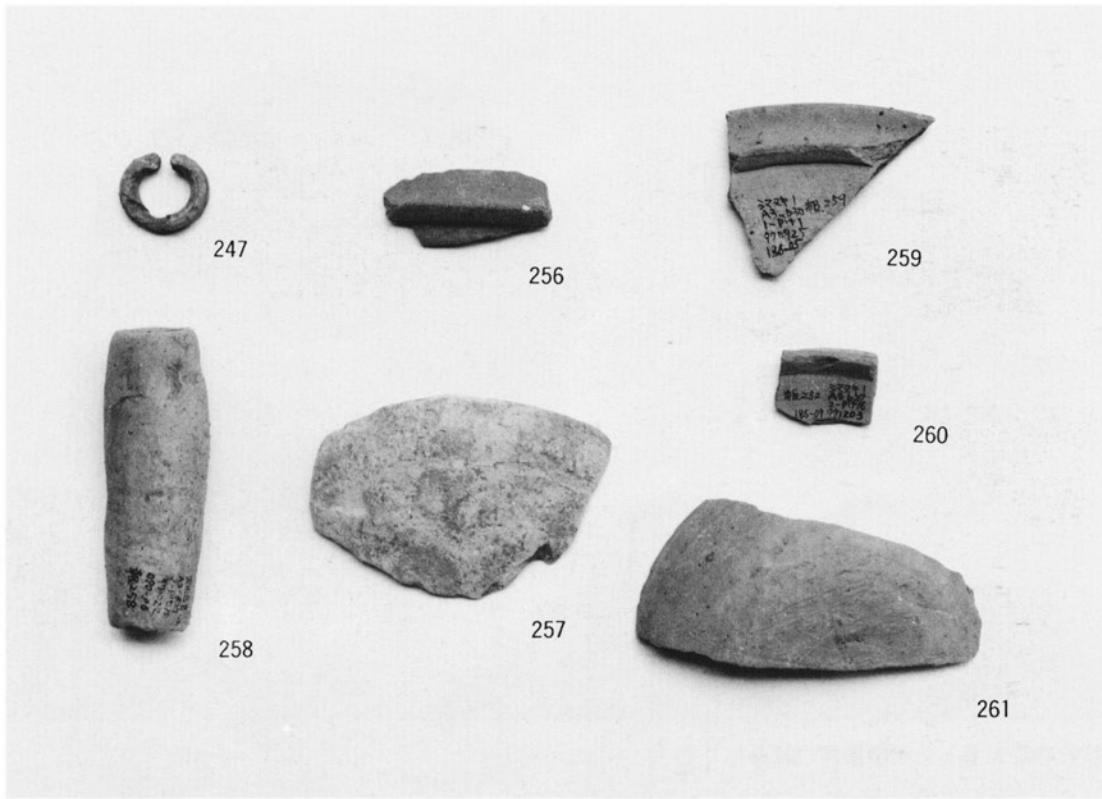
245



246



251



掘立柱建物 S B 106(ほか)

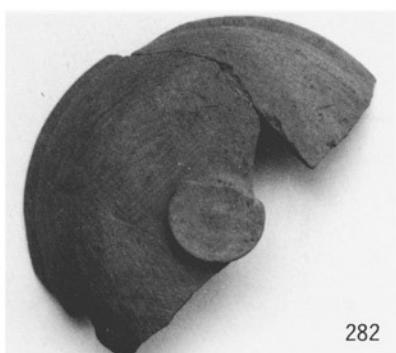
出土遺物(14)  
A  
3  
区



268



279



282

上 面



269



279

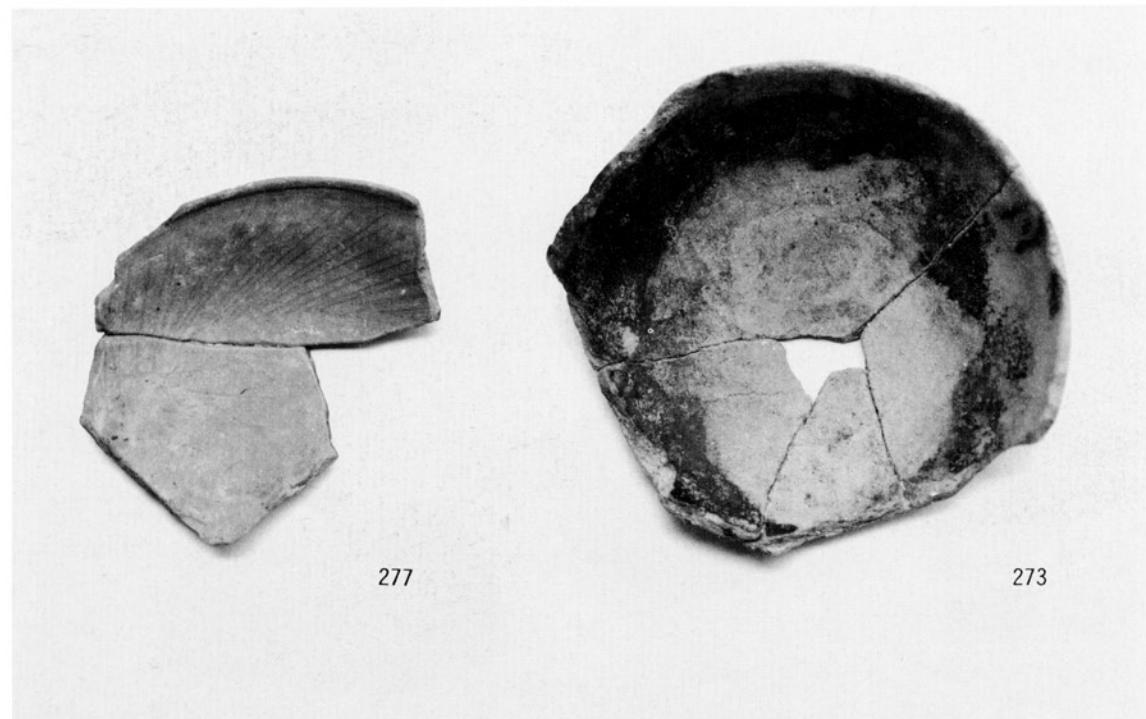


282

内 面



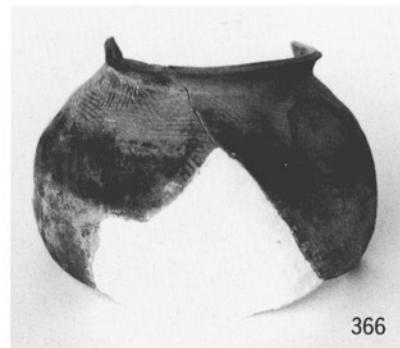
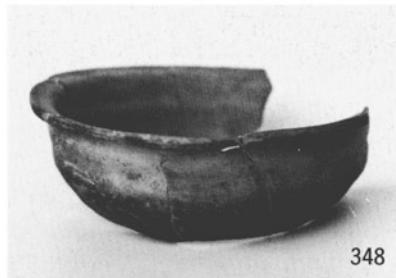
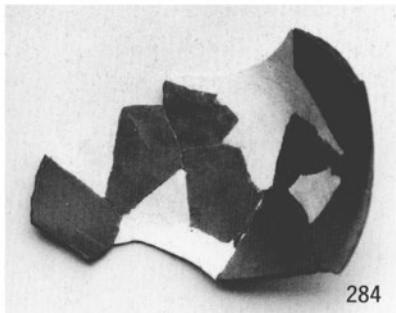
275



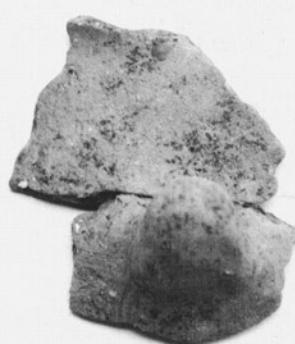
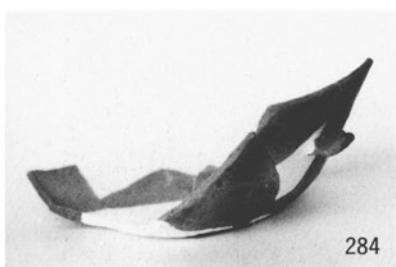
277

273

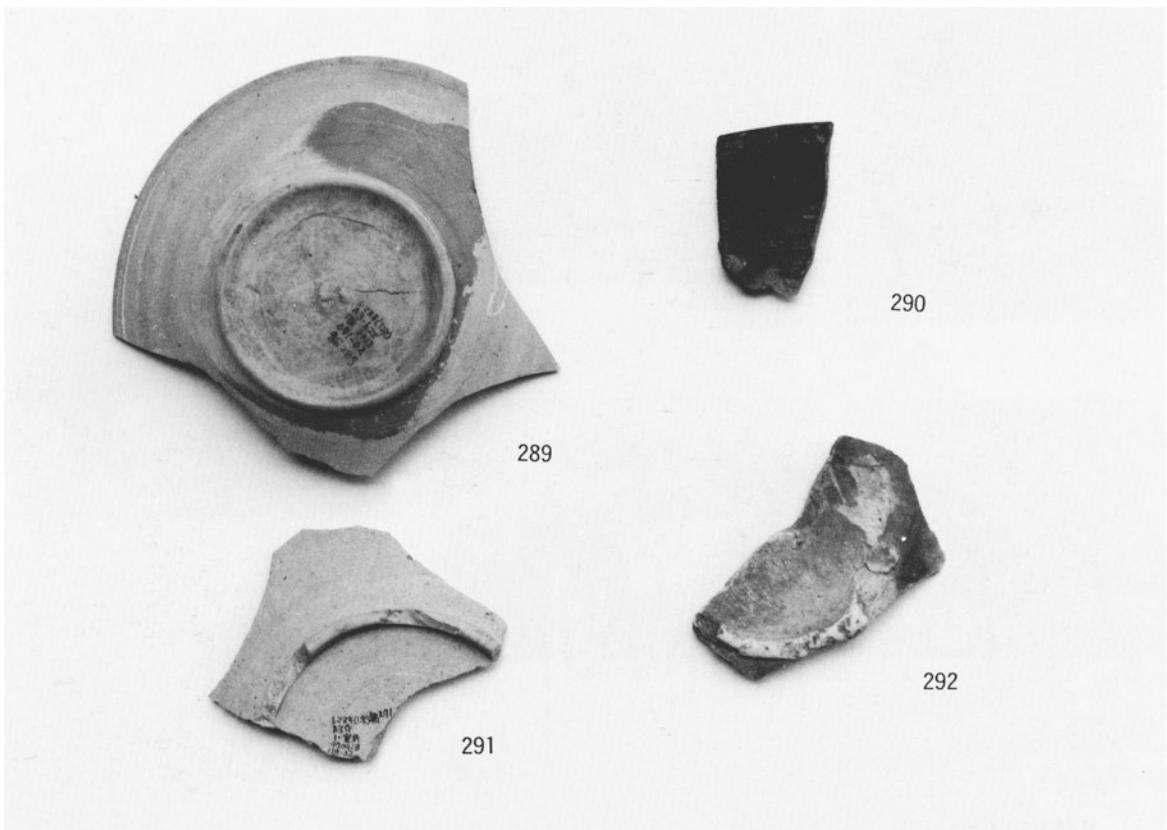
炭化物の付着した土師器杯 (273)



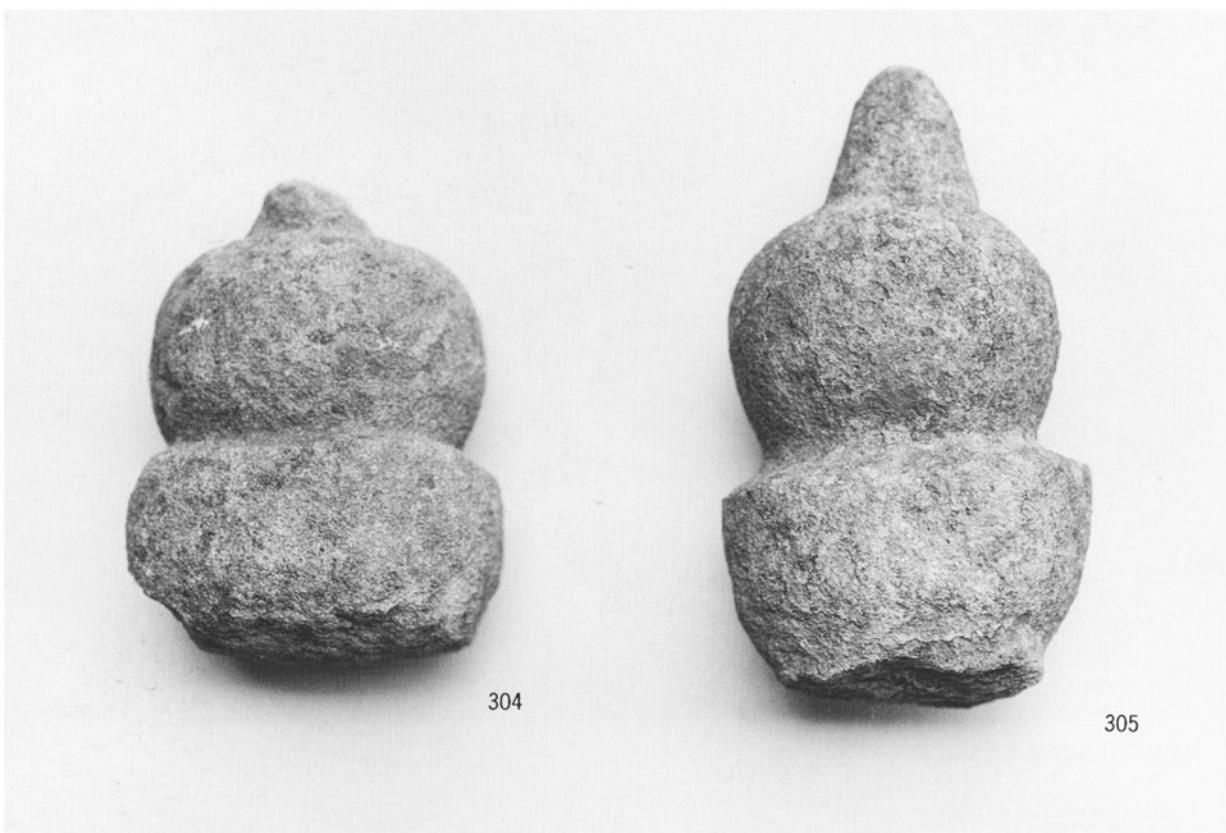
内 面



口縁部に穿孔のある土師器把手付甕 (286)

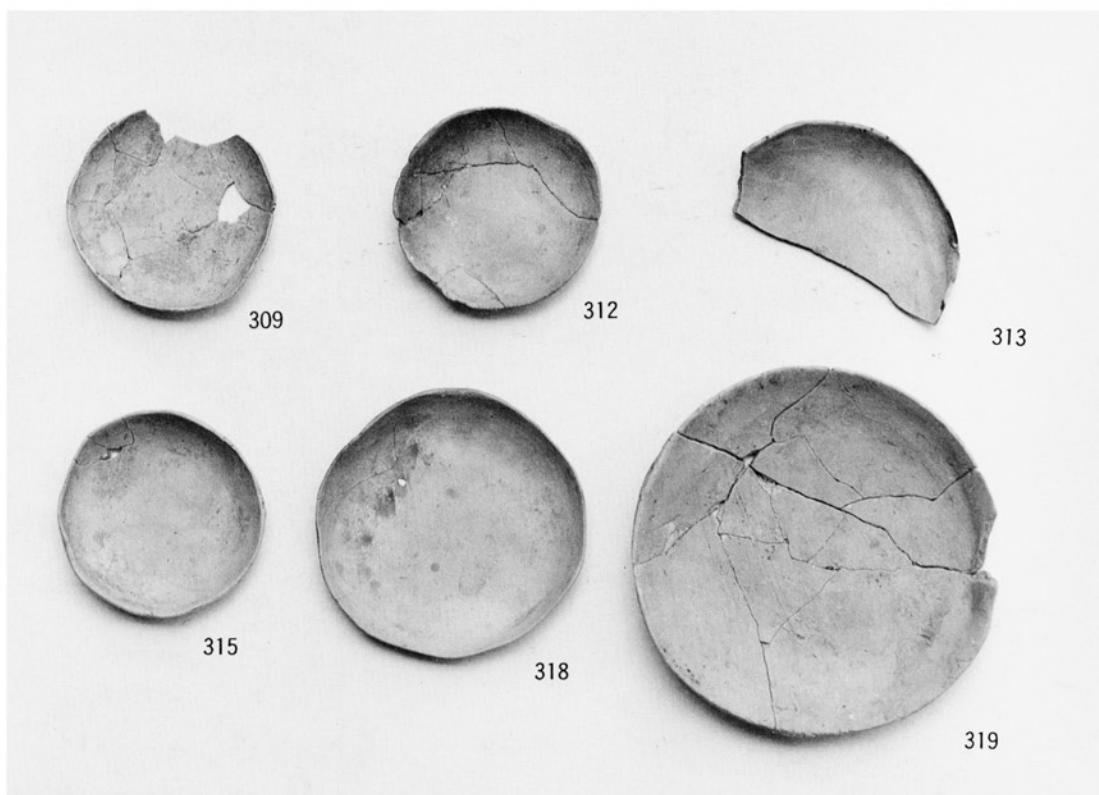


平安～鎌倉時代の土器類

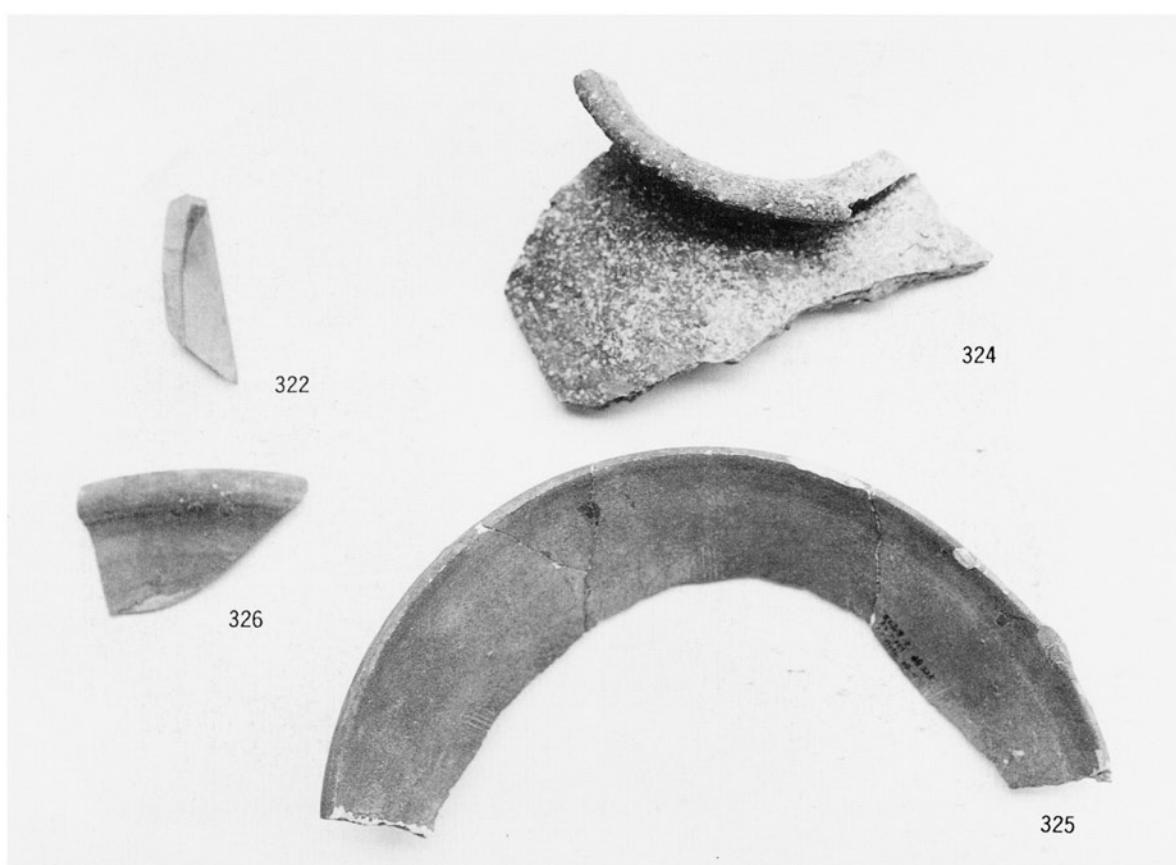


五輪塔片

出土遺物(1) A 3 区



S D 9 出土土師器皿



S D 出土硯、陶器類



335



334



337



336



338



339

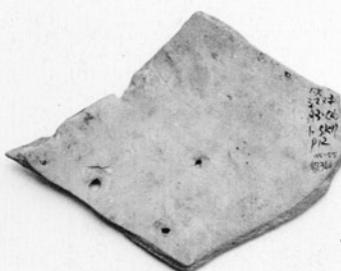
S K 17出土土器類



358



361



363



359



364



360

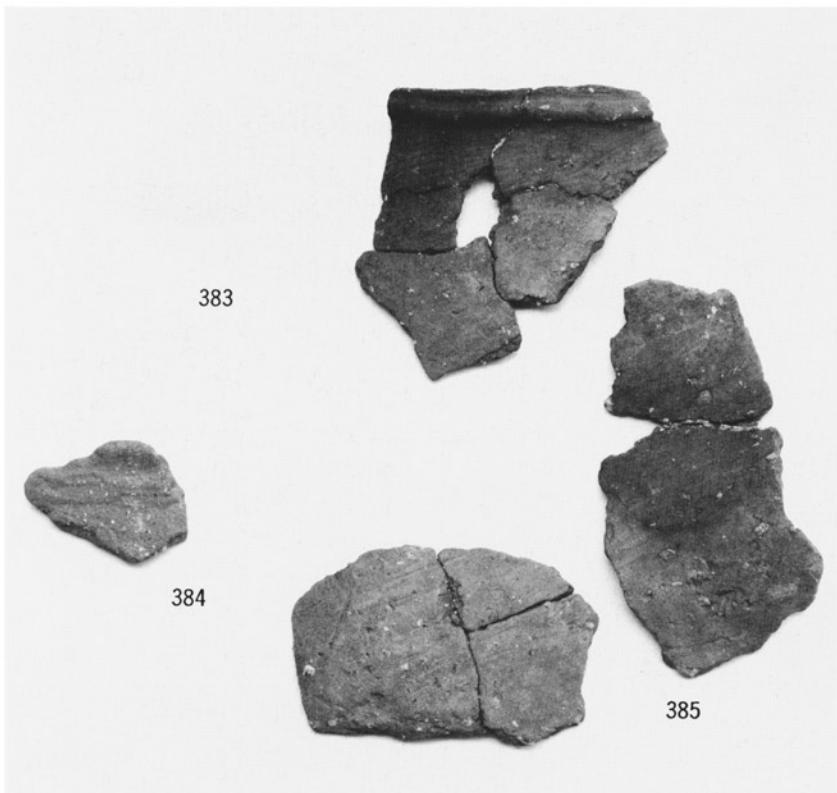


362



365

S K 17出土加工円盤ほか

出土遺物  
19 A 4 区

縄文時代の遺物

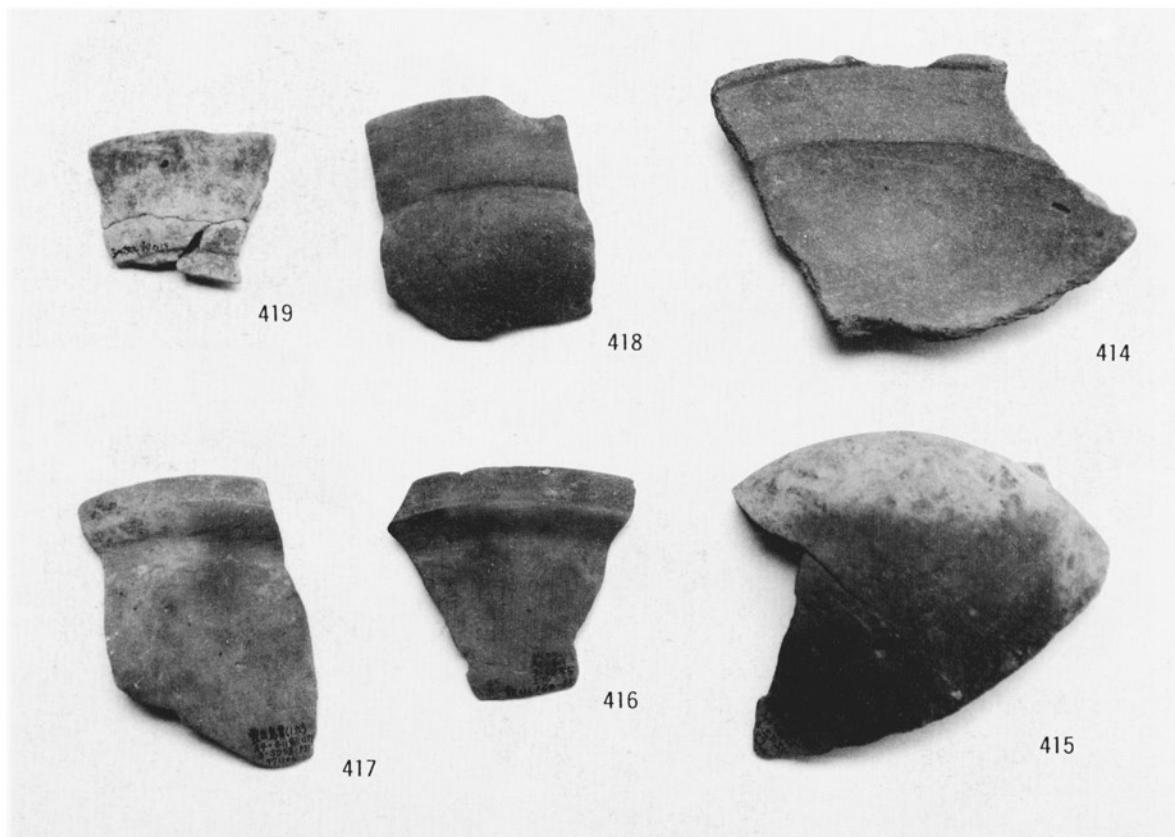


S Z 81出土土器

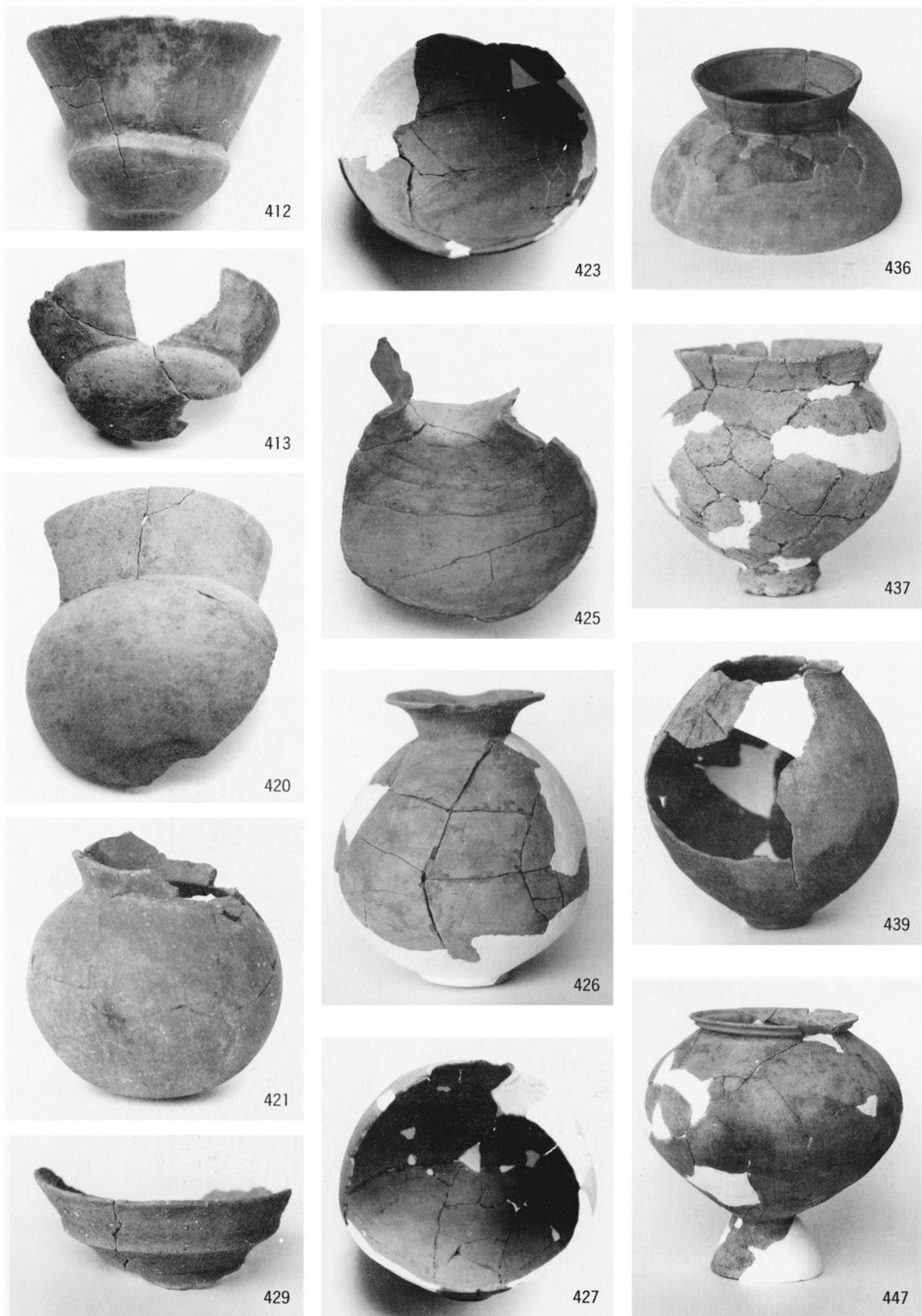
出土遺物  
20 A 4 区



S Z 58出土土器



S D 55出土土器

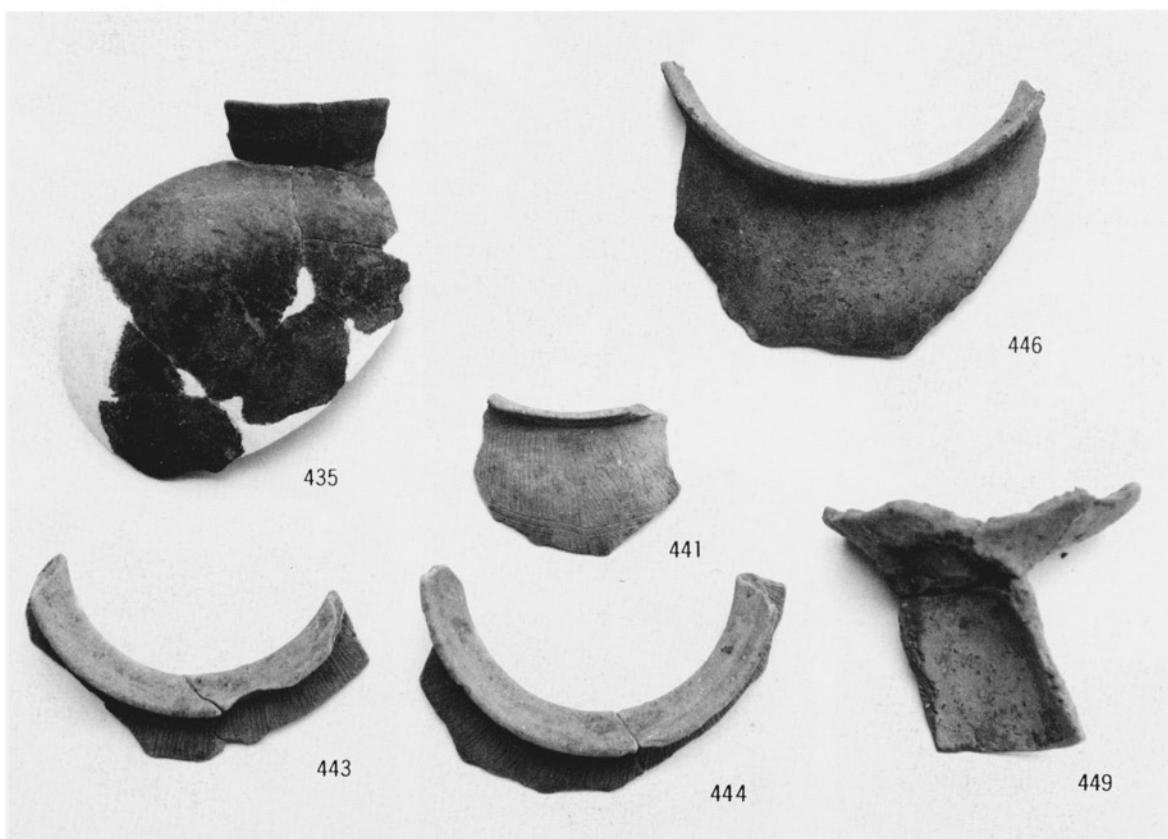


SD55出土土器

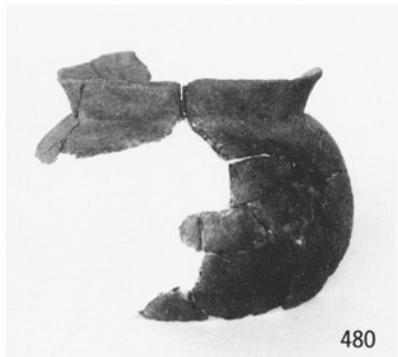
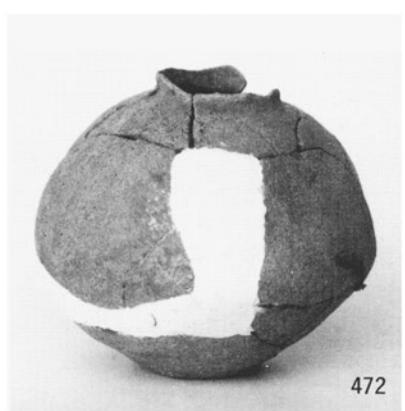
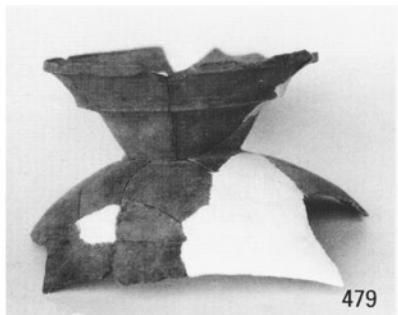
出土遺物  
22  
A 4  
区



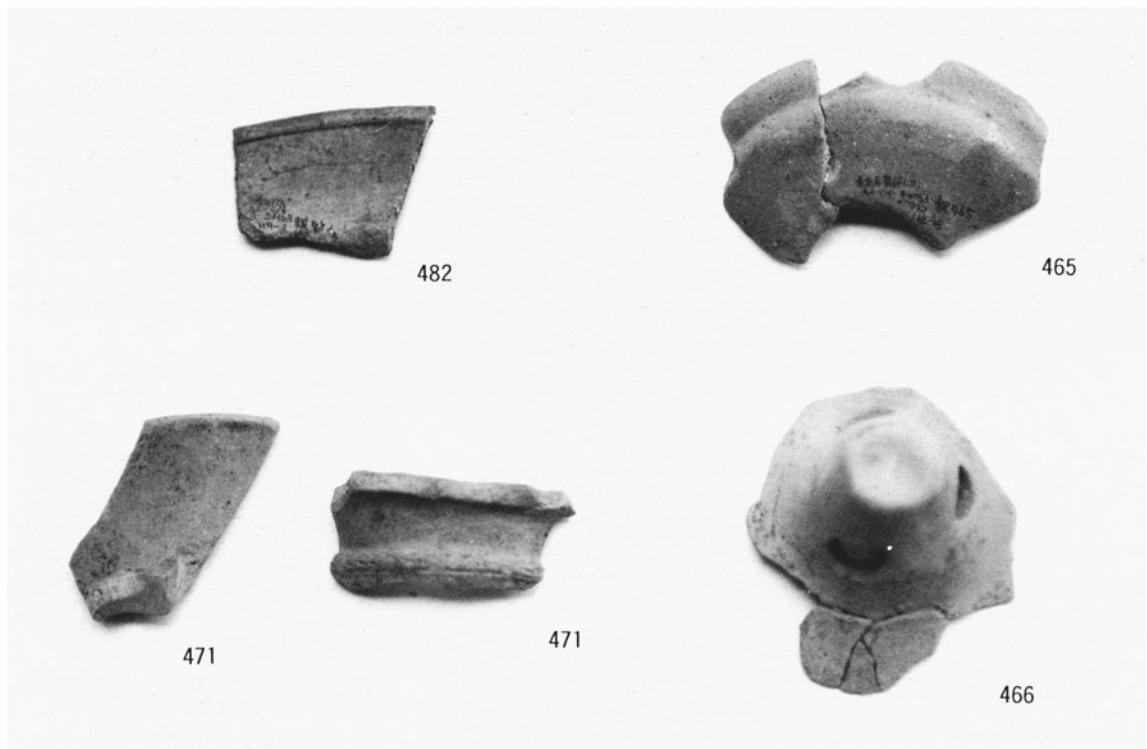
S D 55出土二重口縁壺



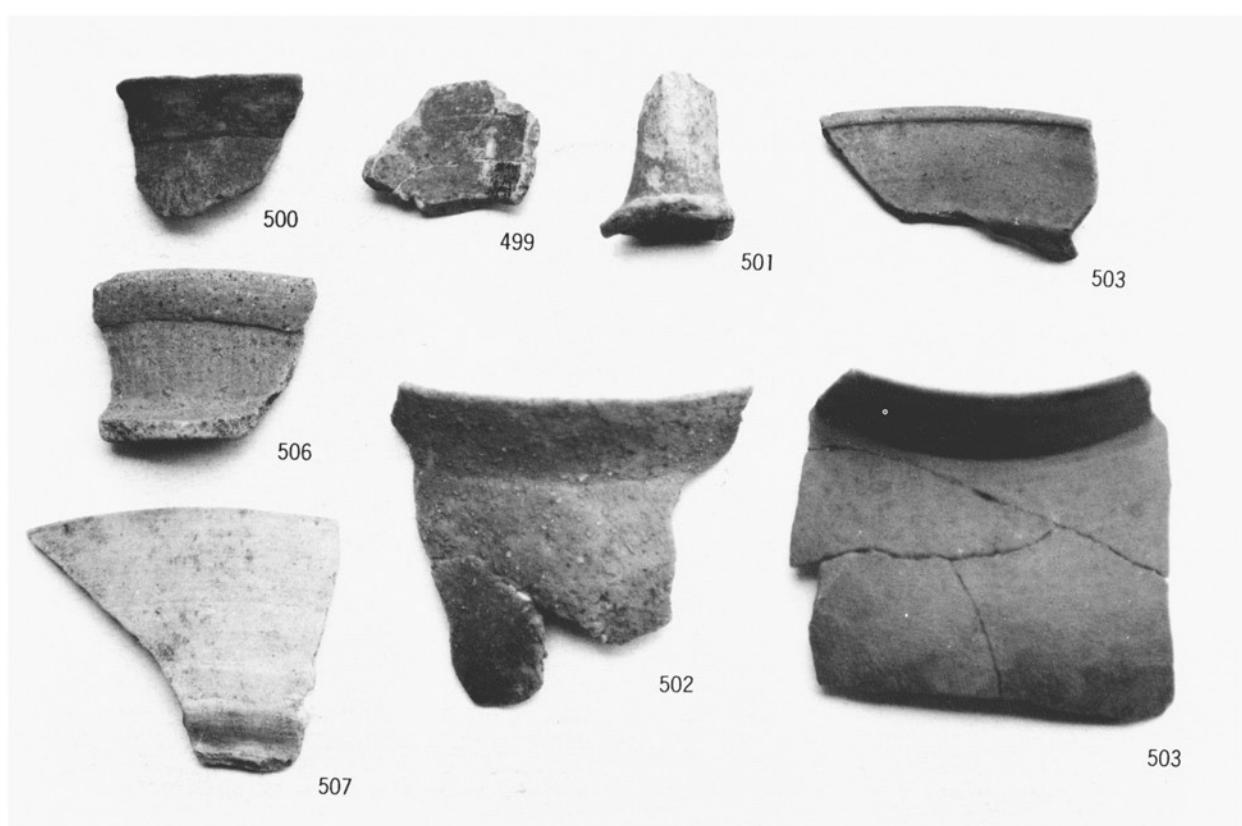
S D 55出土布留形甕ほか



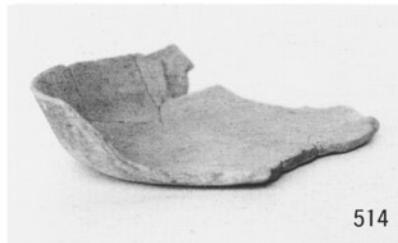
出土遺物  
24 A 4 区



S H63出土土器



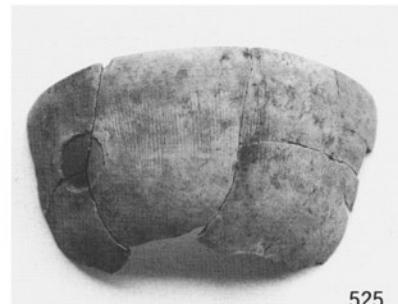
赤彩土器ほか



514



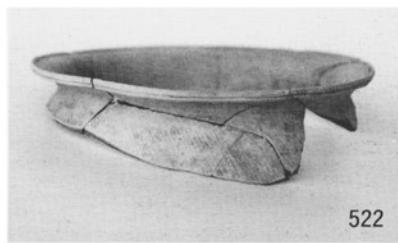
519



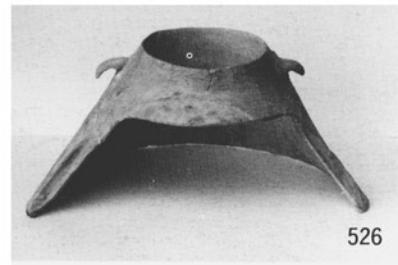
525



515



522



526



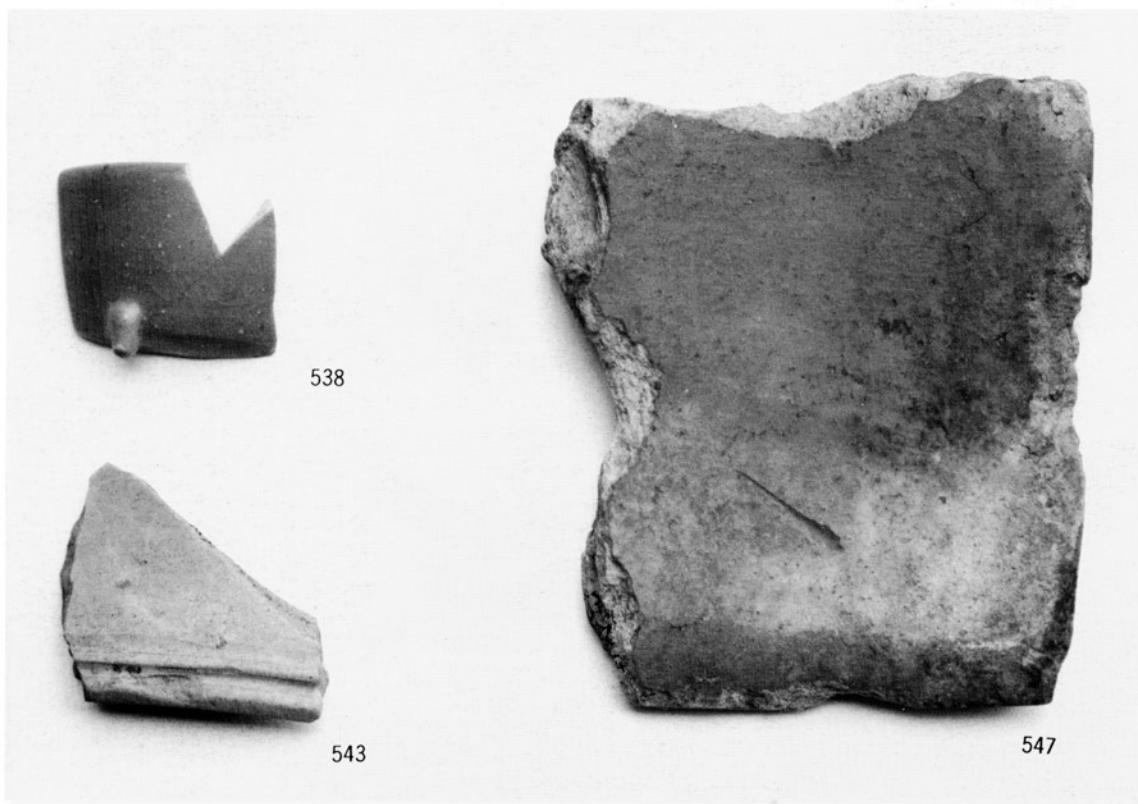
516



527



528



538



543

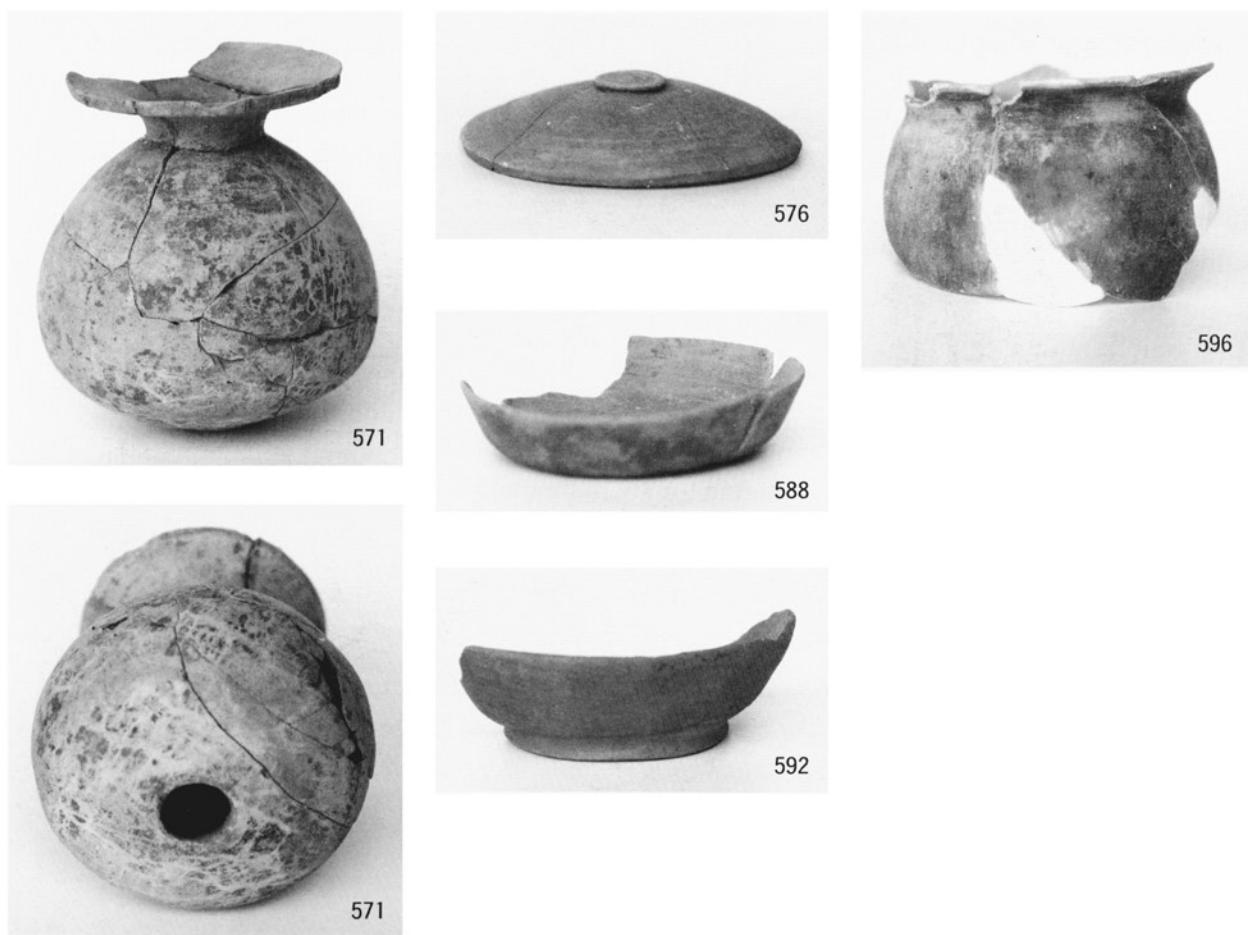


547

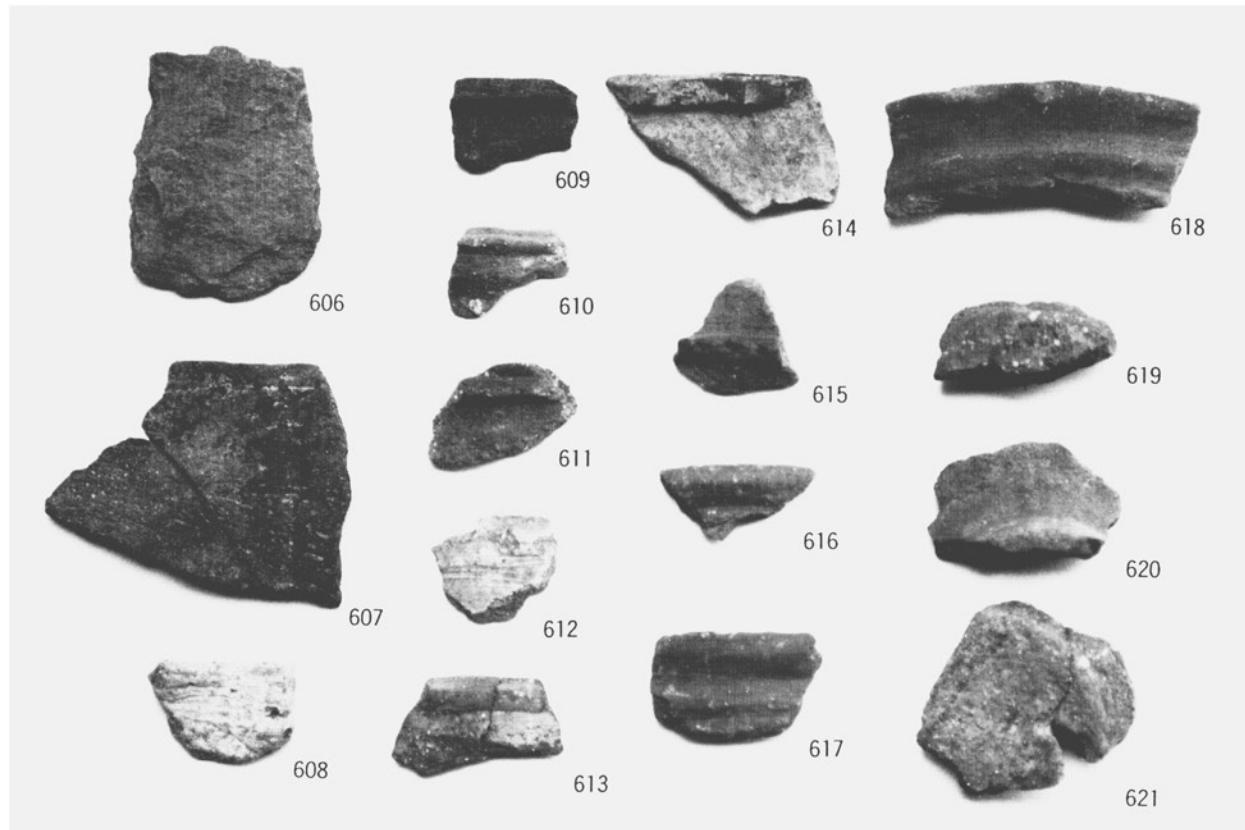
中世の溝出土土器・瓦



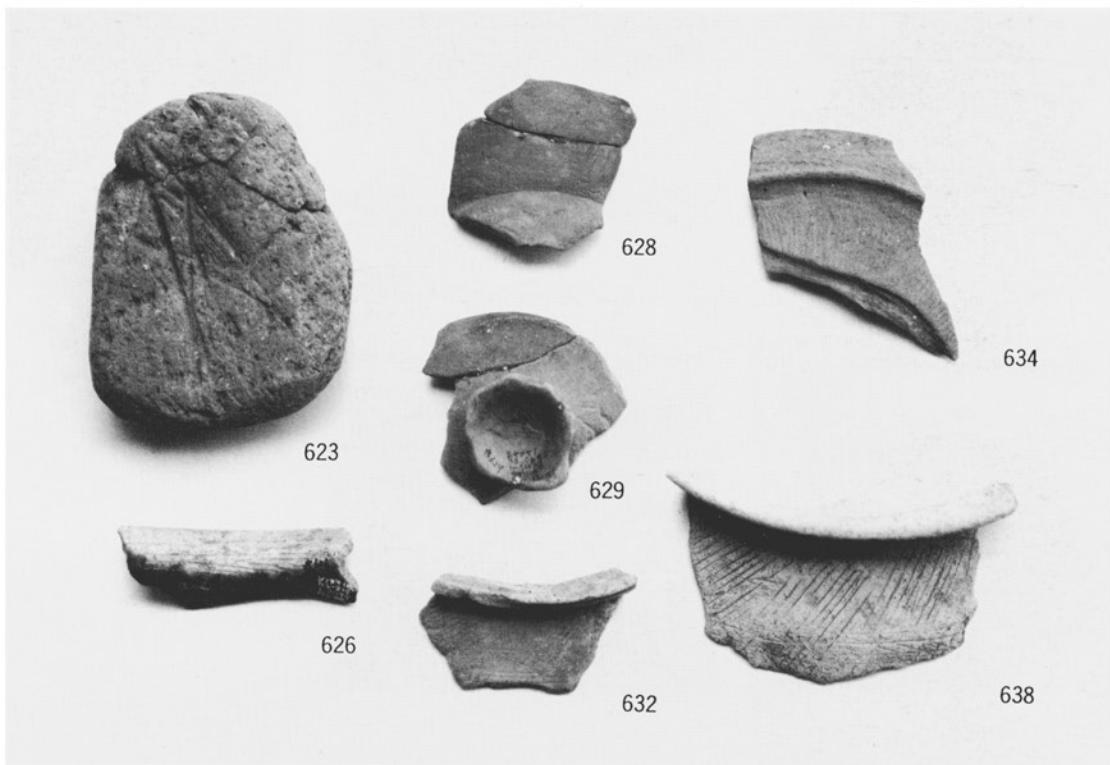
S D54出土土器



穿孔の状況

出土遺物(2)  
B区

縄文時代の遺物



砥石、土器類



636



657



671



640



658



677



652



661



685



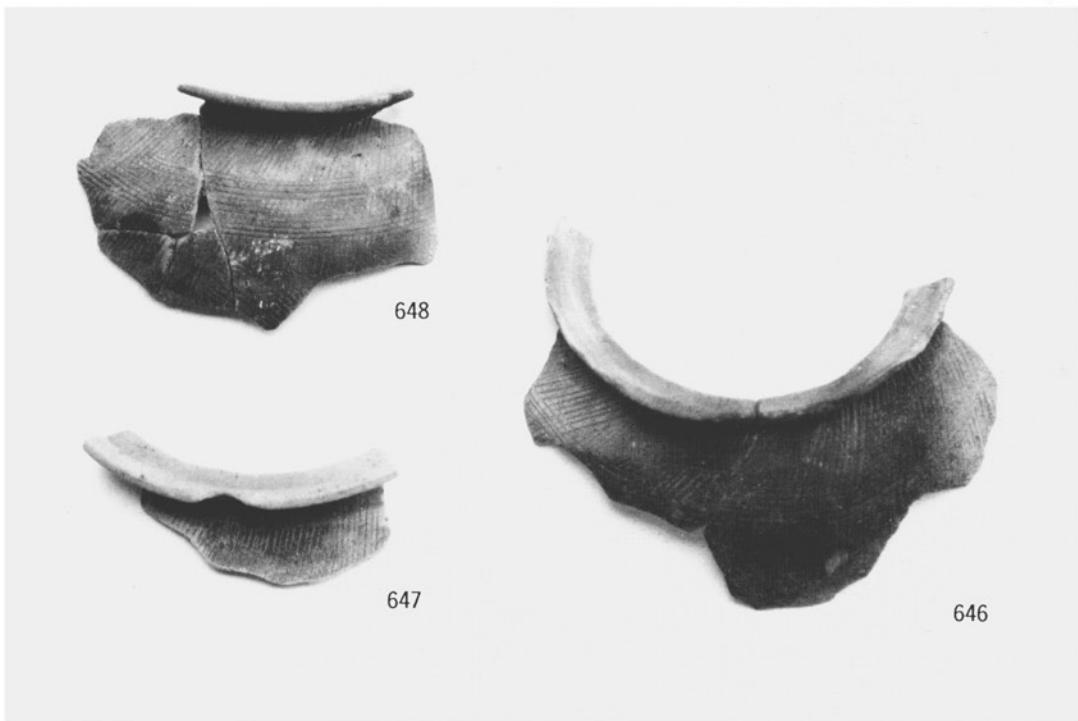
655



664

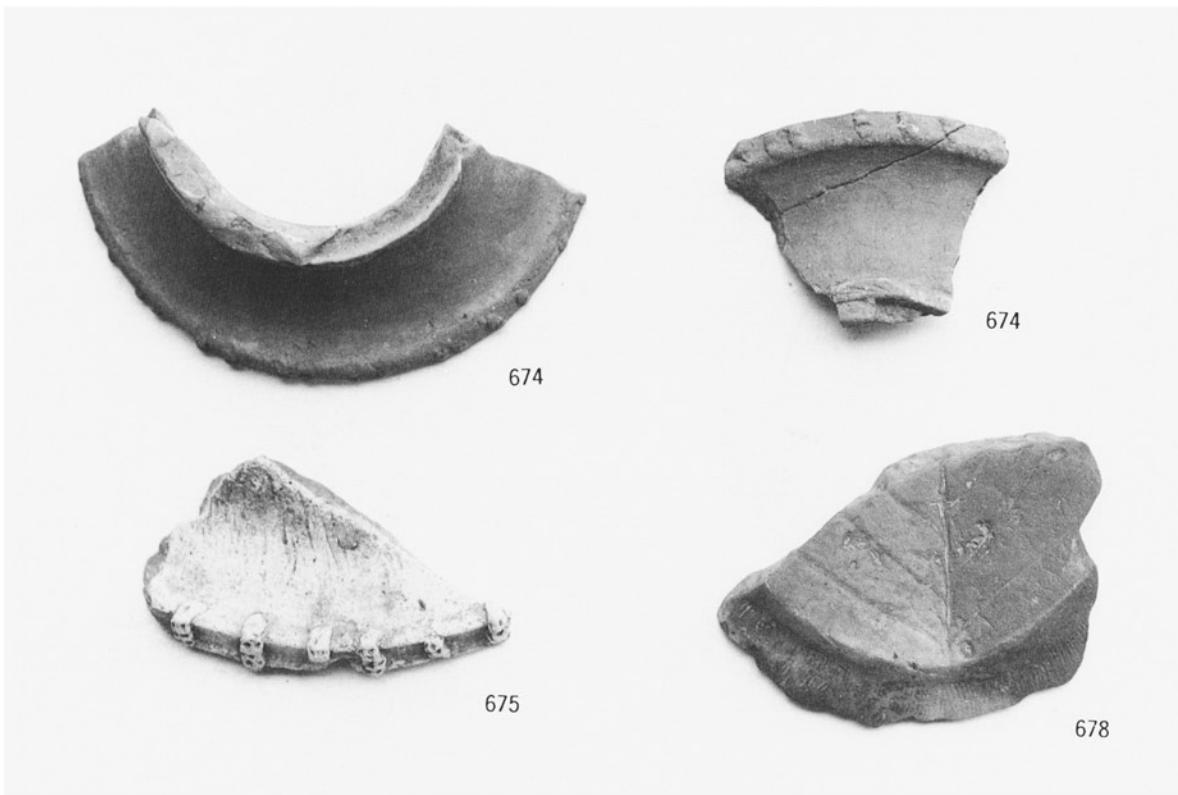


S H83出土北隆系高杯（641）ほか



S H83出土の台付甕

出土遺物  
(30)  
B区

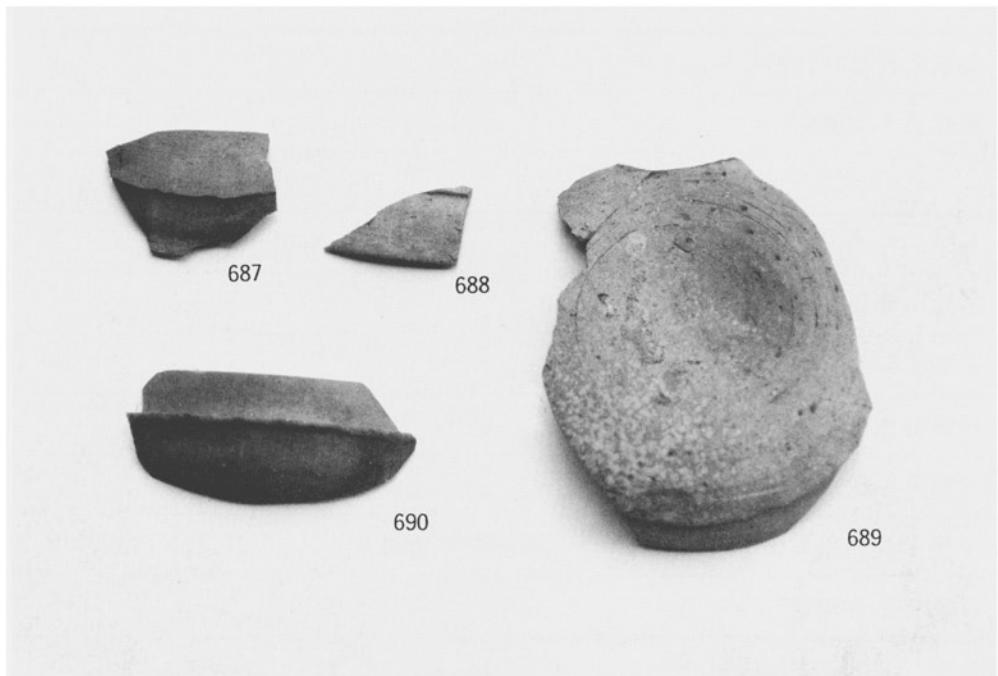


S H73出土壺類

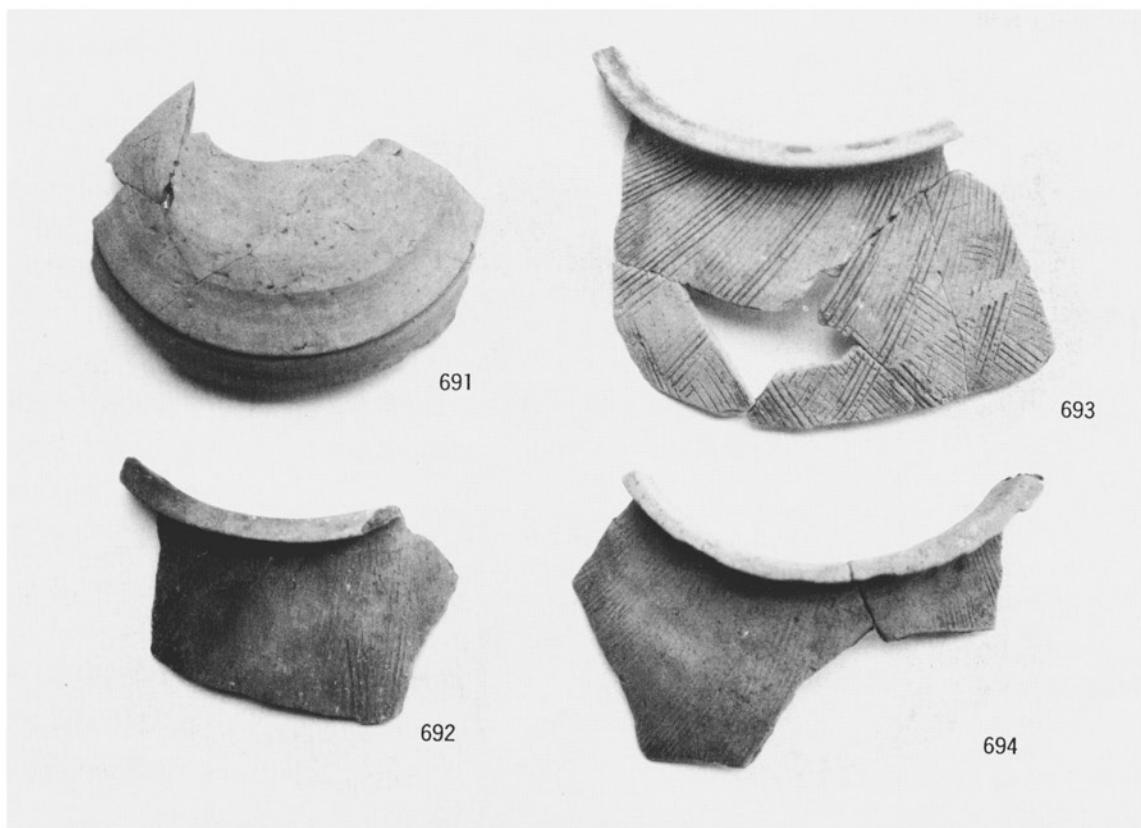


S H73出土台付甕

出土遺物  
(3)  
B区



S H 70出土須恵器



S H 98出土土器

## 報告書抄録

ふりがな	しまぬきだいいちじちょうさ							
書名	嶋抜第1次調査							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	174							
編著者名	伊藤裕偉・川崎志乃							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596(52)7031							
発行年月日	1998年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号	°°"	°°"			
くもづしまぬきいせき 雲出島貫遺跡	つし くもづしまぬきちょう 津市雲出島貫町 あざふじもとまちなか 字藤本・町中 ほか			34° 38' 56"	136° 31' 07"	19970908 ~ 19971222	3,650	(一) 嬉野津線国 補橋梁整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
雲出島貫遺跡	集落跡	縄文晩期 古墳前期 古墳後期 飛鳥奈良 中世	土器棺墓 堅穴住居・井戸・溝・ 墳墓 堅穴住居 大形掘立柱建物 堅穴住居 溝・掘立柱建物 井戸・土坑	突帯文土器 古式土師器良好 底部穿孔壺など 土師器・須恵器 土師器・須恵器 土師器・陶器				布留式多い。北陸・関 東・山陰などの搬入土 器あり。赤彩土器多。 6c末の一括有。 土師器は精製品多。 古代嶋抜郷にあたり、 一志郡家関連か?

平成 10(1998) 年 9 月に刊行されたものをもとに  
平成 19(2007) 年 8 月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告174

## 嶋 扱

第 1 次 調 査

1998年9月

編集 三重県埋蔵文化財センター  
発行

印刷 (有)第一プリント社

---